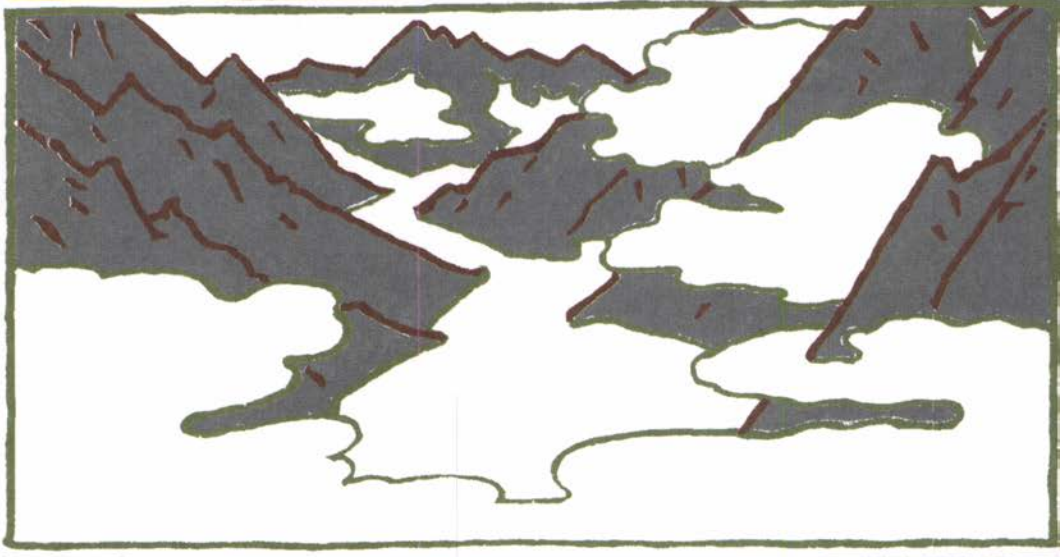
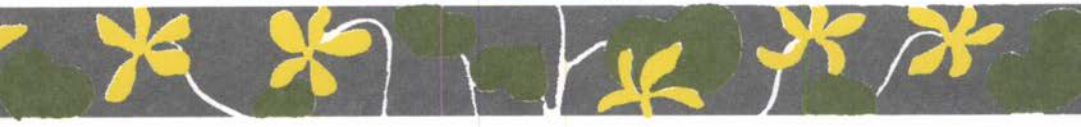
山岳



第四年

第一號

山岳會



山岳

第四年第一號

本號目次

（明治四十二年三月二十五日發行）

圖版

口繪

燒嶽及梓川（三色版）　榎谷徹藏氏作
田代池　高野鷹藏氏撮影
河童橋と穗高山　同上
燒嶽火口壁噴煙　北尾鐐之助氏撮影
蒲田谷より仰げる穗高の一角　辻村伊助氏撮影
白山裏山白水の瀑　石崎光瑤氏作
信越國境五龍嶽　三枝威之介氏撮影

挿圖

梓川に架せる河童橋（高野鷹藏氏撮影）宮川の池（三枝威之介氏撮影）大野川村舍（高野鷹藏氏撮影）河童橋より穗高を望む（三枝威之介氏撮影）上高地溫泉と燒嶽（同上）白山裏山スケッチ二幅（石崎光瑤氏作）石鎚山の一の鎖二の鎖（多田香嶺作）石鎚山頂（同上）梓川上流より蝶ヶ嶽を望む（辻村伊助氏撮影）（以上寫眞銅版）燒嶽南壁の東部（榎谷徹藏氏作）燒嶽北壁の西部（同上）燒嶽噴火口內の見取圖（北尾鐐之助氏作）羽前の三山（大平晟作）豐前中津より東南西の三面を望む（今泉勝沼氏）（以上木版）

本欄

上高地の記　高野鷹藏……一頁
燒嶽噴火口に臨む記　北尾鐐之助……一九
小矢部川上流より越中桂、飛騨加須良を經て白山地嶽谷附近の秋色を探る記　石崎光瑤……三一

石鎚登山記　多田香疇……四三
羽後の森吉山　山本巓坊……五五
羽前の三山（出羽探山記の二）　大平晟……六六
日本河川志（其一、四國の吉野川）　高頭式……七七

雜錄

○山岳會大會に於ける余が陳列品に就て（理學博士神保小虎）○日本北アルプス縱走の記（三枝）○日本北アルプス中央部横斷の旅行談（二）（河田生）○諏訪方面よりの立科山（辻本）○鳳凰山にて採集せる植物の目錄（辻本）○信野植物採集峯記（飯柴永吉）○鋸山の運命（山本巓坊）○はさみ岩（那須生）○山岳寫眞と其器械（高野）○山岳寫眞の名家（烏水）

○山岳圖書批評　○山水美論（烏嶺）○ゼルマット溪谷及マテルホルン山案内記○シャモニイ溪谷及モンブラン山脈案内記（以上二項烏水）

雜報

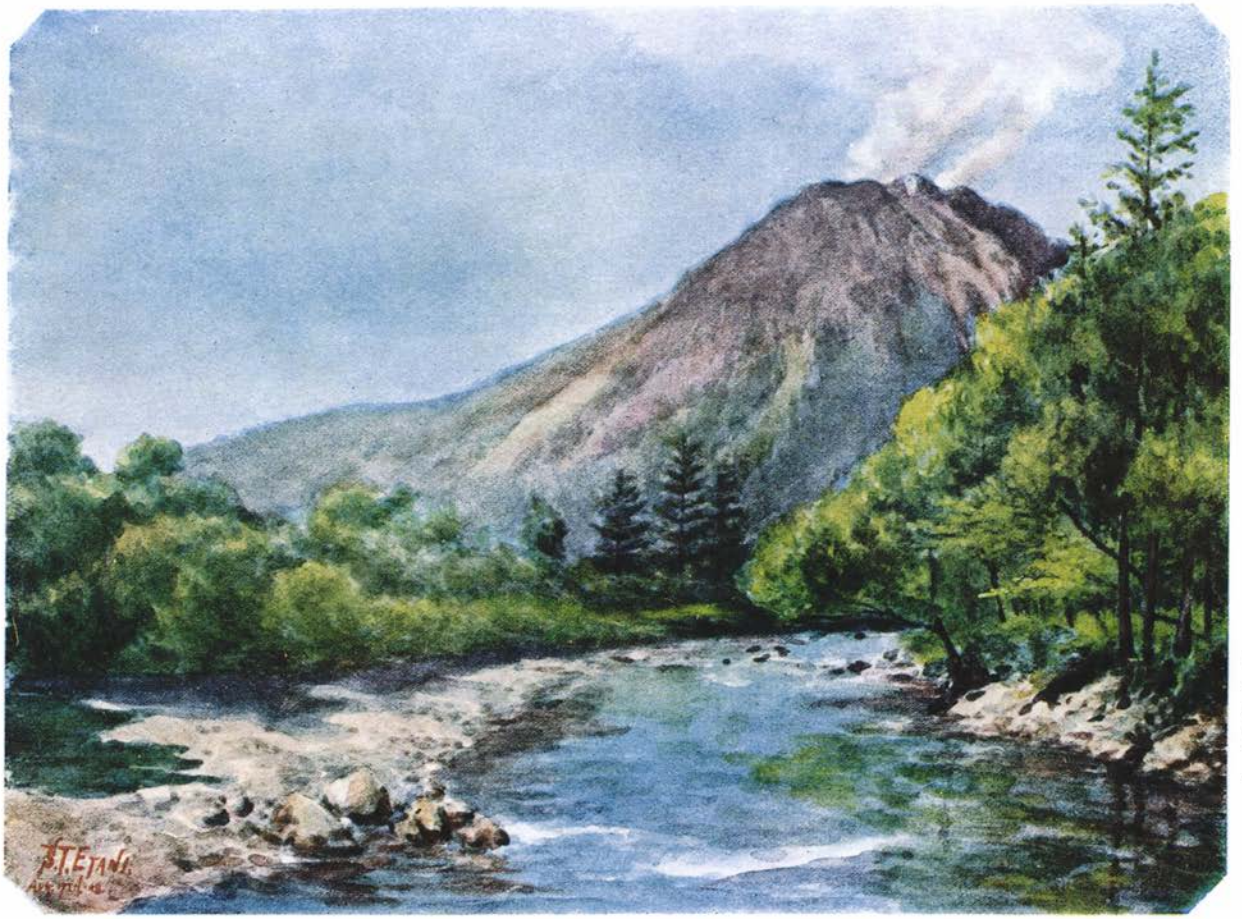
○燒嶽の噴烟及降灰○大鷲の標本○去年の富士登山○火山學者の來朝○淺間山の噴烟○新高山の探險○臺灣中央山脈の探險○有明山中の大猪○木曾山中の鐵道○阿蘇山上の天幕生活○駒ヶ嶽の噴煙

會報

○山岳會有志晩餐會○西内金吾氏逝く○本號附錄（第一、第二）○「山岳」殘本發賣○本會事務所の移轉○會費未納の諸君に○振替貯金口座加入○山岳會第二大會○雜一束○新入會員○退會及轉居者

附錄

會員名簿○山岳總目錄○陸地測量部要覽○三色刷五萬分一地形圖鹿兒島號之内小林圖幅○五萬分一地形圖甲府號之内富士山圖幅



田中製版所三色版

榎谷徹藏氏作

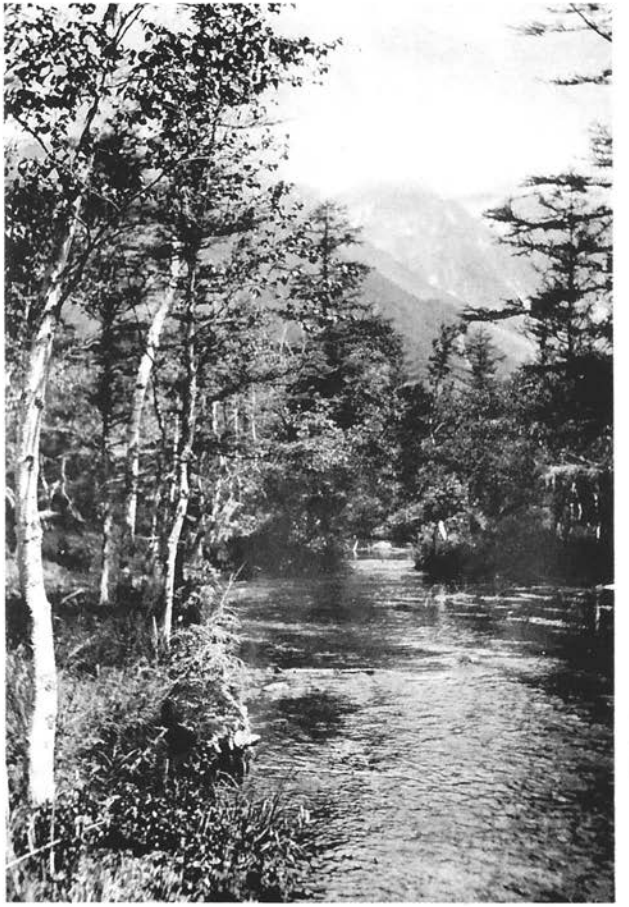
川梓及岳焼

YAKEDAKE AND THE ADZUSAGAWA VALLEY. PAINTED BY T. ETANI.

高野鷹藏氏撮影

穂高山と河童橋

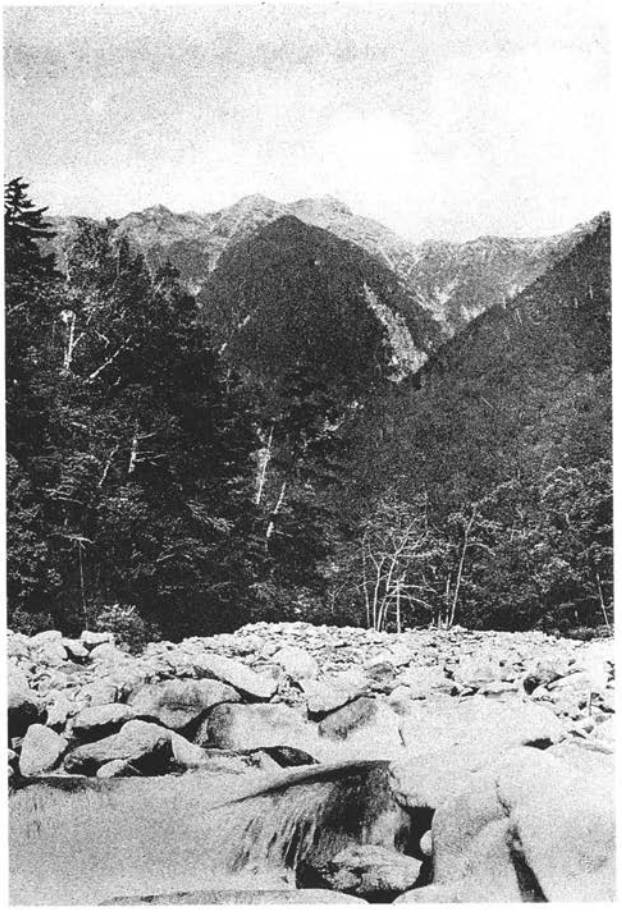
HODAKAYAMA AND KAPPA-BRIDGE. PHOTO. BY T. Z. TAKANO.



高野鷹藏氏撮影

田代池

THE LAKE OF TASHIRO. PHOTO. BY T. Z. TAKANO.



辻村伊助氏撮影

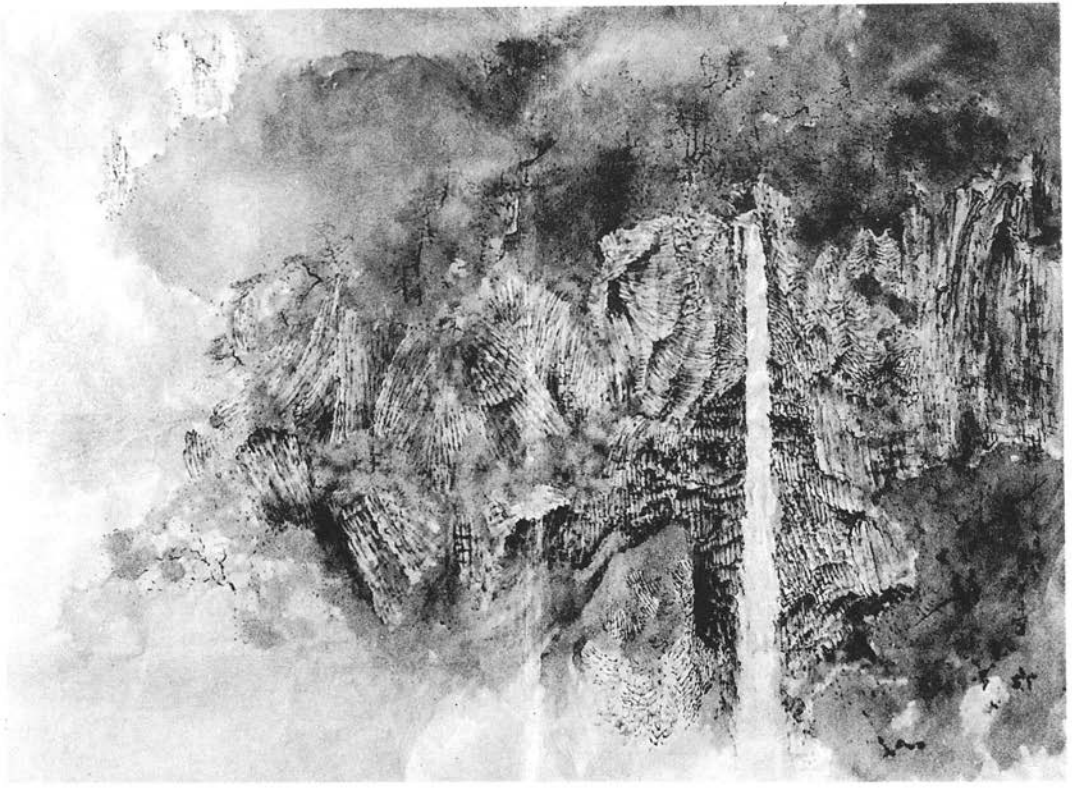
蒲田谷より仰げる穂高の一角

A VIEW OF THE SUMMIT OF HODAKAYAMA FROM THE GAMADA VALLEY. POHTO. BY I. TSUJIMURA.

北尾錞之助氏撮影

燒岳火口壁噴煙

SMOKE COLUMS IN THE CRATER OF YAKEDAKE VOLCANO.
PHOTO. BY R. KITAO.



石崎光瑞氏作

白山裏山白水の瀑

WATERFALL OF HAKUSUI IN THE SHADOW OF HAKUSAN.
PAINTED BY K. ISHIZAKI.

三枝威之介氏撮影

信越國境五龍岳

GORIU DAKE AT THE BORDER OF SINSHIU & ECHIGO.
PHOTO. BY T. SAEGUSA.

◎上高地の記　高野

山岳

第四年第一號

明治四十二年
三月廿五日發行
（禁轉載）

上高地の記

高野鷹藏

梓川の上流—其位置—往路—季節—地圖—交通機關—郵便電信—宿屋—人足及び導者—登山—名所—旅費—道順—里程—上高地に對する希望

一、梓川の上流（烏水氏作）

「神河内に流れ落ちる水の脈、およそどれほどあるでゐらう、自分は隅々隈なく跋渉したわけでは無いが、自分の下りて來た穂高山の前の短澤を始

めとして、槍ヶ岳の麓の德澤、槍澤、横尾谷、それから一ノ俣、二ノ俣、赤岩小屋の傍の赤澤、引きかへして霞澤山から押し出す黑澤といふのは炭質を含むだ、粘板岩が石版を碎いたやうに粉になつてゐるもの。白澤は之に反して、白く光る石英粒の砂岩である、その他、名の無い澤を合せたら幾十筋あるかも知れぬが、それが絡み合つて、本流になるのが梓川だ、その本流といふのが幅濶の二筋三筋に別れ、川と川との間には、花崗の白い砂の平地と、この平地にみどりの黑髮を梳る處女の森とで、水は盲動的に蛇行して、森と森との間を迂回する、或は森を突き切つて、向ふの平地へ驀地に走る、森は孤立した小島になる、水楊が川の畔にちよんぼりと、其蒼い灰のやうな、水銀白を柔かに布いた薄葉を微風にうら反へしてゐる、たまに白砂の中に鹽釜菊が、赤紫色に咲いてゐるのが鮮やかに眼に映る外は、青い空と、綠りの木と、碧りの水。

しかしてどこから見ても、神河内を統御する大帝は、穗高岳で、海拔五千七百尺の神河内から、聳ゆること更に五千尺に近く、梓の濶流も、支線の小峽流も、その間の幾十反の點々たる平地も、何もかも一切包まれた谷は、神つ代の穗高の命の知ろし召す世界である。」

烏水氏の麗文、梓川の上流は、上高地の隈から隈迄（と云ふて南北三里、東西十數町の帶の樣な谷間）の形貌を、曠景的（パノラミック）に序列したものと云ふべきである、上高地の地たるや、文人の筆に、畫家のカンバスに、其自然美を讃へられたものは、蓋し稀である、上高地の景たるや、纖細美はないが、然し人の勢力（エナージー）の及ばざる大なる美がある、日光の建築と、伊勢の太廟とを較べたら、前者は其細密な彫刻に美があるである、太廟は其始原的な、大なる所に崇高な美がある、上高地の美は後者に屬する方だ。

烏水氏の所謂處女の森がある、人の力の及ばざるせゞらぎがある、原始的なる山には、萬古の雪がある、此間點するに赤い車百合、黃な深山をだまき、紫な、とりかぶとが咲く、野飼の牛、黑も、赤も、斑（ぶち）も居る、馬も居る、可愛らしい、小牛も小馬も遊ぶ、跳る、要するに人の力の及ばざる自然——眞の自然である。

上高地の最初の紹介者は烏水氏である、去る三十五年に初めて氏が槍に登つた時の紀行は當時の雜誌「文庫」に出てゐた、其當時は未だ上高地に溫泉場も開かれず、狹く長い上高地には、一二軒の小屋があつたのみである、其後溫泉場も開かれ、又登山熱が盛になるにつれて、上高地は實に日本アルプスに登る一ステーションとなつた、四十年の夏には水彩畫家大下藤次郎氏は數の多スケチを此地で畫かれた、烏水氏は「雲表」を公にして上高地の自然美を紹介された、會員諸君の多くは烏水氏の「雲表」を讀れたであらう、又大下氏の水彩畫を觀られたであらう、吾人の禿筆は如何に筆硯を磨し

ても、烏水氏以上、大下氏以上、上高地を、有のまゝに諸君の目の前に提供する事は出來ない、上高地の景色の序目は、「雲表」を熟讀し、大下氏の水彩畫を見られよと云つて置く。

然らば今、自分は何を書くのか、二、三が四的に上高地を紹介するに止まる、即ち案内記である。

二、其位置

試みに信濃全圖を開いて見給へ、四隣海のない高原的の信濃の國に、凸凹を彫刻する溪谷は、鹽尻峠を極限とゝして南北に背中合せに走つて居る、天龍川の潤す伊那谷、木曾川の流れる木曾谷、北するものは松本平を灌漑する犀川、千曲川は佐久平を走り、善光寺平に來り二者合して信濃川となり、越後米の油となる、上高地は此犀川の西の方飛驒と、信濃との國境に近い山岳重疊せる谷間の一平地を云ふのである。

上高地を浸す川を梓川と云ふ、此川流れて犀川となり信濃川となる、越後米の美味い譯は、浸し水の信濃川が其源をかゝる高い山の雪解の水に發するからであらう。少し詳しい折圖を展げて見ると、松本は國の西半部の首都として、印附けられてある、此松本のある所、即ち松本平、此平を北流する犀川を溯る、松本の北、僅の所で川は二つになつて名を變へる、西するものは梓川、南するものは、奈良井川、梓川を尙ほ溯る、と山と山との間に入る、そして遂に乘鞍岳に突き當つて、北折して、日本アルプスの裳裾を洗ふ、遂に行きつまつて、槍ヶ岳の殘雪の中に姿を隱す。

此梓川が日本アルプスの峻嶺穗高山の東を廻る、南北三里、東西十數町の細長い河床を上高地と云ふ、地形から言へば東西南北悉く山である、然かも皆な七千尺を越えて居る、ぬかるみに車の轍の跡の樣な土地、高さから云へば五千七百尺、政治的位置は長野縣南安曇郡、安曇村字上高地、山一つお隣りは飛驒の國、大概日本アルプスの山々には、近きは半日、遠きも數日にして往復が出來る。

三、往路

道といつても、人が通り得ると云ふ範圍でなく、道路といふべきものは、松本平から一本、飛驒から一本、即ち上高地を水の道と直角に東西に兩斷して居る。

(イ) 松本方面　松本から飛驒高山に通ずる、高山街道を西に島立、新村、波多を通つて、大野田の手前で、梓川を渡り、安曇村字島々に至る、此所から飛驒國中尾を通つて越中國に至る間道が一本、此道が上高地を、東西に、つないで居る、

道順から云へば一番此道が近道ではあるが、或は尙ほ島々から、高山街道を進み稻核（イネコキ）を經て、熊澤の釣橋の手前で、高山街道と別れ、尙ほ梓川の右岸に沿うて、大野川から白骨溫泉に出で、尙ほ北へ北へと梓川に沿うて行くと、上高地へ出る。

（ロ）越中或は北部飛驒からならば、飛驒國船津に出で、高原川に沿うて、どんづまり迄來ると、中尾の僻村がある、茲から登り一里半、下り一里の中尾峠を越えて、上高地に出る、此道は即ち島々から上高地を經て飛驒に通ずる道の西半である。或は飛驒南部からであつたなら、野麥峠を越えて、田ヶ谷、角ヶ平を經て大野川に出で、白骨を經て行くのもよい、白骨、上高地間には立派な道がある、又昨夏期には上高地、大野川間に林道を作つて居たから、既に通じた事と思ふ、此外平湯から、阿房峠を越えて、白骨よりの道に合する道もある。

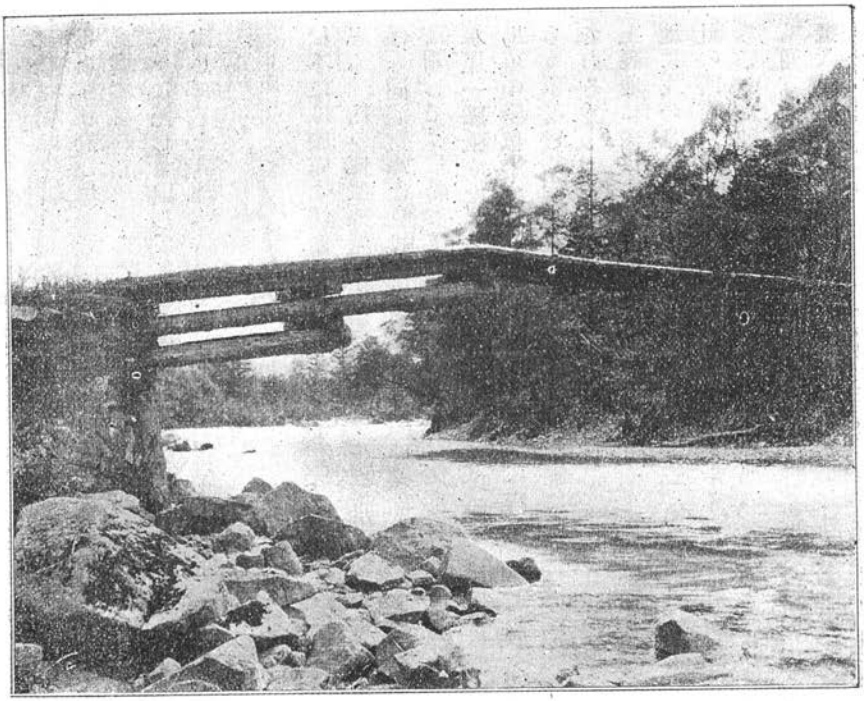
四、季節

上高地に行く時期は、何時（いつ）が一番よいか、此れは問題である、各其目的とする所によつて、選ぶ所を異にするのは勿論であるが、一般の登山としては、七月の中旬から、下旬にかけてが一番よいやうだ、何故ならば此頃は毎年の例として天候も稍々定まる時期ではあり、雪も未だ溶け切れず、山を觀ると云ふ點に於ては最もいゝと思ふ、本誌前號の口繪にある槍ヶ岳の雪は此時分に撮影したものであるが、あの大雪が八月中旬に登つた人の話では皆無であつたさうな、上高地の此時分の氣候は、實に春の樣である。

自分の專門以外の事は判らぬが、昆蟲を採るには、七月の下旬から八月に掛けて適當の時期らしい、此地に冬來ると云ふ事は、都人士の一寸企圖し難い事ではあるが、秋期に來たなら狩獵には實にいゝであらうと思ふ、林の中を涉くと、山鳥の雛などは、五六羽位づゝ足許から飛び出る、名も知らぬ鳥が澤山居る、人の話には田代池には鴨が澤山來るさうである、熊やカモシカは所謂娛樂の銃獵家向ではないし、又此れは冬の眞中の仕事である。

五、地圖

日本の山岳地に良い地圖のない事は、今更初つた事でもない、上高地も亦此例に漏れないのである、上高地附近の地圖では、今のところ比較的地質調査所の四十萬分一の地形圖がよいと思ふ、同所の二十萬分一高山圖幅（タカヤマ）が出版になつたら非常に便利であらうが、中々出版になりさうもない、陸地測量部の輯製二十萬分一、高山圖幅の如きに至つては誤謬に充ちてゐて、



河童橋

（高野鷹蔵氏撮影）

眞實な所は殆んどないと言つても、過大ではない、志村氏の「やま」の附圖、日本高山地圖も小形で携帶に便ではあるが、地質調査所の四十萬分一圖と大同小異である、むしろ四十萬分一地形圖が一枚あればよい。此地圖は大日本帝國豫察地形圖と云ふので、本島を五つに等分して、各區六枚の地圖から出來て居る、一枚一枚雖しては賣らないので、一部壹圓八拾錢づゝである。（賣捌所は東京市神田區通新石町東陽堂である）

六、交通機關

松本市迄は鐵道がある、先づ松本で汽車を降りる、松本から島々迄は乘合馬車がある、時間馬車ではないが、車臺も多いから便利である、尙ほ客さへあれば島々から稻核迄は此馬車が通じて行く、島々と上高地との間は、人の肩に凭る外はない、荷物を運搬する爲めに牛馬などは勿論通つては居ない、白骨に迂廻して行くとしても、稻核迄は馬車、其れから先は徒步、荷は稻核白骨間に運送がある、白骨から先は勿論人足に由る外はない、飛驒方面からも牛馬は通じない、何處から行くのでも、荷は人の背に由るばかりである、溫泉日常の食料も、皆な人足の肩で運ばれるのである、未だ牛馬を通ずるほど交通がないのである、馬でも牛でも通へぬ事はない、現に飛驒からも、信濃からも牛馬をつれて來て放牧してある位である。

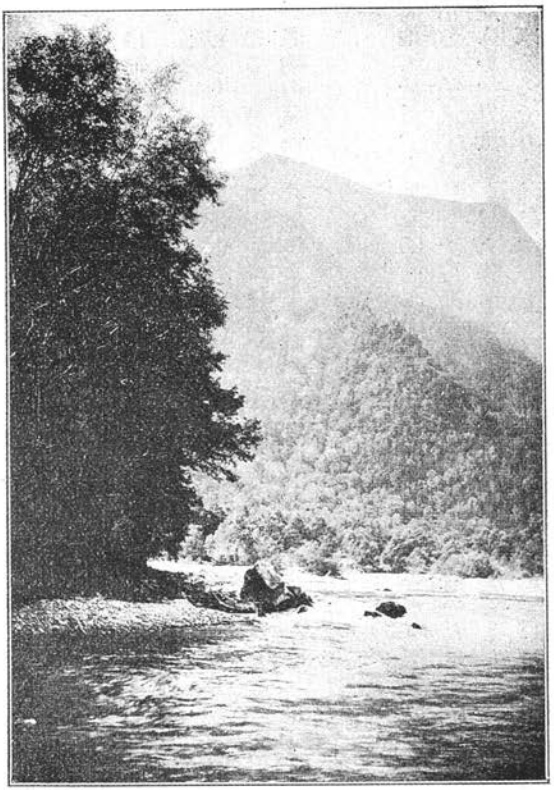
七、郵便電信

郵便電信は、高上地には絶無である、廿世紀の世の中といつても上高地は全く文明の範圍外に置かれてゐるのである、最近の郵便局は島々で、茲には電信も通じる、白骨溫泉では一日に一回、島々から集配して廻る、然し上高地には、來ない、夏場になると、一日に一人や二人上高地から島々へ人の行ぬ事はない、又島々から米や味噌を負ふて人足が來る、此等の人々に托して出してもらう事は出來るが、來る郵便には困る、然し島々に上高地溫泉の出張所があるから、其所宛郵便を出して、上高地へ持つて來てもらうのである、或は島々の宿屋に托して置いてもいゝ。

八、旅宿

松本には旅館は澤山あるが、その中で枕流館（一ッ橋）秀峰館（辰己町）丸中（本町）池田屋（裏小路）等がいゝと思ふ、島々には絲屋、中屋、清水屋の三軒がある、就中比較的清水屋が良い、其れに同家では、上高地溫泉場に直接の關係（同溫泉場は株式會社で、清水屋は其株主の一人である）があるので、萬事上高地の旅客は丁寧にしてくれる、山岳會に關しては、特に依頼をして置いた、又主人も會員諸君には特に注意すると云ふて居つた、ウエストン氏以來外國人は清水屋一點張りで、これらの外國人は同氏の著書に由て搜ねて來るのである、清水屋は松本から來ると、島々の奥の方で、馬車の停車場から、尙ほ二町ばかり先へ行つた、右側の二階屋である、上高地に關する問合せや、人足を雇ふて置いてもらう事などは、同家に依頼すれば、適宜に取計つてくれる、名宛は「長野縣南安曇郡安曇村字島々、清水屋事加藤惣吉」である。

上高地には只一軒、外に人の居る小屋は、德本峠（トクゴータウゲ）の下に牛番小屋と、宮川池の畔に嘉門治小屋があるばかり、細長い上高地に人の息（いき）のする所は、此三ヶ所である、溫泉場は、上高地の南隅、霞澤山の前づらにある、此溫泉場は上高地溫泉株式會社の所有、明治卅八年に開いたものである、湯は無色透明、無味無臭の單純泉である、吾々病氣保養のために溫泉に浴するといふ目的でないものには、至極心地のよい湯であるが、又非常にそこ冷えのする湯である、湯の量も十分、且つ溫度も可なり高い、家は二階建と平屋の二棟、何れも堅固一式である、外に湯殿が一つ、二階建の方は客間で部屋が十二、大抵六疊敷であるが、人の入（はい）れるのは七間（なゝま）、外の部屋は下駄や造作の物置となつて居る、客間の方は未だ十分仕上つて居ないで、天井もなく、恰も芝居の道具立の觀がある、夜具の類は、斯る山中の溫泉場としてまあ並である。



河童淵より穂高を望む

（三枝威之介氏撮影）

山岳重疊の温泉場としては、吾々日本人には決して粗末なるものではない、山野に野宿さへする、吾々登山者にとつては、實に金殿玉樓にも比すべきである、然し如何に登山を以て、快なりと信ずる吾人でも、茲の待遇に至つては到底耐へ得ない所である、食餌の粗は尙ほ忍ぶべしと雖も、吾人は相當の賃錢を支拂ふて、客として泊るのである、決して只で泊めてもらうのでない、まるで御救ひ小屋の樣である、殊に外國人は、よし登山家の常として、食、住粗なるに耐へ得ると雖も、外國人には實に耐へ得ない所であらう、然かも法外の賃錢を要求するのである。

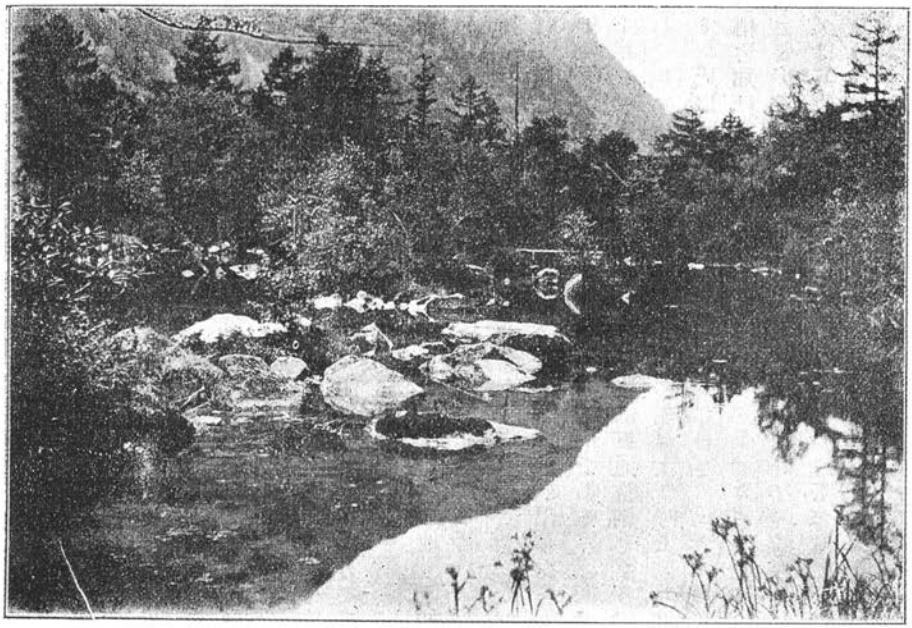
此湯泉場の御客といつては、純粹の湯治客のないのは、勿論の事で、唯だ僅に、飛驒へ通ふ旅客が時間の都合で泊るか、外に我々のやうな山登りの人々が來るか位である、昨夏の如きは、此溫泉は殆んど登山者、寧ろ吾が會員諸君に依つて賑はされたと云ふべきほどであつた、景色の豪壯偉大なる、氣候の冷かなる事は、避暑地として好適の地ではあるが、土地の僻遠と、交通機關の絕無とは、全く上高地の爲めに惜むべき事である、然し又吾々登山者には、爲めに上高地の價値が、より大となるのである、此溫泉場の主人役たるべきものは、會社とは全く關係のない人間で、言はゞ受負で來て居るのである、であるから、後の爲めなどを毫頭思はず、一時の暴利を貪り、待遇不親切を極むるのである、吾人はかゝる不自由の山中で食物の事などに就て、餘り言ふ事は好まぬが、昨夏の待遇の如きは、實に不親切極まれるものである、それでゐて宿料は六十五錢を要求する。

昨夏此溫泉場の取締は、小穴辰次郎と云ふ男で、南安曇郡穂高村の住人であるとか、口髭を生やし、ちょつと村役場の吏員とでも云ふべき風つきである、若し本年も此男が管理して居るとすれば、最初から其つもりで用心してかゝらねばならぬ、斯る山中であれば、食物の粗惡不廉なのは、よく忍ぶべしとするも、某氏の如きは、朝膳につけた菜を、其まゝ殘したら又晝に出し、復其まゝに返へしたら三度目の夜に用ゐたと云ふ如き事がある、後に歸京の途中、馬車の中で某外人と同車したときの話に、同氏は槍ヶ岳に登つたが、上高地では一泊三圓、ビール一瓶六十錢を貪ぼられたと云ふて居た、如何に外國人でも、一泊三圓、ビール六十錢は、亂暴である、然かも其れ相當な待遇もしてないのである、實に此一事は上高地溫泉場將來の爲めから言つても深く惜むべきである、此等の事に就ては歸途清水屋に立寄り、十分忠告を試みたが、同家の主人は種々改良の方法を述べて、明年（即ち本年）からは自身計營して、大に改善をすると答へた、果して其誓言の如くなれば、實に吾々登山者の爲めにも大なる便利である、食料の粗惡な事は、敢て登山客は不平も云ふまいが、若し數日滯留するつもりならば、罐詰、乾魚等を携帶すべきである、要するに上高地溫泉場としては、設備萬般不完全である、白骨の如きに比べて遠く及ばないのである、中尾は知らぬが、同地とて、この地よりは未だしも便利であらう、僅かに二三種の罐詰はある、煙草もある、然し甘味の類は殆んど絶無である。

序に白骨溫泉に迂廻せらるゝ諸君の爲め、同地方の概畧を述べる、白骨は「靈泉白骨」なる小冊子に詳しく書いてある、同地には、湯本（齋藤志津馬）柳屋（奥田琢眞）湯口（齋藤一人）及び大石屋の四軒、內で湯本と湯口とが最大である、白骨は溫泉場としては、熱海、箱根にこそ劣れ、決して都人士が不便を感ずるやうな事はない、設備萬般極めて便利に出來てゐる、斯る深山中の溫泉場としては、此點に於て稀有であらう、同地では、晝中には、所謂「お八つ」なるものを出す、名物の蕨餅、蕎麥燒餅、芋、など毎日出す風習である、一寸他所（よそ）にはない事である。

九、人足及導者

上高地に於て、人足或は道案內を求める事は、殆んど不可能である、上高地に住む人間といつては、湯泉場の番人と、嘉門治と（後述すべし）牛番位なものである、で上高地で人足或は導者を得るものとすれば、島々から荷を負ふて來た人足を雇ふか、岩魚釣り、下駄作りに來た人間を臨時に雇ふより外はない、全く機會の仕事であるだから、多くは島々から連れて來るのである、白骨から、又は飛驒から來るならば、相當な人夫を連れて來ぬと大に間誤つく事がある、幸にして上高地に人夫でも來て居れば、未だしもながら、此等人夫の內には、性質良からぬものがあつて、酷だしいのは山も知らず



宮川の池

（三枝威之介氏撮影）

に、無法の賃金を要求するのがある。

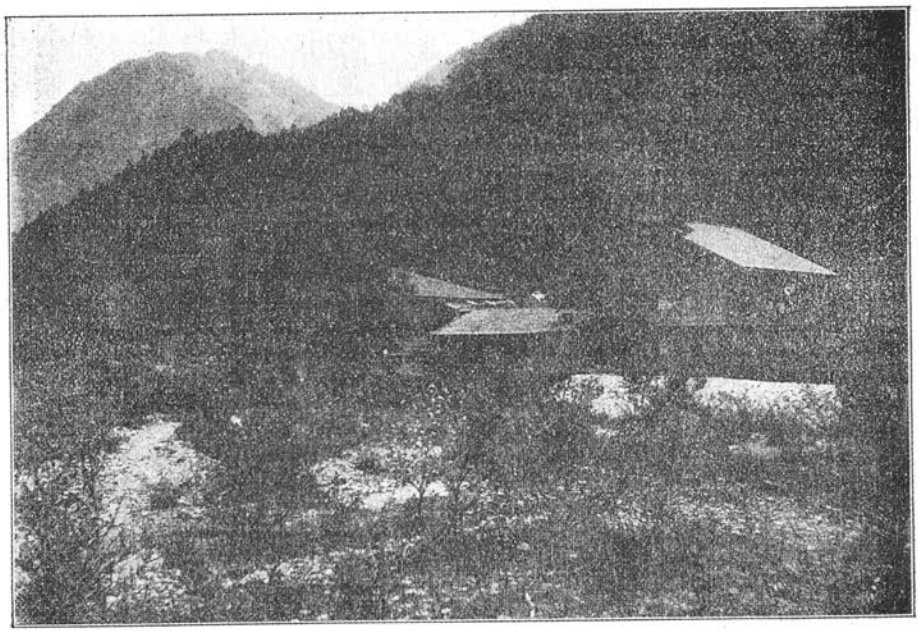
近來登山家の、島々から入る人が多くなつたにつれて、人夫の賃金が段々高くなつて來た、由來島々の人夫の大部分は、土地のものでなく、所謂渡り者と云ふべきもので、島々の勞金が高いのを當て込みに、諸方から入り込んで來た浮浪共であるから、土地の盛衰等は全く眼中になく、目前の利慾のみに走せて、都人士とさへ云へば、無法の賃錢を貪婪することに決めてゐるのである、玆に面白い事は、此日本アルプス地方に於て、人夫の勞金は、土地が北方に至るに從つて次第に廉となる事である、白馬地方に於ては、七八十錢に於て優に雇ひ得べく、島々に於ては其倍額を要する、中房溫泉地方に於ては、日一圓を以て賃する事が出來る。

從來本邦山岳地の導者と人夫とは、其間何等の區別もない、導者即ち人夫である、從つて專門的に導者として、雇はれて居るものもない、人夫兼導者の中には頗る怪しげなものが多い、殊に此地では山路に熟知して居るものゝ如きは中々稀で、時には僅に一、二回の往復、甚しきに至つては、人に聞いて道案内をするものさへある、去れば人夫を雇ふには、よく詮索して、信用のあるものを雇ふ必要がある、隨分山にも馴れぬ人夫が、賃錢の高さで、さも山に通じて居るかの如くに思はせて、大膽にも道案内を承は

るものが多い、斯くの如き輩は島々には極めて多い、現に自分は其實例を目擊して居る、上高地に來た東京の某氏を、穗高に案内したものゝ如きは（姓名を忘れたが）穗高も知らずに、さも熟知せるが如く裝ひ、且つ其人の土地馴れぬに乘じて、極めて不當の賃錢を求めた、然るに其導者は、全く山路無知の事とて、詳しく諸人に聞き合せて出發したが、未知の嶮山であれば果して道を誤り、其頂點にも至らないで、命からゞ〳〵半途で下山の止むなきに至つたのである、此の如きは蓋し稀ではない、導者として穗高に登り得るものは嘉門治父子を除けば、五指を屈するに過ぎぬと云ふ事である、其他は皆な一夜漬けの道案内である。

上高地方に於て、信用ある導者としては嘉門治父子を措いては、稀である、嘉門治姓を上條と云ふ、家は島々にあるが、常に上高地宮川池畔の嘉門治小屋に、一疋の犬と共に、接つて居る、夏は宮川の池に筏を浮べて、岩魚を釣り、秋冬には、山野に狩りをして居る、年既に、六十に近く、尙ほ頭髮霜をいたゞかず、元氣壯者を凌ぐ、嘉門治なら命を托しても大丈夫と云はるゝ位の、剛の者である、日本アルプス地方に三人の有名なる導者があると云ふ事である、一は此嘉門治、二は中房の類藏（横澤）三は大町のシナ右衞門である、類藏に就ては、近來大分非難の聲を聞くのである、彼は大の法螺吹きである、知らざるところも知れりと云ふ、未到の地も既知と云ふ、事實に此れを徵せば、子供の時分に來たのだから、よく知らんと云ふ、加ふるに、金錢に阿佞る、又人の話では類藏はよく、冬期獵中に、山中の小屋を燃料にしてしまうと、だから類藏の行つた跡は、小屋が大分壞れてるさうである、シナ右衞門の事はよく知らない、併し嘉門治ばかりは、どうしても金錢を以て動かす事は出來ない、いやだと云ひ出したら、中々動かない、其れから他の人夫の樣に、嘉門治は荷を負はない、年の故でもあらうが、全く導者專門的である、嘉門治の子息の嘉與吉と云ふのも、中々日本アルプスに通曉して居るさうである、日露の役に出征して、胸部貫通銃創を蒙り、體力が大分弱つたさうである、外國人は、嘉門治を呼ぶに、ミスター、カモンジを以てする、一介の老獵士を呼ぶに「君」附けである、彼れが外國人間に信用ある事は非常である、ウエストン氏以來唯一の案内である、蓋し日本アルプスの導者中、唯一の世界的人間である、遠く西歐の地日本アルプスなる名稱を知れるほどの人々は、又ミスター、カモンジなる名を記憶するのである。

此れを要するに、島々に於ては、人夫の良好なのは少いのである、されば余等の取れる方法は、長時日の旅行に於ては、中房又は其他の地方より、人夫を雇つてつれて來ることである、荷物は此れ等のものに負はせ、導者は其土地のものを雇ふのである、斯くして最も經濟的に、且つ愉快に旅行し得るのである、島々の人夫に就ては、くれ〳〵も大に注意を要する。



上高地温泉と焼岳

（三枝威之介氏撮影）

十、登山

上高地に入浴に來る人は前にも述べた通り、極めて稀である、飛騨に行く旅人か、さもなくば山に登る士が傳手に泊まるのである、上高地の四圍を廻りては、日本アルプス中の主座とも云ふべき山々が多い、曰く、槍ヶ嶽、穂高嶽、燒嶽、此等は一日或は兩日を以て往復し得べく常念、燕、大天井、笠嶽、乘鞍嶽等も亦數日ならずして往復し得、上高地は實に、日本アルプス中の一ステーションと云ふべく、將來益々登山客の爲めに繁榮するであらう、上記の諸山の案内記は、本誌上に公にせられた諸氏の文、或は其他の書籍について見られたい、參考迄に次に其目錄を載せる。

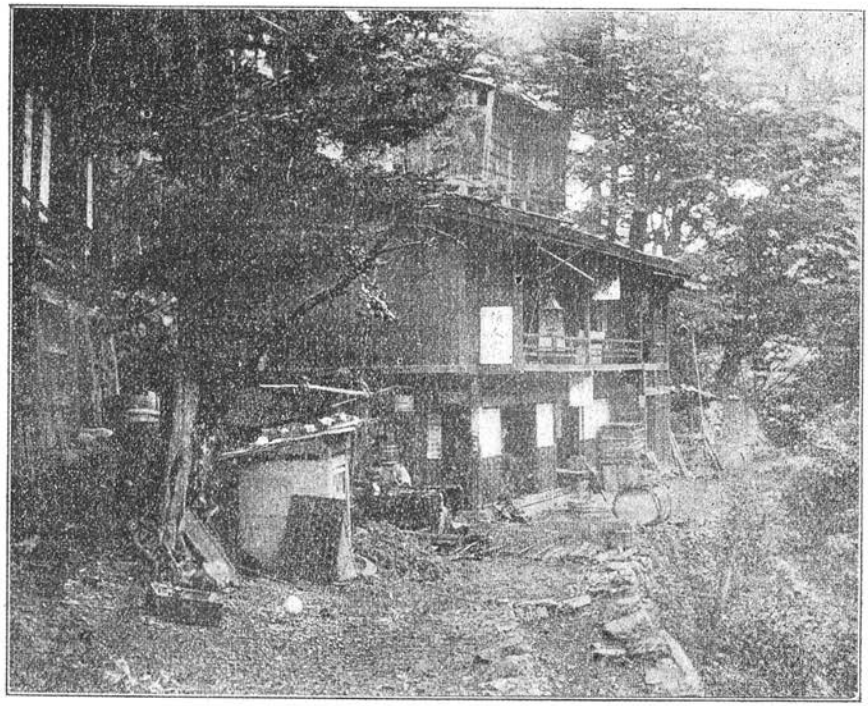
「山岳」所載

乘鞍嶽採集記（川崎義今氏　一年一號）
燕嶽及大天井（志村烏嶺氏　一年三號）
德本峠と槍ヶ岳（河部白水氏　一年三號）
笠嶽燒嶽穂高嶽紀行（林亜木氏　一年三號）
余の日本アルプス登山談（小島烏水氏　一年三號）
日本アルプスと其登路について（高頭式氏　一年三號）
日本アルプスの南半（小島烏水氏　二年一號）
日本アルプス縱走記（志村烏嶺氏　三年二號）
日本アルプス中央部横斷の旅行談（河田氏　三年三號及び本號雜錄）
硫黃嶽登山（たかの　三年三號）

小島烏水氏著。「雲表」、「山水無盡藏」
志村烏嶺氏著。「やま」

十一、名所

名所と云つても、上高地の名所は、普通の名所と稍々其撰を異にして居るのである、上高地には東西に二ヶ所池がある、上高地を訪ふ人の、是非一日を費すべき價値がある、東にあるのを宮川の池と云ひ、西のものを田代池と云ふ、田代池は、丁度上高地温泉場の對岸（温泉場は梓川の右岸に在る）霞澤山の下にある、數町の間一面沮洳の地で、水苔の中には、モウセンゴケや、名も知らぬ白い花も咲いて居る、諸所に水たまりがある、泉がある、林がある、流れがある、池の中には浮島がある、穂高山は、峻嚴な其全容を水中に投ずる、燒嶽は、胸のほむらか、白煙を長く〳〵引いて居る、吾人の如き筆では其實景の萬分の一も現すことは出來ない、今想ふても、其景は髣髴として頭の中に浮ぶ、上高地に遊んで田代池を訪はないならば、上高地の眞價値を知つたものとは云へない。宮川の池は温泉場からは一里半も上、穂高山の眞下にある、上高地に來らるゝ諸君が、島々から長い〳〵谷合ひ道中をして、あき〳〵した德本峠の片面を、登り切つて少し降ると、日本アルプスの第一閃光は、此等疲れ切つた、心を強烈な電氣を與へられた肉の樣に、はつと引きしめ直すのである、其時の感じは、實に瞬間的ではあるが、自然の壯嚴と絶對なる感は、ひし〳〵と逼つて來るのである、其時に注意深き士は、穂高山の直下、綠深き森林の内に、色青き池を見出すのである、此れが宮川の池である、德本峠の北面には、さゝやかな橋に、池見橋の名あるものさへある、池畔に、穂高神社の、粗雜なる奥の宮がある、池は大小三つ何れも相連なつて、池中、泉は滾々として斷えない、池の四周は、森林麟として、晝尙ほ暗濕、三池の内大なるは直徑三町にも餘るであらう、湖面靜止して、穂高の怪峯は、其一岩一石を投影する、第二のものは徑一町餘り、第一池と聯絡しては居るが、其趣は全く異つて、巨岩池中に散點し、岩上、石楠等の樹木は、恰も、人爲に植ゑ附けられた樣である、第三の池は極めて小で、前二者と比較するに足らないが、又其趣を異にして居る、三池の水は合して一流となつて、梓川に入る、是を田代池と比較するに、後者を人間的でありとすると（人爲と云ふ意に非ず）前者は自然的である、田代池は一見して廣ろ〳〵した、快活な感じがするが、宮川の池は、狹い、陰氣な、然し森嚴な想が浮ぶ、實際説明なしに、宮川の池の寫眞を見たならば、未知の人は必ず、人工的の庭園としか思はないであらう、該地方では、宮川の池を信濃松島と云ふて居る位である、此宮川の池の傍に、嘉門治小屋がある、小屋は池を距ること一町餘り、流れに沿うて、間口二間奥行一間半の、斯る山中とし



大野川村舍

（高野鷹蔵氏撮影）

ては、稀なる立派な小屋である、彼の嘉門治、此家を自れが、根城として、夏は宮川の池に筏を浮べて岩魚を漁り、冬は雪皚々たる山中を獵するのである、嘉門治小屋には米一斗を絶やした事がないと云はるゝ程、山中の小屋としては、美事なものである、上高地に訪はるゝ諸君、一度は此老獵士嘉門治と快談して見給へ、如何に穂高の山や、梓川の水は、人の心を感化するかゞ判る。

温泉場から田代池に行くには、温泉場の直ぐ前の梓川を徒渉して、林の中を下へ二三町行き、左に折れて行けばよいのである、然し道と云ふ道もない、其れに放牧してある、牛や馬の蹈み附けた、道跡が、多いので、一寸判り難い、よく温泉場で聞いて、林の中を其方向に直進するのである、自分等は、一度行つた者があつたに拘らず、方向を失つて、池に達する事が出來ず立木に登つたが、判らなかつた、四方八方探し廻つて、やつと見出す事が出來た、池の途中に、塚らしいものがある、穂高見命の後、阿曇連、代々の墳墓の地であると云ふ。

宮川の池は、德本峠から温泉場道にと下つて來て、梓川の縁に出ると槍ヶ嶽道と合する、其所を半町餘り上に行き、其所より眞直に穂高山の方へと、梓川を渡ると、川縁りから一町ばかりで、嘉門治

小屋に行く、小屋のわきの細い道を行くと、一の池に出る、此池も森林中に、あるので一寸見出し難いのである、然し小屋には常に犬が居るから、犬の聲を當てにする事も出來る。

德本峠から溫泉場に來るには必ず梓川を横切らねばならぬ、其所を河童淵と云ふ、梓川は、穗高岳より發する岳川と合して、其所に深潭を作る、日本アルプス雪解の水は、凝つて深碧となる、龍が棲むか、魔が住むか、騷然たる谷川は、默して語らず。河童淵は將に魔の巢窟である、一種特異の木橋が架つてる、淵の名、其まゝ、河童橋と云ふ、德本峠から降りて行く旅人が、此橋を渡らうとすると、きつと行く手を遮るものがある、橋の手前に太い丸太が二本横に、「此所往來無用」と言はぬばかり二の字を引いて、かまへてる、はてな此橋が危險と云ふでもあるまいし、此先に毒蛇か野獸でもゐるのか、はてなと思ふのである、然し仔細はない、上高地東西三里の間に放牧せる牛馬の、此れより下に、出でざるが爲めの柵である、かまはず越して行けばいゝのである、橋の上に立つて、ぐるつと身を廻すと、穗高の雪が見える、岩が見える、雲が見える、燒嶽の煙も見える、穗高を見るには上高地中で、此所が一番いゝ、根から頂き迄、右の隅から左の端まで、茲も上高地の名所と云ふべきである。（本誌第一年三號河野氏撮影の「梓川に臨める燒嶽」に現れる木橋は、即ち河童橋である）

十二、旅費

旅費と云ふても、上、中、下、其他方法次第で、其全般を示し難いのではあるが、大體調べ得た所を示す事にする。

松本宿屋組合定の同地の宿泊料は次の如くである。

上等	貳圓五拾錢	旅籠料	壹　圓
一等	壹圓五拾錢	同	七拾錢
二等	八拾錢	同	參拾錢
三等	六拾錢	同	貳拾四錢

晝食料　同　同　同　同

島々松本間の馬車賃　一人　四拾錢

島々の宿泊料　普通　四拾錢位

島々上高地間　人足　壹圓五拾錢乃至貳圓位

上高地一日の宿料　六拾五錢

上高地溫泉場廣告には「宿料ハ一日金參拾錢以上七拾錢以内ニシテ、滯在諸君ノ御便利ノ爲メ、特ニ自炊室ノ設備アリ」とあり。

十三、道順

松本島々間の風景、烏水氏の「山水無盡藏」は、說き得て盡して居る、この中の「梓川を溯る記」の一文を讀まれん事を希望する。

島々には、ローマンチックな二つの物語がある、烏水氏の說明を、一寸拜借すると（山水無盡藏五十四頁）

『不平と失望の中、島々と橋場二村を繫げる雜食橋を渡る（或は雜水橋といふものあり、孰れが訛れるを知らず）長さ二十間幅六尺、兩岸より框を組み合せ、框上に桁を渡して全橋を持す、橋下に一柱を支へず、黑川の鉢盛山より北下して梓川に注ぐところ、大明神山鍋冠山溪澗の寒流、幾ど一萬尺に近き峻峰の影を漾はして、南下梓川に合するところ、この川に結節して略ぼ十字狀を成すや、こゝに四山に反響して、嘖沫、逆珠、電擊、雷奔、さすがに今まで經來りたる、末流の如く、しかく濁りたらず、川はさながら絕大なる芭蕉葉を幾枚となく展べて、沙婆暗迷の中、こゝなる橋上の欄干に頤を支へて沈吟せる人間を、掩ふが如く包まむとす、この橋に就きては哀れなる一場の物語あり、昔島々と橋場との間に、一橋をも架けざりしころのことなり、橋場に乙女あり、島々なる若人なにがしと互に戀ひつ戀ほれぬる仲とぼなりぬ。されど川澗ひろく、流れ峻しくて、逢ふ瀨のまゝならぬをはかなみたりしが、乙女は慧しき性なりければ、戀人としめしあはせ、おのれらは平生雜炊をのみうちたふべ、野山稼ぎより得たる料は儉ましくして貯へ置きつ、やうやく檜を跡ひゐて枝を截り、皮を剝ぎ、川と戀の橋渡しにしつるより、この名起りぬ、乙女の名はお節といふとか、その床しき昔々物語の紀念として、今の頑拙作りの橋は建てられたれど、橋の名を今尙ほそのまゝに傳へけるなり（ウエストン氏の「日本アルプス」に據る）』

今は島々より奥に行くには、雜食橋を渡らず、新道開けて、道は川の左岸行くのである、雜食橋に就ては、尙ほ次に記する所がある。

「靈泉白骨」なる書に

雜食橋　雜炊又は雜師とも書せり、島々より橋場に渡らんとする所一橋あり兩岸の巨岩鑿へて川を狹め、水は渦紋を爲して淵となり、龍宮淵と名く岩壁は自から橋甍となり、框を組み橋桁を其上に架し、兩岸より刎木を出し橋下柱を用ゐず長さ十八間幅二間一小奇橋なり然るに其名頗る高し、之れ其の奇觀なるに依るにあらずして寧ろ賤夫賤婦の功勞を追想するものなり。

傳へ聞く昔は此梓川に一つの橋梁なかりしかども通行は必ず爰に依れるを以て若し一朝出水あれば、交通全く杜絕して、不便言ふべからず、然るに「於せつ」と言へる一女あり、家貧ふして橋場なる某家に仕へたり、其の未來の夫ともなるべき淸兵衞なる者あり、之れ又た島々なる或人の家に仕へり、他年一家を形成し得るに至らば合巹の式を擧げ偕老同穴たらんと約し、主人の虛用を辨じ日落ちて我身の自由を得るに至れば、此の激流を涉り、斷崖を攀ぢて、往來せり、

然れども其危險言ふべからず、之れが爲め彼等は異常なる奮勵心を起せり。

誰か言ふ愛は人を痴鈍ならしむと、清兵衛おせつは、實に大なる公共心を起し、利益を社會に與ふる事となれり。

彼等兩人は深く約せり、即ち茲に橋梁を架設せん事を以てし互に朝夕の費を減じ、勤儉貯蓄を旨とし、得る所の年金と、早晨深夜主人の用事以外に勞働し得たる金錢を以て拾餘年の後ち乏しくも一木橋を架するに至れり、茲に於てか里人の喜び旅客の便、又た先の困難を忘るゝに至れり、世人其の德を大なりとし、命名するに雜炊橋を以てす、之れ常食を節し雜炊を食して茲に至れるを激賞したるものなり。

▲偶人の渡初め　寡聞淺識或ほ他に其例あるやも知るべからずと雖も、恐らくは此の橋以外には渡り初めに偶像を以てする所は之れあらざるべし、純良朴直なる里人は彼等二人の功績を長なへに後世に傳へんとを計り、以來橋の架換へには必ず兩人を以て渡り初めを行ふとを爲せり、而して其の沒後に至っては偶像を作り、新橋成るや、橋邊よりおせつを出し、島々より清兵衛を出し、之が渡り初めの後ち、初めて作事奉行の渡り初めありて式を爲せり、實に古人が德を墓ふこと、抑も斯の如く篤かりしを知るに足らん。

善行の彰表斯の如くにして忽ち領主の知る所となり、總て直轄して架替べを行ひたり、故に其の設計能く完備し兩崖より刎木を出し、橋より水面迄八間餘、橋の長さ十九間幅二間欄干あり。

橋木は郡奉行裏判手形を元伐奉行へ渡し、島々山稻核山の内にて大野田、島々、稻核の者、元伐し、これ等諸木の山出は山邊組、庄内組、出川組、岡田組、鹽尻組、麻績組、會田組、成相組、長尾組、穗高組、松川組、池田組、右十二組に賃銀を課し、釘、鋸、大工、木挽は地頭より之を出し、橋を掛る働き人足は、上野組、島立組より出せり、故に領主よりは郡奉行をして裏判手形を元伐奉行へ渡さしめ、以て伐採の事を管掌せしめ、且つ架橋工事は作事奉行をして一切を督せしめたり。

特に松平家に至っては之の工事を千兩と定めありし斯くの如くにして其の渡り初めには偶人を出すことゝて當日は市内よりも來覽し頗る其の式を麗大ならしめたり。

尙ほ一つ傳說的の話と云ふは、雜食橋の島々寄りの方に、さゝやかな木立の内に、少さな宮居がある、其後ろは梓川で、特に深く淵をなして、水靜に、碧潭をなして居る、此所には昔から龍神が棲んで居て、人が膳椀が入る時は、紙片に所要の數を書いて置くと、翌朝川べりに、其數だけ、きつと載せてあつたものだとか、然し何時でもあつたか、或人が神から、借りたまゝ返さなかつたので、神の怒りに觸れ、以來一切貸してくれなくなつたのださうな、老人達は、此神を龍神佛と云ふて居る。

島々上高地間は、本誌第一年三號河邨白水氏の「德本峠と槍ヶ岳」を一讀せられたい。

十四、里程

次の里程表は正確なるものとは云へないが、然し多少の參考ともなるであらう。

松本—波多　三里十丁、波多—島々　一里二十丁、島々—上高地　五里十八町、(島々—德本峠　四里四丁)上高地—白骨三里？、白骨—大野川　三里、大野川—稻核　四里五丁、稻核—島々三十四丁、

十五、上高地溫泉に對する希望

以上で上高地の形骸は、稍々述べる事が出來たが、此項を自分が書くわけは、上高地の地が、吾が山岳會と密接なる關係を有するを以て、一日も早く設備が改良せられ、登山者に便利を與へる樣になつてもらひたいと云ふ希望からである、で此項を讀まるゝ上高地溫泉場の當局者は、余が意のある所を諒として、益々登山客の爲め、特別なる便利を計られたいのである。

郵便　上高地には、前にも言つた通り郵便の便利がない、全く日本の文明以外に存在して居る、せめて公の配達はなくとも、溫泉場其れ自身に於て、相當の設置をして可なりと思ふ。

人足賃の一定　島々には一定した人夫の賃金はない、人と時とで違ふ、此れは是非、大體だけでも一定して置いてもらひたい。

案內者と人夫　島々に、一命を托し得るほど、精良なる案內者が幾人あるか、案內者と、名附けらるべき者は、十指を屈するに難い、未だ日本では、此地に限らず純粹の案內者として、學識あるものを得難くはあるが、人夫と案內者とは、是非別のものとしたい、少くも其土地に於て、此者は道案內を知れる人夫、あの者は人夫一點張りの者と、別けて置いてもらひたい、出來れば、相當の方法で公示してもらひたいのである。

上高地島々間には、極めて僅少であるが、諸所道案內の標木が立つて居る、が尙ほ此れを數多くされたいのである、斯る標木を樹てる事は、一部人士には「俗化」と云ふ言葉を以て反對されるかも知れぬが、然し大に必要な點もある、此標木設置は、獨り島々上高地間に止まらず、上高地溫泉場から、田代の池に行く道とか、宮川の池へ行く道とかには、早急設備してもらひたい、田代池、宮川の池の如きは、一寸判り惡い所である。

上高地島々間に、運送を設けてもらひたい、實際上高地に行く人が少くて、運送などは引き合はぬかも知れないが、然し少さな荷物一つ位の爲めに、高い賃錢を拂つて人足一人を雇ふのも面白くないと云ふ人達も間々見受ける、で牛馬は、通はせれば通へるであらう、然し其んな便はなくとも、尙ほ殆んど每日、溫泉場で使用する米、油の類を人が擔ふて行くのであるから、此等の人夫を使用して、此等の旅客の希望を滿されたい。

上高地溫泉場に、會社で、登山に必要なる鍋、毛布等を備へて置いて、必要の時に旅客に相當の料金を徵して、貸したらばいゝ、わざ〳〵重い鍋を持參する、手間も減ずるわけである。

最後に、此れは溫泉會社に對する希望である、會社の溫泉場に對する處置は、大に其當を得て居らんと思ふ、聞く所によると、上高地の溫泉場は、一種の受負制度であつて、一年の收入見積りで、一私人が受負ふので、其豫定以上に收入があれば、其受負者の收入となるのである、從つて溫泉場の將來の發展も、眼中にない、私利一點張りである、溫泉場其ものの繁榮についても、至つて無責任なのである、で見れば、お客に對して親切なわけもなく、又溫泉場未來の爲めにと云ふ考へもない、殊に昨年茲の管理者であつた、小穴なる者の如きは、實に沒常識、不親切、なるやり方で、斯る者を管理者としては、溫泉場の未來は、知るべきである、自分は歸途に十分淸水屋に寄つて、小穴なるものゝ、不適任である事を說いた、さうして上高地の將來に就て、話して置いた、若し本年再び此者を湯守としたならば、吾が六百の山岳會員諸君に上高地に行くの不愉快を說くつもりであると迄極言した、で本年淸水屋よりの來狀によれば、本年は自身計營の任に當る筈であるとの事であれば、本年は上高地溫泉場も、多少の面目を改むるであらう、然し其れは事實に徵しての問題である、若し島々の人夫が改良され、上高地溫泉の設備なり、客の待遇法などが、改めらるゝに非ざれば、何にも島々に由らざるも、中房よりも亦殆んど、島々よりすると同日にして、槍ヶ岳に到るを得るであらう。

自分が斯く云ふも、上高地溫泉場の改良は、登山客の愉快を增す爲めである、出來る丈け登山者の愉快と便利になるやうにと祈ればである。

尙ほ上高地溫泉場の人足の精良を期するには、溫泉場主任者より、人足の姓名年齡と、其精熟せる山岳名とを列記したる書類を與へるのがいゝと思ふ、即ち、人夫適任證である、然れば他地より入り込んで來る、潛り人夫を防ぐ事が出來、旅行者も安心して備ふ事が出來る、然し、此れは一方上高地溫泉會社の當局者を信用しての問題である、無責任に亂發しては返つて、人を誤る基である、斯る事は、吾が山岳會の事業なので、追々はさうせなければならないのである。

吾人は上高地の改良を活目して待つて居る。

これで上高地の記の終末とする。（完）

燒嶽噴火口に臨む記

北尾鐐之助

(一)

七月(四十一年)二十六日天明結束して飛騨高山を發す、十二里の山路を行き盡して今日は蒲田の寒村に一泊し、明日は早天一擧して噴煙の頂きを極めんとす、一天快晴意氣頓に振ふ。

新張、高槻を經て丹生川村にかゝる、此邊りから見る飛騨山脈の連嶂、所謂日本アルプスの最高峰は峻拔一萬四百尺飛騨人の所謂おん嶽なる乘鞍の巉岩峭壁昂々然として天に聳ゆるを見るのみ、丹生川に沿つて、山愈々高く、途益々嶮し、前日の大雨と殊に、鑛山より流す濁流滔々として奇岩を嚙み之れに依つて附近の景色が尠からず損じられたるを見る、三寸の草鞋輕く、高山より漸次爪先き上りの嶮道を飛ぶが如くに進む。

坊方の村端れに、山を穿ち、路を穿つて、囂々丹生川へそゝぐ、所謂ゴンボの大清水なるものがある、何處と云ふ源を知らずして、絶えず此處へ湧き出づるのであるさうな、對岸に峭立して居る山の彼方に一ッの澤があるが、水は多分其澤から來るものと信じられて居る、荷持の爺に聞けば其澤迄は五六里を隔つであらう、其處へ籾を流すと、三日目にして此大清水へ流れ出づるを見ると云ふ、而し其源を極めたと云ふものはない、水は冷徹玉を碎いて、秘密の瀧を嶮道の中頃から迸らせて居る。

其處に長さ十間餘りの柴を以て編んだ危橋が對岸へ架してある、激流を臨む斷岩から斷岩に架して渡れば左右にぶら〳〵と振り動く、此處は何う云ふものか昔から金物を用つた橋が架らない、架しても直ぐに流れて了ふ、木橋でも釘を用いた物は直ぐに落ちて了ふ、流れが淀みを作つて深淵となり、其色、其深さ、一見粟を生ずる邊りは、魔の者が棲んで居て金具を用ひた橋を嫌ふのであると村人は信じて居るのだ。

日面村を通る、此處には兩面の窟と云つて、道から八丁程上つた谷間に底知らずの窟がある、其處は殆んど人の行かるべき所でない、一歩は一歩より嶮に、僅かに二寸餘の草の根に縋つて、身命を賭しながら斷崖を攀ぢ登つて行くのである、昔仁德天皇が兩面の怪賊を誅し給ふたと云ふのは此窟の事だ、日面の村民は此處を靈窟と稱へて神の如く恐れて居る、如

何なる旅人であらうとも決して道を敎へて呉れない、又村民と雖も神罰と唱へて決して此窟に入るやうな事をしない、唯百日以上の旱魃が續いた時は、總代を登せて此窟に願を籠る、すると覆盆の如き雨忽ちに到ると信じられて居る、窟の中は立つて行ける程で上より下より湧き出づる泉の爲め、中は瀧を流して洪水の如き奇觀を呈して居るといふ、高山で逢つた下呂の青木某が、村の子供を欺して其所在を聞き、村民に無斷で這入つた處が、如何にしてか例の大雷雨に出逢ひ、無斷靈窟を見た者がある事を發見せられて、夫が爲め村民は一揆を起し、危く危難を免れて逃げ歸つたと云ふ話も聞いた、一人己が村にありながら、其靈窟を信じなかつた同村善久寺の和尚、寺の新築に來て居た左官を引き連れて、窟の探檢に行つたが、途中神罰に當られて、斷崖より辷り落ち、身體を粉碎されて非業の死を遂げたと云ふ、それはつい此頃の事であるさうな、半丁と云へど一日仕事だと云ふし、案内者や人夫が頻りに止むるを其儘、此窟は探檢せずして直ぐ旗鋒に着き、此村に晝飯を濟して、直ちに平湯峠にかゝる。

平湯溫泉は高山より行くべき唯一の溫泉場である、殆んど信飛の國境にある處で、四面高山を以て圍み、北に笠ヶ嶽の秀峯を見る、此處等一帶、平に溫泉が湧き出づるから平湯と云ふのださうな、冬期になると、到る處濛々たる湯の氣に裹まれて了ふと云ふ事だ、此の夜螢群幾千、團々として、家の周圍を廻り、大奇觀を呈するを見る、遠雷か鳴動か轟々として遠きより異樣の音響を枕に聞く、晴れよ天、明日こそは斷雲嶂壁四里の彼方、天に冲する噴煙の眞只中ぞ。

二十六日　溫度　朝五時（高山）七十度　正午（旗鋒）八十四度　夜　九時（平湯）七十三度

（二）

二十七日　今日は愈よ本舞臺の硫黄嶽だと思ふと、もう靜止として眠つて居られない、蹶起して窓を繰ると、溫泉の石を辷る音がちよろちよろと耳につくばかりで、曉け限らぬ戸外は未だ眞ッ闇だ、大入道のやうな四山が、默然として小い予等の宿を壓して居る、打ち仰ぐ空に銀砂子を撒いたやうな星影だ、思はず、上天氣上天氣と怒鳴つて歩く。

明るくならぬ内に、昨夜勞れて出來なかつた寫眞機の原板を入換へる、荷持二名、案内者一名之れに予等の五名を加へて一行八名白米六升、罐詰十個、梅干、藥品、其他を脊負はして平湯の宿を出る。

平湯で聞いた硫黄嶽への途は斯うだ、此處からは蒲田、中尾へかゝらずに白骨道から、上高地へ行く新道へ這入り、半途も行くと蒲田へ行く途と合する處がある、其處から登つた方が却つて近からう、國境の安房峠を登つて向ふへ越したら更に蒲田へ引返す、蒲田峠を登るのだ、蒲田峠は、硫黄嶽と穗高山との連脈になつて居る間の國境なので、此の峠の絶

頂から、噴火口迄は半途位ゐのものであらう、多少の難義はあらうけれど、充分に用意をして行けば登れぬことはなからう、話で聞くと蒲田峠の上邊りでも、處々噴煙して居ると云ふ事だ、去年の十一月頃、上高地から中尾へ打ち越す旅人が此峠の絶頂で休息した事がある、すると腰かけて居た捨石にむく〳〵と熱さを覺ゑて吃驚仰天轉げるやうに中尾へ走り下つたと云ふ話もある、夫れからいつかはあの邊の山が破裂すると云ふ噂で持ち限つて居た、十二月の噴火當時は、却つて此邊は異狀を認めなかつた、多少の震動はあつたやうに思ふが、當時の風向は信州の方から蒲田の方へ吹いて居た爲め、被害を受たのは矢張り蒲田、中尾邊りの村で、蒲田の溫泉（硫黃嶽より五里）も一時涸渴して了つたし、中尾（硫黃嶽より三里）の邊りも噴煙と、灰の爲に、一時全村立ち退いて了つて、騷ぎは大變であつた、松本、長野、又高山地方へ灰を降らしたと云ふのも、山が高いから、却つて麓へ降らずに遠く十里、十五里と隔つて居る其處等へ灰が飛んだのであつたらう、村からは、未だ登つて見たと云ふ人もないから、充分な道は知らぬが、此の後しろの安房峠を越すと、直ぐ旺んに噴煙を上げて居る處が見ゑる、燒岳も山續きになつて昔しは二十度も三十度も鳴動したと云ふ事であるから、其時分から硫黃嶽邊りも、一度は破裂する山だと云はれて居た、今日でも大變な煙りであらう、上へ登つた以上は、平湯へも白骨へも歸る事は難しいから、山麓の上高地で泊るが宜かろ、峠を越して白骨へ行く岐れ途迄は、行く人があるからと云ふやうな事で、白骨行きの同志二名と共に、信飛國境の峻峰、安房山の險を意氣衝天の勢ひで攀ぢ初めた。

安房峠は遉がに信飛山脈の連峰である丈けに、道は登れば登る丈け急に迫つて、息も吐けぬ急坂である、併し一天快晴、殊に早天の事で日光を浴びず、日出後も見上る峭壁に遮られて樹林の下風は冷々と熱した頰に心地がよい、途中、白骨より平湯に赴く一人の旅人に出逢つたのみ、途は處々崩壞して危ふく杖を便りに渡る所もあるが、斷崖絶壁の俯は此安房山に認むる事が出來ぬ。

此山は硫黃嶽噴火の火山脈即ち越中の立山から發して、蜿々三十餘里御嶽に終る、所謂御嶽火山脈の中央に位して居る處だ、絶頂近くなつて、行手に大山塊が、鐵の素肌を曝露し、突兀として其斷峭天空に嘯くを見る、白箭の如き飛雨を受け天風に鍛へられてそゝり立つと爰に幾千年山の色は折柄の旭日を受けて天魔の如く輝き渡つて居る、一種恐怖の念油然として起る。

安房山の絶頂は殆んど馬の脊程の廣さよりない、此の邊迄は荷を積んだ牛が辛うじて上る位であるから之れからの道はさ程嶮しい事はない、穗高の尖鋭刄の如く近く眉を壓して連るを見る、硫黃嶽の噴煙は何れぞ。

燒嶽と云ひ硫黃嶽と云ひ決して同樣の山ではない、信飛兩國の村民が互ひに山を爭ふの念から、信州からは今回の噴火山

を燒嶽と呼び、飛驒からは硫黄嶽と呼んで居る、地形上から云へば無論噴煙を上げて居るのは硫黄嶽の方が正しい、燒嶽は硫黄嶽山脈の續きで、峰頭は確に二個となつて居る事が宜く解る、蒲田峠になつて居る處である。

噴煙當時は此の邊も一帶灰に掩はれたと云ふ熊笹の中を通る、先程から蒼穹の上一帶に旗の如き一團の雲塊が、漂々として東南に飛ぶのを見て居たが、道を通り盡すや果然、眼前に高く立ち昇れる噴煙を望む、出發以來一週餘日、五十餘里の山路を冒して漸く眼に映じたる壯大なる景色を見よ、一行手を拍ち聲を擧げて覺えず大聲に歡呼す。

始めて見た硫黄嶽は一見恐ろしい程慘烈を極めて居る、全く悉く枯死した草木の爲めに赤茶色を呈し、所々噴煙の爲めに黑く燒け拔けて斑點を殘して居る、火口壁の模樣は未だ解らぬが、望遠鏡を以て望むと火口壁の岩塊内外共一面に噴煙を上げて居るやうである、遠雷の如き鳴動は絶えず此處迄響いて來る、暫く其處に踞し地形を相して登路を探し始める。

峠から噴煙を望む硫黄嶽は、前に梓川へ這入る深溪を隔てゝ、山麓へは更に取付く術もない、唯赤茶色に枯れ果てた樹林が、大崩れになだれ落ちた處は、續いて、少しく平山となり、這ふが如く東南に延びて峠の下に向つて居る、あの平山を無二無三に突進したならば、或は絶頂の噴火口に達する事が出來やう、而し風は始終西北から吹いて居て、雄叫びの音と共に、噴煙が低い松林をかすめて行く、煙りに向つては到底登る事は不可能である、更に望遠鏡を取り直すと、此方面から見る火口壁は全く鋸齒の如き斷岩絶壁、一本の草木を認めず、漲る噴煙の爲め隱れては又現はれて來る其邊一帶の山容は、火山灰と溶岩らしいものゝ爲め殆んど足を入れる所もない、風向に依つて登路を得やうするには山麓を大廻りして煙りを避けながら、反對の西北から登るより外に方法はなからう、參謀本部の三角測量標がむく〳〵と立ち登る煙の中から時として望遠鏡に這入つて來ては、忽ち濛々たる中に消え込んで了ふ。

山を廻るつもりで更に峠を下り始めた、此間始終噴煙を望みながら進む、一里餘を行くと白骨路と上高地路と岐るゝ處へ來たが、此邊は樹林深く、噴煙は全くもう見られなくなつて、雷鳥の羽音、霧藻の懸垂、全山喬木林の物凄き景色となる、岐路は白骨へ三里、上高地へ一里、今朝出發した平湯へは二里の處。

此處で白骨へ行く人々に立ち別れる、山の人は質朴で叮嚀に其成功を祈つて呉れた、道が上高地へ這入つてからは、今迄と見違へる程の嶮路だ、此道は漸く近年開けた林道で辛うじて岩角につかまりながら、梓川の斷崖を傳ひ下りる處である、霞澤山の連峰對岸に聳ゑ、穂高山、蝶ヶ嶽の鋒頭天を摩して行手に峭立す、滔々たる激流の音を聞けど、谷深く、山深く、雜草、樹林愈々深くして更に水の流れを見ず、鳴動は遠くなり近くなり絶えず熱した耳に聞えて來る、暫く行くと樹林が一ト所開けて、硫黄嶽山塊の一角が木を倒し、岩を起して、激流に落ちかゝつて居る處へ出る、其邊へ來ると、もう谷川は一帶に例

の火山灰の爲めに埋め立てられて銀鼠色の彈力ある灰の上は歩とドン〳〵と足の裏を挑返す、或は此大崩壞の處から登る事が出來るか知ぬ時計と磁石とで地形を相すると大分山麓を歩いて來たやうであるから或は噴煙を避けられやう、試に岩角に手をかけて見ると其脆きこと土塊の如く碎け落ちた岩塊は凄じく音して底知れぬ深溪に轉落し行くを見る足塲を圖ればみな之れだ、殊に危險を冒して此の大傾斜を登つた處が、半腹以上處々大龜裂を生じて居るらしい形迹が見える、噴煙はと見るともう頭の上に來て居るやうだ、樹林を洩るゝ天日が、雲なきに時々隱れては蒼然として四邊の山色を暗くする、進めば此邊より硫黄の匂ひ、鹽酸の匂ひ、絶え間なく早や鼻口を襲ふ。

先程の灰の谷と云ひ、もうぼつ〳〵と枯れ果てた大木と云ひ、噴出當時は、十里、十五里を隔てた島々、松本邊りにさへ地上五寸餘の灰を降らしたと云ふのから見ても、如何に當時此邊が慘狀を呈したかを思ひやられる、岩を嚙み山を動かす激流でこそあれ、梓川の溪川が此先き松本を流れる女鳥羽川のやうであつたならば、必ず崩壞した山崖、降下した岩石、灰などの爲めに流れを堰き止められ、上高地一帶二十餘里の大高原は或は溪流の氾濫に任せたであらうと思ふ、高山的な銀箭のやうな豪雨が溜つては四山に沼となり、溢れては瀧となつて、噴火當時の慘狀を悉く今は流し盡したのであらう、進むに從つて、道は火山岩帶となり、山路は愈々急に、奇岩怪石兀として眉に迫る、噴煙再び亦見る能はず、途は熊篠を伐り開いた處に出で、穗高、笠ヶ嶽の秀麗なる山容を眞向きに見て進む、熊笹の途は半途にも渡るであらう、伐り取つた跡は再び縱横に根を張つて、歩行の妨げとなる事は一方でない、熊篠林を辿り越せば、上高地一帶の高原を望む處に出づ、タカトと稱する石竹の如き草花咲き亂れ、前面の翠峯に續きて白き事雪の如し。

見廻したけれども登路と思はしき處は更にない經費と日數とを關はず岩を穿ち木を伐り開いて、路のない路を攀ぢ登つたならば、或は噴火口に達せないとも其邊に出でられぬ事はないであらうが、此邊の山麓は一帶山路に最も禁物なる熊笹が簇生して居て、一度び其中に沒して了つたならば、方角は解らず、行手の山路を知る事能はず、殆んど天日を見る事さへ出來ぬ大困難を來すであらう、予等は佇立して幾度か頭上に掩ひ被さる樹林の隙間から噴煙と鳴動とを目當てに進んで行つた。

突として道、蒲田峠の登路に出づ、天漸く開けて再び硫黄嶽の全表を望む事を得、今迄右に見た噴煙は既に左りに靡いて、尤も白煙の多かつた安房山に向ふ火口の邊りは裏となり、兀として劒の如く聳ゆる火口壁の斷峭は、濛々たる噴煙を遮つて見える勇氣百倍、予は先きに立つていつの日か溪川の流れ落ちたるらしき嶮路を攀ぢ登るに途は遂に熊笹の中に入り、鬱て雜木の茂りに入り、磊々たる石灰の中に入り、行き盡せば斷崖絶壁瀧涸れ、樹木枯れ、石みな涸れて、振り仰ぐ幾百

尺、遂に又登る能はず、進退全く谷る。

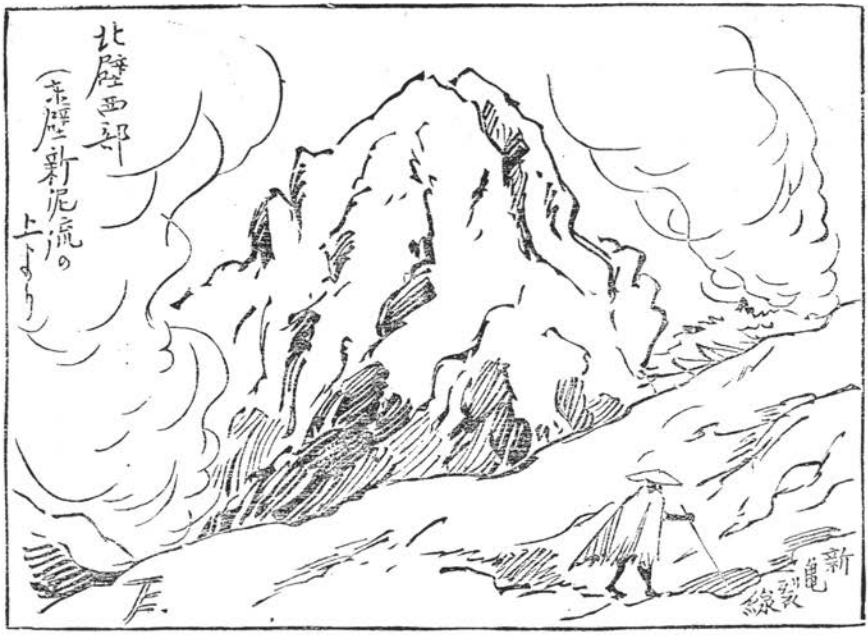
予等は又止むなく懸崖を辷り、熊篠を掻き分けて元來た途に引返さゝるを得なかつた、顧れば、硫黄嶽の煙噴は開たる天の一角に轟々として、予等の愚を笑ふに似たり衆みな佇立して言葉なし。

假令、道がなく共、今度は違ふ方面を取つて、行ける限り登つて見やう、見上る所では五合目以上は吹き出した硫黄の爲め樹木は悉く燒失して、必ず地域が開濶して居るに違ひない、樹林と云ふは唯穗高山連脈なる此蒲田峠の一部に過ぎないが、長いと見ても二里位により渉つて居ないであらう、突進！と一決してより時計を見れば午前十時半、山に入つてからは總てに不都合であらうからと、傍らの溪流を利用して米を炊ぎ、罐詰を開き、以て先づ晝飯を認む。

(三)

晝飯を濟まして暫く噴煙に對し尙山と地形に依つて進路を圖て居ると、腰に山刀を挾み藺で編んだ脚袢に足を固た年配卅位の倔强な男が予等の來た途を辿て來る、聞ば大野川の者で奥野友吉と云ひ長く白骨なる齋藤安曇村長の所に居るのだと云ふ、八月一日には例の豐科にある南安記者倶樂部の一行が、硫黄嶽探檢に赴くに就て二三日前から派遣せられ、其登路を探して居るがどうも思はしいのがない、白骨から出て絶頂を極め又白骨へ戻るのは少し難義である、上高地で一泊する心底であるなら、唯一ヶ所此蒲田峠の絶頂から、横に熊笹の中を突き切り、開濶した石塊の上を火口壁の傍まで行けぬ事はない、而し夫れも今日のやうに西北から風が吹いて居れば宜いが、噴煙に向つては何する事も出來ぬと云ふ、其途を行つた事があるなら今日は案内を賴めぬかと云へば行つても宜しいと云ふ、さらばと一行八名友吉を先登に立てゝ蒲田峠の難路を進む、時に午前十一時。

峠にかゝつてより、鳥の聲を聞かず、草花を見ず、僅かに枯死を免れたる熊笹の幾條、いやが上にも生え延びて行手の妨げとなる事夥し、口の渴き漸く烈しくなりたれど、溪水悉く涸れ果てゝ、淙々たる音を聞かず道嶮にして頗る困難を極む、鳥も花も水も噴煙の爲めに悉く奪ひ去られて了つたのであらう、山漸く高く、絶頂近くなつて、行手一面濛々たる蒲田の谷を望む邊りは、倒木、燒木、縱横に赤はげの石灰上に重り合ふて、一見物凄き事云はん方なし、此邊の山はもう到る處一條二條、太きもの小さきもの、燒くが如き岩角の間から、所々噴煙するを見る、煙りの立つ周圍を見ると或は黑く或は黄に、硫黄の結晶せるもの夥し、風向の都合が宜いので、大噴火口の噴煙は此邊へは未だ少しも來ない、唯轟々と鳴る音響は、地軸を震はして、今にも大爆發を來すかと思はしむ、道、遂に絶頂に出で、丈けと延びたる熊笹を出づれば果然、



近く天に冲する大柱煙を望む灰や岩や燒石や斷崖垂直半里餘の間赤褐色を一面に搔き廻したる如く何物も認むるに由なし、孔音早や雷の如く頭上に落かゝる。

鳥も飛ばず、花も咲かず、水も又流れず、あるは唯火口壁の一端が崩れ落ちた處から土砂を捲いて、幾十町の間樹林悉く燒け爛れ、根元から倒壞せる邊りは、乾固りたる赤褐色の赭土を山頂から一面に漲らして居る外、行手には尙ほ五月蠅くも底知れざる熊笹が茂り生ふを見るのみだ、鼻を打つ硫黄臭の爲め、胃中の膨滿と口の渴きは一層甚しい、附近を探して水を求めたけれど、更に見當らない。

平地にも尙ほ熊笹の簇生は禁物である、況してや、懸崖垂直幾十丁の間頭を沒する程の竹林は予等が行手に擴こつて居る、押ふれば跳ね返り、搔き分くれば前を塞ぎ、辷りて轉べば忽ち頭上を掩ふ、胸を打たせ頭を打たせて漸く此急崖を拔けると、忽ちにして廣濶なる地域に出で、磊々たる火口岩の一壁を見上ぐ、攀ぢ登る崖もなければ、足場を圖るの樹根もなく、糸の如く瀧の如き小噴煙縱横に噴き上りて、見上る火口壁の一端迄其間崩壞凡そ九百間。

此半里餘の燒石原を隔てゝ、火口壁の一部は圓錐形の兀岩二個を聳立し其間稍や開けて、附近なる這ひ松帶の上は一面に噴き出せし火山灰を以て埋め立てしを見る、踞したる地上早や燒くが如く、試みに踏みたる石を起せば、跡より一道の硫氣立ち騰り紛々として鼻を打つ、僅かに杖を便りに溶岩流を登り始む、凡そ山に登つて、地辷りを横斷する程危險な事はない、夫れに

之は又灰の如く、土の如き燒石原を殆んど直線に登るのだ、始め先づ縱隊になつて進む、足一度び岩塊を辷ると、忽ち二間三間と地辷りして、觸れたる處皮肉を破る、殊に先頭に立つ者が一ト度岩を落すと、其岩は後より續く者の頭上を越へて全く行く所を知らず、石、石と相搏ち、響きを發して轉び落ちて行く、其度毎に相見て幾度か苦笑した、加ふるに時々風の都合で下ろして來る噴煙は、鹽酸と硫黄の臭氣を下ろして、目と云はず鼻と云はず、濛々として吹き入る苦しさ、長く向はゞ窒息死を免れないであらう、予等は噴煙を見る度毎此の大傾斜に腹這つて煙りを避けた、そして、一分、二分、三分、風納まりて噴煙高く昇れる頃、亦一歩、一歩と進んで行く、草鞋の熱を覺ゆる事益々甚しく、全く樹林の蔭なき背上は、燒くが如き烈日に照らされて口の渴く事言語に絶し、咽喉全く涸渴して、呼吸の度毎疼痛を感ず。

實に此大傾斜は四十五度の角度を持つて居る、今一度高かりせば、四肢屬の外登攀するを免さないであらう、噴き出す硫煙の中に這つて山頂を仰げば、煙りは圓柱となり、天を衝きて蒼空に白流を漲らし、日の光りを受けては表を見せ、裏を返し、蓼々として鳴りはためき、空氣の流動迅速となりて猛勢宛然瀑を逆上ぼらすが如し。

予等は尙ほ縱隊となつて進む事の危險であるを知り、用意の細引綱を取り出して四人宛一隊となり、横隊に身體を繫ぎ合せ、一歩一歩足場を圖つて、匍ふが如く强烈なる噴煙を避けて登つた。

穂高山の尖鋭天を磨して餘りに明かに、其鋒頭を越へて槍ヶ嶽の所謂大槍突如始めて我が瞳に映じ來る、梓川の急瀬糸の如く帶の如く、中尾の寒村を遠く脚下の山懷ろに望む、漸くにして溶岩流を這ひ上つて直立幾千尺火口壁の外部に辿りついた頃は足痿へ氣勞れ、口の渴きも益々烈しくなつて困憊其極に達し今や如何ともする事が出來ない。

案内者の一人は火口壁の外部を辿つて漸く掩ひ被さる一大岩塊の下に少しの空虛ゐるを發見し、予等は辛うじて其處に辿つて休息する事を得た、此處ばかりは幸ひに烈日の光りと、噴煙とを避け得られる、そして見廻すと、尙ほ岩面を濡らした雨の爲めに、泉こそ湧き出でぬ、周圍二間餘り枯れかゝつた苔が生えて居るのを發見した、試みに舌に觸れて見ると未だ多少の水分を含んで居る、衆皆狂喜噴煙の爲め黑くなれる苔を爭ふて嘗め盡す、幸ひにも之で多少の渴を醫する事が出來た、此時一片の黑雲槍の鋒頭を掠めて、東南に走るよと見る間に笠、穂高、蝶ヶ嶽の連峰は飛ぶが如く包むが如き斷雲に隔てられて、山なく、峰なく、軈て天地なく見る限り一面の雲海を現じ來たる、是れを雲と云はゞは餘りに智に過ぎたり、濛々漠々須臾にして山脚を襲ひ、須臾にして又岩角を拂ふ、紫電一閃、般々たる雷鳴脚下に起る。

後とにして思ふ、此時こそ誠、笠、穂高、鎗の尖鋭を始め常念、大天井、有明、鍋冠りの諸山を始め悉く雨の銀箭に射すくめられて遠くは長野、北佐久、南佐久の高原一帶に及び、二錢銅貨大の雹を降らし、殊に岩村田近在は大荒れに荒れ狂て落雷數十ヶ個所即死者五名を出したる大雷雨の先き觸れであつたのだ、雲益々凝つて雷鳴愈々烈しきを加ふ、見上ぐれば轟々として小止みなき大噴煙、下瞰すれば般々たる大雷雨、思へ海拔早や八千尺の天空、雄叫びの中間にゐつて、予等は蟻の如く動き止まぬ岩角に取り縋つて居るのだ。

幸ひにして此時尙ほ天明らかに、眩しき日の光りを仰ぎ、連峰も亦皆中腹以上大雷雨を脚下に踏まへて、笑ふが如く雲外に表立するを見る、天祐、予等は之れに氣力を取り直して、殆んど垂直の火口壁を攀ぢ登り一舉、遂に其角に取り縋りて焦熱地獄の孔内を望みつゝ一齊に歡呼の聲を揚げた時に廿七日午後二時半。

凡そ自然界に於て、大噴火口より吐き出す流煙の圓柱程、圓錐形なる吾が視角に急激なる反抗を起して上昇するものはゐるまい、そして、百年、二百年、千年、萬年の後と雖も、地軸を貫き、天を突いて囂々小止みなく無限より無限に鳴りはためく、淺間は既に白鳳の昔から今に至るまで此の大不平を止めぬ、硫黃嶽の噴煙も或は今後何萬年續くかも知れない、火口壁の一部に取縋つて白煙濛々たる孔内を窺かつた時、何者とも知れず來つて予等を威嚇するものあり、去れ、去つて速やかに人の子は人に行けと、鼻を衝く硫氣を避けながら孔内を見るに、火孔の口徑、凡そ一千八十尺と稱せらる、或ひは直徑六百六十尺と稱せらるゝ淺間の噴火口より少しく遜れるものゝ如し、之れに崩れんとして崩れざる、大兀岩五峰を周ぐらし、

噴火口内の見取圖

予等が登ぼりたる、西北、及び東南の一部、火口壁の罅裂せし處より大崩壞を來して、直下幾里の間驚くべき大溶岩流蕩々として山麓に連り、殊に東南の一部は其色紫黑色を呈して、誠、黑色なる狂瀾怒濤の化石せしかを疑はしむ、而して其溶岩流の一角に危ふく崩れかゝりし一基の三角點立てり。

火口壁中の五峯中、高きものは凡そ三百尺或は檜ヶ嶽の絶巔に聳ゆる大槍の三百餘尺と伯仲の間にあらむか、噴煙、時々其頂きを廻りて、岩を呑み岩を吐き鬱々として天涯に冲騰す。

孔の附近には噴き上げられし儘、燒け散りたる這ひ松が、縱横に岩と岩との間を埋め、其上には銀鼠色の火岩灰が二尺餘り降り積りしを見る、孔内には尙ほ幾多の小孔があり平一面に噴煙を上げ、大なるものは雷の如き音響を發して白煙濛々近くべからず、予は今迄潛みたる岩角を出て累り合ふ噴石の間を下す煙りに對し凡そ幾分時位堪へ得らるゝやを試さうとしたが、未だ一分時ならざるに早や眩暈を覺ゑ、頭腦亂れて覺ゑずひれ伏しながら引退いた、暫くして噴煙の模樣を見る事半時間餘、時に風强く今迄頭上にあつた遠雷の如き轟き稍や彼方に去つて、煙りの東南に靡くを見、徐々孔内に入りて、煙なき西方に向ひ、下りて行つた、此處から見ると、例の五個の兀岩は殆んど煙りの中に包まれて了つて居る、右するも、左するも糸の如く、瀧の如き、小噴煙石をも溶かす熱氣を噴き上げ火口の中部以上に上りては時々噴煙風にあふられて、彼方の兀岩に向つて走る身は宛然釜の中に入りたるが如し、岩角に小寫眞器を据ゑ煙りに包まれんとして逃ぐる事三度、漸く其處より火口の上部を見上げて數葉を撮影す。

午後三時十五分、始め孔音凄しく、時々白煙の中に黑きもの數條を見出しおどろおどろと地底に異樣の響きを聞きしもの應て何物か顏に當るあり、拭ひ見れば灰なり既にして孔音漸く激しく、突如、大柱煙素破やと思ふ間もあらせず、鳴動、鳴動大鳴動！。

素破大鳴動と見るや、予等は覺ゑず岩塊の上に飛び上り、何の考へもなく夢中になつて溶岩流を走り下つた、頭上に降りかかる灰の爲め服は悉く汚れ、岩角に傷つけたる足よりは紅血の滲み出るを見る、暫くして鳴動漸く納り、一時凄じかりし噴煙も舊に復して遙かに煙の靡くを見たが、案内に引き連れた友吉は悠然と遲れて上方の火口壁に立ちつゝ一人笑つて居る、開けば大鳴動は一日十回又は十五回宛三十分乃至一時間と時を限つて起る、下から見て居ても其時は烈しく噴き出す黑煙と、其他平常煙の見えぬ處ゑで一齊に噴出し、孔音も其時ばかりは二里半を隔てた上高地で能く聞き取る事が出來るのだと云ふ、誰れやらが淺間の大噴煙に出逢うて周章走り下り、仰ぎ見て、始めて何等の恐、何等の痴、淺間の火口もし爆發せば、吾人が……數歩……數百歩……數千歩を走るとも其甲斐やなからむと云ひし事あるを思ひ起し、衆みな相顧みて苦笑す、驚くべし、登りには巡逡如何ともし難かりし岩角の一部を、予等は正しく飛鳥の如く飛び下りて來たのだ、大いなる恐怖は殆んど決死の勇を出す、予等は又氣力を取り直して火口壁上に登る。

昨年十二月十日噴火當時に於ける風向は何うであつたか知る者が尠ないが、地形で見ると噴煙は大方西北（飛驒）から東南（信州）に向つて靡いて居るやうである、先き程の大雷雨の先觸れは、既に松本平地方から、遠く北佐久間方面に向つたやうで、今日は殊に西北の風が強い、南は乘鞍の峻峰を以て圍み、東南から東にかけては、霞澤、及び蝶ヶ嶽の連峯峙ち北は穗高、槍の峯頭、一大峯壁となり、西は乘鞍の支脈なる平湯峠の山一帶、帶の如く立て廻して、僅かに西北の一方、少しく隔たりて、笠ヶ嶽、笠戸山の大山脈を集めたれど、遠く吉城郡の廿五山を隔てゝは越、飛の國境を爲す高嶺山の連峯を望むまで地勢稍や開け、越ゑては十五里に渉る越中の大平原となり、平原の行き盡す所富山市あり、果は洋々たる日本海より吹き送る天風、遠く此硫黃嶽の噴煙に突き當つて、相鬪ふ。

地質は蒲田峠の下一部古世紀の水成岩を廻らし、間々硬砂岩、又は始めの火山灰質が冲積層を作り出して居る處もある、硫黃嶽にかゝつてからは輝石富士岩となり、大體に於て淺間山體を構成するものと同樣である、噴出物には流紋岩質、凝灰岩などの變質して生ずるといふ菫青石などを見ず、噴煙は硫黃質の外甚しく鹽酸質を含む。

火口は予等の望み得たるものゝみでも大小八個は數へられる、尤も大いなるものは口徑八尺餘、此内兀岩の腹に噴き出したる火口には危險を冒さば其側迄進む事を得、地熱五十三度、氣壓五二五、海拔八千百八十七尺を測る。

廿七日温度　朝五時（平湯）七十度　正午（蒲田峠）八十度　夜九時（上高地）七十四度

(四)

一行の中に高山から有志が人選して、荷持ちに付けて來れた、平八と云ふお爺さんがあつた、もう五十越しの年寄りであるが、山にかけては人に遲れぬ豪の者で、今でも年々御嶽、乘鞍などの嶮を五六度も往來すると云ふ、曾ては御嶽の絶頂から、相對して聳立する駒ヶ嶽の絶頂に赴き、直樣引返して、再び御嶽の頂上迄四十餘里の嶮路を其日一日に往復して人人を愕かして、今尙ほ土地の一ッ話となつて居る位の爺さんである、後學の爲めにとて、寫眞器を引擔いで、始終元氣宜く先頭に立ち道なき道を無雜作に攀ぢ登つて行つたが、予等が危險を冒して火口壁の內部に迄進入した折には、唯一人殘つて岩上に踞して居るのを見た、道がに老の身の危險を氣遣ふのであらうと思つて居ると、不思議や須臾にして彼れの姿を認めず、予等は充分なる觀測及び撮影を終りての歸途、不圖見れば、思ひきや彼れは知らず〳〵風の爲めに靡ける噴煙の中を突き切り大火口の傍に迄辿て行き大膽にも手近にありし岩塊の一個を其孔內に投込だ先程灰ともつかず、砂ともつかず、燒石の如きものが紛々として面を打ち、火傷する程ではないが、一種の熱氣を覺えたのは此石の噴出したのであつたのだ、而も今迄向ふの岩角へ吹き付けて居た噴煙は次第に孔口に擴がり來り、老人は突切りし道を一面の煙りに斷たれて引返す事能はず止むなく地上に這つて煙りの退くを待つて居たのが遂に硫氣に中てられて絶息せんとしたのだ、予等は必死を期して鼻口にメントール液又はエーテルを塗抹し、布切れに顏面を掩ひて漲る煙りの中を突進し、辛うじて老人を救ひ出した、顏面蒼白、呼吸切迫、言語も發し得ざるを肩に掛て下山の途に着く、さらば、予等は今五十餘里の山路を踏破して漸く合したる硫黃嶽の噴火口に分れんとす、辛うじて崩れかゝりし三角點に辿りつき、各自に姓名を署して愈々一溜りもなき溶岩流の上を辷り始む、一足毎に立つ硫氣と、濛々たる火山灰とは目と云はず鼻と云はず、强烈なる臭氣を衝き上げ來たり、膽沮みて手足みな震ふ、而も噴煙漸やく遠くより予等の後を襲ふものゝ如く此の大噴煙に脅を威嚇されながら、殆んど轉ぶが如く大傾斜を下り、再び路なき熊笹を突進して薄田峠の絶頂に辿り下りしは午後五時半、道は尙遠し、飛ぶが如く峠の難路を走り下りて梓川の急瀨、一條白く、夕雲の中を縫うて目の仄かなる頃、漸くにして此深山中の一軒家、上高地の溫泉場に歸着す。

燒嶽は信州の燒嶽であるが、硫黃嶽は飛驒の硫黃嶽である、登つて見て國境を案ずると、同山の麓は飛驒に向つて擴大し、殊に噴火口の大部分は飛驒の方、吉城郡上寶村に屬して居る、尤も山に近い所は飛驒の中尾、信州の方では一行が辿りついた、上高地の溫泉場である。

上高地の温泉場は、穂高の山麓、梓川の急瀬に臨んで居る處で、今まで多くの地圖には見當らない、何處へ行くにも、家のある處までは五里近くの深山に一棟建の家で、全く人寰を離れて居る、海拔五千七百尺、輕井澤より高きこと實に一千九百尺、温泉も玉を溶かしたやうであるが、惜しむらくは設備が不完全で、殊に客を遇するに甚だ不親切である、目下三十六人の株主で株式組織になつて居るが之れを維持すると云ふ事は難かしいであらう、温泉や避暑地と云ふよりも、寧ろ、山嶽深勝家が、據なく雨露を凌ぐ位ゐのものだ、殊に槍、穂高などの壯觀を極めるには、何うしても此處に一泊せねばならぬ地形を持つて居る、同宿した中に、京都から來た、米人の一團があつた、槍ヶ嶽を極めて、此處に勞れを休むること二日、予等を迎へて頻りに硫黄嶽の話しを求む、明日は穂高を極むるか、或ひは硫黄嶽を探檢せんかと、未だ協議中だと云ふやうな話、斯くして外人等の團體は、避暑旅行として、もう旺んに信飛の國境を蹂躙して居るのだ、去年も飛驒を歩いて、幾團かの外人に出逢つた事がある、日光、箱根と云へば、宜いは宜いとしても箱庭的だ、日本人は何故此の雄大な日本アルプスを跋渉するものが尠ないだらうと寧ろ向ふから不思議顔で云ふ。

夕方より般々たる雷鳴を聞く、朝晴たれど天候尚は定まらず、幾度か躊躇したる結果案内者なきと、食料に乏しかりし爲め、遂に槍ヶ嶽の登攀を中止す、あゝ槍ヶ嶽密雲漠々として、天全くその峰頭を秘密の幕に包み終る。

早朝上高地出發、此處より直ちに島々に出でんとせしも、引返して白骨に向ふ事に決し、再び四里の山道を辿る、道に山下吉城郡長小池上實村長等、硫黄嶽實地探檢の一行に逢ふ、一行は同山に登りたれど、天候思はしからずして火孔内を窺ふ事を得ず、予等の一行が天祐によりて飽く迄觀測し得たるを聞き頗る羨色あり、路傍の樹根に踞し、硫黄嶽に就きて、數十分を語る、白骨に着せしは午後三時、齋藤安曇村長の好意を受けて同本家に入る。

小矢部川上流より越中桂、飛驒加須良を經て白山地嶽谷附近の秋色を探る記

石崎光瑤

白山の靈峰から、裏山越えして、飛驒の平瀬に降つたのは、去年(四十年)の盛夏七月下旬であつた、絶頂より新谷までの間道は、只惡絶嶮峻を極めるのみで、其間頗る急斜面の區域の大きい殘雪の偉觀はあるが、斯るものは他の山嶽に於ても、

見る事が出來るから敢て推賞するにも足るまい、然し新谷に近く、白水瀧より平瀬に出づる約四里餘の谿間は、實に詩趣の横溢したる處、海内他にかれ程神々しい幽遠な景色は尠なからうと思ふ、黒部の谿谷が或一部に於て、稍々趣の髣髴たるものがあるが規模の點に至つては、全然比較にならない、自分が此谿谷を通過したのは、盛夏の眞晝で、滿山濃厚なる暗綠色を以て塗抹せられ、强烈な日光が、容赦なく隈々まで射徹してゐる極く色彩に乏しい時であつた、平遠なる水田だとか、限りなき空中などには、此强烈なる配色によつて、折には面白い情趣を添へるものだが、百尺斷岩が削立して、水晶の樣な清流が、其間を水煙を騰てゝ縫ふて行く深山の谿谷には、眞夏の晝として、絶好の趣味を味ふには、物足らぬ心地もする、併し彼蓊鬱たる大森林帶が、俄然數百尺の斷涯に蔭さて、其中から轟然落下し來る瀑水の、迂餘曲折「ハコヌキ」と稱する狹い暗い峽間を、ゆるやかに流れ來つて「シナクラ」「ベンツル」の絶壁の下を音を立てゝ、奔り走ぐ崇嚴雄渾なる景は、稱するに足るものがある、で此邊の神々しい風景は、深く腦裏に印せられ、爾來常に當時を、追想しては、徒らに夢裡に此大自然に親しんで居た、其曾遊の俤をだもと、抽き出した寫生帖に、はしなくも紅葉の大門山を見出したので、フト秋の白水の瀧と云ふのに想ひ到る、彼裾を水に浸して、頂は九天を摩する大絶壁が、燃ゆる樣な紅葉を以て彩られたならばと思ふと、高山の秋が切に見たくなる、さして此大門山を寫したのは、丁度去年の今日だつたと知ると、又他を顧慮するの遑もない、直ちに井村芳園君に檄を飛した、事もなく出立は明朝と極まつた。

（一）小矢部川上流

由來北陸の地は、秋から冬へかけて、常に暴れ勝の陰鬱極まる不快な天候のみ續くのが例で、數日前からも、既にこれに惱まされて居たのだが、出立の今朝、珍らしく輝やかしい日影を見たので、心地よき快晴を期して、十月十四日午前七時輕裝、福光の栖霞山莊を立ち出でた、小矢部に沿うて、溯ること三里、小院瀬見村より道を傍の細徑に取つて、小矢部の橋を渡り、これより少しく坂路を辿る、アキチョウヂ、ミソガワサウ、の花が夥しく咲き亂れてゐる、立野脇を過ぎて、岩澤（カンヂヤ）、大瀧などの奔湍激流を、脚下に瞰下しつゝ、路は始終川に沿うて次第に山へと入つて行く、こゝにめづらしく鹽釜菊を數株見た、今夏佐良峠で、立山風露や山鳥甲、深山鍬形など、入り交つて妍を競ふてゐたのを寫した事があるが、此晩秋をゆくりなく、こゝにこれを見たので聊か驚かされた、進むに隨つて、次第に景色が山深くなつてくる、が此邊の風物は既に目慣れて居るから足を速めて下刀利（シモトウリ）を過ぎ、上刀利をも過ぎ、瀧谷で晝飯を取つたが、折から收穫に急がしき山村の秋が、いかにも畫趣に富んで居たので、こゝに一時間以上を寫生に費した、中河内を過ぎると小矢部は、其源を二流に岐れ

て居る、左の方大門山よりするものを渡つて更に左折し、川に沿うて溯れば、途は俄に峽谷の半腹を縫ふて進み、生ひ茂れる雜木に小矢部の流れは、暫く見る事が出來ぬ、此登り口にハンクワイアザミが美しう、丁度ユキワリシホガマを廓大した樣に、淡紅の芳唇を開いてる、試みに折り取ると嫌な臭がした、漸次長瀞へと近づく、比較的植物が高山めいてくる、カニカワホリ、クルマバハグマ、フクハラサウなどが霜に染みて紅紫色を呈してる、斑入の車前止を一株採つた、これだけは霜にも染まずに居る、刀利谷の上へと來て、木の間隱れを遙かに小矢部川が絕壁の下を流るるのを見た、此あたり巖面に生せる老松の幾百年の風雨に白く晒されたものが所謂蒼龍の俯して碧潭に臨むとか、或は雲表遙かに翔らんとするとか云ふ風に、其態が頗る凡でない、これを大白川沿岸の壯大なる趣に比べて、盆景的である、此絕壁を下より仰ぎ見やうと、路傍に細徑を求めて、密林をなしてゐる石楠花の間を縫ふて甕て川へ出た、三方谷の方に向つて、炭燒が架けたらしい柴橋がある、それが雅致に富んだ、丁度明畫などの山水中のものだつたので、直ちにスケッチを始める、尙是れに近く、峭壁を落つる三丈に近き瀧を得たので、此谷で約二時間をば、畫に餘念もなき時を四五人の炭燒が重荷を擔ぎながら、思はぬ自分等に怪訝の眼を張つて去つた、時計を見ると四時半だ、寫生を止めて元の道へ上り、黃昏時下小屋に着いて豪農谷口三太と云ふに草鞋を解いた、圍爐裡を取まいて四方山の話の中に、平瀨に幾年も居たと云ふ、頗る白水通の壯漢が居つて、滔々として辯ずる、此頃でも行けるだらうかと問ふと、「模樣さへよけりや案じやないぞ」と答へる、我事就れりとばかり、其夜は魂を白山の中に飛ばせて夢に入つた。

小矢部川上流(長瀞)の寫生

(石崎光瑤氏作)

◎小矢部川上流より越中桂、飛驒加須良を經て白山地獄谷附近の秋色を探る記　石崎

(二) 越中桂―飛驒加須良

朝六時結束して下小屋を出た、曇つてる加減か、未だ薄暗い空合だ、小矢部へ注ぐ支流を徒渉する頃雨がポツリと落ちて來た、行程一里餘にして小矢部の上流に達する、遙か山の彼方の木の間より、不動ヶ瀧の落ちるのが見ゆる、溪流傳ひに瀧へ行くのは、尠からぬ勞苦と時間とを費さねばならぬ、既に昨秋是を究めた經驗もあるので、今日は間道を求めて行うと、其儘川を横ぎつて、桂路を三四丁登り、注意すると小さい道がある、蕎麥畑へでも通ふのらしい、それへ折れて行くと、生ひ茂れる雜草の中に又ゐるかなしかに小道らしいのが認められる、それを行くこと一丁餘りにして瀧の前へ出た、しかも「里人が魔艸の樣に恐れて近づかぬ瀧だから一度は探りたい」と云つた友も、其無趣味で、レンズにおさむる價値のないのに呆れて直ぐに引返して元の道へと出た、雨は益々降りしきる、後を振り向くと霜に飽くまでにはないが、丹赭色の味のある山に、輕く白雲が、飛ぶよと見るまに樣々に變化して山腹を飾る、山葡萄や何かを前景として一枚撮らうかと、幾度も踏み止まつてみたが、雨が激しいので斷念して行く、軈て此山の峠らしい處へ出ると、道が二つに分れてる、右は上りで左はダラ〳〵下りだ、左を取つて大分行くと、又二筋になる、木標が立つてるが文字が消へ失せて分らない、幸に前夜質して置いたから右をとつて行く、(左は赤尾に出づる路) 是より急坂もあり、且つ縷の如き路の削れる如く谷底に向つて崩壞したのが、處々にあるなど、松尾峠にも劣らないなどゝ話し合うて行く、トキハカヘデ、フウ、ウリハダカヘデ、オガラバナ、ミヂカヘデ、イタヤメイゲツ、其他千種の楓が黄に、紅に、樣々に照つてるのは、實に美くしい、無情なる雨伯の虐待を受けてる我等に、少からぬ慰藉を與へて呉れる、紀念の爲にと、歩きながら折り採つては胴籃に打込みつゝ急進する、午前十時半木蔭に握飯をしたゝめて、十一時境川へ注ぎ加はる流れを徒渉し、林の中を上つて行くと、程なく桂へ着いて、始めて人に會つた、此間五里の山道、絶えて人に出會さなかつた、幸にして前夜快男兒が詳細に敎へて呉れたのを書き取つて置いたから、錯雜した處も直ちに選定を下したものゝ、知らぬとすれば隨分迷い易い處が澤山あつた。十一時半越飛の境界なる境川を徒渉して、向岸に道を探り出して登つて行く、此磧で名も知らぬ拳大の、馬鹿に大きい蘚を採集した、四五丁登ると、峠で加須良の在所が見える、桂もこゝも戸數僅に七戸に過ぎぬ、地味磽确、農産物としては又稗、蕎麥類の外無く、唯家々養蠶を盛んに營むから、其屋宇の構造、前面よりは屋根のみ、無暗に高い、平屋の樣に見えて、側面は四階五階、甚だしいのは六階のがある、古雅な面白い建築だ、豪農中野清四郎と云ふに休憩し、懇ろなる歡待を受けた、茲を辭したのが午後一時、村の端れに立派な森があつて、古色掬す可き小社が祀られてある、暫く行く

と、廣い川を徒渉する事となるが、是からは其度毎、更に細徑を探り出さねばならぬ、二人で上と下とに別れて探り出しては、一ッになつて進む、幽邃な處もあつたが、雨が寸時も餘裕を與へぬので更に感興を惹かさない、樹の枝を以て、組み成した梯子によつて磧へ下りると、右手の谷から二十名計の工夫が盛んに、曹洞宗大本山總持寺再建用の木材を伐り出してる、それから川を渉つて半里程行くと、人夫小屋があつた、中を覗いて道を尋ねると「今白い雲の出て居る初めての谷へ入れ」と敎へて呉れた、それを目指して入つて行く、道らしくも覺えぬので不安ながら十町程登ると、向ふに二十名程の人夫が掛聲勇ましく鳶口を振り立てゝ、谷を埋めん計り夥しい木材を出してゐる、此處で人夫の頭とも覺しきのに前途の道程を訊くと、馬狩へ三里鳩ヶ谷へ五里だと云ふので、馬狩迄行くと定めた、四邊は欅、栃等の見事な深林をなしてゐる、さなきだに日光を通さない深林に終日の雨とゐるから、一入陰濕の氣充滿し霧立て罩めて、梢の先が朦朧と見ゐる、振り返つて見ると、一團となつて働いてる人夫は、蟲の樣に小さい、此森林を登るのが頗る長い、太古以來斧鉞を入れないと云ふ樣な處も隨分ゐる、登り盡くすと峠らしいのに石が二ッ三ッと木標らしいのが倒れて居る、峠と云へば何人も明るゝ晴々とした處の樣に直覺するが、此峠は眞暗な茂つた處だ、一寸休むで、寒いから直に下つて行く、少し下ると前方に、金剛堂山の連脈が屏風の樣に聳立してる、走る樣に下り切ると、川が流れてる、夫を渡つて又、峠にさしかゝる、雨水の爲に携帶品が、重量を增したのと、空腹を覺へて來たので、平素ならば易々たる道だが、今は却々に苦しい、時計を出して見ると五時に間もない、暮るゝに早き秋の夕、況してや雨とゐる、必死となつて歩るいて行く、此峠を越して下ると谷川の向岸に、定かならぬが、畑地らしいのが見ゐる、飛び立つ樣に思ふて行くと、細い道の中央へ出た、新らしい木標があるので、見ると今來た道を指して「大本山伐木道」とのみゐる、川下へ行く筈はないと、右手を取つて行く、路は次第に廣くなつて、六七町來ると川へ出る、傍に細い路が見ゐたが、廣いのに限ると、見向きもせず川を渡らうとすると、珍らしくも一人の樵夫が後から來るのに逢ふた、是を行けば馬狩かと訊くと「是は飯島へ行く、馬狩なら後の細道を行け」と云ふ、黃昏時でもあり「馬狩迄何町程だ」と尋ねると「二三町だ」と云ふ、引返して行うとすると途が三筋ゐる、南無三と思つたが、川の近いのに行けと一番目のを取つて行く、日は追々と暮れかゝる、三丁も四丁も來たと思ふが、未だ人家の有る氣勢もない、却つて今迄は畑もあり、路もよかつたのが、次第に山深い景色となつて途も次第に惡くなる、草茫々たる有樣だ、斯うなると、友が疑ひ出した、慥かな自信がないから自分も動かされて元の交叉點へ來て、二筋目のを邁進する、また失望に終つた、刻一刻彼方の山此方の谷と次第に薄黑い夜の帷が垂れて來る、三筋目のを進む、山へ登つてしまう、もはや日は暮れて、物のゐいろも分らない、些細な樹根に觸れても轉びさうになる、此上は天明を待つて進むの利な

るを知つて不心服らしい友を說いて、樹の下蔭に野宿する事と定めた、此時既に雙肩から下した携帶品の所在すら分らぬ眞暗だ、燐寸を取出したが濡れてしまつて色々工夫を凝らしたが遂に發火せぬ、斷念して、莫蓙と笠で漸くに、雨を凌いでる、夜は更けるが今朝よりの雨は、小歇みもせず、愈々豪く降り出す、眠を得んとすれども、寒氣五體に浸みて、骨迄冷へ込む、雨水は首筋より胸、胸より腹へと流れ込むので心地惡るさ例へ方もない、同じ野宿でも嘗て針の木横斷の時、高瀨川で行き暮れた夜は、空腹は讓らなかつたが、幸ひに天候が良かつたので、天も焦さんばかりの大焚火が出來たから、苦しい中にも遙かに快味があつた、斯くて惡戰苦鬪の中に、長き夜も漸く明けなんとする頃、小歇みもしなかつた雨も歇んで、闇に慣れたる眼に、白い雲が薄暗い山をめぐつてるのが見え出した、待兼ねたとばかり、携帶品を確乎と分擔したは見事だが、空腹、不眠、加ふるに、一夜を踏み通した足は歩むとよりは、寧ろ蹌き〳〵昨日の川へ引き返し、一掬の水に腹を滿たして、昨日樵夫の去つた坂路を上る事三町程、夫より下り坂半里餘りで、飯嶋へ着いた、人家三四十も散在して居る、取るものも取り敢へず、とある家へ入つて、飯を掻き込んだ、鳩ヶ谷迄の里程を問へば「此處が鳩ヶ谷だ」と云ふ。

『飯嶋鳩ヶ谷つゞきの在所、他所でないぞや荻町』

と云ふ里謳迄、聞かされて、昨夜の失敗は全然、狐につまゝれた樣で、何だか耻かしくてたまらなかつた。

此行下小屋で聞いた時は、加須良で一泊せよとの事であつたが、其處へ着いたのが正午で、それから馬狩へも鳩ヶ谷へも山越三里だと云ふ、二十萬分一の地圖を檢すると、鳩ヶ谷と加須良との中央に馬狩があるのに些か不審を抱いたが、實地に通ひ慣れた里人の言だから信じて出た、然るに山中で人夫に聞くと鳩ヶ谷へは五里だと云ふ、すると二十萬分一に適合する、該圖には馬狩から大窪を經て馬狩へ出る線と、馬狩の手前から、内ヶ戸へ出る線とが記されてある（内ヶ戸へ出る線をつたら鳩ヶ谷へ出た）から、然らばと馬狩をのみ求めて鳩ヶ谷を念中に置かなかつたから「飯島へ行く」と答へた樵夫の言も村落の名稱とは氣が付かず、つまらぬ失敗に陷つた。

下小屋より鳩ヶ谷迄九里に滿たぬが、里道とは云へ、其間終日行人に會はず、路も極めて認め難く、幾度も徒涉の毎に路を探り出すのに時間を要する（山中唯一の道知るべたる小石を積んだのがない）今度の樣な失敗は無くとも些の餘裕を有つ事が出來ず、樣（トヂ）の木の森林もスケッチ一枚出來ず、素通りに終つたのは千歲の恨事であつた、併し日の長い夏季ならば、こんな考は要らない。

里謳

『飯嶋鳩ヶ谷飛ぶ鳥りや落つる、諸國あきうどは皆泊る』

鳩ヶ谷は飯嶋を合算して、戸數百に餘る、白川筋での大村落である、昨夜來の疲勞を醫す可く、井村君の知己、長澤某氏方に一日休養することゝした、不足を告げた睡魔の勢は旺盛なもので、午前中は一氣に華胥の國へ遊んでしまつた、目を覺ましてから、植物の壓搾や携帶品の點檢などをする、昨日終日終夜、間斷なき强雨の苛責を受けた爲め、寫眞器の如きは、

注意したにも不拘、取枠一個毎に徹を生じてゐる、一々乾燥する樣に整頓し完つて、植物の壓搾などをやつてる中に、短き秋の日の早や日は屋後の峰に落ちてしまつた。今日は氏神樣の祭禮と云ふので、晩餐には酒迄饗應される、家人にすゝめらるゝ儘、終日寢轉んで居たから運動がてら、家僕に提燈を持たせて、御宮へと詣でた、眞暗な往來を餘程行くと、山手に一むら杉木立があつて、灯の光が洩れて見える、神官も居ず神樂の音も聞えず、小供も遊んで居ない、寂寞としてる、村の若衆が二三人悄然と座つて居る、餘りに淋しいのに驚いた、禮拜を濟まして立ち出でた、歸る途すがら、頰にほてる酒機嫌に任せて、友と、加茂や、松風の節々を高らかに謳ふ、昨夜の今頃は慄へて居たになどゝ、笑ひ興じつゝやつて來ると、今しがた郵便局で三弦を搔きならして、騷いで居たのが、遽にひつそりとなる、我々の謠に興を破られたのらしい。

(三) 白川沿岸＝平瀨

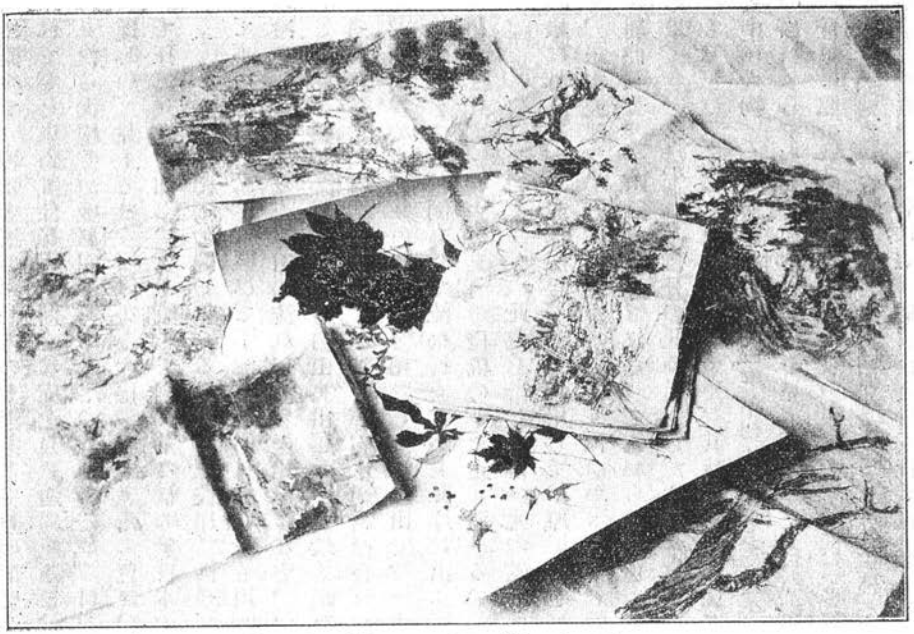
翌朝目覺めの床に、梢の露が落葉を叩く音を聞きながら起き出でた、外は霧が深く立罩めて、隣家の立樹すら、淡々として見える、天氣のよくなる前兆らしい、欣んで外へ出て、冷たい空氣を吸ひつゝ、栗林の中を逍遙する、朝食を濟まして、外を見ると、對岸に棚引いてる雲が、如何にも美しい、急いで寫生帖を携へ、田甫傳ひに、磧に飛び下りて見た、雲は此時既に巖蔭に隱れて巖壁のみが目に立つ、幾千年の古へより、息む事なき水の浸蝕によつて、成されたる巖壁には、蒼松翠を滴らして、急瀨に臨み、後には白雲搖曳して、岩墟から潺々として落つる小さき飛泉は、銀湍碧渦の本流へ注いでゐる、こゝに寫生を恣にして、午後二時―それれ友に喚び入れられて―倉皇書飯を喫し、再び旅裝を整へて、此處を辭した、家の前で獅子捕の秘曲の最中だ、獅子も獅子捕も、頗る悠暢な働らき振りだ、そして是を環視して立てる、村童の風采は、正に中古の人物だ、變遷の激烈な此頃でも、此邊は未だ一向風潮に、染まつて居らぬと見える、然うかと思ふと、隣村の荻町を通過する時、山袴を穿つた、嫁御寮に、是れは又興さめた、二〇三とやらを結ふた急進派もあつた。鳩ヶ谷を距る十餘町、荻町を過ぎて、大牧迄約二里の間は、巨巖と、青松と、急流との配合美は、變化極まりなく、實に應接に遑がない位だ、大牧から路は川と離れて、野谷へ出て再び川岸を通過する、野谷の在所を下りて、釣橋の上から、過ぎ來し方を眺めると、紅葉の美しいのと、茅屋の澁いのと、調和して、如何にも風致に富んで居るので、橋上に立ちはだかつて、寫生を始めてると、郵便脚夫が通り掛つて、傍へ立つて覗いてる、此處を去つて、保木脇村を過ぐると向ふの山稜が、甚だしく崩壞して山骨を露出してる、村の者の口碑によると、往時此處に百戸許の村があつたが一夜此大崩壞によつて、家屋人畜餘さず埋沒せられ、水は行手を遮られて、蒼海の觀があつたとの事だ、平瀨へ近づいて、水谷と云ふ處へ來る、今迄濶か

つた道が急に細くなつて、深淵を脚下に見る絶壁の處を通過する、眼を脚下に注げば、緩く渦を卷いて蟠めく水は宛然油を流した樣、水色は碧瑠璃盤と云ふよりも全く紺壺の樣な色を呈してる、此處で一枚撮影して、舊知の平瀨へ、日沒頃に着いた、前年泊つた山越猪之助と云ふに、宿を定め、明朝白水へ行く人夫の交渉や、食料萬端の準備等を完つて、明日の天候を祈りつゝ寢に就いた。

(四) 白山裏山道

朝早く眼が覺めた、戸を排すると、外は濛々たる濃霧だ、雨も落ちない樣子、此分ならばと、仕度早々出立する事とする、人夫として、此家の松五郎さんと云ふのが、携帶品一切大鍋迄背負ふて來て吳れる、平瀨を出たのが午前七時、少し行くと、道は岐阜往來と岐れて山へと入る、愈々是より、舊戀の山に再會するのだと思ふと、足が知らず〳〵速まる、是迄白川沿岸の紅葉も、奇麗であつたが、步一步、愈々色が冴へ勝つて來る、追々針葉樹にサルオガセが、ぶら〳〵下つてる絶壁が見られる、恐ろしい大きな橡の木の下を、魚貫したり、細い棧道を蝸附したりして、行くと、今迄山蔭をのみ、縫ふて來たのが遽然廣濶な場所へ出て、氣が晴々する、右手は削り成せる數百尺の絶壁、殆んど垂直に屹立せる爲に、喬木の生ずる餘地とても無い、只極矮少なる雜樹が巖面に朱の點體を添へてるのみ、樵夫は名づけて一枚壁と稱してゐる、恐らく巨人が神斧を揮つても、度毎に斯る雄快な仕事は出來ぬであらう、自分は、首骨の痛くなる迄、仰ぎ見て、自然の大なるを驚歎すると共に、人間の餘りに小なるに驚かざるを得なかつた、少し日光を照り出した、行手の雲間には、名も知らぬ高嶺が巍々として聳えてる、空氣の澄み亘つた故か、頗る鮮明に見える、朝に晴れても夕に降り出すのが此頃の癖だ、如何なる禍が、生せぬとも限らぬから、一時も早く、滝迄行つて大署を、今日中に寫生しなくてはならぬ、氣が急くから寫生もせずに、人夫を勵まして前進を續ける、磊々たる石の上を飛び越へて行く、路は又草深い處へ入つてしまう、大虎杖が悉く枯れ衰へて細い枝がピン〳〵と寒林の樣になつてる、何か珍らしい草もがなと、注意して行くが、降霜の酷い故か、生さてるものとては一莖も見當らぬ、路は暫らく、林間を進んだが程なく、山腹を危き板を棧橋として、轟々たる、急流深潭の上を通過する所に至つた、水は非常に豐富である、白川の水は半ば以上を此谷に發すると云ふのでも、畧ぼ察せらるゝであらう、家の如き巨岩を、只一氣に、押流さんずる勢に、裂けよ、碎けと逆卷いて流れ來る、岩は水の剛慢を憤つて、此處かしこに相呼應して是を防がうとする、ひたよせに走り來るのを、優勢なる一手が、必死と是を迎へ擊つ、と看ると彼方には、大崩れに崩れ來つたのと、慓悍なる一手とが、今や入り亂れてわめき叫んで、はためく聲は雷の如く、諸

所に聞へて、坤軸も搖がん計りの大混亂、一陣の慘風を生じて、唐紅のもみぢ葉が、片々と散り落ちては此の中へ捲き込まれて姿を失ふて仕舞う、斯んな處を良久通過すると、又一しきり森林帶を通過する、軈て廣き磧の砂地へ下り立つと、稜々たる大絶壁が威風四邊を壓して、聳ゆるのが、目前に現はれた、紛ふ事なき「ベンツル」の絶壁である、喜びに滿ちて躍進しつゝ見上ると、怪偉なる大絶壁が濃き朱の色に、彩られし有樣は、怒れる阿修羅王が鮮血を浴び、瞋恚の炎を燃やして狂ひ立てる如く、算を亂して倒れ重なれる數百本の喬木は、敗鬼の朽骨が散つてるのかとも思はれる、是を過ぐると「シナクラ」の釣棧橋の端が見える、地形上彼岸に渉つて眺むれば、布置の面白きが故に、徒渉する事と定めたが、人夫が驚いて不可能だと云ふ、强ひて下流へ迂回して、最も川幅の廣い處を選んで徒渉した、水は股より上へは超さなかつたが、寒冷無比、到底夏季雪田の流れを渉るの比ではない、向ふの砂地へ飛び上つた時は、ブル〳〵ッと慄へ上つた、扨彼方此方と方向を轉じて觀賞する、白山裏山越の中で最も絶勝の寄り集つた處は此「マナゴ谷」附近である、畫材が充溢してゐる、「大倉谷」、「白水谷」、「ワリ谷」等の水が誘ひ合せて「ハコヌキ」と稱する鬱蒼と針葉樹を以て掩はれたる雨涯の迫つた、暗い谷から、銀色の球玉を轉ばして流れ出で「マナゴ」の本流と打合うて、極くゆるやかに、さながら靜止せる水の如くに樹影をさえ、倒寫して流れ行く、が其左岸に沿ふて流れ來つた水が、急轉右岸にめぐると、再び驀然として、萬斛の雪を飛ばして「シナクラ」の棧橋の下を走り過ぎる、此處でも沈着いて、寫生をしたかつたが、歸途に讓つて、簡單なスケッチと寫眞で蹟を抑へて、此處を辭して再び元の處を徒渉して棧橋の上へとかゝる、是迄棧橋は澤山あつたが、夫は杭を岩根に打込むか、或は樹根などを利用して、厚い板を括り付けたものだが、此釣棧橋は巖壁に、長さ二間乃至三間の丸木を、一本或は二本づゝ、懸崖の上より掩ひかゝれる老幹から、藤蔓及針金を以て、吊り下げてゐるので、而も屏風の如くに屈曲して、一町計りの長さに亘つてるから頗る趣がある、大平晟氏の裏山下りの記行中にも此釣棧橋を賞讃してあつたのは、尤もと肯かれる、自分が此前通過した時は、氏の御說の通り杜鵑花が眞盛りで、サルヲガセの白綠色のと對照して如何にも、しつくりとした色調であつた、其時は行進の豫定上、寫生するの餘裕がなく、單にレンスで、同行の河合良成君を畫中の人物として撮影した、其後本年初號の誌上で大平氏が『此紅花を衣囊に挿し吐雪散球の急湍棧上を渡れる余は豈好箇の畫料ならずや』と記されたのを見て、何人も大自然に對すれば同一の感興に打たれるものだと思つた、今は巖面には楓葉が奇麗に照つてゐる、石楠花も交つてるから春前には定めて、幽韻な趣を添へるであらう、棧橋より磧へ下りて再び山路に入り「マナゴ谷」を徒渉して急坂を攀づると又森林となる、巨大な怪樹が狼藉として打倒れ、朽ちた處には雜木が隆々と寄生してる、これを打乘り飛び越えして行くと、又山の半腹を危く沿ふて屈曲して行く道となる、鑛山業によつて作られた



白水附近の寫生集

（石崎光瑤氏作）

路も朽ち果てゝゐる、「ワリ谷」を横切つて又暫く急坂を攀づる、檜の木の面白いのが立つてゐる、此處で落葉深き石に座して辨當を喫する、身邊にはイワウチワの葉がキラ〳〵光つてゐる、珍卉異草の尠からぬ處だが今は萬物枯死して、只是のみより認められぬ、立ち上つて前進する、此邊の林は橡が主で山毛欅も少しく交つてる、落葉が行路を埋めてる、天も地も宛ら金色の樣、其堆き落葉の間に珍らしくも、眞紅の球を聯ねて、漸くに細莖を擡げた草がゐる、近寄つて見ると、マヒヅルサウだ、今より七旬の前には、優しの白花を開き、翠玉の實を結びては、我を慰めたのが、今や再び秋風颯々たる寂しき、此靈峰に其憔悴の中に凜乎たる風姿を見するのが、何となく、いぢらしく思はれる、珍らしいから二三莖胴監に入れて、猶林間を急進する、午後二時、空寂たる山中、かすかなる響が森の奥から洩れて耳朶を打つ、進むにつれ益々音が明瞭に聞へて來る、云はずと知れた瀧の音だ、行き行きて瀧を望む爲に、茂り合ふ木を伐り開かれた處へ來た、大樹が道知るべの樣に倒れてるのを、傳つて、巨大なる橡の木の下に立つと、我憧憬れし、紅葉を以て裝はれたる白水瀧の大畫圖は、目前に展開された、削り成せる數百尺の絶壁の上は、鬱然たる大森林を以て蔽はれ、其間より瀧は、白馬の奔逸する如く躍り狂ふて、藥研の如き谷底へと落つる、落ちたる水は直ちに、瀧壺を穿ち巖に當つて碎ける、咆哮怒號とも云ふ可き音響は、耳も聾

せんばかり、凄じい鳴りをしてる、眞暗な深林の中より、岩角を蹴つて飛び下る水の一團が、深谷へ達するのを目送すると、隨分長い時間がかゝる、幾度か俯仰して水の活動をジッと注視してると、遂に視覺が白痴の樣になつて仕舞う、目を轉じて、周圍の景色を眺める、前後左右に附隨する、幾多の連嶺は、今や華やかなる、緋色の錦衣を着けて、眼もあやに相提携してゐる、其うしろには、頭を雲表に現はして廣く肩を張つて、是等の佳人を下瞰してる秀麗なる一帶の高峰が聳えてゐる、是こそ昨夏頂を究めし、雄山の連嶺の一部である、今や新たなる聖き白銀の寶冠を戴き、燦然として虛空に輝いて居る、良久佇んだ儘、恍惚として、眺め入つて居たが、急いで寫生に着手した、先づ岩面の節理を寫し初める、四角な岩が、或は縱に、或は横に、斜めに、急に並列し、積み重なれる奇觀は、自分等の樣な地質學の素養のない目には、丁度玄武岩の樣になつて見ゐる、莊重なる岩面に、點綴せる楓葉は、冷かにして死せるが如き岩に、燃ゆる樣な熱烈な色彩を加へてゐる、瀑水、岩壁、樹木、配景と次第に、筆をすゝめて一心に寫生を續ける、何時の間にか人夫が居なくなつてる、多分ヒラタケを採りに附近の山へ、分け入つたのだらう、友はと見ると、是もノートの端に色鉛筆でコチ〳〵、スケッチをやつて居る、滿山耳にするは轟々たる瀑音と、カラ〳〵と梢より舞ひ下る落葉の外には、何の音もせぬ、鳥一羽飛んで居ない、大製鐵場の内に、幾百の鐵槌が一時にあら鐵を打ち伸す如き、瀧の叫びは、空氣の工合か、水聲の加減か、時に爆然と、其音響を高めて、鼓膜を打つ、今や我身も瀧の一部になつた樣、無我の境に入つて、それからそれと、筆を走らして居る中に、人夫が歸つて來た、見ると美事なヒラタケを夥しく持つて居る、時計を見ると午後四時である、一先づ今夜の宿地なる、新谷の鑛山廢趾へ行うと、筆を收めて、立ち上らうとすると、何處かに、氣魂(けたましさ)じく、猿の啼音がした。

瀧から四五丁行くと、白水谷へ行く、此谷水は其名に背かず、著るしく、乳白色を呈して居る、危き丸木橋を渡ると、又深林である、十町計り行くと、新谷の流れが見える、鑛山業で造られた段坂を、脛を埋むる落葉を蹴散らして、トン〳〵下ると、一棟の建物が、荒れ果てゝ、蟲籠の樣に、骨のみ殘つてる、それを通り拔けて行くと、硫黄の臭氣がプーンと鼻をつく、三丁程向ふに、稍完全な建物が二棟ある、中央のは、去年厚意を受けて休憩した事務所である、今は當時の俤を殘さず、透間なく板を打ち付けてあるのへ、通過した學生の名が數多落書してある、何處から入らうかとグル〳〵廻つてると、裡からガタンと云ふ音が洩れる、何か居るらしいので、聲を掛けて戸を開かうとすると、無人の家と思ひきや、内から戸を排して、薄暗い室内から、ヒョックリと眞黑な樵夫が一人顔を出した、來意を述べてる處へ、人夫が後から來たが、親しい間柄と見ゐて、如何にも嬉しさうに、頓狂聲を放つて、饒舌り立てる、今迄は自分等に分り易かれと、いくらか心酌して、語つたが今二人が、悅に入つて、哄笑してるのを聞くと鴉舌辨じ難しで、アクセントがまるで支那人の樣だ、室

へ入つて見ると、爐がある許り其他には、何一ッ無い、全くの廢趾となつてゐる、暫らく焚火に暖まつてから、未だ飯が煮上らぬから、其間に喬木でも寫生して來やうと立上ると、友も一所に來る、附近の森で一枚寫生して、黄昏時に歸つて、二人で川下の溫泉へ行つた、五尺四方程の浴槽が設けられてゐつて、透き徹る樣な淸烈な、湯が滾々として流れてゐる、溫度も人體に丁度適してる、疲れた足を、踏み伸して、悠然と双眸を四邊の景色に放つ、岩を嚙み雪を吐いて流るゝ新谷の川を隔てゝ、對岸の紅葉、此處も劣らじと、照り榮えて居るのに、暮靄が白く帶を引いて、淡々として見ゆるは、綾羅錦繡に身を飾つた、厚化粧の美人が、ヴェールを被ぎしとでも云ふ可きであらう、浴を完つて、冷水で顏を洗ひ、小屋に歸ると、人夫が心盡くしのヒラタケは、既に煮られて、晩餐の佳肴となつた、ヒラタケは此附近に、夥しく生じ、遠く越中方面迄へも送り出だすとの事である、先刻の樵夫もヒラタケ採りの爲に來て居るのだと云ふ、飯が濟むと、四人でグルリと、爐を圍んで、暫く松五郎さんの、熊と格鬪して、水中へ轉げ落ちた功名談などに、興を催して居たが、やがて無心の人夫は二人共、白水の瀑聲にも比す可き高鼾になつて仕舞ふ。

今日は如斯、白水寫生の一日を、好運にも天候の恩惠に浴しつゝ、充分なる歡樂を盡くすを得た、陰險極まる秋の末つかた、此山で斯く迄、悠々と仕事が出來るとは豫期しなかつた、初めて山へ足を踏み入れた時は、紅葉の寫生をした上、運よくば、頂上の新雪の奇觀をも見度き考を懷いて居たが、此處迄の數々の大絶壁の秋色が、頗る氣に入つて、登つた處で規模の小さい絶頂の、徒らに勞多くして、功少ないよりは、寧ろ全力を、秋色の寫生に傾注しやうと思ふて、新雪寫生は他日峻秀なる候補地を選んで、試むる事とし、明日も又終日瀧や「マナゴ谷」で寫生して暮らさうと、心に定めて寢に就いた。夜の更るに隨つて、高寒犇々と、身を襲ふて來る、焚火に暖を取つて、爐邊に横はり、莫座で身を掩ひ笠を面上に被つて、飛火に備へながら寢た。

(五) 下山

有明の月に幾度か、惑はされて起き上る、屋外を見ると、皎々たる月夜で、オリオンの星座は、爛々として輝いてゐる、未だ起きるにも早いので、また引込む、六時に起きて朝食を濟し、七時に立ち出でた、谷間だから未だ日光が照らさないが、今日も幸に、拭ふが如き碧瑠璃の天、雲翳一ッない、瀧へ日を當るのには、未だ少しく時間があると云ふので、井村君を地獄谷へ案内して、直に引返して、瀧の前へくる、朝の日光を受けた瀑水は、金色に隈取られてる、日光がさゝなかつた時は、水が岩面を、擦過するのか、又岩と離れて、直下するのか、一寸見分けが付け惡いが、今は斜に日光を受ける爲め、

明瞭に其直下する瀑身の影が、宛然疾走せる瀛罐車が、吐き出す黑烟の影を、砂上に印する如くに、綿を拂つた樣な水が、岩壁に明瞭に畫かれてゐる、此處で昨日の寫生の殘りを仕上げて、あかぬ思ひに此處を辭し、「マナゴ谷」へ降り、此處でも長き時間を寫生に費し、途々寫生に暮らして夜に入つて、平瀨へ歸つた。

鑛山事業の廢せられてよりは、夏季僅かに少數なる旅行家の通過するあるも、秋に入りては、全く是れ無人の境である、造化が丹精の手によつて、染め出されたる、千差萬別の色彩も、觀る人もなく、獨り華やかに燃えて、軈ては、潔く梢をはなれて、飛び散つてしまう事であらう。

一度降雨に遭遇すれば、溪流怒張、進退意の如くならざるの地なれば、遙々、平瀨迄漕ぎ付けながら、運惡くば數日間滯留の上、悄々と引返す人士も、屢々有るとの事である、可惜大白川の絕勝も、幾層の深谿に鎖さるゝ事迚、終に汎く世に、知られざるは、甚だ遺憾ではあるが、かの華嚴の飛瀑の如く、高雄の紅葉の如くに、卑近なる人間の俗塵を浴せらるゝに比したならば、槍ヶ嶽の俗人を近づけざると一般、輕佻浮薄なる似而非風流家が、容易に親しみ得ざるは、慥かに此谿谷の幸福かとも信ずる。

自分は頂上の新雪を見遁したが、此谿谷に風雨の迫害にも遇はず、充分なる淸遊を盡くして、畫囊を滿たしたので滿足して、翌日白川に沿うてゆく〳〵沿岸の村落などを寫生し、或は植物の採集などを試みつゝ、鳩ヶ谷に一泊、新屋に一泊して、小瀨峠を越ゑ、城端より福光の旅寓へ歸つた。

石鎚登山記

多田香疇

石鎚山は伊豫國新居、周桑、上浮穴の三郡に跨り、所謂四國の主山脈をなし、一に石土、石槌、石鐵と云ふ、海拔約二千米突、四國第二の高山なり、舊五月二十五日より六月一日迄を祭日とし、其間は白衣の行者絡繹として登る、就中備前、備中、備後地方より多く、殊に漁夫は海幸多しとて詣で、爲に山中所々に飲食店あり、山麓なる黑川、今宮の農家は日々幾百人を宿泊すると云ふ、其他の日は、登るもの眞に微々、近來登山流行のため、其案內記の如きは信飛地方の所謂日本アルプス邊は刊行の書も多けれど、四國は殊に麁にして、余の不學なる、石鎚山の登山記は『愛媛の面影』にある文久三年五月

二十七日に、今治藩何某の記より他を見ず、四十一年七月上旬參謀本部の五萬分一地形圖西條、石鎚山を送り來れば、そを道知るべとして、

七月二十九日の午後八時〇五分にて先づ尾ノ道に向ふ、山陽線の官鐵となりしより、車窓に煤煙吹き込むこと甚し、顏も手も衣服一ぱいの石炭かすにて、能くも寢られず、戸を閉れば暑し、漸く翌朝未明四時四十二分尾ノ道に着く。

三十日　快晴

尾ノ道へ着しは漸く人顏朧に見えし頃、四五町東して住友瀛船にて伊豫へ渡る、舟は第一四坂丸、木津川丸の二艘、朝と晝に新居濱に通ふ、余の乘りしは木津川丸にて百三十八噸八五、午前六時半發す、尾ノ道水道を西して三ノ庄、四坂島、今治（イマバル）、壬生川（ミブカハ）と寄港して正午西條につく、西條は遠淺とて沖合約二海里に停船し、小舟來りて客を乘す、瀛船は遠く新居濱に向つて去れど、余等の端舟は漕ぎ行くこと悠々、されど風なく浪なけれど眞晝中とて暑さ堪へ難し、海中木標を知るべに築堤を入りて港口に入る、今は滿潮とて此處迄入れど、干潮の時は木更津の如く、車にて淺瀨を渡ると云ふ、不便の所なり。車にて約十二町、西條の字東町なる金屋、村上房太郎と云ふ宿につく、時は午後一時。

今日は半日靜養す、この宿は靜にして、清潔、物價も廉に宜き宿なり、石鎚登山の模樣を聞しも、町の者も山中の事を知らず、要領を得ず、先に村役場へ聞合せしは、野々市にて雇へとありしも、野々市には宿屋なし、爲にこゝに宿る。

三十一日　快晴

今曉は四時に起しくれと賴み置きしに、果して余の起きざるに起しくれたり、賴みし俥も來れり。

午前四時四十分夜はまだ明けず、草鞋脚胖の出立にて俥に乘る、西條の町を南する十二町、四國街道に出で、加茂川あり、加茂川は石鎚山の溪水を集めたる川約一町の幅、水なし、三十町にして前上寺に至る。

前上寺は四國六十四番の札所、古は石鎚山の本坊にして前神寺と云ふ、本尊は阿彌陀如來、維新の際神佛分離の爲、石鎚口之宮と分れ、當所は寺となる、地は新居郡橘村大字西田字棚林（タナバヤシ）なり、時は夜の明けし頃なり。

櫻は若木なれど多し、寺は約二町の入込み、物靜にして僧の勤行する外人もなし、本堂の上に石鎚權現の祠あり、本坊に花崗石造の槌あり、記したる歌面白し。

前は神うしろは佛極樂の萬の罪をくだく石づち。

街道を西へ三町行けば、左手に石鎚口之宮あり、松の並樹を四町入れば、社あれど荒れはて人もなし、表の標には石鎚前神社とあり、石土毘古（イシヅチヒコ）神を祀る、社前の眺望よし。

又西する十六町、橋村の字野々市に至る、車夫は此地の者にして、先に石鎚前神社の入口にて、案内兼荷物を雇ひ來れり、難波江庄太郎、(齡四十)と云ふ、食費余の持にて一日五十錢の定め、至て深切なる男なりし、時に六時四十分。

爰にて車を捨て、とある小き流の堤防を南に入る、此道、この少し西、氷見より登るが本道なれど、近道と云ふまゝ、結束して細路を行く十四町、氷見より奥「大保木より黑瀨山、東の川、西の川礦山」へ通ふ本道に合ふ、長谷村と云ふ、少しの坂あれど、荷車も通ず、約半里峠に登りつゝ、是より道は山腹づたひ、左は直下に加茂川の流れ迂回し、大保木の村を過ぎ、千年橋なる加茂川に架せるを渡れば、道は細くなり、漸く人一人を通ず、八町にして鎭守の森なる字淀と云ふ一軒の茶店に休む、清泉迸り、小瀑をなし、夏尙寒し、時に十時二十分、野々市より二里十八町、歩時計一萬三千六十歩。此家の主人、四寸位より六寸位迄の生鮎を十二足、今網に採りたるばかりなりとて持ち來る、價を聞けば〆て六錢、早速煮附さし、飯を喰ふ、安くて、山中思ひ設けざりし御馳走なり。

正午出づ、今迄は約平坦の道なれど、是より道は惡しく、肉桂の産地なる中奥山の村ありて、山路にかゝる、とある山嘴に、口の覗とて老杉二三聳る間に、岩石の谷間に突出せるあり、岩上御首の飛んだる地藏尊あり、此所は加茂川の上流なる西の川よりの溪水と、千足山よりのそれと合する岩角なり、此邊より山路に入る思あり。

口覗より少しく下れば、左に見上る巨岩一枚の岩、高約二十間幅十間もありなん、削れる如く斜に道を蔽ひ、豆葛はひ蔽はれ、屏風岩と云ふ、眞に其名の如し。

下ること五町、西の川の溪流あり、橋を高橋と云ふ、風景甚宜し、右せば黑川道、余は今宮より登らんと、橋を渡りて左の山手にかゝる、是より眞の石鎚登山道なり。

途次大保木には、二三の木賃宿あれど、晝飯する處はなし、凡て四國の山中は、何れにても晝飯携帶を要す、淀より奥は、休む家もなし。

之の字形急坂を、八町登れば、秀坂の村あり、參謀本部五萬分一には家あれど、此村の名なし、又十町半は登坂、半ばは、横がけ(方言山腹を傳ふを横がけと云ふ)をなす、今宮につく、秀坂、今宮とも、大保木村の大字中奥山の小字にして、今宮は五戸、秀坂は三十六戸の部落にして、山腹傾斜甚しき地を、蕎麥、玉蜀黍を植ゑ、全村材木と農のみなり、平地は一もなし、皆山腹を少し平げ、纔に家を建つ、余の今夜泊らんと思ふ家は、八郎兵衞とて、古へ石鎚權現を背負ひしと云ふ家、尋ぬれば門構して、白紙に勅使御休憩所の標ありと云へば、立派さうなれど、一村皆同じ構の農家、一泊を賴めば、俄に煤だらけの一間を掃除す、時に午後三時三十分、淀より一里半、六千三百四十歩なり。

着くや否や、淀より曇りし空、俄に驟雨となりしも、暫くして晴る。

何か石鎚山の舊記ゐるかを尋ねしに、四五年前迄は九十何歳とかの老翁居りたれば、知りしかど、既に死し、主人は小松へ行き、主婦と小供のみ、何も知らず、只座敷の一隅に、石鎚權現を祭り、鴨居に木札多くかけしのみ、地は六百五十米の高なれば、涼しけれど、晝は蠅、夜は蚊多し。

夕飯はジャガ芋、三度豆、高野豆腐、揚豆腐の煮〻、明日の晝飯と泊り共二人にて四十八錢、玉子は山麓黑川ともに、鷄、牛は石鎚權現のお嫌とて、古へより飼はざれば無しと云ふ、されど幸に米飯あり、この邊常食は玉蜀黍なりと云へり。

八月一日　快晴　午後曇

余の連れし荷持は、常住迄（ジョーヂウ）より知らざれば、新に又案内を雇ふ、御塔石廻りて七十錢と云ふ、伊藤太郎吉と云ふ、餘り善からず、山中水なければ、水瓶、草鞋の用意す。

午前五時出づ、夜の明けし頃なり。

山頂迄の里程は

◉今宮		計	前五時發		
○矢倉	二十五丁		六時十分 七時四十分 八時十五分發	二千三百七十二歩	約六百五十米
◉常住	二十五丁	五十丁		三千百歩	同千〇七十五米
一ノ坂登り口	十丁				千四百十米
△禪師森	十六丁		九時四十五分	三千百六十歩	千三百五十米
夜明	十丁	常住より一里		四百八十歩	約千五百七十米
△一の鎖下	五丁				同千六百五十米
△二の鎖下	十丁				同千七百米
三の鎖下	八丁				同千八百米
頂上	一丁	夜明より一里	十一時五十分	夜明より千四百五十歩	約二千米
計	里人は四里と云ふ		一萬〇五百六十二歩		

登り甚急	
山腹傳ひ較平なり	
ダラ〳〵下り坂	
急坂	
較平坦	
前半平坦後半急坂	
同	
最急	
三の鎖を登れば頂上	

◉印　一年中人の住む所　○印　空家、雨露を凌ぐに足る。　△印、廢家屋半ば頽れたり、祭日には出し店すと云ふ、此外二三ヶ所ゐり。

八郎兵衛方を出れば、二戸の家あるのみ、麥畑中を登ること甚急なり、ヤスバノ坂と云ふ、昨日の秀坂を登りしよりも、急なり、約半里にして、少しく緩となる、花トリ塲と云ふ、畑はなし、只老杉所々にありて、艸原のみ、山頂を横かげ傳ひに行く二三町にして、レイホウと云ふ、正面には千八百九十米なる瓶森山屹立す、顧れば山間より始めて、御代島より西條市街附近の海を見る、約五丁にして、杉の一叢茂れる内に、小祠あり、新らしき家にして人は住まず、矢倉と云ふ、例の首なき石地藏尊立たせ給ふ、時は六時十分、今宮より二十五町、歩數は二千三百七十二、今宮より高さ四百二十五米突なり。

祭りの間は、留守居も居て宿れる由なれど、今は空屋、附近に水なし。

暫く憩ひて、是より登りは急ならず、四五町にして山の背に出づ、右は黑河谷の深谷、左は加茂川谷、何れも深谷削れる如し、黑川の村は、遙に南方の下流に見ゆ、山頂を傳ひ行く十町にして、右手の向ふの山に、常住の家見ゆ、是邊を走り込と云ふ、常住の向ふに遠く茂れる山頂を縹かに見るは、即ち石鎚山頂なり。

此附近の山々は大阪住友の拜借地とかにて、深山木を切り、銅鑛の薪にすといへり。

又登る、四五町にして左に下る道あり、附近の銅鑛道と云ふ、この分れより熊笹そろ〳〵深し、少しくして、平坦なる地約一町にして草葺の門を入れば、四五の小家見ゆ、これ常住なり、時は七時四十分、矢倉より二十五町と云ひ、三千百歩、地は標高千四百十米。

常住は石鎚山の前山とも云ふべきもの、黑河より登りし道も、此所にて合す、石鎚山の即ち前峰の一嶺、丄字形の⊕合點の如し、古へは佛光寺と云ひ、石鎚權現の別當として、維新後石土毘古の神を祭る、約三間四面の社あり、社務所は、今は空屋なれど、廣し、土地は二反二畝の平地あり。

一戸の茶店あり、盛夏中、いろり燒き二人の男居る、こは年中こゝに住めりと云へり、是より上は祠もなければ、凡ての祭事は此社にて取り行ふと聞けり。

社の左に山腹かけて拜殿あり、こゝより石鎚山は正面に屹立す、今日は朝來快晴、山頂は凡て朝晴るゝなれば、何はともあれ、山姿を寫さんと行きしに、雲は、今正に山頂にかゝらんとする所なり、一の鎖、二の鎖、三の鎖と能く見ゆる由なれど、霞みて幽なり、前なる山は禪師森とて、一むら茂れる小山なり、石鎚山は高けれど、四國は暖地とて、頂上まで青々たる山、頂上は約三に分れて、中央は石鎚山、左方は天狗嶽、右方は測量標のある山なり、中央最高し。

社務所の前の平地より、南方を見れば、山又山の向ふに、燧灘より西條、今治附近の平地、霞の中に幽に眺望よし。

八時十五分登山の路につく、茶店の西方木造の鳥居を入り、ダラ〳〵下りなり、熊笹多く、道は廣し、少しく下れば、左に住友鑛山への道あり、迷ひ易し、四五町下れば、路傍に白き小石露出せり、杖にて掘れば、完全に結晶せる小き半成の水晶なり、この下り十町にして、山の脊を傳ふ、左右の深谷の森林伐木の音あり、又間々鷄の聲を聞く、案内者云ふ、こは皆住友鑛山の炭燒にて、一戸を山中に構へ、太古の民の如く、木に從ひて轉々移住するなり、麓の今宮にても、黑川にても、鷄並びに牛馬は、石鎚權現さんのお嫌ひとて、飼ぬに、文明の世は山中にて、鷄の聲もするに崇なしと、迷信がちに云へり、山中の諸村は今に於て牛馬並玉子さへもなし、又女などは、常住を第一の遊所とすと云へり。

常住より約四町下りし所に、左に小徑あり、夜明より御塔石廻りて八丁坂（八丁と云へど實際は半里程もありと云へり）登りて合する道なり、又下り詰し所に右へ下る細徑あり、老ノ川へ近道と記せり、此邊は常住山と石鎚山と、峯傳ひに區分せる地にして、是より石鎚山の本山の一の坂にかゝる、時鳥の聲を聞く、坂も嶮なり、岩石露出約五町、又表白坂にかゝる、坂の所の區別なし、顧れば常住の山は、我と高さを同じくす、樹は漸く深山的となり、ブナ又は夏椿多し、表白坂を登る事十町にして、一大岩石の屹立せるに、鐵鎖をかく、下に廢屋あり、禪定の森と云ふ、五萬分圖にて見るH印ある處なり、常住より山頂への里程は、里人二里と云ひ、此處を半とすと云へど、一里としては甚近し、二十六町より三十町迄ならん、平歩時計は常住より三千百六十歩、時は午前九時四十分、常住より約二百米高し。

禪師森は、見上る巨巖にして、岩間に檜や雜樹、下は熊笹一面なり、鐵鎖を持ちて攀づれば、凡十間にして岩上石造の小祠あり、又向ふは同じき危險の鐵鎖を縋り、僅かに岩角を足がゝりとして下る。

道は少し平坦なること四五町、左手の山嘴を入れば、小劍大劍早鷹の祠ありたれど、今は頽れて、何もなしと、案内者云ひければ、詣でず。

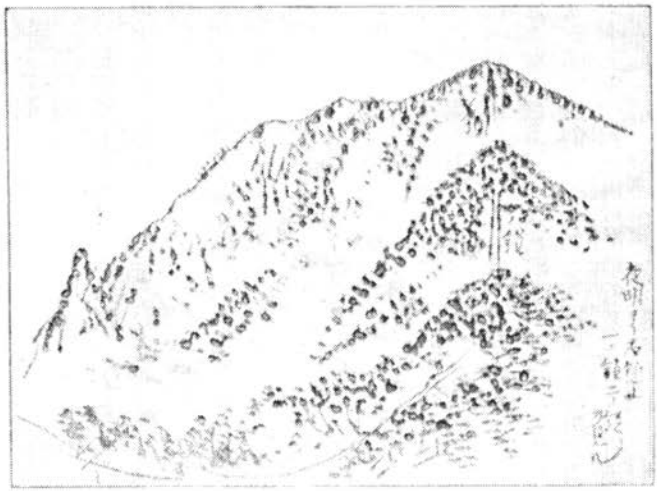
諸書に此邊の坂を、一の坂、表白坂、早鷹坂と記せり、されど案内者並に常住の者も、一の坂表白坂は云へど、早鷹坂の名を知らず、此早鷹の祠の間違ならん乎。

又登り坂なれど、是より急ならず、ダラ〳〵上りつ、熊笹一面に青席の如く、老樹は獨立して點々す、向ふは雲霧の絶間より、石鎚山頂を顯はし、一の鎖より二の鎖正面にして、こゝを夜明と云ふ、禪師森より四百八十歩。

夜明と云へど、廢室もなし、左に小高き丘あり、僅かに風を凌ぎ得べし、古はこゝにて夜明せし故の名といへど、今は只、山中、名くる謂はれもなし。

夜明より少しく山脊を下れば、左に小徑あり、御塔石に至る道なり。

夜明より山勢一變し、青席の熊笹、中道は眞土にして廣し、四五町にして一の鎖下に出づ、一の廢家あり、草鞋澤山脱ぎ捨て、臭氣甚し、蜻蛉多く飛ぶ、顧れば遙に右方の山下に、御搭石は屹立す、直徑一里餘の下なれど、峨々たる大石、名の如く積重り、肉眼にてよく見ゆ、其下は加茂川の上流、一條の銀線の如し、常住の山は雲の爲め見えず。



一の鎖は長十七尋、直下に鐵の小さき鳥居あり、岩面削るが如き絶壁に、二條の鐵鎖を下す、二條といへ、並びしに非ず、上方は見えず、杖は用をなさず、左方登るに便なり、案内者の云ふに任せて登る、鎖は直徑約一寸二三分、長約二尺毎に環もて繋ぐ、鎖に跨り兩手にたぐり、纔かの岩角に足先をかけ、猿の如く、漸く此險を登り終つて、ホット一息。

又少しの上下ありて、約十町二の鎖の下に至る、又廢室あり、是等の小屋は、祭事に皆出し店すと云へり、此所にて左方山腹博ひの細き道あり、土佐吾川方面より來る道なり、少しく登れば、即二の鎖、鎖の下に大なる鐵環をつく、是より上は、杖も不用、否使用するに用なければ、草叢の内に置く、此邊白髭艸、又舞鶴艸多し、二の鎖も同じく二條あり、左の方を登る、一の鎖よりも長くして、險なり、三十三尋即二十七間半、約半町なり、其上岩には足かゝる角もなし、身の丈以上も上に、纔か足かゝりの處もあり、案内者に尻を押上さして攀づ、されど一歩過てば三十何尋の下へ落ち身も岩に打ちつけ、命の滿足なると更になし、所謂戰々兢々なり、案内者は鎖の繼目に、足を掛よと云へど、多年の人の爲に、摺り磨けたれば、足はすべりてかゝらず、漸く登れば、鐵鎖は大木の根、岩角に、俗に云ふカンジョガラミにくゝりつけたり、見下れば足元れのゝき、目眩き氣も肝も消ゆ。

又嶮なる岩、只鎖のあるかなきかとのみ、千鳥形に岩角を這ひ登る事、約五六町、富士に於ける胸突の如くにして、三の鎖の下に出づ、右に行く細き道あり、伊豫上浮穴地方即梅ヶ市より來る道なり。

三の鎖は長七十七尋、即ち六十四間約一丁餘、最長し、二條ある左の方をよづ、一二の鎖にて、少しく馴たれど、途中岩

角ある處には、一休悠々緩々と、時間はどこにあるやらと云ふ程にて、漸く登りつむれば、偶然山頂に出でたり、鑛は山頂を越へ、後の方遠く、例の巖石にくゝりつけたり、時に午前十一時五十分、夜明より千四百五十歩、高き事約三百二十米突、鑛は何時代に出來しものか知らざれど、よくかゝる山頂迄、重き物を持登られしものなり。

鐵角棒一寸四角、長一尺にて、六百四十匁あり、されば其鑛二尺直徑一寸とすれば、一本一貫と見て

一の鑛十七尋　四十二貫五百匁
二の鑛三十三尋　八十二貫五百匁
三の鑛七十七尋　百八十七貫五百匁

頂上を里人御頂上（オンチョウジョウ）と名く、竪六間、横三間、岩石峨々として一の平地なし、東西共に少し、一段下に土の平地少許あり、樹は頂上には、一もなく、艸點々す、二尺四方奥行一尺程の石造の室あり、内に三尊の佛像を彫り附く、其前に鐵造の小鳥居あり、諸書に銅造、又明治十四年に眞鍮の祠ある由なれど、現今は明治三十六年四月、尾ノ道西濱の人建立せし由彫刻せり、くゝり猿あり、俗に云ふお使ものなりと。

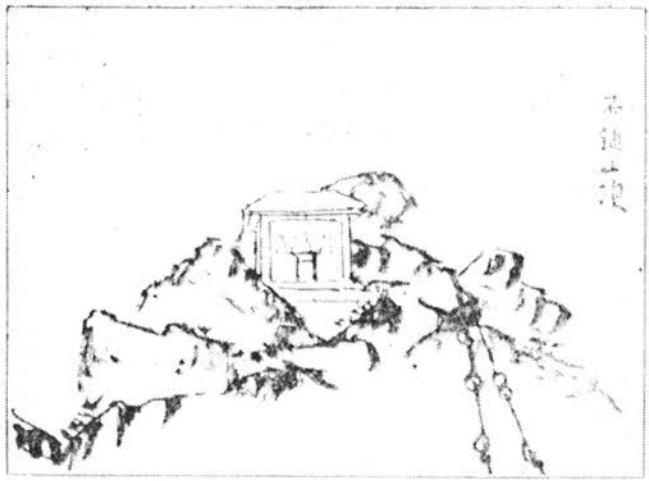
東方を見れば、天狗を仰面せし形の天狗嶽、北の方面は、斷崖削るが如く、深谷となり、南の方は較傾斜をなし、老樹一面に蔽る、南方は土佐方面、山岳重疊し、よく晴れたり、西方は近く一の峰あり、三角點ある處なれど、標は見えず、西冠嶽は一曲して、南方にあり、共に山又山と連り、遠見なし、南方は晴たれば、伊豫海より中國地方一望中にありと雖も、曇りて一物も見えず。

祠は南々東に面す、先づ携へ來し神酒を供す。

抑石鎚山權現は、元は其東方瓶ヶ森山（千八百九十六米）一に古權現山と稱し、其山に鎮座あり、古事記に所謂次生石土毘古神を祭り、延喜式神名帳は、土佐國長岡郡石土神社とあり、即ち古は土佐に屬す、例の役行者是を開き、千有餘年前聖武天皇の御宇、石仙なる道人黑瀨山の南方一里半、龍王山の中腹に天河寺を創し、別當とし道を開き、登るに便す、天正十三年、西野川村高須賀某の祖先、石鎚權現の神體を瓶ヶ森より、今の山頂に脊負來りて移す、因て石鎚祭禮の時は、此庄屋の主人上下（かみしも）を着し、帶刀して人に負はれ、上席に着くと、今の常式といへり、現今は舊暦五月二十五日より六月一日迄を祭事とし、白衣の行者口々に

「なんまいだんぶお山の行は大行じや」

と峯々谷々に響き、かの三つの鎖は、恰も白き豆つけし如く、さしもに重き鑛も中に浮き鈴の如しと。



晴たる日は、松山より九州並に高知城下迄見ゆる由なれど、今日は只土佐分の近き山を見るのみ、曇れど風なく、長閑なる天氣、少しの風あれば、山頂に佇まれずと云ふ、頂上を南に少し下れば、約二十間にして、東方に巨大の巖石一枚、平面の傾斜あり、其下より約三間、上に三角形の凹みし穴あり、水禪定とて天水貯へし所なり、登山者は神水とて、最も珍重す、案内者水を得んとて登りしに、少しの溜水も、泥多くして飲まれず、其岩角を廻れば覗とて恐ろしき崖あり、直下は數千仞の深谷にして、見るも恐ろし。

山麓大戸の人とて、教員らしき一行五人、土佐の物とて老幼十餘人連れ登山し來り、腰に瓢箪つけ、祠前に讀經す、又遍路らしきもの二人來りしかば、無人の山頂大に賑はし。

山頂に居る事一時間、午後一時下山の途につく。

頂上		頂上より	後一時發		約二千米
夜明	里程 一里		二時十分	千三百八十二歩	同千六百五十米
◎常住	同 一里	二里	三時廿分 四時發	三千七百歩	同千四百十米
○女人堂	一里		五時	二千七百廿五歩	同九百米
◎上黒川	一里	四里	六時中着	四千六百歩	同四百五十米

下り坂急なり谷川に沿ふ

較緩なり

計四里　一萬二千四百十七歩

頂上より直に鎖を、今度は下りなれば登りに比すれば、返つて危險、足を探りつゝ足掛りをなし、中には足のかゝり處もなく、鎖に取りすがり、中ぶらり、荷持は先にれりて、杖にて岩角に足掛りを拵らへくる、其危險なる、身の毛もよだつ計なり、余諸國の高山へ登りしも、かゝる危險なる處はなし、元來下向は西方の鎖の定めなれど、今は登山者も少く、道に往來ふ人もなければ、樂なる方にす、途中懷中の卷煙草、身の傾斜の爲、拔け落ちしに、散々に止まる處を知らず、漸く斯して二の鎖も下り果つれば、彼の土佐の連中は、早き事猿の如くに、つる〳〵すべり下れり、皆此鐵鎖の先につきある、大なる環をもち、神前の鈴の代用として、振り合掌す、土佐の者は東方小徑に向つて去れり。

一の鎖も、二三と大試驗に及第せしかば、下りは樂なり、御塔石へ廻らんかと思ひしも、そこに廻りては、とても今日中には、上黑川迄下れざれば見合す。

御塔石は加茂川谷に望み、早鷹祠の東方の麓にあり、自然岩七層の塔をなす、高二十五丈八尺、周圍二十二間と云ひ、天の御柱と云ふ、夜明より約一里、道は荊棘茂りて、案内者なくては行き難しと云ふ。

夜明邊より、空曇り南方、遙に殷雷の聲を聽きしかど、常住にて收まれり、幸に天氣も直れり。

禪師森には、手前に右手の方に入る、但しこは禪師森の巨巖を登るを、避くる傍道なり、この所のみ、野生の百合咲亂れて麗し。

常住に歸りしは、午後三時半なり、朝來携へし拳大の握飯多數も、餘す處なし。

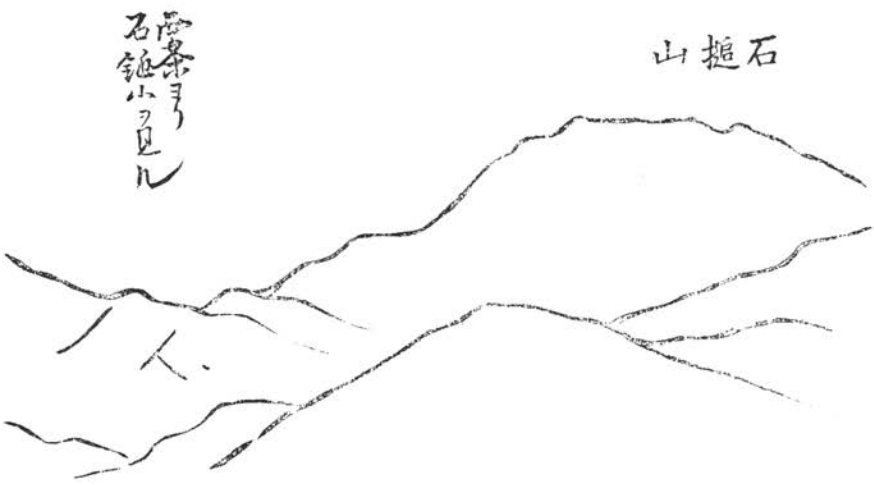
里人常住より夜明迄一里、又頂上は一里、計二里と云へど、余の步測には、約一里なり、去れど頂上近く、其急嶮なる、一二三鎖あれば、到底普通の里數を以て、計るべからず。

常住に歸れば、彼の大戸の敎員連、まだ休めり、氏等の寒暖計によれば

大戸	三十一日午後	華氏	八十九度
上黑川	三十一日午後七時	同	七十九度
同	一日午前四時半	同	七十二度
常住	一日午前八時	同	七十一度
頂上	一日午前十時	同	六十九度
同	同　正午	同	七十九度

常住には、滾々として善き水湧く、登りは今宮より登りたれば、今度は上黑川へ下らんと、今宮よりの案内者を返して、荷持と二人、午後四時に出づ、黑川へ下るは、山懷の谷合を下るなり、道は今宮に比せば、廣く、谷川に沿へば渴の憂なし、古へは兩側檜の並木なりしと云へど、皆伐り倒されて、今は纔かに數本をまばらに殘す、隨分急なる下り、二十五町にして、右方に瀧あり、高約二十間、山伏瀧と云ふ、幅は狹けれど、面前遮るものなし、三四段に腰を打てど、よき瀧なり、二町下りて、女人堂あり、新築の空屋役小角を祭りて、鐘あり、時に午後五時、常住より山狀瀧迄二千二百八十五步、瀧より女人堂迄四百五十步、一里と云へど近し、約二十五町位ならん、地も矢倉の直下ならん乎。

是より溪谷漸次に開け、兩方の山も廣くなる、道いまだ急にして、自然形の石磴なる處もあり、黑川近くなれば、黍畑も



見え、鎮守の森を過ぎて、久保屋竹村芳藏と云ふにつきしは、午後六時半、女人堂より一里と云ふは慥にあり、四千六百歩、日はまだ暮れざりし。黒川の村は、上下に分れ、こゝは上なり、周桑郡千足山村の大字谷間にして、今宮に比すれば宜し、圃は日中多く、蚊も夜中多きは同じ、されぞかゝる片田舎に似ず、遊藝の流行る處とて、戸々三味線ありと云ふ、宿屋とて實は農家、眞に仙境たり、夕飯は

アマゴ、干物、高野豆腐煮〆、とろゝ昆布汁、味噌漬、香の物は今宮と同じ。

八月二日　快晴

朝飯はとろゝ昆布に、九年母、味噌づけ、書の握飯とも、泊り一人五拾錢なり。

午前四時三十五分、夜の明けやらぬに出づ、今日は涼しき内に、モエ坂越へ、横峯寺より小松へ早く出でんと思ふ。

下黒川	四時廿五分發			四百五十米
板摺橋	半里	五時つ五分 五時廿五分發	千九百九十歩	二百五十米　下り坂
モエ坂峠	一里	七時四十分	三千九百八十歩	八百十米　登り甚急峻
横峯寺	五町	九時十五分發	千三百五十歩	六百九十米　下り坂道宜し
チコヤ	一里	十時四十五分	六千七十一歩	四百九十米　山の半腹づたひ
小松	一里十三町	一時十五分	七千七百廿歩	約二十米　道宜し下り坂

四五町にして下黒川の村あり、右へ下れば秀坂下の高橋より、大保木へ出る道、余は少し南東へと急坂を下り、川端に出づ、板摺瀬の橋あり、夜は全く明けたり、向ふを見れば、モエ坂の道屹立す、午前五時〇五分。

板摺橋は、千足山の村々の落水を集めたるもの、其水清洌、長約十間、曉とて冷し橋を渡りて、モエ坂の嶮にかゝるなり、嶮路一里、途中に郷の村家飛び飛びにあり、傾斜甚しき畑少許あり、三椏（ミツマタ）幷黍（キビ）を植う、黍は此邊の

常食物にして種子を下すや、地は下より上へと逆に鋤き上ぐると云ふ。
漸く峠の上に登れば、七時四十分、地は八百十米。
峠より顧れば、石鎚山は全形を顯はし、扁平なる山にして、常住より秀坂、今宮迄、一々指點し得べし、又石鎚山の遙拜所として、小き鐵の鳥居あり。
半町向ふへ下れば、星森とて二軒の茶店を始めて見る、二三町下れば、横峯神社あり。
横峯神社は、石疊の上にある、小き祠、荒れはてたり、石鎚權現を祭る、古へ横峯寺の、別當と云へば、新に設けしものならん、人も居ず、社務所も半は頽れたり。
元來し道を、少し引返して、西方に下れば、木挽多く居て、挽屑の坂を下る三町、大峯寺あり。
大峯寺は、四國六十番の札所にして、小松又大頭へ二里にして、高さは六百九十米の深山なり、石仙の開基と云ひ、往古の天河寺を移せしなりと云ふ、本尊は座像三尺三寸の大日如來、往古は前神寺と同じく、石鎚山の別當なりしも、文化年中に、石鎚別當の論諍、前神寺と起り、幕府よりの裁決により、別當は前神寺、地は千足山と定まれりとぞ。
前は横峯寺と記せしも、今は大峯寺と書く、定めし維新の際の、神佛喧嘩にて、此上の横峯神社と分れしならん、神佛とも水波の隔なるに由なき爭をせしもの哉。
寺前に茶店あり、茶も湧きたれば晝飯して、九時十五分下山す、山腹を北に行けば、古防(フルバウ)の村あり、少しくして山の脊に出で、山の脊を以て周桑、新居の郡境となる道を、平坦に歩むやらし、下るやらして、一里ヲコヤと云ふに出づ、一軒の家あり。
雜新前小松藩の關所ありし處と云ふ、其傍に巨大の櫻、路傍より谷に望む、盛花には美事ならん。
ヲコヤより急坂の下り、綱附(ツナツキ)坂と云ふを、一里下れば、此道海を見て、小松より西條の平野一眸、風景甚よし、山下に下れば、十町始めて人家ある小松に下る、時に午後一時十五分、ヲコヤより一里十二町。
案内者には、三日分壹圓五拾錢と、心付として貳拾錢をやり、車あれば、二里四町にして西條へ歸る、此車代五拾錢、午後二時四十分、西條の金屋に歸る。
今日は、歸路の舟もなければ、靜養す。

八月三日　快晴

未明起しくれたれば、十町餘の道を、車にて波止場に行く、尾ノ道渡りは六時四十分發なれば、六時に例の小船にて沖中一里

餘も出で、待てども中々汽船は來ず、旭日照り輝き、暑さ甚し、石鎚の連山は、高くよく見ゆ、漸く新居濱より來れる汽船に乘る、第一四坂丸と云ひ、百二十一噸餘、木津川丸より良し、往路と同じく、壬生川、今治、四坂島、三ノ庄、と寄る。四坂島は、住友鑛毒事件の根地、元は元島、小豆島、美濃島、化粧島と並ぶを、人工にて小豆島と美濃島を土もて埋め繫ぎ、巨大の煙突盛に煤煙を吐き、數段の道路を分ち、半洋の市街整然、全島一の樹木なし。

尾ノ道へ着きしは、午前十一時五十分

午後一時二十二分發の列車にて、夜十時五十五分、京都につく。

追記石鎚山の初雪は　十月二日

明治四十一年は　十一月一日

同　四十年は　十月二十一日

平年比較は

羽後の森吉山

山本巔坊

一、總記

羽後の森吉山は、海拔四千七百九十八尺、秋田に於ては鳥海山の次に位する名山であるが、北日本の脊梁山脈に沿うた、燒山火山群に近い、ほんの山奥に座を占めて居るので、汽車の窓から、此山を望見し得るのは、北秋田郡の大館、鷹ノ巢間と、八郎湖畔五城目大久保間とである。從つて、餘り人目を引かない、諸方から持囃やさるゝ花役者でない。が、煩らはしい世間の人の口の端を脫した隱君子である。この山の傾斜は頗る緩漫で、裾野の發達が殆ど見えない、遠く望んだ山の輪廓は、山頂から山麓まで一直線に劃せられ、富士、鳥海、岩木の如き曲線の美に乏しい。富士山を以て、摺鉢を伏せたる如しとするならば、森吉山は以て、山笠か檜木笠を伏せたる如しと言ひたい。これも多年渡世の荒き波風と戰つて、稜々たる氣骨もそぎ落され、今は溫容優和な姿となつたのであらう。火山とし言へば、必ず圓錐金字形とのみ速斷してゐた余には、

今まで火山とは思はなかつた。これが火山、しかも有史以來、一度も噴火したことのない消火山で、森林の古いこと、新しい休火山の比いでないと聞くからに、愈々面白くなつた。登らでやあるべきである。又此山には豪放にして、詩趣を帶びた、山人の話も傳つてる、童話とも神話ともつかない、他國の山伏、仙人、山ノ神の混血兒の樣なものだ。

二、山下の一日

羽後國北秋田郡鷹ノ巣驛に下車したのは、四十一年七月二十九日午前九時頃。それより阿仁街道により、七日市を經、米内澤町に着いた。此處までは馬車もある。藥店に腰を下ろし、サイダアを飲みながら、土地の人から森吉山の登道を聞くと、前田から渡場を越えて小又村に至り、木内、桐内澤、高畑を通ふて登るのが、一番近くて容易ですと叮嚀に敎へてくれた。圖を見ても最らしい、けれども、こんな村落や山路は、參謀本部の二十萬分の一にも、分縣地圖にも載つてゐない。中で比較的に秋田市淺見書店發行の、實地明細秋田縣全圖といふのが最も精しい。

小又は小又川が大阿仁川に合する處で、新屋敷村も間近い。此邊は森吉山の麓で、多少の平地もある。晴天であつたなら、秀靈な火山の外形も、はつきり見らるべきであつたが、如何せん前日來の雨天の名殘が、全く消え失せない、今日も照つたり曇つたり、時々雨脚を垂るゝ程である。頂上近くの黑い針葉樹林のあたりから、白い雲や、灰色の雲がかゝつて、上方には雲峯積雲が乘つて居る。見ゆるのは、山脚の廣く靡いた、所謂中山性の腰である。山麓に連る丘陵は、雨に洗はれ、濃淡遠近が明かになつて、澤々も算へ得る位である。遙か上層には絲を亂したやうな、乳色の卷層雲が、太陽の回はりに光環を着せてゐる。低氣壓の先發隊か知らぬ。とある鎭守の森から獅子踊の太鼓と笛の音が聞えた。其調子の勇しい事、軍隊の進軍ラッパのたぐひである、木内から桐内澤に行ふとして、橋を渡り、山坂を右に曲り、だん〳〵澤深く辿り行くが、人家が見えない、これは違つたと思ふと、谷の奥から、青草を脊負つた若い娘が三人現はれた。桐内澤はと尋ねたら、此街道は岳路で桐内澤には行かれない、餘り來過ぎた。少し戻ると僅か引込んだ所に、一枚板の橋がある。そこから分れる細い路を右に進むと間違がないと、半笑で答へた。深山女の言ふが儘に細い路を通ふて桐内澤も過ぎ、午後五時前に高畑に着いた。鷹ノ巣からは八里程もあらう。木内からの山路は、一人旅の余には容易に判らなかつたが、幸ひ人家もあつたり、澤になつても田の草取の農夫が見えたので、甚だ好都合であつた。泊める家は、一軒よりない。山本萬藏といふ豪家で、宿屋ではないらしいが、測量部の人や、大林區署員其他の官人の泊まる内ださうで、貧書生の僕が願つても、早速承知してくれた。此小村は山麓から、餘程登つた處で、富士で申せば、一合目か二合目に當る。頂上までは三里餘、此の先

きは人は居ない。人里の終點である。舊四月八日の祭日前後には、前岳に人が居つて泊まるにもよい。其時は半道ばかり登れば、一面の堅雪であるから、其上をチャカ〳〵と登つて行けるさうだ。小又木内桐内澤にも、泊める家があると聞いた。宿の主人と對座して、豪傑を理想化せる如き、痛快な山人の話に耳を傾けた。此話は長くなるから省くが、武藏坊辨慶や、大江山酒呑童兒の氣質を備へ、鞍馬山の木葉天狗を加味した樣な奴で、なか〳〵勢力範圍が廣く、局部低氣壓によつて生ずる、旋風雷雨にも手を延ばし、折り〳〵産婦や死人を頂戴したがるらしい。白頭巾と云ふ奥へ行くと、死人に冠せる白い頭巾が木の枝にかゝつて、小屋があると思ふと、葬棺（茶毘より變じたるならむ）の屋根で、獵人等（方言マタギ）が度々見るさうだが、これも山人の仕わざにして居る。山人に就いては本會會員伊藤銀月氏が精しく調べた事があるといふのは耳に殘つてゐる。

晩の御膳が出た。附近の山から取つた、青物の料理が色々澤山付いて、淡白な味が原始的で、佳味よりも寧ろ趣味の方が多かつた。みぢ（本名を知らず）の莖をたゝきつぶしたのは、都の人にも、御氣に入るであらう。にこ〳〵した愛相の好い細君が出て來て、色々御叮嚀な事を言ふ。この樣な山奥で、始終新しい風にあたつて奇麗な流れ水を飲んだら、長生きするでしやうねーとやつた。はい直ぐ近所にも八十八になつて、毎朝鋸を擔いで、薪を取りに行く老翁もありますと、面白さうに答へた。流行病も知らぬだらう。老人の多い村だ。雪隱には塵紙の代りに、なま乾きの大きな草葉を備へてある。いたどり、とちの葉が多かつた。

三、登　山

翌三十日、主人から道筋を聞いて、午前六時に宿を發した。歸りは阿仁の二ノ又、小澤方向に下り、銀山町に一泊する豫定である。雨天ではないが山頂は雲でゐる。六時半頃鳥居が見えた。道は二本に分れて居るが、敎はつた通り右の方を取る。知らぬ間に大森林に來た。老大の濶葉樹は椈で、胡桃類、槭類、七葉樹、金縷梅、黑文字を混じ、下生樹としては、粗榧が密生してゐる。全山殆ど椈のみの所もある。其樹皮は白味を帶びて、白樺の林の如く、日光太郎山の麓を聯想した。白塗の柱に、綠の屋根を葺いた自然の大宮殿で、岩石の露出があるでなく、堆積した落葉が大抵黑い朽土に化して、急な坂もなく、富士の太郎坊、馬返あたりの傾斜で少しも苦しい所がない。時々老鶯の聲がする。七時になつて、突然一本の針葉樹、白檜が來た。濶葉喬木のみに見飽きて居つた目には、非常に嬉しい。海拔も漸く高まり、將に寒帶林に入らんとするを覺えて、初めて身は高山にゐるを感じた。もう椈の大木は減退し、青葉の屋根の破れた疎林となつて、栂、米栂が續々現はれ、さ

ひはたかんば、白樺があつちこつちに見ゑて、下木の粗樫の代はりに、小笹が地表を蔽ふて居る。雲も來た。青森椴松もある。濃厚な紫に黑味のある先端の凹んだ卵形の球果が、梢に直立してゐるのも見事である。が餘り高い木はない。

四、雲遊

白雲の中を歩いてる中に、前嶽神社に着いた。まだ九時前である。社の側に小屋もあつて、食物の用意さへあれば泊るにもよい。雲が深くて、自分が山の何處の邊に居るか、上も下も白い幕で、周はりに何んな舞臺があるのやら、少しも判らないが、兎に角最高點を極めないと氣がすまないので、再び雲中を猛進した。左方に僅少の殘雪もある。笹竹の密生してる間に、赤い石楠花や、白花石楠花が、三ッ四ッかたまつて、簪の如く彼方此方に咲いてゐる。濕氣の多い沼地が、竹藪の間に散在し、中央の水溜りが田の如くなつて、稻に似た青草が、株をなして生えて、これが所謂山人の作つた田である。山人の開墾を免れた沼地で、御花畑となつてるのもある。食蟲植物で有名な、もうせんごけは、葉面の腺毛に粘液を汾泌して、昆蟲を待つてゐる。いわかゞみ、いわうちわが、可憐な薄紅の美花を飾り、莖葉のくつきりした、ちんぐるまは、ちんちろりんと開いて、黃色に、きちんと咲いてるのは、みやまきんばいである。其他多くの草木が澤山あつてもよい場所であるが、竹藪でない所は大抵牧場になつてるから、草葉に饑えた牛馬は、花をむしり取つて折角の花園も蹄に蹂躙せられ、山人の田も荒されて居る。最高點向嶽が、直ぐ眼の前にあるのも知らない、もつと奥だと思ふと、眞直ぐの細い道を登ればよいのに、放牧のために造つた路が、却て立派であつたために、遂ひ其方に足を入れ、向嶽の中腹を左に周はり、くるまゆりの多い處を通り、牧場の堤防を乘り越えて、嶽の背面（東面）に行つたら、二個所に、大殘雪が崖半にかゝり、下方には、暗黑な針葉樹林が、ちらほらと見える。程なく、山腹一面離瓣の小白花に占領せられてる。傾斜の急な牧場である。青毛、栗毛の牝馬は、白雲の間に彷徨し、照る日の影に嘶て居る。中には白馬も混つてる。嶺風に綠の髮をなびかせ、高嶺の花を嚼みながら、折々眼玉を据へて、僕の顏を見る。天雲の影に嘶く姿は、天上御遊の御駕を引かんずる勢である。自分はまだ、此の半腹が向嶽とは、氣が付がない、此高いのは石森か何かで、もつと奥に、ほんものがある積りで、降つたが、山らしいものは見えない。牛馬の歩きよいために、山腹が帶のやうに何段にも削られ、路は明らかでない。時計を見ると十一時、末だ早い。中飯を濟して、緩つくり考へ直さうと、再び雪の如く咲き亂れてる白花園に登り、黑い石に腰掛け、馬の顏を見ながら、握飯半分を平げた。この小白花は筒狀で離瓣が十二三、石竹科らしいが何んだか知らない、平地のうまごやしの樣に、自分獨りで、大面積を占領して居る。いくら待つても、雲が晴れない、暗霧が深い、今更案内

人を連れて來ないのを殘念がつた。

五、雲中の援軍

危ふげに、偃松の枝を這ひあがり、大きい岩に昇つて見ても、雲影は益々雲影を追ふのみである。四山の景色を大觀するのは秋山に限る。夏は大抵こんな空が多い。されど學生には夏の外に機會を持たない。さあ元の道を忘れぬ中に前嶽神社に歸るが上策ときめて、帶の如き山腹の牧道を周つた、餘り名殘惜しさに殘雪を食ふた。森吉の御神體は蛙で、長虫が恐いために、向ひ時まで雪を消さないと云ふ話もある。偃松を手に取り、支那の娥眉山の松を想像しながら、石森も間近くなつた頃に、彼方の隈笹の蔭から、白帽の一團が、雲を排し、力足を踏みならし、城砦を乘つ取るが如く突進して來た。東方のスバルタを以て稱せられ、常にオリンピアの競技會を夢みて居ると云ふ、大館中學校の健兒である。近づいて見ると、中に年を取つた案内人も加はつてる。實に雲中百萬の援軍を得たと同樣である。相共に一先前嶽神社に參り、御神酒、燈明、樂書も終つて、向嶽に向はんとする。案内者は多少勞れたと見ゐて、今日の如き天氣に、向に行つても何んにもならん、こゝで澤山だ、參詣者百人中、向に登るのは、二十人位とか言つて、中止をすゝめる。然し一行中には余と同じく、最高點を望んでる連中が澤山ある。案内者に帶をつけて引いても、負ふても、擔いでもと騷ぐ。案内翁もたまらない、とうとう行く事になつた。向に上る所謂向上心である。僕が誤つて左に曲つたのは、頂上直ぐ下の馬道で、細い道を眞直ぐに登れば何の事もなかつたのに、しかし案内人も、雲のために少しく道を廻はり過ぎて、多少の偃松と竹籔とをこがせられた。間もなく向嶽頂上三角標點に上り、一先づ安心した。岩高蘭もあるが黑い實がついてゐない。赤い實もなつて居ないが、こけもゝもある。極く小さな御堂が二ッ並んで、風に飛びさうである。十二時も過ぎて、風のあたらぬ低地で、火を焚いて、擂飯を咬ぢり、大館君から、榲桲（又は、かまくらかいだう）の罐詰に、御神酒を饗せらる。常には餘り好まぬ酒も、渴いてる最中で、咽工合が好い。無邪氣で、痛快な話を語り、雲の散ずるを待てど、容易に晴れない。一行は再び銀山に歸るのを幸ひとして、余も同行下山の途に就く。

六、再登山

將に石森に差しかゝらんとすると、またしても意外、今迄長らく鎖して居た雲の幕が、ぱつと剝がれて、山頂の光景は元より、下界の群山連峰、さながら藍の波を打つた樣に、簇々と活舞臺に現はれ、一覽萬狀、海内之巨觀、天造の傑作と叫ん

だ人もある。不意に起る、一行の感嘆詞が、絶えず唸りとなつて、天空に波動した。彼等の眼中、地を離れ、俗を忘れ、天地も猶ほ狹い樣な顏付である。餘り騷ぐとまた雲がくるから靜かにせいと、案內者に制せらる。彼の實驗からの結論なれば、一笑に附し去る事が出來ない、音波の物理的現象で雲量に影響せぬとも限らぬ、時々曇るが、段々剝げてくる。雲剝げるとは案內者の口調である。銀山までは三四時間で行ける。夕方になると益々晴れるに相違ない、衆議一決、再び登るに如かじとなつた。案內翁を石森に置いて、若い者は殘らず、引き返し、亦も三角臺の櫓に集つて、雪の晴れ間〳〵に、雄大壯嚴で、純潔な自然の傑作を賞した。愉快痛快なんて云ふ程度を越して居つて、何んとも言ひ得ない。殊に此頃雨に洗はれ、雲に潤はされて、塵埃が立たない。飽くまで色が美い。朝から今迄、何も見ないから、尙ほ〳〵嬉しい。此處に至つて、巔坊巔花を擁し、揚々として向嶽の頂上に樹立したのである。

七、潤ひたる植物の鮮色

植物が濡れると、其色の濃くなるのは、汚塵の拭ひ去らるゝためであらうが、光學上の解釋は、こうである。植物組織の間隙には、常に空氣を充たして居るが、植物が液體に潤ほはさるゝ時は、組織間の空氣は、液と置き換はり、組織と液との境界に於ける、光線反射量は、空氣の時より少けない。從つて光は物體內部に深く進入し、或る特種の色光は益々多く吸收せられ、其餘色たる植物の色が益々濃く表はるゝ。約言すれば、光が二物質の境界に於て、反射するに當り、兩物質の屈折率の差、小なる程反射光の量少し。然るに。液の屈折率は、空氣のそれより大にて、屈折率の差小となるためである。

八、山巔の眺望

意外の邊に意外の事件が起り、巔坊益々幸運である。北方靑森縣との北境連山は、須後崎より、殆ど緯線に沿ふて、東に走り、頭は陽光を浴びた、雲峰を冠せて、秀靈な岩木山は其蔭に、隱れてゐるらしい。矢立峠の奧には、裾の長い八甲田山の半腹が、薄紫に見える。燃料の大部が石炭に非ずして、硫化鑛石を使用する小坂鑛山の煙は、黃いろく雲に結ばれて居る。有名な長木の澤は、大森林を以て蔽はれ、米代川は綠の沃野を、白く縫ふて岸を溢れない。此川は一に米白とも書く。昔時、陸中の小豆澤に、日々數百人の下男下婢を使役する、稀有の豪家が住んで、朝夕米を磨ぐ白水が、川一つぱいに流れたので、前記の名を得たといふ口碑は人の知る處。縣內一の御物川の船は、筵帆であるのに、米白川は白帆である。北秋田は三角に尖つて半分傾いた山が多い。田圃の中に獨座してゐる、ピラミッド形の小山もある。西方日本海の方に首

を回らすと、男鹿半島は雲の頭巾に包まれ、八郎湖は碧く輝いて、五城目の森山は、破壊された小ピラミットを、三ッ四ッ一所に、かためたやうに湖畔に立つて、大平山は激浪が衝突して、高まつたかの如く、のつそりと聳えて、横合ひから、綿のやうな雲を吹いて居る。鳥海山は雲を冠つて、腰より上を見せない。

南方、山岳に圍まれた山湖は、田澤湖である。八郎の水神と、田澤の女神とに、詩的な神話が傳つてゐる。今此二ッの湖水を一時に、瞰下ろすと、其話が最近の事實の如く、感ぜられた。其他、遠く縣南の群山、自分勝手に活動し、平野は靜止してゐる。余は常に、汽車の窓からなりとも、雄偉崇高な、慕はしく懷しい、莊美な紫色の、大山岳に對すると、忽ち滿身の心血が湧きかへり、願くは全身を彼に捧げ、彼の懷に抱かれて、靜かに眠りたいと、思ふ事もあるが、今は其懷に動いて居る感じもする。

たゞ、東面一帶始終雲が晴れない。燒山火山彙の活躍、中央分水嶺山脈、駒ヶ嶽の雄姿、巖手山の面影に接し得ない。當日は、西南の風で、雲の材料を供給するは日本海、雲の製造所は縣南の山岳だ、故に日本海に臨時蓋をしたいと、一人の大館君は叫んだ。なか〳〵の名言である。山頂の壯大に、共に同趣味を感じ、皆々朋友の如くなつた。山岳は神聖な媒介者である。朋友の生ずるは、事情の同一と、情緒の感應であると、言ふのも尤もだ。

九、頂上の氣象、雲の成因

歩行しないで、立つて眺めて居ると、寒くて慄へる。シャツを出すものもある。余も冬シャツの用意あるも、後に脱ぐのがいやで、着なかつた。

風は強く、帽子も舞ふ程であるが、氣壓が低く、空氣も多少稀薄であるから、調べ奏づる偃松の聲も、優しい低い調子である。遠い物の、近く明瞭に見ゆるは、空中に塵埃の少きためであらう。

山に於て雲を見るのも一興である。自在に移る雲の舞姿、一々名狀することは、僕の分際でない。『天地有情』土井晚翠氏の「雲の歌」を、パノラマにして見る樣だ。我等の身邊を飛び去る雲は、積雲（雲峯）の下底が谷風に、吹き拙ぎられた白雲である、夏の炎天に現はるゝ雲峯の上部が、夥多の圓凸面を作り、或は纖維狀をなし、或は突然湯釜の蓋を取つたやうに、絶えずもろ〳〵と、綿の湧出するが如き運動を目擊するは、上昇氣流の作用と、空氣の一時靜止によりて生ずる、過冷部の水蒸氣が、一時に凝結雲化して、大量の潛熱（液化熱）を發し、急激に附近の空氣を膨脹せしむるためである。と云ふのは現今の説明である。

積雲の上表は、太陽直射するため、雲の水滴は再び蒸發し、上層零度以下の處に、凝結するものは、直ちに結晶の氷片即ち最上層雲たる卷雲となり、翁鬚、馬尾、帶狀又は白羽狀に浮遊し、平均の高さ二萬九千七百尺（二里餘）、汚ない混り物がないために、薄絹か眞綿に小石を包んで、投げ出したやうに、他の雲より遙かに白く、判然な輪廓がない。これが一番地球を離れた、星に近い雲である。

山の高さを形容して、高く雲表に聳ゆると言つても、其雲が層積雲又は、中層雲に屬する、層卷雲、積卷雲ならば、隨分高い、七千尺以上と見る事も出來るが、若し下層の層雲などであれば、僅か二千尺餘位にて、左程高くも思はれない。高さによりて雲の形狀が大概定まる、そこで我等山岳に遊ぶものは、十種の雲の形狀を揃えた、繪端書でもあればよいと思つた。山岳會で發行したら、更らに妙であらう。

十、山體構造、溫容な火山

自分の立つて居る向嶽は、完美な圓錐形を作り、舊火口の南壁には比較的新時代に噴火した、新火口丘がある。舊火口壁の外輪山は、東西の兩部のみに殘つて、西面は石森、前嶽神社、一ノ腰等の南北に走れる弧狀連峯。

東部は、雲で見えないが、檜葉倉の連嶺で、北壁は缺損し、南方は向嶽の裾に覆はれて居る。其證據には、噴出物が南坂を自由に流れた爲めに、向嶽の南側は北側より傾斜が急である。現存する外輪山によりて、舊火口の概形を推察すると、南北に長き楕圓形ならんと、專門家は說いてゐる。此火山の如く、外輪山と一火口丘より成るのを、二重式火山と謂ふさうだ。

北麓の湯澤溫泉は本火山に何の關係もないとも、『震災豫防調査會報文』に出て居る。富士の寶永山の如き側火山がない。爆裂口もない。噴火に關して、口碑記錄の據るべきものもない。されば山腹の森林は、有史以來未だ一度も荒されない太古のまゝである。

何うしてこんな、笠の如き溫和な姿となつたか、學者の說を述べやう。

火山の形を大別して、富士式、白根（草津）式の二種とする。前者は重に火口より拋げ出された、噴出碎屑物の堆積より成り、傾斜の急な圓錐形をなし、後者は火口より熔岩、泥流等の溢出するに基き、鈍き圓錐形をなす。されば森吉山は後者に屬し、火山活動の前半期は、全く碎屑物のみ噴出して、火山心髓の凝灰岩を造り、後期に至り、碎屑物の噴出を止め、熔岩、集塊熔岩、泥流等を溢出して、表面を形成し、最後に出でたる泥流の爲に、峻立せる岩石も一樣平等に隱され、尖

れる山骨もなだらかに圓められたであらう。加之、本火山有史以前已に、活動を止め、向嶽の成生後は、全く暴ばれない。暗黑不變の森林が奥深い。これらが鳥海山と輪廓を異にする原因であらう。

向嶽の坐席は舊火口底に擴がり、火口原をなさないが、傾斜がのろいため、偃松でない所は殘らず牧場に利用せられ、背面には帶狀の步道が幾本もある。

十一、哀れな御花畑

山岳會第一大會に於て、志村さんが話された通り、高山は季節が短いので、芽葉の未稺(うらわか)い中に、緊要機關たる生殖器、即ち花が早く咲いて、一般に葉は小さく花は大きい。故に、平地に於て、草の綠の濃淡に、去年の雪の、遲くとく消えける程を推しはかり

うすくてき野邊の綠の若草に
あとまで見ゆる雪のむらぎえ　（增鏡）

を咏じたる古人の心ばえを、高嶺に持ち來したならば、花の色香の强い弱いにより、殘雪のむら消の跡を察するもよからう。平原にて、春先さとか秋の寒い時に咲く花は、あつさりした黃、白、又はオリーブ色で、暖かな春の末より初夏までは、濃艶な赤又は紫の花が多いと、聞えてるが、高嶺になつては、春夏秋が一時に來る。從つて紅白紅紫が咲き揃ふ、由之、百花爛漫てふ言の葉も、高山の御花畑に於て、實現さるゝものと思ふ。併し此森吉山に來て見ると、折角の花の筵も、放牧に利用されて、見る影もない。荒寥寂寞である。此點に於て鳥海山に劣ること數等である。この山は五千尺にも足らないから、中央日本にあるなら、御花畑も出來なかつたらうが、北方に偏して、盛夏尙ほ殘雪狼藉、向嶽頂上には、がんこうらん、こけもゝが澤山あつた。つがさくら、あをのつがざくら、いわうめ、りんだうなどは見當らない。殊に紫の花が少くない。

これは山が古く、黑い腐蝕土が表面の大部を掩ふてるので、火山灰に特有なものは、生え得ないためでもあらうが？。年取つた山なれば、御化粧飾りを欲しないとも見える。白髮の代はりでもなからうが、白い花が多い。前述の通り向嶽の東南坂は、一樣の小白花で、花を厭へば足を着くるに、地のない處もある。其下に大雪溪もある。

十二、寒帶林

中腹以上は、針葉樹のえも言はれぬ香が、芬々と鼻を打つ。白檜が多いが、青森椴松も少くない。就中檜葉倉連嶺に多いと聞いた、此等針葉樹は、方言もろみと唱へ、縣北では此の葉を、神棚に乾かし、燻して雷避けにする。富士、日光邊では、六千尺以上でこの帶に來る。九州には、これに達する高山がない。臺灣新高山になると、一萬〇五百尺以上でなければ見られない。日本の寒帶針葉樹の天生せる區域は、獨逸のアルペン山中腹以上に、髣髴たりと、或る博士が語られた。

此帶は地方によりて、其主木を異にし、新高山は青森とゞまつを主林木となし、日本中央より北緯凡そ四十度（森吉、銀山附近通過）までは白檜を主とし、これより以北青森八甲田山に至れば、殆ど白檜を缺き、新高山と同樣青森とゞまつである。然るに此森吉山は、白檜林と青森椴松林との中間に位し、此二ッの聯絡を保つて、兩樹種共に豐富である。

十三、山岳の未來、瞬時の快感

色々な事が胸に湧いてくる。交通機關が段々發達して、空中飛行器の世の中となつたら、各地の高山は皆公園と化し、富士、鳥海、森吉、日本アルプスの御花畑等、一寸食後の散歩位に、出掛る樣にならないでしやうか、其時は山岳會が何うなるだらう。

實地山岳に跨がり、地球の成因などを考へ、自分の身を省みると、多大の感興が起る。山巔高遠な自然に接する瞬間、自轉をなせる地球の一角（山岳）に打乘り、楕圓の公轉軌道を走り、同系統の諸遊星に前後し、相共に更にハーキユリースの星座に向つて突進するは、宇宙の一大快樂であると感ずるのである。

十四、椈岱

機々、いらぬ事まで考へてる中に、大分時間も立つた。五時近くまで大館君と頂上に遊んだ。一行は皆名殘惜しい顏して下山した、案内者は石森から顏を出して、此處が却つて好く晴れたのにと言ふ。阿仁の銀山に行くには石森より南坂を下るのである。石森とは外輪山の一峯頭に、人が積んだ小石の塚のある處だ。

花を掘つたり、もろみの枝をかいたり、どん〳〵下る中に傾斜が次第に緩るやかになり、平坦で臺地をなせる、椈岱の大森林に來た。此岱は熔岩流等の終止によつて生じたもので、栃ノ木澤登路に於ける同岱もこれであるさうだ。岱の左右は谿谷に限られ、山頂に向へる方は、次第に傾き、普通の傾斜面と一致するも、山麓に向へる方は俄かに屹ッ坂となる。

熔岩が停止して下に流れないためである。博奕と稱する伐木跡地に休憩して後れた人を待つた。何んでこんな變な地名が附いたか、此處は銀山町から三里も山奥で、昔は誰れも來なかつたのを幸ひ、山師や人夫等が、白晝公然賭博をやつたからと聞いて、あきれた。固有名詞となつた以上は、永久博奕で通るであらう。富士の金明水の如く氷を咬むよりも冷めたい水が湧いて居る。あしたに高嶺の雪を嚙み、夕に谷の水を飲むと洒落れる。

岱を過れば急に傾斜が烈しい、地藏樣のあたり最もである、これを見ても、高畑の方は樂である。

十五、日本海の夕陽

下方に小さい池がある、近いやうで遠い。此邊に來ると、西の空に夕陽が眞紅に見える。帶を重ねた層卷雲が、金覆輪せる金襴色に染つて、黄昏の空を飾り、日本海の蒼碧一面、夕榮の色に同化されんとして居る。溪谷の川原に下ると、日は全く暮れて暗路となつた。萱草を通らずに、小澤鑛山を經て銀山町に急いだ。此地方の人が岳に參詣すれば、遲くも午後の三四時頃に歸るのに、夜になつても歸らない、何か異變でも起りはせぬかと、提燈かゝえて迎へに來て居る。大館君の一行中に銀山の人たちも加つてるので、餘程心配したらしい。向嶽の再登山、山上四時間の眺望を話したら、若い者は、そんな呑氣な眞似をしてると、一先安心した樣に一人の女は言ふた。余は銀山町字水無大成館に泊した。茶代を置かない貧書生を輕蔑しないで、優遇してくれたのは嬉しかつた。

十六、山下の清流

翌日は、大館君等と紀念の寫眞をとつた。君等の團體に僕が加はつて、興を損ずる事はないかと言つたら、頂上の快味を共にした紀念が却つて、興を添ふるからと、とう〳〵ひつぱり出された。一同大阿仁川を船で下る、川は森吉の南溪、打當内澤より源を發し、奔湍激怒、細船を以て有名である。船頭の伎倆を信じてゐるためか、波激し船動き、飛沫面を掠むるも、快哉を連呼して平氣で居る。今日は昨日よりも天氣が惡い。時々大粒の雨が來る。雄大な森吉も下腹まで隱れて見えない。只管、自分等の幸運を喜んだ。神成附近に、教科書の插繪にしても好い樣な、立派な河岸段丘を見る。軍歌、唱歌、奏笛、快談で船中は賑ぎやかだ。昨日と今日と、山と川との對照を味ひ、林巒連る七座山を賞し、漸く二ッ井停車場に着いた。午前九時から午後五時半頃まで清流の上である。こゝで行を共にした彼の青年の一連と、西と東に袂を分たなければならぬのである。

慕しい山岳の美容と、懐しい青年の顔容とは生涯忘るべからざる、一印象である。

羽前の三山（出羽探山記の二）

大平晟

第七　寒河江の河畔

十七日朝、腕車を驅り、郊外松川の橋を渡り、六時五十九分發の奥羽線汽車に搭ず、車中の人々、煤掃顔を作るの夥しきを訝りしに、板谷峠隧道通過の折に戴きたる土産なりとぞ。

赤湯、鶴脛の温泉地、及山形を經、九時天童に下車す、山形は、天平中、鎮守府將軍大野東人が城を築きし所、元と最上と稱し、後山方と云ひ、中古山縣、次で山形と改む、水野氏五十七萬石の城下にして、今は縣廳の所在地となり、人口三萬餘あり。

天童は、東村山郡衙の所在地にして、名にし負ふ米澤薄荷は、概ね當地方より產し、年額十萬圓に上ると云ふ、東南二里餘の山寺は寶珠山立石寺と號し、其の怪岩奇石は、榛名、妙義に讓らずと稱せらる。

朝來の曇天、此に至りて雨を催しければ、天童より歸り、車を利用すること三里弱、西村山郡衙の所在地寒河江に著きし頃は、雨は幸にも霽れぬ、時に十時三十分とす、此地朝日嶽の裾野に位し、西北郊外、爪先上りの丘陵に出づれば、東の方山形盆地を一眸の下に收むべし、路右に校舍あり「山形縣西村山郡立西村山中學校」の門標は掲げれど、柵内草は茂りて廢校に似たり、偶湯殿山歸りの白衣輩十數に逢ふ、門前に遊べる群童馳せ來りて「くらしゃい」、「くらしゃい」と連呼しつゝ、甚だしきは我等が袂を引くものあるに、予其意を解せざりしが、次で「錢くらしゃい」、「お山祝くらしゃい」といふを聞き、始めて富士山北口の袖乞と同一筆法なりしを悟りぬ、山門の雀は、經を讀むといふに、今校前の童兒は、袖乞を學ぶ、因襲とはいへ、彼等品性の上に、至大の汚點を刻するに至らずんば幸ひなり。

「今度の御行さん金持だ、一文撒かしゃれ、明日の御山に、御來迎にも遇はしゃんすべい、撒かしゃれ、御行さん」とは、

山麓稲乞の歌なりけり、「御行さん」とは、詣客即ち道者をいひ、「御山」は山麓人民の、靈山に對する尊稱なり。午後〇時三十分、白岩部落の入口、寒河江川に隔める、右岸の茶店後藤方に休み、喫飯す、川に架せる新橋は、中隆く、代赭の塗色鮮かにして、宛然日光神橋に似たり、對岸は、灰白色なせる沙岩、泥板岩の絶壁相連り、白岩の名空しからず、橋を渡れば、崖下に碑あり、「臥龍橋之碑」と題し、文末に「白崖隱醫高橋某撰」と書す、蓋し開鑿架橋工事の碑となす。白岩は戸數約四百、旅館數戸あり、天童以來、湯殿參詣白衣の客往くもの還るもの、殆ど引きも切らず、沿道村落、依りて以て生を營むもの多き、知るべきなり、寒河江川は、朝日嶽に發源し、朝日、月山兩脈の間を穿ちて東下し、最上川に會す、而して白岩は、實に此溪谷の關門に當り、これより路は、始終川の左岸に沿ひ、緩斜の爪先上りとなる。

三時三十分海味に著し、朝日屋に投宿す、時尚早けれど、汗染みたる衣類を洗濯する必要ありしによれり、此地戸數約百五十、海拔五百尺とす、寒河江の鮎は、晩餐の膳に上る。

十八日、夜來の雨歇み雲斂まりて、一天拭ふが如し、七時海味を發し、九時三十分本道寺に著し、湯殿山神社に詣づ、荒れ廢れたる外門には「湯殿山、賜紫沙門古梁」と書せる額を掲ぐ、本殿の傍に「官國幣社務出張所」と書せる標札あり、就て三山の繪圖を需め、濯茶の饗にあづかる、三神社とは、湯殿山、月山、羽黑山の三社にして、官幣社あり、國幣社あれば、官國幣と冠せるなり、三社今悉く羽黑山麓社務所の所管にかゝり、此口の社殿は、甚だ寂寞の觀あり、昔時は、宏大なる坊舍ありし由なるも、戊辰災餘、今は散亂せる斷礎と、側坊の小學校に假用せらるゝを見るのみ、森々たる老杉の裡、急勾配の石階を降れば、「湯殿山千人講社」、「湯殿山三萬人講」など刻せる、石標の夥しき、昔時の繁昌を偲ばしむ。

本道寺より湯殿山を探らんには、急崖の昇降を反覆すべき累あり、且つ此地の人氣頗る善からぬを聞き、予は志津口を取るに決し、尙ほ歩を進め、十一時三十分、砂子關の農家兼茶店式の椽側に踞し、寒河江の鰍汁にて、晝飯をしたゝめ、海味よりの荷擔人夫を歸へす、此人夫「老人の遊び役なれば、如何程にても」といひながら、二貫目にも足らぬ荷物の賃錢、半日五十錢を請求せるは、驚き入りたる慾張り老爺なりき、路はこゝにて寒河江の本流と別れ、或は崖側の急坂を辿り、或は山毛欅の森林を穿つ、蓋し月山の濶葉喬木帶と稱すべきなり、午後三時三十分、志津に著し、今野傳内に投宿す、今野は、郵便局兼旅舍を營み、鶴岡に通ずる縣道に當ると雖、行人稀少、其宿客は、概ね湯殿山詣りの白衣連となす、標高約二千三百尺、前には近く月山の峯頭、火山式緩斜の圓錐形を呈し、殘雪其襟を飾り、左に姥ヶ嶽、仙人ヶ嶽相連り、南微西に當り、波狀なせる山々峯々の奥、脈絡雄大、中央の二尖峯、天を刺せるは、之を朝日嶽となす、此地山間に介在し、戸數僅かに十五といへる小部落なれども、白衣願客の需めに應ずべく、菓子、麪類、麥酒、鑵詰等の準備あり。

晩餐後、屋外を逍遙すれば、月山颯の涼氣は、肌に沁み、月は皎として東天にかゝり、杜鵑の聲は、谷より谷、峯より峯に傳はる。

第八、語られぬ湯殿山

十九日、未明起床、曉天の星下、屋前の泉流に嗽ぎ、冷水摩擦に身を清め、愈々三山跋渉の途に就くべく、導者志田仙助を先きに立て、志津を出發せしは、午前五時三十分とす。

志田は六十二歳といへる老人なれども、矍鑠たる長身、口能く辯ず、曾て三山神職の助手たりしとて、頗る自負の色あり、想ふに、登山初陣の客には、彼尊大自ら裝ふべきも、對面早々、予が日本名山跋渉談の烟に捲かれ、且つは予が取調べし、三山豫察材料の豐かなるに敬服し、大に忠實の態度を取りしのみならず、予は却て彼を利用し、靈域神秘の見學を得しこと少からず、所謂用材適處の類か。

郊外路右、廣さ數町歩の池あり、頗なき清水なれば、「しみづ」の畧語「しづ」(志津)を以て、地名とせるなりとは、導者志田の說明なりけり。

程なく路傍に庚申塔あり、右するは湯殿山道なれども、予は此道の急にして長き降り坂あるを避けて、尙ほ歩を縣道に進めぬ、縣道は即六十里越なり、行くこと少許にして、屈曲緩斜の下りに就き、八時四十五分縣道と別れ、右折し、湯殿の山逕にかゝる、入口に掘立小屋あり「湯殿山新道」と書せる木標を立つ。

九時五分藥師堂の小屋といふに休む、茅葺の長き屋根は、甚だ低きも、道者百人位は詰め得べし、此道は一昨年始めて開きしものなりと云ふ、屋内神壇を設け、御符等を鬻ぐ、美髯を蓄へ、袴を穿てる神職來りて應接す、予は志田の紹介により、普通道者の取扱を免れ、茶菓の饗にあづかり、且つ彼が持ち來りし鉢植のまうせんごけ、こわかばなどに對し、說明を加へしに、神酒なぞ取出して侑めぬ、此男頗る山師の氣ありと見え、果ては鑛石なぞ持出し、技師ならぬ予に鑑定を需め、頻りに志田と共に、彼處の鑛脈は如何、此處の試掘は如何などゝ、餘念なく語れるは、何處も鑛山熱の流行せるにや、屋外に切石もて圍める冷水浴槽、及び清潔なる溫浴塲の設備ありしは、意外なりき。

餘り有り難からぬ雜談に、時を移し、既に十時となりければ、志田を促し、出發し、五分時にして大網口(オホアミ)(或書及び三山圖に大網と書せるは誤なり)よりの道と會し、同十分、仙人澤の小屋に到る、傍に湯殿山と刻せる石塔林立し、附近の濕地には、まうせんごけ、むしとりせきしゃうの開花多し、同三十分、鐵鎖によりて少許の急崖を降り、河床に達す、是

れ湯殿山靈泉の下流梵字川にして、此溪谷を御澤と稱す、赤川上流の一なり、路は之を横ぎりて、右岸の丘上を經るものと、始終川を縫ひつゝ溯るものとの二つあり、志田は河床の中、巨岩激流跋涉の困難あるを厭ひ、丘上の路を取らんと提議せしも、予は比較的興味の多きを選び、斷じて川路を取りぬ、蓋し川路によらざれば、奇瀑及本山名物の長き鐵梯を見ること能はざればなり。

河床崖側、褐色の鑛泉溫泉湧出する所、青銅製の御幣、及び小石祠を設くること多く、白衣の道者等は、一々先達の指導によりて、拜辭を誦し、撒きたる賽錢は、礫片と相伍す、「湯殿山錢ふむ道の泪哉」と曾良の詠みたりしは、實を穿てりと謂ふべし、志田は予が豫約により、呪文撒錢の式を畧し、白衣の陣中を乘越す幾十回、同五十分御瀧に到る、瀧高さ四丈餘、幅約二丈、傍奇形の岩竇中より、迸出せる副瀑あり、瀑側に所謂十三間の鐵梯あり、而かも數條相並びて懸り、古きは既に腐蝕して用をなさず、鐵梯に沿ひ、鐵鎖若くは藁繩を垂れ、握りて上下するに便す。

十一時十五分、名だたる湯殿山に達す、湯殿山、月山、羽黑山は之を羽前の三山と稱し、諸國皆鼎立を以て表すれど、主峯は素より月山にして、羽黑山は其北脚の丘陵、湯殿山は其西南山腹の溪谷たるに過ぎざるは、諸家の既に說きし所、溪谷を稱して山と云ふ、元來大々的敬語のみ、更に之を詳說せんに、月山の支脈、西南に亘り、山背幾多の突起を生じ、其突起の特に著はるゝもの、姥ヶ嶽、仙人ヶ嶽とす、仙人ヶ嶽又湯殿嶽と稱す、所謂靈域湯殿山は、此仙人ヶ嶽の西腹劒山と、御田ノ峯との間に位し、高距約三千三百尺の溪谷とす、些々たる狹き此溪谷、何が故に、天下の靈場として、古來道者の尊敬を博せしか、唯溫泉の噴出奇異なるにあるのみ。

靈場は、竹を交叉せり、高八尺許の籬柵を繞らし、入口に銅盤あり、縱三尺、横一尺五寸許、側面に「御寶前」と彫刻す、これ手洗水なり、傍に淸泉あり、以て嗽ぎ、こゝにて笠を脫ぎ、草鞋を去り、徒跣にて柵內に入り、十間許にして、靈場に達す、小墳狀なせる岩塊あり、高約一丈、底徑約三間、頂に小孔ありて、溫泉を噴上すること一尺許、所謂五味の藥湯是なり、藥湯四散流下して、絕えず岩面を沾し、含有せる水酸化鐵の沈澱は、赭褐色鱗狀凹凸の凝固被覆を作り、甚だ奇景を呈す、これぞ道者が、隨喜渴仰の涙に咽ぶ、湯殿山の神體なる、正面に徑三尺許の鏡面を揭ぐ、神體の一側に沿ひ、弦月狀なせる溫泉の潴溜あり、赤褐色を呈し、蒸氣濛々たり、潴溜長徑約二間、畔狀の緣を存し、緣外は直ちに數丈の斷崖とす、湯殿の名、これより起る、神體は頂上噴泉の外、尙ほ表面所々に小孔凹窩ありて、溫泉湧き出で、附近の崖側亦溫泉の迸出するもの、滴下するもの、甚だ多く、溫度は百度內外なり、試みに溫泉を口に含むに、收斂性澁味に加ふるに、甘さが如く、酸さが如く、鹹さが如き感あれば、五味の藥湯と稱するも宜なり。

道者は、天にも響けと、聲高らかに、例の「阿夜爾阿夜爾奇志久尊支湯殿山乃神乃御前乎拜美奉留」を合唱しつゝ、神體の側面、及び崖側を巡拜し、入り代り、立ち代り、引きも切らぬ各隊の、高誦の聲、拍手の音は、谷に充ち、千枝の燭光は、五色の幣帛と相映じ、一種異樣の感起りぬ、彼等が撒きたる賽錢の、岩窩内に散在せるは、有り難けれど、瀦溜内まで投げ込むとは、神靈の御嘉納、如何のものにや。

湯殿山は太己貴命、少彦名命、大山祇命を祀り、今は國幣小社に列するも、古來靈場には社殿の設なく、唯社務出張所ありて、數名の神職、御符、供米、繪圖、緣起等を鬻ぐのみ、予は例により、志田の紹介を以て、特別取扱を受け、所謂神體頂上の裏面を巡り、神の湯槽を檢しぬ、頂上裏面石標あり、「迦具土神社」と刻す、附近温泉の沈澱より成れる、木葉條理の判然たる化石を見る、溪谷にはなら、もみぢ、やまはん多し、新風土記によれば、湯殿山又戀の山と稱するは、詣客一たび此境に到らんものは、年月を經るも、戀ひ止まざるより名くといへり。

「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」とは芭蕉の句、道者にして、本山の光景を他に語るに於ては、忽ち神罰に觸るゝと稱し、古來秘密の靈場たりし所なれど、道者ならぬ山人、之を語るも、敢て罰なからんか。

棚外清泉前の巨石に踞して、晝飯をしたゝめ、十二時湯殿山靈場を出發し、〇時五分、含滿瀧に到る、高約四丈、崖側斜面を擦下するものなり。

大雨には、路身忽ち瀧とも成るべき「みづがっこ」、塊岩磊々たる急崖の「おがっこ」など名くる所、長百二十間といへる鐵鎖を攀ぢ、同五十分、裝束場に達す、此鐵鎖は甚長きも、把握攀縋の必要なき所多きが如し。

裝束場とは、道者衣服を更むる處なれば、斯くは名けしもの、標高約四千二百尺、志津口の登客は、こゝより湯殿山に下るものなり、此間約十八町とす、道者の穿き換へ棄てし草鞋は、積りて小丘をなす、狹き小屋あり、菓子及び藥品百草丸を鬻ぐ、本山の靈藥を加味すといへる砂糖湯に、咽を濕し、歩を移せば、これより眼界稍開け、灌木漸く減じて、草本帶に入り、みつばわうれん、やまくわんざう、いはいてふ、ごせんたちばな、まひづるさう、だいもんじさう、くろくもさう、はくさんいちげさう、きんぐるま、たてやまうつぼぐさ、こばいけいさう、たかねよもぎ、うめばちさう、はくさんふうろ等を見る、此邊唐鍬もて、形式ばかりの道普請を裝ひ、詣客に志を求むる一種の袖乞に接す、左方谷稍開けたる處、往々御田式の瀦水、及殘雪を見る、是れ梵字川の最上水源となす。

第九、月夜の月山

志津より見たる月山　（四十一年八月十八日夕）

午後二時、一の木戸（即牛ヶ首）といふに達す、標高約五千二百尺、湯殿山、月山の分界點となす、小屋あり、右より來れる道は、岩根澤、本道寺口よりせるものにて、之を横道と稱す、故に此二口より來れるものは、こゝより湯殿山まで往復し、月山に登らざるべからず。

近く月山の鈍頭を仰ぎつゝ、御田ノ峯の側面を經れば、右方の窪地は、殘雪數町歩に亘り、純白のひなざくら、淡黄白のちんぐるまは、雪と其潔を競ひ、いはべんけい、あをのつがざくら、こいはかゞみ、あきのきりんさう、きばなのこまのつめ等、刺繡の如く、路傍を飾りね。

同二十分、左方に西普陀落と稱する急壑を下瞰す、これ爆裂口の址にして、溫泉湧出せりと云ふ、一の木戸以來、甚だしき昇降なかりしが、茲に至り俄然急勾配となり、崔嵬重疊せる安山岩を攀ぢ、同四十五分、鍛冶屋敷を過ぎ、急坂登り詰め、三時月山の絶巔に達す、標高約六千五百尺、湯殿山靈場を距る約二里、本道寺より直ちに登れば約四里とす、鍛冶屋敷は、昔時此國の鍛匠、本山の靈水を選び、銘刀月山丸を鍛へし所なりと言ひ傳へ、今其址に小屋あり、詣客數十人を宿すべく、力餅と稱し、汁粉或は納豆（ナット）をかけたる切餅を鬻ぐ、又毎日豆腐を製し、本山許判の名物たり、傍に稻荷神社あり。

月山絶巔には、月山神社を立つ、月讀命を祀る、三代實錄に、藤原保則征戰に方り、靈驗ありし旨を上奏し、元慶四年、月山神社に、正三位を授けらるとあり、社は方九尺大の木造にして、正南に面し、屋上徑一尺許の銅蛭一面を掲ぐ、道者は此鏡面に向て、賽錢を投じ、的中せざれば止まず、蓋し先達が、御山の御機嫌を圖れる賽錢政畧ならんか、社殿繞らすに、高八尺許の富士岩石垣を以てし、數十間の賽路は、直線的に南に通じ、左右に高き石垣を設け、路身亦一面の敷石とす、賽路の左右に小屋數棟あり、舟小屋式の茅屋なれども頗る廣く、優に數百人の宿泊に應じ得べし、社前十間許の處に草鞋脱場あり、道者此處にて草鞋を脱き、手を洗へば、先達之を神職に通じ、

然る後神前に詣づ、參拜時間は、午前五時より午後五時までとす、其儀の嚴なる、他に多く其比を見ず、社前に高一丈餘の尺角木標あり「官幣中社月山神社」と書す、社後に三角點あり。

社南三町許に、長方形の池あり、御池と稱す、長約二十間、幅十間許、深三四尺を超えざるが如し、是れ雨霧の瀦溜せるものにして、項上緊要の用水とす、されど旱魃甚だしき年は、稀に涸るゝことありと云ふ、入口に「月山神饌用水」、「このところへ立よるべからず」と記せる標札あり、池の南數町にして東に下るは、肱折道とす、本山は、此天然蒸溜水を用ゆる爲めにや、高山の飯としては、上乘なるを感じぬ。

社前數歩、社務出張所あり、是亦茅屋式なり、神職五名出張す、志田は、取締白井岩記氏と熟知なれば、予を紹介し、氏の厚意により、滯在中は、社務所にて食事の饗にあづかり、夜分及び未明は、事務の爲め、雜沓なればとて、賽路西側の小屋に宿せり、此小屋守は、七十以上の老人なるが、本山小屋係をなすこと、既に四十六ヶ年に及び、山上生活の健康功德を述べ、既に一週間も滯留すといへる、三歳許なる其愛孫が、膝下に懷ける樣、如何にも爽かに清き感を與へぬ、豫て白井取締より、深厚なる注意ありしことゝて、數十人の道者詣客の、烟に燻じつゝ爐邊に混臥せるに反し、予には隣隔内の別室に於て、火鉢を附し、十分の夜具を給し、懇待を盡しぬ、白井氏より借りて閲讀せる、山形縣地誌提要に、本山を直立五千三百尺と記せるは、誇鄕的の世の中には、珍らしき安目利なりけり。

素より澄める高山の空は、夜に入り益冴え渡り、月は皎として山上山下を照らし、星稀にして其光奢たり、烏鵲の南に飛ぶは睹ざれども、杜鵑の聲は、谷間に聞ゆ、嗚呼浮世の塵を高く離れ、月山の頂上、超然として獨り此月明を賞するものは誰ぞ、唯東方の下界、霞の淡く鎖せる上、其半身を天界に挺き、穩然予に長揖せる葉山(五千尺)あるのみ。

此日朝、志津に於て、溫度七十二度を示しゝが、夕方月山頂上は、七十度となり、翌朝六十度に下れり。

高山の上は、時ならぬ山荒れに、寒風或は雪を齎すことありて、昨年八月十五六の兩日は、霰雪降りしきり、山上一面に白くなれりと云ふ。

本山頂上の小屋開きは、陰曆五月下旬より、八月下旬まで、約九十日間なるも、道者の最も多く登るは、陰曆七月十四日より一週間なりと云ふ。

九月上旬に至れば、頂上の雪は、全く消ゆるも、獨り東腹の大雪城(オホユキシロ)(當字)のみは、概ね終歳消えずと云ふ。

數日前、山形師範學生七十名登山し、此小屋に宿せりと云ふ。

以上四件は、小屋老翁の語れる所なり。

二十日昧爽、朝餐をすまし、輕裝山頂を逍遙す、此日斷雲飛び、淡靄掠め、遠望可ならず、唯正北に方り、予が新に交りを結ぶべき鳥海山の、深く白雲帽子を被れるあるのみ。

本山は、「グッサン」、又「ツキノヤマ」といひ、庄内平野より望むときは、月輪が其三分一を、地平線上に顯はしたるに似たりと云ふ、又犂牛山、牛首山の稱あるは、山容臥牛に似たればなりと云ふ、頂上南北に長く十數町に亙り、幅約四五町、甚だしき起伏なく、唯火山岩質の巨塊碎礫相伍し、偃松は著しく縮まり、却て偃檜の繁茂を見る、草本の主なるものをあぐれば、うらじろたで、きんかうくわ、たかねとんぼ、きんぐるま、いはおとぎりさう、はくさんふうろ、ちしませきしやう、よつばしほがま、きばなのしほがま、ひろはのきりんさう、みやまひかげのかづら、まんねんすぎ、かうやのまんねんすぎ、いはべんけい、みねはりゐ等にして、がんかうらん、こめばつがざくら、いはうめの一面に密布せる處多く、殊にはくさんいちげと、うめばちさうとは、甚だ夥しく、且つ其莖著しく短縮し、はくさんいちげの莖二寸、うめばちさうの莖一寸許にして、其得意の銀葩金蕊を呈せる樣、本山の特色となすに足れり、但六千尺以上の天界に於て、蚜蟲がいちげさうを侵せるは奇と謂ふべし、東側斜面を下れば、殘雪點々、廣きは徑數十間に亙り、きばなのこまのつめ、べにばないちご、いはいてふ、ちんぐるま、あをのつがざくら、ひなざくら等、今を盛りと咲き匂ふ、尙下れば、御田式の小池散在し、頗る廣き段丘をなせり。

予宿泊の謝儀を呈せるに、白井取締は、固辭して受けざりければ、更に携帶せる鮭の鑵詰を呈せしに、晝飯には、此鮭肉を、本山の名物豆腐汁に入れ、神酒など饗し、主客歡を共にせしは、天界に於ける珍宴と謂ふべく、古來神佛混淆の餘習を免れざる、繁昌の御山にして、肉食に對し、外見を衒はざるは、亦快とするに足れり、又氏は特に予が爲めに、使丁を東谿に派し、だけせり、みやまみつばなどいへるを採集せしめ、胡麻合ひ、浸しとし、或は汁に入れ、時には自ら鰹節を削り、或は生姜を擂りて、砂糖湯を製し、予を饗するなど、淡泊懇切、謝するに堪へたり、殊に山形の名物、「のし梅」の到來あればとて、分たれしは珍らし、高山の上、生姜の砂糖湯は、特に佳なるを感じぬ。

第十　晝猶暗き羽黑山

導者志田は、昨日既に歸しければ、神官の周旋により、本日下山の途に就くべき、手向の人夫を案内とし、羽黑山に向つて、月山頂上を出發せしは、午前十時二十分とす、磊々たる巨岩の間を縫ひ、風穴多き急勾配の斜面を降り、同四十五分行者戻といふに著きぬ、昔役行者、羽黑山より、此處まで登りしに、老翁顯はれ出で、行者を押戻しければ、修業數旬

にして、漸く月山の頂上に登るを得たりし舊蹟なりと傳ふ。
十一時五分、一ノ嶽といふに下る、小祠あり、「眞名井大神」と記せる幟を立つ、傍に小屋あり、赤飯を鬻ぐ、附近に毒池と名くるものあり。
十二時御田原（ミタノハラ）（又彌陀原）に著す、小祠あり、眞鍮幟に「御田原神社」と刻す、多少の高低あり、行潦の穿てる痕跡夥しき、頗る廣き緩斜の濕原相亙り、所謂御田多く、其大なるものは、一町歩に餘れるものありと雖も皆淺く、中には例のえぞほそね、周圍には、まうせんごけ、みつがしは、みづばせをを生じ、原中さんかうくわ、むしとりせきしやう、ゑんかうさう、おほこめつゝじ、みやまもみぢ、なゝかまど、紅花及白花のわれもかう等あり、土人がうしのしたと名くる、一種のはなやすりを見る、雪白の一包葉に、淡黃の子囊莖を抽きたるは、頗る人目を引きぬ。
御田原の東に、爆裂口址の小湖を存せる、東普陀落山の險あり、名高き掛所なれど、予は之を畧しぬ。
○時三十五分、馬返に著す、小屋あり、麪類菓子を鬻ぐ、合清水（ゲフシミヅ）と名くる涌泉あり、榮井（サカヰ）神社の幟を立つ、月山頂上より約三里と稱す、こゝより灌木帶に入り、路は交々塩土、赤土を表はし、漸く緩斜となる。
午後一時十五分、「名物力餅」の幟、高く揭げたる、平清水（ヒラ）の小屋に休憩し、小豆をつけたる餅を試む、價頗る廉にして、出來亦宜し、澁茶の佳味、高山には珍らしと褒むれば、此處の清水は、本山第一の良質なれば、茶にも適し、餅にも適すとて、無邪氣なる愛嬌を振り撒きしは、小屋番せる、二十餘りの色白き男なりけり、津長井神社あり、平清水以下、濶葉喬木帶に入り、蓊鬱たる山毛欅の樹林相連る、同五十五分、老杉圍緩せる狩籠（カリコメ）の新山神社を經、二時十五分、强清水（コハ）に着す、本山第一の冷泉と稱す、此邊行潦の跡あるを認め、之を來人に質せば、數時前に、餘程の夕立ありしと云ふ、曩さに、御田原にて、山下の雷鳴を聞きしが、當時下界は、大雨なりしなり。
三時五分、月山、羽黑山の分界點たる、小月山（コツキヤマ）神社を經れば、喬木帶を脫し、頗る緩斜の芒原、相連ること一里餘、これ月山の裾野にして、其山背の著しく廣がれるものなり、右は溪谷を隔てゝ、高倉山脈あり、左は波狀の小丘陵を隔てゝ、日本海の白波を眺むべし、平野は今政府造林に着手し、松、杉、檜の植栽を見る、同四十分、濱の砂路に似たればとて、海道坂の名を得たる處を過ぎ、再び一里許の芝生廣原に出づ、左には造化の鑿もて、小さく刻める、饅頭狀の丘陵、幾百千相布ける樣、如何にも奇なり。
四時三十分、野口といふに到る、路傍に石塔あり。

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

雲の峯いくつくづれて月の山
涼しさやほの三日月の羽黑山
はせを

文政八年乙酉四月立之

程なく、岐路に標柱を見る、「向て右立谷(ヌタ)村道　左羽黑山坊町」と註しぬ、月山より、羽黑山に詣でんと欲するもの、此標柱に接せば、必ず左道を取るならん、されどこれ自己の土地を經過せしめんとの、營利主義より割出せる、坊町土人の所爲なれば、右道直ちに羽黑山に至るを可とす、偶山形地方のものなりとて、五六の青年團體、こゝに迷ひけるが、予が說明により、予に次で右道を取りぬ。

女人禁制の石標を建てる、觀青堂を左に、宏壯なる地藏堂を右に見、松林、樹林、交錯せる大杉林中、飛石的の石段を踏み、五時二十分、羽黑山神社に達す、月山頂上より約六里、標高約一千二百尺とす。

羽黑山神社は、即ち出羽(イデハ)神社にして、今は國幣小社に列す、相傳ふ、崇峻帝第三の皇子蜂子皇子（法名弘海）魁偉勇猛、蘇我氏に忌まれて、都を去り、怪鳥の導きにより、此地に於て修驗道を開き、羽黑派を起し給ふ、所謂羽黑大權現は、推古帝元年の創建にして、稻倉(ウガノミタマ)魂命、玉依姫命を合祀し、當時七千の僧徒をして之を守らしむ、冷泉帝の御代、奥羽信越の總鎭守たるべき勅宣あり、延喜式神名帳に出羽國田川郡伊氐波神社とある是なり、社殿は藤原秀衡再建し、慶長中最上義光再修すといひ、桁行十三間二尺、梁間九間二尺、丹朱之を塗り、高壯美麗、多く其比を見ず、表額に「出羽神社」、內額に「羽黑山月山湯殿山」と書す、古鐘あり、口徑五尺五寸、長八尺、後宇多帝建治年間、鑄し所なりと云ふ、境內末社の多きは兎に角、東照宮まで設けあるは如何にと、神職に質せば、德川の腹心、酒井忠勝、鶴岡に治せしとき建てたるものなりと云ふ、傍に蜂子皇子の墓所あり、方約十間の木柵を繞らし、土墳上に石を立つ、本社は規模既に宏大、加ふるに數里に亘れる老杉巨松、欝々森々として、晝猶暗く、神氣眞に人に迫るの感あり。

高さ二丈二尺五寸ありといへる、青銅華表の下を通り、十六町ありといへる石階を降るに、或は急、或は緩、或は平に、其幅約二間、石面往々霧爛崩壞せる所、寧ろ古色を呈し、此石材を蒐集せる當時の勢力を偲ばしむ、思ふに、神社としての大杉林、長石磴、本社は實に海內の珍たらんか。

石階始め降り盡し、右に當り、名高き五重塔あり、平將門が建てしものなりと云へど、勿論後世の作なり。

出羽神社參詣の折、密雲月山の天より蔓り、遠雷の聲頻りなりしが、茲に至り、閃く電光に眼眩じ、轟く雷鳴に、耳聾せ

んばかり、烈しき澍雨は、天池破れし如く、荒ぶる風は、繁吹の銀波を造れる活劇に、流石の山人も辟易し、路傍の小堂に逃げ込み、その稍靜まるを待ちて出發し、秡川の橋を渡り、隨神門に到着せしは、六時二十分とす、門側に高一丈五尺許の石標あり、左の金文字を刻せり。

官國幣中社　羽出月山三神社　明治三十二年七月吉辰
國幣小社湯殿山

隨神門に向て、左に社務所あり、右に皇典講究所あり、社務所に就き、紀念の捺印を請ひ、門前の手向村（舊たむけ）土岐多門に投宿す。

手向は戸數約四百、登山季節には、皆道者の宿泊に應ず、昔時は宿坊千戸に上れりといへば、其盛なりしこと驚くべし、從て種々の餘弊を存し、袖乞の陋は言ふに及ばず、詣客の財布に對する、作戰計畫盡さゞるなく、神職の手よりする御符の如き、一個七厘、若くば一錢六厘、二錢一厘などゝ定め、詣客をして、一種の四捨五入法、否無捨悉入法を餘儀なくせしむ、予が導者の如き、月山頂上神職の周旋によれるもの、且つ手向より荷物を運び終り、此日は空荷の歸路なるにも拘らず、予が豫め賃金を定めざりしを奇貨とし、半日の賃金に、一日分の普通剛力料七十錢を請求せるが如き、一々數ふべからず、是れ靈城に對する、不忠實の行爲にして、やがては自ら削るの策なれば、予は切に其反省を望むものなり。

羽黑山舊記に、「羽前の三山は、古來月山を以て總稱す」とあり、今之を跋渉するに及び、湯殿山は、溪谷局部の稱なるも高距尚ほ三千餘尺を有すれど、羽黑山に至りては、第三紀の臺地狀をなし、其高距山麓手向に比し、約八百尺の差あるのみ、彼橘南谿氏が、名山論に、羽黑山は、都の鞍馬にも及び難く、湯殿山は叡山よりは、低かるべしと云へりしは、中らずと雖も遠からざるなり。

羽黑山の繁昌せし往時は、一年の詣客、二十萬を以て數ふる由なりしも、今は三山中、湯殿山の詣客最多く、年五萬乃至十萬に及び、羽黑山之に次ぎ、月山は我輩山人の脚には、平易極まるものなれども、流石は山岳の相を有すればにや、之を畧するもの多きが如し。

古來、月山の登口は、羽黑山、肱折、岩根澤、本道寺、大井澤、注連寺、大日坊の七所ありて、羽黑山を以て表口とし、本道寺を以て裏口とし、互に競爭の姿ありしに、封建時代、武將の爭奪により、益反目嫉視の度を高めたりしが、維新の後、神佛混淆を禁じ、物集高見氏、三山神社宮司となるに及び、社務所を羽黑山下に設け、三山は茲に統一を見るに至れりと云ふ。

手向村落の中央、一大標柱を建つ、左の文字あり。

月山 羽黒山 湯殿山 三山參詣者案内所

坊舍の門標には「何縣何郡三山參詣者宿泊所」と註しぬ。

日本河川志（一）

高頭式編纂

此書は山嶽志に次で稿を起し、既に脱稿する筈なりしが、事心と違ひ、目下の處にては、幾年の後、上木の歩びに至るやら、五里霧中の態にて、忘れ果てたるものゝ如くなりし、今春親戚の者、年賀に來り、余が山嶽志の增補を中止せしと、此書の編纂を怠る等の罪を數へ、山岳の四年號には、是非何れなり掲載するやう、苦言せられたる先々へ、小島兄よりも、原稿を促がされ、多少纏りたる部分より、連載して見る氣になりたり、海賊同じやうなことを言ふて、失禮の至りなれど、田舍住居の余には、材料の不足と、諸大家の教を請ふことを得ずして、充分なる考證をなす能はず、山嶽志と均しく、識者の教を仰ぐ目的にて、執筆せるものなれば、體裁其の他御心付の分は、御腹藏なく、御明指あらむことを、切望するものなり、本書の體裁は、主として河川を記し、湖沼、瀑布を附記せり、故に、水系志と名づくる方、妥當なるべきか、日本全國を、第一區、日領樺太、第二區、十州島、第三區、奥羽、第四區、北陸道、第五區、關東、第六區、本州中部、第七區、中國、第八區、四國、第九區、九州、第十區、臺灣に分ち、更に太平洋、北海、日本海、西海、海峽、（臺灣）、內海、（瀬戸內）、の六斜面に區別せるも、理屈あるにあらず、分ちたる方、都合がよきやうなればなり、隨て四國より創めたるも、四國が比較的纏まつてゐたに過ぎず、川系は、幹流と支流に分ち、更に支流を、支川と、分川と、派川と、及び溪に分ち、索引と、附圖とを添ひて、閲覽に便ずる筈なり、先づ幹流の別稱、流域、支川、分川、派川、發源、流來、河線、航路、効用を揭げて、其の大體を考證し、次に解說に入り、解說中にて、支川、分川、派川、溪を說明せり、尙ほ漁獲、物產、橋梁、水利、水力の應用、破堤、汎濫の歷史等を、記する筈なりしも、材料皆無なるを以て、之を略し、其の幾分は、考證又は解說中に記せり、幹流とは流末の海に注ぐものに名づけ、川名に冠するに◎符を以てし、其の十里以上を流るゝものは、川名殊に四號字を用ひ、以下なるものは、五號字を用ふ、湖沼に注ぐものは、◉符を冠して、川名五號字を用ふ、但し湖沼が海に接續せるときは、海に注ぐものと同じくす、支流とは、支川、分川、派川をいふ、支川とは、幹流に入るものに名づけ、◎符を冠して、川名五號字を用ふ、分川とは、幹流より分れて、復た幹流に入るものに名づけ、口符を冠して、川名五號字を用ふ、派川とは、幹流の流末、分れて海に入るものに名づけ、◎符を冠して、川名五號字を用ふ、溪とは、支流に入るものに名づけ、△符を冠して、川名五號字を用ふ、索引と附圖とは、此書が單行せられたる時にあらざれば、製作するを得ず、序に附圖に就きて一言す、余は山嶽志を出版せしとき、附圖を添へて、各山岳に山嶽志の頁數を記して、小島兄が第三年第一號の「日本山岳案內記は如何に編輯すべきや」に陳べられたる、木曾山脈の駒ヶ嶽と、飛驒山脈の御嶽が、額を突てゐながら、三十頁の間隔のあるが如き、不都合を補ふ筈なりしが、所在不明の山岳多かりしと、時間と費用の點よりして、之を節したり、同書の「日本群島山岳系統圖」に、纒に山系、火山帶の頁數を載せたるは、此微意に外ならず、河川志刊行の曉には、自信ある圖上索引を附する意なり、引用書名は、其の出處を嚴明にせんと努

め、蒼蠅きほどに明記せるも、地圖に至りては、「二十萬分一大日本地形詳圖何々圖幅」といふが如き文字を、一々詳記するの氣力なければ、(日本山嶽志第一增補)の「引用地圖略號」を用ひ、符號の(()、「」、()等も、同書の凡例に從へり、同書は、雜誌の第一年第二號に附しあれば、就きて見るべし。

斯の如く長廣舌を弄すれば、大に地學界を益する書籍のやうなれども、實際は山崎、佐藤兩氏の、(大日本地誌)の水系を抜き書きして、少しく贅說を加へたるのみ之を世に問ほんとする、余が面皮も薄すからずといふべし、同好諸氏の援助を願ふの情に耐へず。

第八區

四國

內海斜面

紀伊水道

吉野川系

吉野川を記するに先だち、一言することあり、此川の流末二大分流となり、北川(中富川)といひ、別宮川といふ、古より北川を以て、幹流とせるが如く、(日本地誌提要)以來、現今に至りても、普通の教科書等、悉く皆之に倣へり、往昔は知らざれども、今日にありては、別宮川を幹流となす方、適當なるものに似たり、故に余は、(大日本地誌)、及び(大日本地名辭書)に從ひ、北川を支流となせり、左に北川を幹流とせる諸書を擧げて、參考に資す。

(日本地誌提要)第六册阿波一五頁、((六十五大川流域誌))八七、八八頁、(內外地誌))二〇三頁、(帝國大地誌)七五頁、(帝國地名大辭典))河渠二一九頁、((地理辭典))三四〇頁、(德島縣統計書)明治三十五年二七、一六七頁、以下同書を引用するも、悉く三十五年調査と知るべし。

((大八洲遊記))九の一、午食、車を買ひて、東南し、村落田畦を馳せ過ぎ、北川を渡る、是を吉野川の本流と爲す、源を土佐土佐郡本川鄕に發し、東流して、本國に入る、濶さ四町、四國中に在りては、第一の巨川と爲す、水源を距る五十里餘、其大さ殆んど筑後川に次ぐ、下流分れて數派と爲るを以て、本流極めて大ならず、又た南川を渡る、北川の分流なり、北川に比して、稍や小、將に德島に入らんとす、別宮川を渡る、又た吉野川の分流也、鮎食川を併せ、又た數派と爲り、德島を繞りて海に入る、故に德島、浪華の如く、漕運尤も便、百貨湊集して、一都會を爲す、(原漢文)。

別稱　芳野川、四國三郎、上流　本川、下流　別宮川、助任川。

諸書參取、((日本地名辭書))一三四六頁、本川をモトカハと訓ぜり、之を取らず。

流域　幹流　土佐國　土佐郡、長岡郡。

阿波國　三好郡、美馬郡、阿波郡、麻殖郡、板野郡、名西郡、名東郡。

豐前中津ヨリ展望セル山岳

支流　土佐國　土佐郡、長岡郡。
阿波國　三好郡、美馬郡、阿波郡、麻殖郡、板野郡、名西郡、名東郡。
伊豫國　宇摩郡。
讃岐國　大川郡、木田郡。

（六十五大川流域誌）八八頁に據る、同書讃岐國を脱せり、「廿地形德島圖幅」に據りて之を補ふ。
備考　拜原、日開谷の二川、大川、本田の二郡に發して吉野川に入る、細溪にして、山間を流るゝ雖も、之を流域に加へざるが如きは失當を免かれず。

支川

土佐國　繁藤川、森川、汗見川、立川、南小川、森川、朝谷川。
阿波國　藤川谷、伊豫川、白川谷、佐野川、野呂内谷、小川谷、添谷、河内谷、山口谷、西庄谷、井内谷、添川谷、祖谷川、黑川谷、相川谷、松尾川、半田川、貞光川、穴吹川、曾江谷、馬木谷、井口谷、野村谷、大谷、川田川、木屋平川、二戸谷、飯尾川、瀧倉谷、伊澤谷、大久保谷、日開谷、カッエ谷、九頭宇谷、指谷、高西谷、金清谷、陰レ谷、坪井谷、別墅谷、松谷、柿木谷、觀音谷、鈴川谷、熊谷、上山川、宮河内川、泉谷川、宮ヶ谷川、盜人谷川、大谷、黑谷川、松谷川、藏佐川、大阪谷川、蔭谷川、下阪ヶ谷川、樋殿谷川、石園川、鮎食川、田宮川。

派川

阿波國　善入寺川、江川、津田川、今切川、別宮川、撫養川、宮島江古川、榎瀨川、鍋川、北野川、中岸川、寺島川、新町川、新川、大岡川、助任川、小通川、福島川、冲洲川、中洲川、津田川。

（六十五大川流域誌）八八、八九頁に據る、其黑點を施したるものは、後文解說あるものにして、批點を施せるものは、所在の分明なるものなり、他は不明のものとす、又た後文解說あるものにて、こゝに漏れたるものは、土佐にて、カマヤブ川、大森川、（森川か）、葛原川、北川、南川、（南小川か）、地藏寺川、穴内川、豐永川にして、阿波にて、拜原川、川山田川、（川田川か）、なりとす。

發源

土佐國土佐郡瓶ヶ森山の南麓、本川村大字寺川

（（日本地誌提要））第六冊土佐一七頁、（（六十五大川流域誌））八七頁に據る、（（帝國地名大辭典））河渠二一八頁、「土佐國土佐郡の西北隅

今泉勝治氏寄贈

矢筈山及び瓶ヶ森山に發し」に作る、((日本名勝地誌)) 第八編二二〇頁、「遠く土佐の矢筈山より來たり」に作る、((大日本地名辭書)) 一二〇四頁、「土佐の北境石鎚山の東南麓に發し」、同書一三四六頁、「源を瓶筒森に發し」に作る。

流末　阿波國板野郡川内村大字別宮浦に至りて紀伊水道に注ぐ。

((日本地誌提要)) 第六册阿波一五頁、((六十五大川流域誌)) 八八頁に據る。

河線　約五十里、水系延長三百五十六里に達す。

諸書參取、水系延長は、((内外地誌)) 二〇三頁に據る、同書幹流の長さ六十里に作る、((六十五大川流域誌)) 八七頁、「河線六十一里九町、濶土佐にて四十間、阿波下流にて二百四十間」に作る、((高知縣統計書)) 明治三十六年（以下此書を引用するも、悉く同年の調査と知るべし）三二頁、二十五里二十町、((德島縣統計書)) 二六頁、二十九里三十四町に作る、但し此書は、別宮川を支流とせり、((日本名勝地誌)) 第八編四一三頁、「吉野川は土佐國本川村より發し、東流長岡郡を經て、阿波に入る、其延長二十五里二十町、末流は阿波の部に詳記したれば茲に贅せず」、同書二二一頁、即ち阿波の部には、「其流程三十一里ありて」に作る、((帝國地名大辭典)) 河渠二一九頁、「流程凡五十餘里」に作る、((大日本地名辭書)) 一二〇四頁、「其源を去る凡五十里にして潮海す」に作る、((大日本地誌)) 第七卷一三六頁、吉野川の全長は約百八十五粁（約四十八里）に達すれども、其の中國内（土佐）に關するは、凡そ七十五粁（約十九里）に過ぎず」に作る、((地理辭典)) 三四〇頁、「流程四十三里、濶四町に達せり」に作る、((日本地誌提要)) 第六册阿波一五頁、「州界より此に至る長二十六里、濶四町、上流土佐に詳かにす」、同書土佐一八頁、「源より州界に至る長凡十五里、濶四十間」に作る。

航路　三好郡より以下二十三四里程、舟筏を泛ぶべく、可航水路延長六十里に及ぶ。

((大日本地名辭書)) 一二〇四頁、「凡舟筏は中流三好郡より之を泛べ、二十三四里程あり、(同書一三四六頁、水源より州界に至る凡十八里、舟を通ぜずと雖、筏を流下することを得とあり) 岩津（阿波郡林村）以東は水勢殊に緩なり」、((高知縣統計書)) 三二頁、通船里程三十町とあり、((内外地誌)) 二〇三頁、「可航水路六十里に及ぶ」に據る、((日本名勝地誌)) 第八編二二一頁、「二十五六里は、舟楫を通ず」に作る。((六十五大川流域誌)) 八六頁、「航路延長六十九里十二町餘」に作る、((大日本地誌)) 第七卷三八頁、「美馬郡半田村附近より以下五十八粁（凡十五里）の間舟運の利甚だ多く、尚ほ其の上流に於ても、木材運搬線として、主要なる脈絡をなし」に作る。

効用　(1)、盆域の面積二百四十方里に及び、良好なる豐域にして、特に有名なる藍は此灌域に産す、(阿波の兩岸は藍田なり)、又此河を往復する河舟、壹千二百二十九隻に達し、搭載量、貳萬九千九百二十八石に達す、本邦有數の有利河道にして、木材其他の貨物此河道に依る、(2)、殊に本川の三角洲たる、德島市附近の平地の如き、本國中人事の活動、最も盛んなる地域を形成せり、(3)、古來、德島の繁榮を助けたる最要素は、此川の海に注ぐ河口にあり、(4)、漁獲年額壹萬圓に上る、四國第一の漁河とす。

其不便なる點を擧ぐれば、夏秋の際往々暴漲して、水害を釀し、且つ幹流の交通要路に當る所にして、架橋の難きに由り、代ふるに渡船を以てせる、河水土砂を流すこと多く、爲めに河口水淺くして砂洲に富み、大船の出入に不便なるは、本流地方の發達上大に不利なる點なりとす。

(1)、((内外地誌)) 二〇三、二〇四、(2)、((大日本地誌)) 第七卷三八頁、(3)、((日本漫遊案内)) 下卷四〇七頁、(4)、((大日本地名辭書)) 一二〇四頁、不便の點、((大日本地誌)) 第七卷三八頁に據る。

土木工費と浸水面積

徳島縣の調査によれば、明治三十四年度に於ける、吉野川幹支三十六條の土木工費は、實に四萬二千二百八十圓以上に上り、三十五年度の浸水面積は、大字百七十三町村に亘りて、被害反別壹萬五千二百八町歩なり。

((徳島縣統計書)) 一六七、一六八、一六九、一八三頁に據る、又た破堤、橋梁の墜落、人畜の死傷、家屋の崩潰流失、浸水の狀況等を、委細に知らんと欲せば、同書の一七四頁より一八三頁に至る、水害の部を參照すべし、猶ほ十ヶ年間の平均數を擧ぐる筈なりしも、上野圖書館には揃本なく、且つ明治三十五年以後のものなきは、遺憾の至りなり。

吉野川幹流

一に芳野川に作る、往古、利根川を、阪東太郎といひ、筑後川を、筑紫二郎といひしに對して、四國三郎と稱せらる、其の流域は、四國、十二郡にして、四國主山脈の畧々全部に亘る、源を土佐國土佐郡本川村大字寺川（標高二千四百二十二尺）なる瓶ヶ森山（舊稱、舊權現山、權現山、伊豫國新居郡に跨がる、標高六千四百四十八尺）の南麓に發し、左岸よりカマヤブ川を容れ、東南流し、本川といふ。

◎カマヤブ川　土佐國土佐郡伊豫峰（伊豫國新居郡に跨がり、瓶ヶ森の東に聳ゆ、標高五千九百七十三尺）と黑森（伊豫國新居郡に跨がり、伊豫峰の東に聳ゆ、標高五千七百三十二尺）の間に發し、南流、本川村大字寺川にて吉野川に入る、流程凡一里。

「廿地形高知圖幅」に據る、「輯製廿高知圖幅」記名なし。

大字越裏門を過ぎ、石鎚山脈の南麓に沿ひ、縱谷をなして、東流し、大字長澤に至り、右岸より大森川を合せ。

◎大森川（別稱　奥水川）　土佐國土佐郡筒城山（伊豫國上浮名、新居の二郡に跨がる）と手宮山（土佐、吾川の二郡及び伊豫國上浮名郡に跨がる、標高六千三尺）の間に發し、東南流して、北に折れ、本川村大字大森を過ぎ、大字長澤に至りて、吉野川に入る、流程凡五里。

「廿地形高知圖幅」、((大日本地誌)) 第七卷一三六頁參取、「輯製廿高知圖幅」に據れば、土佐、吾川の郡界なる水野山（標高三千三

十三尺、「廿地形」に據る）の北に發し、東流して北に折れ、大森にて吉野川に入る、流程凡二里。

大字戸中（標高千八百四十八尺）に至りて、北に轉じ、大字葛原に至りて、左岸より葛原川（カツラハラ）を合せ。

◎葛原川（トツラハラ）　土佐國土佐郡笹ヶ峰（伊豫國新居郡に跨がる、標高五千三百四十六尺）の東方、及び同山と寒風山（伊豫國新居郡に跨がり、笹ヶ峰の西南に聳ゆ、標高五千三百七十二尺）の間に發し、東南流して、本川村大字桑瀬を經、右岸よりナカノ川を入れ、東に折れ、大字葛原に至りて、吉野川に入る、流程凡三里。

「廿地形高知圖幅」、「輯製廿高知圖幅」參取。

○ナカノ川　土佐國土佐郡黒森（伊豫國新居郡に跨がる、標高六千四百三十二尺）の東南に發し、東南流して、本川村大字中の川を經、葛野川に入る、流程凡二里。

「廿地形高知圖幅」に據る、「輯製圖」記名なし。

更に東北に折れ、大字高籔（標高千七百十三尺）を過ぎ、大川村（オホカハ）大字大平附近より再轉して、東に向ひ、大字小松に至りて、左岸より北川を合せ、次で右岸より南川を合せ、川漸く大となる。

●●●小金の瀧は、土佐國土佐郡大川村大字川崎にあり、高さ三十六丈、幅八間、（コガ子ノタキ又ミタキといふ（日本地誌提要））阿波二〇頁に據る、（帝國地名大辭典）瀑布二二、二四頁、サンノ瀑と訓ず、誤りなるべし）、（日本名勝地誌）第八編四三九頁、巨岩の上より直下し、行人は對岸より、僅かに瀑の上半部を望み得べく、實に國中第一の巨瀑なれども、●●土地僻遠にして、其名も亦隨て世に著れず、●●●●鐃手口の瀧（テウシクチ）は、大川村大字井の川村に在り、高さ十丈、幅五間、翠流は一名御法の瀧（ミドリ又はミノリ）又は大樽瀧とも云ひ、同郡森村大字和田にあり、瀑脊に小徑を通じ、行人は其背面より望むを得べく、恰も下野の裏見の瀧の如し、瀑の高さ十丈五尺、幅三間、能知川に注ぎ、下流は吉野川に入る、以上三瀑吉野川に入る。

◎北川　土佐國土佐郡三ツ森（伊豫國宇摩郡に跨がる、標高四千九百六十尺）の西南に發し、東南流して、大川村大字大北川を經、字白石（大北川に屬するか）にて南に折れ、大字小松に至りて、吉野川に入る、流程凡三里。

（（大日本地誌））第七巻一三頁、「廿地形高知圖幅」參取、但し同圖及び「輯製圖」記名なし。

◎南川（ミナ）　土佐國土佐郡稻村山（吾川郡に跨がる、標高四千八百五尺）の東方に發し、東北流して、大川村大字小松と、大字船戸（フナト）の間なる、標高千四十六尺の處に至りて、吉野川に入る、流程凡四里。

「廿地形高知圖幅」に據る、「輯製圖」記名なし。

尚ほ進んで、字百々ヶ谷（船戸に屬するか）近傍より東南に向ひて、土佐、長岡（ナガヲカ）の二郡界を劃し、遂に長岡郡に入り、田井（タヰ）村（標高八百五十八尺）に至りて、右岸より地藏寺（ヂザウジ）川を合せ、吉野（ヨシノ）村大字汗見（アセミ）に至りて、左岸より汗見川を合せ。

◎地藏寺川（ヂザウジ）　土佐國土佐郡工法石山（吾川郡に跨がる、標高凡三千尺）の東方に發し、東北流して、地藏寺村大字地藏寺（標高九百八尺）、森村大字土居を經、長岡郡界にて、右岸よりイセ川を容れ、同郡に入り、田井村に至りて、吉野川に入る、流程凡四里。「廿地形高知圖幅」、「輯製廿高知圖幅」參取。

（（日本地誌提要））第六册土佐一七、一八頁、（（六十五大川流域誌））八七頁、中島村にて吉野川に入るとあり、然れども（（市町村一覽））に中島の名なし、中島は田井村の字となれるか、或は改稱せるものか、後考を待つ。

○イセ川　土佐國土佐郡根來森（長岡郡に跨がる、標高三千五百二十一尺）の北方に發し、土佐、長岡の二郡界を西流して、地藏寺川に入る、流域凡二里。

「廿地形高知圖幅」に據る、「輯製圖」、記名なし。

◎汗見川（アセミ）　（（帝國地名大辭典））河渠二一八頁、綾見川に作る」、土佐國長岡郡クイシ山（伊豫國宇摩郡に跨がる、標高四千八百三十一尺）の西南に發し、南流し、吉野村大字瓜生野（標高八百六十八尺）を過ぎ、大字汗見に至りて、吉野川に入る、流程凡四里。

「廿地形高知圖幅」、「輯製廿高知圖幅」參取。

郡の中央を横斷し、屈曲東北東を指し、東本山村大字川口（カハグチ）（標高七百八十五尺）に至りて、左岸より川口川を合せ、大字穴内（アナイ）（標高六百四十四尺）に至りて、右岸より穴内川を合せ。

◎川口川（カハグチ）　（（大日本地誌））第七卷一三六頁、立川に作り、「廿地形高知圖幅」タヂ川に作る」、土佐國長岡郡笹峰（伊豫國宇摩郡に跨がる、標高三千四百六尺、「廿地形」に據る）の南方に發し、南流し、東本山村大字川口に至りて、吉野川に入る、流程四里。

「輯製廿高知圖幅」及び諸書參取、流程は（（高知縣統計書））に據る。

◎穴内川（アナイ）　土佐國長岡郡の西方なる伊勢川嶺（標高三千二百二十一尺）の東方に發し、南流し、上倉村大字桑ノ川（標高二千二百四尺）にて、屈曲東北東に轉じ、字向田（瓶岩村大字繁藤に屬するか）より北方に折れ、東本山村大字小川（標高九百六十四尺）を過ぎ、大字高須より東北に向ひ、大字穴内に至りて、吉野川に入る、流程凡九里、（約三十四粁）吉野川の支流中、最も大なるものの一なり。

（（大日本地誌））第七卷一三六頁、「廿地形高知圖幅」、「輯製廿高知圖幅」參取、（（帝國地名大辭典））河渠一四頁、「源を郡の中央西部なる、國見山の南麓より發し」に作る、（（大日本地名辭典））一三四七頁、國見峠の西南麓に發し、吉野川に入る、長凡十里に作る。

（（日本名勝地誌））第八編四四六頁、郡の中央瓶岩村に二流の瀑布あり、共に毘沙門瀧と云ふ。其一は字西瀧山に在りて、下流北瀧川（北瀧本川の誤りならん、（（提要））阿波二〇頁に據る）に注ぎ、穴内川に入る、高さ十八丈、幅一間、一は大字瀧本村にあり、高さ八丈二尺、幅三間にして、下流は瀧本川に入る、其順路は、丸龜街道（國道）の北瀧本より、左折して直ちに山に入れば、半里にして第二の毘沙門瀧に達すべし。

西豐永村大字中屋（ニシトヨナガ　ナカヤ）（標高六百六十尺）に至りて、右岸より豐永川（トヨナガ）を合せ。

◎豐永川（トヨナガ）　土佐國長岡郡京柱山（阿波國美馬郡に跨がる、標高四千七百四十二尺）の西方に發し、西南流して、同郡大洞山（香美郡に跨がる、標高凡四十尺）の西より發する一水を、左岸より合せ、西豐永村大字中屋に至りて、吉野川に入る、流程凡三里。

「廿地形高知圖幅」、「輯製廿高知圖幅」、（日本地誌提要）第六册土佐一八頁、（六十五大川流域誌）八七頁參取。

式曰く、以下七川詳ならざれども、（高知縣統計書）三二頁により左に附記して、參考となす、或は同川異名のものならむ、但し同書には、七川の外、立川を揭げあり。

◎森川　土佐國土佐郡地藏寺村に發源し、森村を過ぎ、長岡郡田井村に至りて、吉野川に入る、流程一里六町。

◎瀨戸川　土佐國土佐郡地藏寺村に發源し、森村に至りて、吉野川に入る、流程三里三町。

◎南小川　土佐國長岡郡東本山村に發源し、天坪村を過ぎ、東本山村に至りて、吉野川に入る、流程凡十一里二町（按ずるに二里二町の誤植にあらざるか）

◎樫の川　土佐國長岡郡本山村に發源し、同村にて吉野川に入る、流程二里十五町。

◎栗の木川　土佐國長岡郡本山村に發源し、天坪村に至りて吉野川に入る、流程一里二十町。

◎木能津川　土佐國長岡郡本山村に發源し、同村にて吉野川に入る、流程一里二十四町。

◎行川　土佐國長岡郡本山村に發源し、同村にて吉野川に入る、流程二里十町。

漸次彎曲して、北に向ひ、西豐永村大字大久保に至り、南北に走れる地盤の裂線に沿ひ、急に北に折れて、横谷となり、阿波國に入る、水源より國界迄、凡十九里、沿岸には、山巒近く逼りて、平地極めて少なく、且つ流勢も概して駛きを以て、灌漑の利、漕運の便甚だ少なし、是より一大峽谷をなし、大久保より阿波國三好郡佐馬地村大字白地に至るまで、凡六里二十町（二十六粁）の間、幅狹くして、河床深く、兩岸の絕壁高く聳え、危岩削立して、有名なる峽流をなし、夫の「瀞八町」式、又は「寢覺の床」標式風景を呈せる、大崩壞、小崩壞等の險所を作る、且河床の勾配甚だ急にして、殊に阿波の國境より、三好郡山城谷村字川口に至る間の如きは、凡四里二十町（約十八粁）の間に於て、約二百二十尺（六十七米）の落差（傾斜約二百七十分の一）あるを以て、激流奔湍多く、峽流の光景最も壯絕を見る。

備考　（日本地誌提要）第六册土佐一八頁、「岩原村に至り東北流、阿波に入」とあれども、「廿地形高知圖幅」及び、（大日本地誌）第七卷三六頁に據りて、之を取らず。

●●●●●大厳壁の險　又た大冒險、大步怪に作る、（大日本地名辭書）一二三〇頁、山城谷の南、土佐國豐永鄕の北なる、吉野川の隘峽をオホボケと呼ぶ、山厓壁立し、岸は高くして狹く、井底を流るゝ者に似たり、地相最嶮怪奇絕なり、○地學雜誌云、吉野川は石鎚山の東に發源

し、縦谷を走り大久保に至り、地盤に南北に罅け目あり、川床北に急折する所、即阿波、土佐の國境なり、爰より眞北に轉じ、横谷をなし、古來有名なる大冒危の下を逃り、川幅狹きも、川床深く、大久保より川口に至る五里の間、二百二十尺の直立差あり、勾配甚だ急なれば、激流咆哮、隨所小瀑布を爲す、川口に於て伊豫の別子より下る銅山川と遇ふ、又云、太古紀岩層の地方に、不毛磽瘠の山野なく、又直立險絶の岩巒稀少なるを以て、一般の大則とす、唯往々太古紀岩層地の横谷に於て、險怪を見る、池田村及び大歩怪の間に於ける、吉野川谷の如き是なり、一般に云へば、山形平圓にして、傾斜寛に、無數の不規則に走れる水蝕谷ありて、純角圓錐形の嶺を作る、樹木は通例繁茂せり。

(〈み山路の日記〉) 一〇、一一、一二頁、此白川口といふは、白川といふ川の、吉野川に落つる處にて、ことをわたれば、西宇村なり、かくて吉野川の岸を行く、此道を小歩危(コボケ)といひ、その先を大歩危(オホボケ)といひて、此國の名高き難所なり、今行く道も、もしあやまりて、ふみもはづしなば、日のしたいみにくふかく、あを〳〵と見ゆるふちにおちいらまし、かやうの所おほくて、中々にけしきおもしろし、川の兩岸は、やがて山にて、屯きしに炭がまありて、其けふり、川すぢのなりに、棚引けるが、あだかも大野に見し白雲のごとく、其色こそはことなれ、是もまたけしきをそふるなり。

河水もきしの若葉も炭がまの
煙もひとつみどりなりけり

さて小ぼとけをすぎて、ゆき〳〵て、西宇の本つ村をもうちすぎて、大歩危の口にかゝりぬ、此處に家五六軒ありて、物あきなふ家もあり、この家にやすらひて、おくれて來る人をまちつ、そに大歩危のたむけの下は、一里ばかりの間、舟よりゆかるゝを、今ありあふ三つの舟、一時にいづべければ、あさにのこすべき舟なし、かれ、おくれ來む人は、いとものほしき大ぼけを、かちよりこゆむことを、心ぐるしくれもへばなりけり、おくて、一時あまりまてども〳〵來ず、かく待ち來ずば、すべなしとて、今はいそぎて、五六丁ゆきて、川ばたに下りて、二つの舟にのりて、一つは後の人のために、しひて殘せり、さて大歩けの間は、すべて岩山左右に立ちならびて、きりきしたかく、川はゞせまく、世にもたぐひなきけしきなり、かつ、このごろは、木々若葉の、みどりそひゆくもなかなれば、ことに見所おほし、岸の岩の形、高き、低き、大きく、小き、廣き、狹き、たゞしき、ゆがめる、あるは、あやしきものなどのごときもあり まことにさまざまにて、いひつくすべくもあらず、港めきたるところの、岩間に舟をよせて、打見るに、谷の若葉のみどりの間に、瀧の瀨の水、いと白くたゞ〳〵に見ゆるなど、ことにめづらし。

夏山の青葉のころもいまほとて
いそしくもぬふか瀧の白いと

かくなどめでつゝ、酒をくみて、たのしむあり、茶をにてひるけするもあり、かゝる間に、おくれし人々かの舟にておひつきて、ひとつになりぬ、おのれはいにし年、土佐の國よりこのくにへくとて、こゝを、舟より下りしことあり、そのかみは、紅葉のさかりなりしかど、いかでけふのおもしろくたのしきにしかむ。

ほけやまや、みれどもあかぬわかみどり
秋のけしきは物の數かは

岩のくまをこぎたみゆけば、來し方行へもわかぬ屏風の中のやうなる所あり。

うなばらの波路の月に舟や似て
岩よりいづるいはにいるらむ

さるほど、むかし、貫之の朝臣が、土佐の國よりかへる波路にて、月を見て、そのいにしへの仲麿がことをおもひあはせられて、波よりいでゝ波にこそいれと、よまれたりしことを今もおもいでゝのすさびなれども、いまにもむかしにも似るべくや。

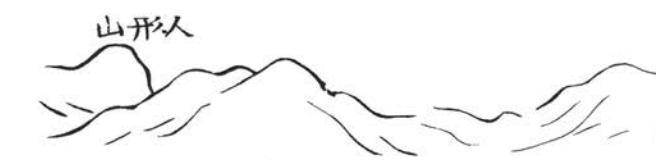
こゝに又しるしつべきは、吉野川は世に四國三郎とかいひて、いと大きく、かの川下なる岩津といふあたりにては、洪水のときは、常より二丈ばかりも、水かさ增すとかきくなるを、此わたりは、とりわけ川はゞ、いみじく狹くしあれば、さる洪水の時など、いかさまにありなんか、さるほどに、上名村のむら長、舟にてむかひに來て、これもひとつになれり、さて瀨を三つばかりは、舟をあがりて、岩をつたひ、舟は引かせてのぼりつゝゆきて、舟をあがりて、さてまた十丁あまりゆきて、今宵の宿なる下名の、大黑清といふ人の家につきぬ。

本川の奇溪　寺石杜山

吉野川は源を土、豫の國境、瓶ヶ森に發し、曲折回流して、阿波の海に注ぐ、其上流、極奥十里の間を、土佐郡本川の谷となす、〈式曰く(大日本地名辭書)一三四五頁、「土佐國は其嶺陰(四國中帶山脈の北)に、一大山谷あり、即吉野川の上流にして、東西二十里、南北廣部七里、狹部二里許、空山絶壑、曠遠の境なり、本來險阻の地なれば、人煙稀少にして、和名抄に鄕名を缺く、然れども、瀨戸内方面より、土佐に赴くは、此山谷を横斷するを捷路とするを以て、延曆十六年山路を開き、吾椅、丹川の二驛を置き、伊豫宇摩郡山背驛に聯絡せしむ、爾後、長岡郡の關境とす、然れど、曠遠の山谷なれば、其西部を土佐郡に分隸せしめ、今其七村は、長岡、四村は土佐に管治す、」とあり〉、蓋吉野川は、其全長四十餘里にして、本川の谷に至れば、已に河口より、三十里を溯る、地勢の幽邃にして、凡ならざる、素より其所なり。

試に其溪谷の勝概を記さんに、全體の山脈、深山の事として、峯然高く聳ゆて、翠壁天を支ゆる如きは、いふまでもなく、其下方、溪谷の千趣萬態、一種の畫趣を開けるは、捨てがたき景色なり、先其兩山、攢蹤左右に相峙つ、下溪、流峽勢に從ひ、右に開き、左に通じ、紆餘曲折、變化極なし、其峽勢益逼まり、溪流愈激するに至れば、奇石縱横、水面に亂立し、奇魚の浮が如く、猛獸の走るが如く、千變萬化、愈出で愈妙なり、忽にして大石壘の如く、水路を遮斷し、高三四尺の懸瀑、鏘然として其上にかゝり、紛沫四散、雪花を噴するあり、忽にして流水停蓄、藍を湛すが如く、沿岸の明砂雪の如く、皎潔に水光と相映し、遊魚の影、一々數ふべきあり、若夫れ晩春、又初夏の候、之を過ぐれば、櫻雲黯淡として、高嶺にかゝり、或は紅白の杜鵑花、一時に斷崖に亂開し、風致いふべからず、其景色の幽邃の中、自然に閒澹の雅趣を含むは、殆ど人工もて、故らに其奇を集めたる如く、深山路自然の景色とは、受取れぬ妙致あり。

已嘗て京都に遊び、金、銀閣寺、南禪寺等の名刹庭園を賞せしに、其足利氏時代一代の名匠が、手に成れる泉石といへるものゝ、平々凡



凡たる盆景的なるに驚き、痛く瀟想の感に堪へざることありき、蓋其泉石排列の有樣を見るに、或は奇形の岩石を、點々水邊に竝列し、軟砂を其間にまきて、自然の濱に擬し、或は丈低き樹木を扶疎に、彼方此方と植ゑ、高三尺にも足らぬ小瀑を、石間に懸け、自然の谷に擬し、其外全般の景致の取方、如何にも澄泊にして、天然の趣を缺き、山國に生れたるものをして、之を見せしむれば、其不自然を笑はしむるを免れざるを思ふて、何故にかゝる庭園が、本邦人工の泉石に於て、勝名を擅にするやを疑ひ居りたりき。然るに其後、本川の山中を過ぐるに及びて、始めて悟りぬ、彼の巖岩鑿谿、急瀨激する奇峭的山水は、實に人里近き山水の常景なるも、人界を離る二三十里の深山の、又深山に來れば、其景色は全く盆景的にして、京都諸寺の庭園と、配置少しも異ならず、岩は必ず大ならず、樹は必ず密ならず、山は必ず逼らず、瀑は必ず高からず、其閑靜にして、長閑なる有樣は、實に狩野家一流の畫本なり、げにも古の名匠が、泉石の粉本は、かゝる極奥の山水にありしなと、獨り點頭して、轉た其用意の深きに感じて、我ながら批評眼の淺かりしに愧き、偖も泉石又粉畫に心ある人は、一たびこゝに遊びて、化工の妙術を探り給へかし、（土佐古跡巡遊錄）讀書餘課二九、三〇、三一頁。

土佐より來りたる吉野川は、美馬（ミマ）、三好（ミヨシ）の二郡界を截り、三好郡三名村（サンミヤウ）大字下名（シモミヤウ）（標高六百二十七尺）を過ぎ、大字西宇にて、美馬郡を去り、山城谷村（ヤマシロダニ）字川口（標高三百六十尺）に至りて、左岸より伊豫（イヨ）川を容れ、初めて舟筏を泛ぶ、德島を距る二十三里なり。

備考（（日本地誌提要））第六册阿波一四頁、（（六十五大川流域誌））八七頁、「末真に至り伊豫川に會し」とあれども、「廿地形高知圖幅」（（大日本地誌））第七卷三六頁に據りて、之を取らず、且つ末真の名は「廿地形」、（（市町村一覽））に見ゆ、或は川口と改稱せるものか、後考を待つ。

●●●●
千代の瀑（チヨ）（シラカハ）阿波國三好郡三名村大字西宇にあり、二層に落つ、上層、高さ十丈、下層、八丈、幅各三間、●●●日昏瀑（ヒクラシ）同郡山城谷村字白川にあり、高さ九丈、幅四間、●●●有宮瀑（アリミヤ）同所にあり、高さ七丈、幅三間、●●●鶯年瀑（ホウチン）同村字光兼（ミツカネ）（シモカハ）にあり、高さ十八丈、幅三尺、●●●轟の瀑（トヤロキ）同村字下川にあり、四層に落つ、一の瀑、高さ三丈五尺、二の瀑、四丈、三の瀑、二丈、四の瀑、一丈八尺、幅各三間、以上五瀑、吉野川に入る。

（（日本地誌提要））阿波一八頁に據る（（日本名勝地誌））第八編二四頁、千代の瀑を三名村大字下名にありと記せり、誤記なりとす。

◎伊豫（イヨ）川　（別稱）銅山川　山城川　金砂川）伊豫國宇摩郡足谷山（土佐郡に跨がる、標高六千六尺）の北方に發し、石鎚山脈と其支脈なる、法皇山脈との間に縱谷をなし、別子銅山地方を、東流し銅山川といふ、字筏津（標高二千百九尺、別子山村に屬するか）を經、東北東に流れ、字葛川（標高千二百七十一尺、富鄕村に屬するか）に至りて、川は其の南北を劃する、兩山脈の趨向に從ひ、東北に轉じ、富鄕村大字寒川山（標高九百七十四尺）に至りて、右岸よりガチアヒ川を容れ、金砂村大字平野山附近より、再び東北東に向ひ、大字小川山（標高七百七十六尺）に至りて、右岸より馬立川を容れ、數多の小彎曲をなし、新立村大字新宮（標高七百八十五尺）に至りて、右岸より堂成川を容れ、阿波國に入り、伊豫川と稱せられ、三好郡山城谷村字川口に至りて、吉野川に會す、其の山城谷を流るゝを以て、山城川の名あり、流程約十二里二十町、（凡五十粁）、濶三十間、水源より國界まで、凡そ九里二十六町、（約四十二粁）、國界より川口まで、凡二里、（八粁）、其の流るゝ所、山高く谷急に、沿岸の地、平地に乏しく、驛邑の大なるものは甚だ少

なし、上流に別子銅山あるがために、溪魚鑛毒に害滅せらる、又砂金を拾ふことを得るといふ、吉野川系第一の大支流なり。

（（大日本地誌））第七卷三九、八八頁、「廿地形高知圖幅」參取、川濯は、（（日本地誌提要））第六册伊豫一七頁、（（六十五大川流域誌））八八頁に據る、二書、伊豫川の水源を別子銅山に作れども、之を取らず、（（流域誌））銅山川の河線を十里餘となせるは、（（提要））の「州界に至る長凡十里餘」とあるより誤れるなるべし、（（愛媛縣統計書））明治三十九年一七頁、十六里十六町に作り、（（德島縣統計書））二六頁、三里二十町に作る。

（（大日本地名辭書））一二八三頁、此川一名金砂川と云ひ、山に鑛石の賓藏ありて、砂金を拾ふべし、殊に水源別子山の採銅最盛大なり、此溪流東行十一里にして、阿波國三好郡に入り、吉野川に注ぐ、溪魚は採冶の藥毒のために害滅せらる、同書一二三〇頁、山城谷の結晶片岩地を貫通する溪流の畔に、砂金を拾集すべし、土砂含金の量、凡四百萬分の六にして、其粒の大なる者は、往々二匁に上る、地質學に於て、之を太古元の砂金床、并に原生礦床の產金とは曰ふ也、（地學雜誌）。

（（みゝ山路の日記））五、六頁、川口より山道をのぼりて、山の中ほらを、横づたひに、吉野川に落つるなる伊豫川を、右に見つゝゆくに、朝ぎりやう〳〵ほれて、けしきいとよろし、一里ばかりゆくに、あび川ばしといふ橋あり、是は相川といふ所にて、いにしへ天正のころ、今の池田になりし大西の一族が、土佐の長曾我部元親が軍を、防ぎたりし跡なりとかや、橋は伊豫川の兩さしの、岩ほのいであひて、幅のいと狹きところに渡せるなり、長さ五間ばかりもあらむか、岩ほの、いとたゞろ〳〵しきまでにつきあてる、川よどの水のさかまくさま、又あたりの山々のけしきなど、ゐもいはずをかし、橋を渡りて、よき所にやすらひて、ながむれどもあかず。

あやふきは心にかけずわたりけり
山なす岩のあび川のはし

○小川　伊豫國宇摩郡新玄村に發源し、同村にて銅山川に入る、流程三里二町。

（（愛媛縣統計書））明治三十九年一七頁に據る。

○オチアイ川　伊豫國宇摩郡黑藏山（土佐國長岡郡に跨がる、標高五千二百四十七尺）の西方に發し、北流して、富郷村大字寒川山に至りて、銅山川に入る、流程凡二里。

「廿地形高知圖幅」に據る、「輯製圖」記名なし

○馬立川　伊豫國宇摩郡黑藏山の東方に發し、東北流して、金砂村大字小川山に至りて、銅山川に入る、流程凡三里。

「輯製廿高知圖幅」に據る、「廿地形圖」記名なし。

○堂成川　伊豫國宇摩郡の東南方なる三足山（標高三千五百五十七尺）と、藤長山（三足山の西南に聳ゆ、土佐國長岡郡に跨がる、標高四千四百四十二尺）との間、及び笹峰、（土佐國長岡郡に跨がる、標高三千四百六尺）、三傍示山（笹峰の東方に聳ゆ、土佐國長岡郡、阿波國三好郡に跨がる、標高三千六百八十三尺）より發する諸水、新立村大字馬立にて合し、北流して、大字新宮に至りて、銅山川に入る、流程凡三里。

「輯製廿高知圖幅」、「廿地形高知圖幅」參取、但し「廿地形」記名なし。

●●清瀑（キヨ）伊豫國宇摩郡新立村大字馬立なる、仙龍寺の奥にあり、銅山川に入る、高さ十二丈、幅一間四尺。（日本地誌提要）伊豫一九頁に據る。

●●●嘉見瀑（カミ）阿波國三好郡山城谷村字相川にあり、高さ九丈、幅十五間、平時水少なし、●●●音羽瀑（オトハ）同所字岩戸にあり、高さ十丈八尺、幅一間三尺、●●●弟瀑（アカ）同所字赤谷にあり、高さ九丈、幅三間、以上三瀑、伊豫川に入る。（日本地誌提要）阿波一八頁に據る。

東流し、三繩（ミナハ）村大字大利に至りて、右岸より松尾（マツヲ）川を容れ、斯くて川は倍々其水量を増し。

備考（日本地誌提要）第六册阿波一四、一五頁、（六十五大川流域誌）八七頁、三繩村大字川崎にて、松尾川を容れとあれども、（大日本地誌）第六卷三六頁に據りて、之を取らず、「廿地形高知圖幅」を按ずるに、川崎と大利の間にて、吉野川に入る。

◎松尾（マツヲ）川（別稱）祖谷川、祖谷山川（帝國地名大辭典）河渠一九〇頁、祖母川に作る）阿波國美馬郡劍山（麻殖、那賀、海部の三郡に跨がり、四國、中國、九州第一の高峰なり、標高七千三百九十九尺）の西麓に發し、始めは阿波、土佐の界なる劍山山脈の北麓に、縱谷を作りて、東祖谷山村字落合、（標高千七百四十六尺）、字參生土（標高千六百一尺）を經て、西に流るれども、西祖谷村（標高四百九尺）に至りて、急に北に折れ、吉野川横谷と並びて、石鎚山脈を横斷する大峽谷をなし、三好郡に入り、三繩村大字松尾に至りて、右岸より小祖谷川を容れ、松尾川と稱し、大字大利に至りて、吉野川に入る、流程約十一里、（凡そ四十二粁）、其西祖谷山村より以下、狹谷をなせる所は、凡そ三里二十町、（約十四粁）にして、其兩岸には天神山、（東岸にあり、美馬郡に屬す、標高三千三百八十三尺）中津山、（東岸にあり、美馬、三好の二郡に跨がる、標高四千八百五十一尺）、國見山（西岸にあり、美馬、三好の二郡に跨がる、標高四千六百七十九尺）等の峻嶽急に聳ゆ、岩崖削立して、奇景を呈せることは、吉野川横谷と相似たり、吉野川支流中、第三の長流なり。（大日本地誌）第六卷三六、三九頁、「廿地形高知圖幅」、「四十形西部」參取、（德島縣統計書）二七頁、三十里に作る、「輯製圖」記名あり。

◎小祖谷川　阿波國美馬郡の東北方なる黑笠山（標高五千九百四十三尺）の西方に發し、字寛の久保（何村に屬するを知らず、標高三千四百十三尺）を經、西南流し、字日原にて西北に轉じ、三好郡に入り、三繩村大字松尾に至りて、祖谷川に入る、流程五里。「廿地形高地圖幅」、（帝國地名大辭典）河渠一九〇頁參取、同書小祖母川に作る、但し「廿地形」、「輯製廿」記名なし、流程は（德島縣統計書）二七頁に據る。

●●●●●祖谷の憂橋（日本名勝地誌）第八編二四〇、二四一、二四二頁、一字村より小島峠の絶嶮を越ゆて、祖谷村に入る、此の村は、山嶽重なり聯る、祖谷山の間を流るゝ祖谷川の左右に、東祖谷山村、西祖谷山村と分かれ、戸數九百戸ばかりある、深山の一部落にして、祖谷川は、劍山の麓なる那古呂谷に發し、遙迢として西に奔流して、三好郡に入り、芳野川に合しけるにて、此の渓流の兩崖、削りたらん如く峙てる所、白口蔓といふを編みて、橋に作りて、架け渡すもの各所にありて、其の最も大なるを善德橋とす、幅四尺、長さ三十三間にして、渓流の水上よりの高さ、十八丈も上にあるべし、其が製作は、長さ五尺の丸木を二つ割にして横となし、蔓を幾條も糾ひて經となし、布を織れる如くに編みて、編み目を六五寸四方に明け、風を通はせて、橋の搖れざらん樣にし、橋の左右には、同じ蔓

を糾ひて欄干を作り、兩崖の突出したる所に架け渡し、樹木の根に縫り着け、其が樹梢より蜘蛛網とて、蜘蛛の巣の如くに幾條ともなく、蔓を橋に結び着けて釣りぬ、神の作りたる歟、鬼の架けたらん歟と想ふる形狀に、看るから心駭き膽破れて、やなら蹈み渡れば、編み目より十八丈も深き下の急湍を瞰下し、空中を蹈むごときに、橋又左右に搖らめくから、傾き覆らん驚さ、氣湯し、脚顫へて、進退こゝに谷まるべし、他鄉の者は、得渡り難きも、土人は物を到ひ、小歌うたひて、平地を行くに異なるとなし、この橋は三年に一回架け換ふるといふ、こゝより數町にして、西祖谷山村の閑定といふ所の、岩石峭立せる絶頂より、●●●●琵琶の流は墜落しぬ、高さ十二間、八間は丈の誤りならん、(提要)阿波一七頁、丈に作るを以てなり、(帝國地名辭典)瀑布四八頁、「江原村大字曾江山にあり、祖谷川に入る」に作る、杜撰といふべし)、幅三間にして、祖谷川に注げるが、その橋より仰ぎ、遙に見ゆるなり、(下略)

羅橋の記　堤新甫

祖谷山は美馬郡に在る也、西南は土州に接す、辟陋の深山にして、土俗朴實、太古之風有る也、雖新以來、教化益々洽し、小學校の設けあり、皷篋の式を知る、讀書の聲、窮谷を動かす、民皆厚喜あり、是に於て、我が門生某、教員となり、彼に祗役し、歸省の時を以て我を訪ふ、彼の地の形狀を話す、凡そ是山西東十餘里、南北七里、祖谷川中央を貫通し、兩流して川崎に下り、吉の川に入る、左右絶崖急湍、溪身怪石、偃蹇角列、溪風之便なし、又た揭跳固より難し、是を以て、土人相議し、德義に於て名づく、兩岸突出の狹に因り、羅葛を編み、溪上に架し、兩端を左右の樹根に繫ぎ、往來を通ず、其長さ三十餘間、神施鬼設の如き也、冬雪に方り、雪の壓するを恐れて、羅を纏ふ尤も疎、是を以て、渉人密に墮落に備ひ、杖を腰間に横たふ、慣習なき者は、忽ち心驚き、膽破れ、空を蹈むが如く、怖れて進む能はず、則ち左右搖動して、鞦韆の如く、定まる能はず、而して傾覆を恐ひ、匍匐して羅を提へ、俯して急湍を視れば、噴白數百尺の下に在り、怔忪氣沮み、進退是れ谷まり、哀を樵夫に乞ひ、携誘の扶を受け、危迫の難を逃かる、其人面容異常、剗子の壙を出づるに似たり、是れ畏懼之致す所乎、其他便に因つて、短橋を施す、所々に在り焉、世俗歌あり、祖谷の羅橋、君と則ち渡る勿、落ちて而して死すれば、則諸共勿、拔歌を以て、其危險を知る、余只聞く所に遵ひ、未だ剋彈せざる也、(原漢文)(阿波國名勝記)五牧。

蔓橋

見るからにわたるもいやのかづらばし　涙花桃苗
身もほいかゝる心地こそすれ

雲ふんでたどらん花のかづらばし　阿波鳴雄
ときは木をはひしかづらの橋なれや　山田邦彦
人も命をかけてわたれる

琵琶の瀧

邊りにはたへず平家の物がたり　　涙花桃苗
いされもしろき琵琶の瀧つせ
いや高く聞ゆる瀧の琵琶の音の　　阿波春芳
ほろく雨にも水まさりてや
名月にさわらぬ音や琵琶の瀧　　涙花蟻兄
平てふ臣の末の子住む山の　　山田邦彥
いや音高しびはの瀧つ瀬

〔狀句同書に據る、但し山田邦彥のものは（〈み山路の日記〉二〇頁に據る）〕

●●●●廊谷の橋　祖谷の獨木橋とも名づけ、ホケノカケハシともいへり、（阿波名所圖會）上卷、美馬郡祖谷にあり、柴の橋より、小ホケ、大ホケとて、谷へさし出でたる岩の細き路を登りすぐれば、其上に、一木の四方につくり、幅三尺、長十間餘なる橋をかけたり、此橋のもとより下を見れば、鵞の舞ふ事、雀のごとくに見ゆ、されば他郷の人は、怖れて渡り得ず、土人これをわたるに、平道の如し。

こゝろなき雲こそわたれ鳥すらも　　橋大僧都高ね
いゆきはぐくる峰のかけ橋

北流し、佐馬地村大字白地に至りて、西方、阿波、伊豫の界より來る縱谷、左岸より佐野川を容る。

●●●吳石瀑（グレイシ）阿波國三好郡佐馬地大字白地字井の久保にあり、高さ九丈四尺、幅五間、沖●●瀑（ツシ）同村大字白地字符甲部と大字馬路の間にあり、高さ六丈三尺、幅五間一尺。

（日本地誌提要）阿波一八頁に據る。

◎佐野川　阿波國三好郡曼陀ヶ峰（讃岐國三豐郡、伊豫國宇摩郡に跨がる、標高千六百四十三尺）の東方に發し、縱谷をなし、佐馬地村大字馬路にて、左岸よりフカ谷を合せ、大字白地に至りて、吉野川に入る、流程凡三里二十町。

（德島縣統計書）二六頁、「地質廿丸龜圖幅」、「輯製廿高知圖幅」參取。

○フカ谷　阿波國三好郡雲邊寺山（別稱、雲遍山、佐野山、讃岐國三豐郡に跨がる、標高二千九百六十尺）の南方に發し、東南流して、佐馬地村大字馬路に至りて、佐野川に入る、流程凡一里。

「地質廿丸龜圖幅」に據る、「輯製廿丸龜圖幅」記名なし。

爰に於て川は、讃岐山脈の山脚に衝突し、侵蝕作用を逞くし、西岸には、侵蝕性段丘を遺し、又少しく北に彎曲し、やがて東に折れ、愈々其大さを增し、讃岐山脈と、石鎚山脈との間に横たはれる、一大縱谷の中を流れ、走路逶迤、幾多の小屈曲をなすも、其の走路の大勢は、縱谷の軸線に沿ひ、東微北を指し、遂に下流に於ける三角洲平野に及び、爰に初めて幾條の

分流に岐かれ、紀伊水道に朝せり、白地以下川は、南北の兩山脈より發する、多くの支流を合すれども、其の多くは急流にして、降雨の際には、土砂を流すこと夥だしく、爲めに本流と合する所には、砂礫より成る冲積的扇狀地を作り、廣さ荒蕪地を形成し、且つ本流の沿岸及び河底にも、數多の廣さ砂礫洲を生じ、川は幾多の分流を派し、或は分れ、或は合し、水路爲めに錯雜を極めたり、池田、辻（井川村大字東井川）を經て、美馬郡に入り、郡の北部を貫き、半田村大字半田（標高二百十一尺）を過ぎ、貞光村大字貞光（標高百五十五尺）に至りて、右岸より貞光川を容れ。

●●●來光瀑（ライクワウ）阿波國三好郡井内谷村字東井内谷大窪にあり、二層に落つ、上層、高さ十八丈、幅一間、下層、高さ七丈二尺、幅八間、●●●神通瀑（ジンツウ）同郡加茂村にあり、高さ九丈、幅三間、●●●井口瀑（井ノクチ）同郡三庄村大字毛田字大藤にあり、高さ十二丈、幅二間、●●●龍頭瀑（リウヅ）同郡三野村大字加茂野宮にあり、二瀑あり、相距る凡そ三十間、一の瀑、高さ四丈五尺、幅六間、二の瀑、高さ十三丈、幅一間、同村滝谷川原より、地中を潛流し、大字清水界に至り、涌出して、吉野川に入る、以上四瀑吉野川に入る。

（日本地誌提要）第六册阿波一七、一八頁に據る、（日本名勝地誌）第八編二四四頁、來光瀑を井川村大字東井川にありとなせり、誤謬なり。

◎貞光川（別稱一宇川）阿波國美馬郡劍山の北側、大島嶺（標高四千四百六尺）の東方に發し、北流して、一宇川といふ、一宇村大字一宇山口（標高八百八十八尺）を經、貞光村に來りて、貞光川と稱し、吉野川に入る、流程凡五里（約二十粁）、幹流より凡一里（約四粁）の間、貞光、宮平の附近、扁舟を通すべし。

（大日本地誌）第七卷三九、四〇頁、「輯製廿劍山、德島圖幅」、「四十形西部」、（帝國地名大辭典）河渠二六、九三頁（德島縣統計書）二七頁參取、但し同書は流程六里とせり。

（大日本地名辭書）一二二六頁、一宇川は北流、端山、貞光の二村を經て、吉野川に入る、長七里、夏日、劍山詣の人々、此溪に沿ふて、上下するもの多し、一宇川には●●●●●●鳴瀧及び土釜（日本名勝地誌）第八編二四〇頁、貞光川に沿ひて、山路に分け入れば、一宇村に一宇山聳ゑ立ちて、この山の獵飼（端山村大字西端山に屬す）といふ所に、高さ三十六丈、幅十二間の瀑布、三段になり、岩石に激して、百雷の墜つる如きもの、是れを鳴瀧といふ、此の國にて第二の瀑布とす、貞光川に注ぎ、芳野川に入る、こゝより南に數百歩距れて、土釜と喚ぶ所あり、一宇川の溪流こゝに至り、倒に懸かり、溪流岩間を穿ち窪めて、形釜の如くになりたる碧潭、大小三個ありて、渦を卷き、白波を飛ばせて、流れ出づる形狀、觀る者をして、漫に毛骨を寒からしむ、よりて土釜を又釜に作る、釜中の水噴騰するに似たるを以てなり。

鳴瀧　　山田邦彦

きくさへもめづらしきかなわかれても
すゑはひとつになるたきのおと

なるたきややへの岩まを一すちに
つらぬく音の潔きかな　　同人

（歌二首（（み山路の日記））に據る）二八頁。

（（み山路の日記））二九頁、やど（半平山）をたちて、一里ほど穴吹川を傳ひ下れば、谷川よりおつる瀧あり、●●●●●紅葉のたきといふ、しばしやすらひて見るに、

青葉のひまより、かつ〳〵みゆ。

名にしたふ紅葉のたきも夏なれば

青葉のかげに音をこそきけ。

鳴瀑の記

堤新甫

余往日三四の諸生を携へ、迢遙杖を曳きて之を訪ふ、數村を經て、已に真光に到る、街心より轉角すること數百武、進みて山路に就く、絶險尤も甚だし、力を用ひて漸く羅飼に登る、小店あり、醪酒を鬻ぐ、各自一瓢を備ふると雖ども、前路の遠きを計り、後興の貯に充て、先づ酒を喚んで數杯を傾く、其味醰酷、其口に嬾ぶる無しと雖ども、少しく其勞を釋く、相ひ共に奮ひ登る、荒逕半里、遊止する所なし、左右松林鬱茂、榛莽蔭密、唯だ雲煙有無の際に於て、礙々の聲を洩す、衆皆な其瀑の近きを覺ゆ、快走先を爭そふて而して進む、到る所尤も深し、因つて以爲らく、好學の者、名に汲々し、循々勤めず、而して其實を得るを貪ぼるは、此行に似たる也、其勞に忍びず、而して其道を極めず、中途將さに廢せんとする也、相ひ共に告戒し、緩歩時を移す、已に瀑の勝を得、聲視形の存する所の者を認む、水盤頭に挂り、灑々汎濺、其高さ數十丈、迸沫數十歩を隔てゝ、人の袂を沾ほす、中貫して通路あり、洑水數仞、其下倒さまに天漢の落つるが如し、其泓其響、雷の吼ゆるが如し矣、嘗つて聞く、雨後水漲ぎるに値へば、則ち其象を變じ、瀑口より巖を離れて直下すること數十丈、其路を踰へて一條の白龍となりて泓淵に躍る、其聲天地の崩裂するが如し、是を以て、其名を得たる也、慣習の土人、苟くも驚悸ぜず、往來常の如し、恰も二荒裏見の瀑に似たり、只水煙蒼茫として洞天に在るが如し、玆瀑の怪特變幻ほ、水の多少に因りて、妍殘の觀あり、徘徊探討し、奇所を求めて、巖上に座し、而して醉唫暑を移す、又た土釜を訪ふ、屈曲危路、杖を進む、數百武を隔てゝ、洶湧の響き耳底に徹ふ、已に其上に到り、古樹に扳して、其淵を瞰視すれば、則ち四面全く石、依稀として釜の如し、水勢激越、沸騰烹るが如し、電閃盪擊、其涯を嚼む、澎湃廣濤、其際を極むる能はず、只足下の震激を怪しむ耳、其故如何、土着の樵商、時々玆の上流より、樵木を浮べ、流して此に到る、倘し河伯の咎に値へば、則ち無數の樵木、釜底に淪沒し、數日を歷ると雖ども、其一木をも視る能はず、是に於て其主、齋戒盥漱、隙若々、清酌を奠し、樽の大小を問はず、之を崇め、其枘を密にし、新響して其樽を投擲すること三回、而して水底に沉むるや否や、倏然として空樽浮び出づ、其枘奮の如し、蹶ち沉木絡繹として出で流る、此れ其一奇也、又た古より此に遊びて、其狀を認め、而して將さに之を圖せんとする者は、其躬を襲する尠なからず矣、世人の知る所也、相ひ傳ふ國公、此に臨覽すれば、則ち溪頭に樓館を設け、其上に座し、俯して之を視れば、忽ち麵麵全體を現じて拜服す、眤近の諸士、公の袖下より之を瞰す、其躬を匿す能はずと、豈に大怪事ならずや、嗚呼玆の絶奇、全國中に於て媲する所の物なき也、此に到りて之を視る、盡くるなき感あり、盡くるなきの懼れあり、若し一歩の過ちあれば、既に黄泉の鬼とならむ、人々告戒し、子孫をして視せしめずして可也、全く巖牆に立つの類にあらず、余偶々誤つて訪ふ爲、只抑畏戰慄して、苟くも興を遣るの樂しみなし、切に懲ちなきを思ふ、而して共に習ひ訓告して、歸乎歸乎の歎あり、更に觴を引くの遊を忘れ、只暮色蒼然の至るを愁ひ、其勝概を究むる能はず、憮然として興を敗り、共に便道を取り、三皷して吾が盧に入る也、（原漢文）（（阿波國名勝記））六牧。

更に脇町大字脇町（標高百三十五尺）の南を流れ、穴吹村大字穴吹（標高百二十二尺）に至り、右岸より穴吹川を容れ、江原村大字拜原に至りて、左岸より拜原川を容れ、岩津の急灘となり、美馬郡に別れ、阿波、麻殖の二郡を界す。

◎穴吹川　阿波國麻殖郡劍山の東北に發する横谷にして、始めは東北に流れ、木屋平村大字三ツ木に至り、急に西に折れ、暫く縱谷をなせども、再び北北東に轉じ、日山村大字東日山字知野（標高二百五十四尺）を過ぎ、穴吹村大字穴吹に至りて、吉野川に入る、流程凡そ八里二十町、（約三十四粁）。

（大日本地誌）第七卷四〇頁、「廿地形德島圖幅」、「輯製廿德島、劍山圖幅」、「四十形西部」參取、（德島縣統計書）二六頁、流程を十里に作る。

◎拜原川　讃岐國大川郡の西南隅なる矢筈山（標高二千五百六十四尺）の西方より發し、讃岐、阿波の國境を、縱谷をなして、西に流れ、美馬郡に入り、南流し、右岸よりトチ谷を容れ、字落合（江原村大字曾江山に屬するか、標高三百八十三尺）にて、讃岐國木田郡の東南隅より發する一水を合せ、大字拜原に至りて、吉野川に入る、流程凡五里、其幅廣けれども、常に流水を見ず。

「廿地形德島圖幅」、（帝國地名大辭典）河渠一六六頁參取、「輯製圖」記名なし。

△トチ谷　阿波國美馬郡の東北方、讃岐國界より發し、南流して拜原川に入る、流程凡そ一里弱。

「廿地形德島圖幅」に據る、「輯製圖」記名なし。

●●●●●岩津の急灘（（大日本地名辭書）一二二四頁、吉野川の急灘なり、林村（阿波郡）の前に在り、怪岩錯峙し、其奇異なる者、十有三あり、灘の兩崖、峻峰相對して門を成す、南は高越山にして、北を三頭山と爲す、三頭は林村に屬す、岩津より吉野川の委口、別宮浦まで凡十里。

川は益々逶迤東走して、伊澤村大字伊澤（阿波郡に屬す、標高八十九尺）を過ぎ、右岸麻殖郡より、川田山川を容れ、左岸阿波郡より、日開谷川を容れ、分流の離合愈々多く、幾多の砂洲を其間に挾み、麻殖郡桑川村大字川島町、（標高百七十五尺）鳴島村大字鳴島（標高七十三尺）を右にして、阿波郡を離れ、板野、麻殖の郡界をなし、名西郡に入り、左岸より宮河内川を容れ、遂に名西、名東の郡界に至りて、二大分流となる。

◎川田山川　阿波國麻殖郡高越山（別稱、衣笠山、鷹尼琛山、阿波富士、美馬郡に跨がる、標高三千七百五尺）の東南に發し、北流し、中枝村大字別子山（標高五百五十一尺）、字川東（川田村に屬するか、標高百六尺）の附近より、東北に折れ、山瀨村大字山崎と、大字瀨詰の間に至りて、吉野川に入る、流程凡そ五里。

（大日本地誌）第七卷三七頁、「廿地形德島圖幅」、「四十形西部」、「輯製廿德島圖幅」參取、但し三圖記名なし。

◎日開谷川　讃岐國大川郡矢筈山（拜原川參照）の東方に發し、阿波の國界を、縱谷をなして、西に流れ、阿波郡に入り、大俣村大字大影（標高七百五十九尺）より西流し、大字犬の墓に至り、左岸よりヒガノヒガイ谷、ヤナギ谷の二水を合せ、大字上喜來、（標高二百五十四尺）、市香村大字市場町（標高百二十九尺）を經、勝久村大字勝命に至りて、吉野川に入る、流程凡そ五里。

「廿地形德島圖幅」、（帝國地名大辭典）河渠一七四頁に據る、「輯製圖」記名なし。

△ヒガノヒガイ谷　阿波國阿波郡登尾山（讃岐國大川郡に跨がる、標高凡二千尺）の東南に發し、西南流して、大俣村大字犬の墓に至りて、日開谷川に入

る、流程凡そ二里。

「廿地形德島圖幅」に據る、「輯製圖」記名なし。

△ヤナギ谷　阿波國阿波郡の東北の山中より發し、西流し、大俣村大字犬の墓に至りて、日開谷川に入る、流程凡そ一里弱。

「廿地形德島圖幅」に據る、「輯製圖」記名なし。

◎宮河内川　阿波國板野郡の西北方、讃岐國境の山中より發し、東南流して、御所村大字宮河内（標高二百八十四尺）を經て、大字吉田（標高百五十八尺）附近より彎曲して、東に向ひ、板野、名西の郡界をなし、名西郡に入り、高志村大字佐藤塚に至りて、吉野川に入る、流程凡そ五里。

「廿地形德島圖幅」に據る、「輯製圖」記名なし。

南なるは即ち吉野川の本流にして、別宮川と稱せられ、北（左）なるを中富川（ナカトミ）とす

●中富川（ナカトミ）（別稱　北川、下流廣戸川（ヒロト）、「廿地形德島圖幅」、（大日本地誌）第七卷三八頁、廣津川に作る）　阿波國名西郡高志村大字佐藤塚、藍畑村大字第十七、名東郡北井上村大字祖母ヶ島、大字佐野塚の間にて、幹流に分れ、名西、名東の郡界を劃し、北に向ひて板野郡に入り、一大彎曲をなし、板西村大字大寺（標高二十六尺）を經て、東に轉じ、北川と稱す、北島村大字高房に至り、南川を右方に分ち、北に繞りて、松茂村大字中喜來浦に至り、撫養川を左方に分ち、本流を廣戸川といふ、東流し、大字覇久新田に至りて、海に注ぐ、流程凡七里、濶二百四十間。

「廿地形德島圖幅」、「輯製廿德島圖幅」、（日本地誌提要）第六册阿波一五頁、（大日本地誌）第七卷三八頁、（大日本地名辭書）一二一一、一二一八頁參取、同書一二一一頁、「中富川、吉野川の北支派にて、大阪山、大麻山の澗水之に會集し、其末は再び分裂して、江渠を爲り、撫養、里浦、長原浦、別宮浦などへ通ず、吉野川の流移變遷、此間に於て最多しと云ふ」（中富川は、天正十年八月、長曾我部元親が、三好氏を破りし處なり）、（六十五大川流域誌）八七頁、廣戸川の海に注ぐ處を、里浦村大字里浦に作れり、之を取らず。

●南川（別稱、今切川（イマハリ）　阿波國板野郡北島村大字高房より、北川に分れ、南流し、應神村大字中原より東に向ひ、北島村大字鯛濱を經て、北折し、川内村大字中島浦より東南に流れ、今切川といふ、松茂村大字長原浦に至りて、海に注ぐ、流程二里十三町、濶凡二町。

（日本地誌提要）第六册阿波一五頁に據る、（德島縣統計書）二一七頁、流程を三里に作る。

●撫養川　阿波國板野郡松茂村大字中喜來浦にて、北川に分れ、西北流し、大津村大字備前島に至り、東に折れ、撫養町大字南濱より北に轉じ、大字岡崎を、大字大桑島の間に至りて、海に注ぐ、流程凡二里、濶凡一町。

（日本地誌提要）第六册阿波一五頁、「廿形德島圖幅」參取。

本流は、名東、板野の郡界を流れ、名東郡新居（ニヰ）村大字高崎（タカサキ）に至りて、右岸より鮎喰（アユクヒ）川を容れ、助任（スケタフ）川ともいふ。

◎鮎喰（アユクヒ）川（別稱　鮎食川、上山川）　阿波國名西郡雲早山（勝浦、那賀の二郡に跨がり、國の略々中央に位す、標高凡三千六百尺）に發し、劍山山脈の北側に縱谷をなし、上山川と稱し、東北東に向ひ、郡の中央部を貫流し、阿野村大字阿川に至り、地下を潛流すること三十歩にして現出し、浚激奔流す、土人呼んで、龍の首といふ、大字廣野（標高二百八尺）字川又に至り、南方より怪岩奇壁の間を奔下する一溪流を合す、是れより川は、東に向ひて、横谷をなし、西岸には多くの砂礫洲を作り、遂に名東郡に入り、上八萬村大字一の宮附近より、北北東に轉じ、鮎食川といふ、新居村大字高崎に至りて、吉野川に入る、流程約

十一里十六町、(凡そ四十五粁)、濶三十間、川又以下凡そ五里(約二十粁)の間は、舟楫の便あり、吉野川の支流中、伊豫川に次げる、長流なり。

((大日本地誌))第七卷四〇頁、((大日本地名辭書))一二一九頁、((日本地誌提要))第六册阿波一六頁、「廿地形德島圖幅」參取、((提要))一五頁、發源を名西郡上山村奥屋敷、骨川兩谷となせり、「四十形西部」を按ずるに、名西、那賀、麻殖の三郡に跨がり、標高四千八百四十五尺ある、旭丸山の北方に發するものゝ如し、今ま((大日本地誌))に據りて、之を取らず、((德島縣統計書))二七頁、上山川と鮎喰川を別流となし、上山川十四里、鮎喰川三里に作る。

((日本地名辭書))一二一九頁、阿波志、上山川上山を發し、東北流して阿川に至り、地下を潛流すること三十歩にして現出し、淺激奔流す、土人呼んで龍の首といふ、又神領、入田等を過ぎて、一宮に至り、鮎食川と稱す、一派は德島市にて、助任川に合し、一派は高崎にて吉野川に入る、同書一二一五頁、阿波志云、助任川は、吉野川の支流にして、助任村よりして南し、出來島に至つて岐分す、其北する者は、城北に從つて東し、又分れて福島川となり、東して海に入る、其南する者は、田宮川に合し、新街に注いで城南に出で、福島川に合して、又東して海に入る、(助任川、別宮川に同じ)。

德島市の北郊を流れ、板野郡川内村大字別宮浦に至りて、紀伊水道に注ぐ、中富川を分ちてより、是に至るまで、三里十五町、濶凡そ六町。

((日本地誌提要))第六册阿波一四、一五頁、同書土佐一七、一八頁、((六十五大川流域誌))八七頁、((大日本地誌))第七卷一八、三六、三七、三八、一三五、一三六、一四六頁、((高知縣統計書))三二頁、((德島縣統計書))二六、二七頁、((內外地誌))二〇三頁、((日本名勝地誌))第八編二二一、四一三頁、((帝國地名大辭典))河渠二一八、二一九頁、((帝國大地誌))七五頁、「廿地形德島、高知圖幅」、「地質廿丸龜圖幅」、「四十形西部」、「輯製廿德島、丸龜、劍山、高知圖幅」、當山堂編輯((日本大地圖))、((市町村一覽))、辭編((日本山嶽志))參取。

式曰く、((德島縣統計書))左の七川を揭ぐ、同川異名なるべけれども、記して參考となす。

◎藤谷川　阿波國三好郡三名村に發源し、同村にて吉野川に入る、流程十三里。

◎白谷川　阿波國三好郡山城谷村に發源し、同村にて吉野川に入る、流程五里八町。

◎曾江谷川　讃岐國大川郡奥山川に發源し、阿波國美馬郡に入り、江原村に至りて、吉野川に入る、流程三里、或は拜原川ならん。

◎野村谷川　阿波國美馬郡郡里村に發源し、岩倉村に至りて、吉野川に入る、流程三里。

◎半田川　阿波國三好郡三庄村大字毛田に發源し、半田奥山村を過ぎ、半田村に至りて、吉野川に入る、流程四里。

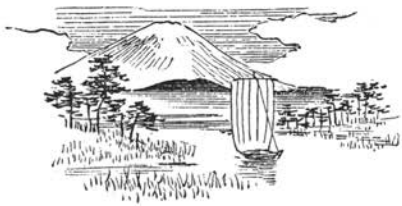
◎飯尾川　阿波國麻殖郡西尾村に發源し、名東郡新居村に至りて、吉野川に入る、流域浦庄村外十三村に亘り、流程十四里。

式曰く、此稿迅速を要する事情ありて、執筆せしも、發熱酷しくして、杜撰を免れず、次號訂正する處あるべし、幸に恕せよ。

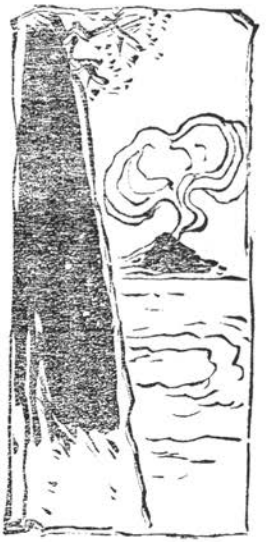
吉の川の記　堤　新甫

夫れ損は益を招き、益は損を招く、是川に於て乎、此の變換ある也、源は豫土より發す、其流凡そ四十里餘、委遶として撫養に至り、近く津田浦に入る、其支派皆灌漑の便を以て、萬物を沾潤し、枯旱の患なからしむ、其効尤も博し矣、國の產品、多く辟隙に出づ、其搬運の勞費、物價の半を減ず、幸に是流れありて、而して

駄馬擔夫の煩なし、平水に於ては則ち二日にして、德島に達す、雨後水漲ぎるに方つては、矢よりも迅し、一日稽倫なき也、是の如く捷便あり、而して其費耗を省く、是を以て沿流の庶民、此川の賜ありて、妻孥を撫育するもの幾百千、故に藥南富農、隨所にあり爲、天下に豐國の名を得たるは、此水の在るあるを以て也、然らば則ち其の有益巨多、寔に我邦の至寶也、秋天積雨、洪流暴漲、潰胃衝突、堤を裂き、岸を崩し、横流散溢、地垠を汨し、南北の山際三四里許、處として水ならざるなき也、轉瞬に變じて、滿天鄉となる、人畜を亡傷し、蕃害太甚だし矣、嗚呼哀哉、呼天哭泣の聲を聽く、時々在り爲、因て以爲らく、所謂禍福相因の川乎、寔に損益相ひ輕重しがたき也、古より水利を建て、害を防ぐの至道は、導疏法を施し、微密其機要を攝れば、行はれざる所なき也、其術を悉くすと謂ふべし矣、然りと雖ども、暴流の烈、當今の如く大患をなす、然らば則ち、其効費を以て、堤防に充て、其衝突の要處に方り、堤址は巖石を用ひ、密以て塞ぎ、半以上は須らく厚板を駢積すべし、然して土砂を以て積塞すれば、則ち幸に崩潰の害を免れん乎、只土砂のみを以て堤と爲さん乎、高さ五岳の如しと雖ども、激水の勢、復た崩潰の衝胃を止むるに難し、田產を破壞し、却つて堤なきの水を強むるのみなり、然らば則ち各村の庶民、輯和して居邑の利害を問はず、土地形勢の便利を以て、堤を修治し、掃して以て水を順にするを、計を得たりとなし、共に黽勉倦まず、是水を以て暴寇となし、痛捍に從事し、謀慮を廻らし、大害を避くるを急務と いふべし矣、假令ひ百白圭を出すと雖ども、此水に於ては則ち其術なきを恐るゝ矣、今に於て下情を察し、翕然として以て木石を用ひ、修築の法を主となす、而して其人あらん也、我亦何をか謂はん乎、時に明治十九年仲秋也、〔原漢文〕、《阿波國名勝記》十三、十四枚。



雜　錄



余が陳列品に就て（山岳會第一大會講演）

何も用意は致してございませぬけれども御話を致します、高頭君の山岳志の初に何か書けといふことで私も少し書きましたが、文章は餘り良くは出來て居りませぬ、併し漢學の人にちよつと見て貰ひましたが、假名違ひがあるかも知れませぬが、先づ大概意味は分るだらうと思ひます、書きました事は先刻御話がございました繪を描く人は大概山を見ないといふことに付てちよつと書いて置きました、高頭君の書物の初に書きますのですから、何か高頭君の事を書かなければなりませぬが、其書きました事は、山を見る人は多く有るが、山に登る人は少ない、山に登る人は有るけれども、山を繪に描く人は誠に少ない、それから山を繪に描く人は大概山を見ない人である、併し高頭君は山を見て山の景色を樂み、山の事を世に紹介されるといふことは誠に結構なことであると、さういふ事を書きましたので、何も專門に渉つたことではありませぬ、又た山岳志の中には外の諸君は餘りさういふ事を書いてありませぬですから、重複にはなりませぬ。

今日私にこちらへ何か出品するやうにといふ御需めでございまして、私が出しました物は是も矢張り專門外の御方にも大概御分りになる樣な物を出しましたが、其出品に就てちよつと御話を致したいと思ひます、餘り見て美くしい寫眞とか、或は珍らしい器械とか、變つた物でもございませぬから、陳列所の方へ入らつしやいましても、大概御見落しになるだらうと思ひます、そこでちよつと其御話を致します、此御話は大概日が暮れますと止めになるといふ豫定であります、日が暮れないと幻燈には少し差支へるので、日の暮れるまで私が話を致す積りでございます、幸ひ日が早く暮れますと私の話も早くしまひます、又どうかいふ都合で特別に日が暮れるのに長く掛りますと、それまで續けなければならぬので、誠に材料が足らないといふ樣な虞れがあるかも知れませぬ、何しろ用意せずに參つたのでありますが、唯何にもせずに幻燈の始まるまで御待ちになるよりは少しは宜しからうと思ひます位な御話でございます、あちらへ列べました物は總て皆經歷を經て來た品物であります、高頭君の山岳志の初に書きました樣に「山を繪に描く人は大概山を見ない人だ」と惡口とは反對で、山を皆さんが見て御歩きなさるといふ御考であるならば之に入用の物が少し彼處に列べてあります、一年位前からちよつと御

需めがありますと、まだ面白い物を持つて參られました。山に御登りになるのに一番大切の物は履物で、是には大變皆さんが心配をなさりますから、履物を一番始めに御話しなければなりません、あちらに列べてございます履物は藁でなくして麻で作つた草鞋でございます、あれは陸軍省の官給品でありますが、明治二十八年に私が可なり大きな足に丁度合ふ麻の草鞋は、隨分丈夫で、且つ厚いのが、何十錢か取られたといふ大變な高い物でございますが、あれは夫れと違つて小さくありますが、矢張り當り前の草鞋と比較にならぬ價の高い物であります、あれは結構なことには、乾いた地面の上を歩くと却々長く持ちます、併し水の中ではあの草鞋でも矢張り格別澤山効能は無いので、水の中をボチャ〳〵歩くと早く切れます、又た長く保存して置くと段々腐る氣味で、乾いた土の上を歩いても五六町歩くと剃刀で切つた樣にブッと切れる事があります、此水の中をボチャボチャ何の爲にやるかといふとはちよつと御分りになりますまいけれども、東京では水の中を歩く餘り必要はありませぬが、道路の無い山の中の不都合の所へ往きますと、地面の上には木や草が非常に繁茂して居て、それを押潰して歩くのは困難で、飛鳥山の上を驅歩いて見るのとは餘程寸法が違ひます、話で聞くと嘘の樣でありますけれども、隨分植物の茂つて居る處では馬に乘つて人の頭がさう草から上に出ない、當り前の馬ですとさういふ所があります、それをグン〳〵やつて往くのは敵ひませぬ、又唯、木や草が生へて居るばかりでなく、色々の蔓物が木や何かに搦まつて居て非常に強くて、肩でグイ〳〵押しても非常に抵抗力があつて迚も敵は無いやうな所では一番歩き善いのは水の中をボチャ〳〵やるのです、其時には草鞋の切れることは非常なものです、是は東京邊で鐵砲を擔いで遊獵をして歩く人などゝは大變に違ひます。

それから次が防蚊覆面で、あれは軍隊などに在つた人は御存じでせうが、初めて御覽になつた方もありませう、あの防蚊覆面はちよつと籠籠の樣な理窟で、あれは明治二十七八年支那と戰の時は、未だ有りませんでした、所が其後段段開化して色々機械が出來てあゝいふ物が出來ました、あれを被つて歩きますと蚊がブン〳〵螫して來ても大丈夫であります、所が人間の習慣といふものは恐ろしいもので、縱令螫して呉れなくても、ちよつと此邊までブーンと來ると大變嫌やな心持がして、矢張り煩悶です、此頃は下らない意氣地の無い若い者が、餘り學問抔もしないで煩悶をするといふことがありますが、それとは違つて誠に煩悶で堪らないので、道で唾が出てもあれを斯う被つて居ると一寸困ります、又た面部に汗が出ても始末にいけないのです、があれが無かつたらどうかと云ふと、蚊の多い所へ往くと、とても本所深川などの蚊の名所でも比較すれば何でも無いので、本所深川の蚊といふものは、幾ら二十四孝の一人の眞似をして居つて、螫された所で大したとは無いので、跡が膿む樣な蚊では無いので、ホンに酷い處では螫した處が

腫物になつて、水脹れになつて痒くて、掻き潰ぶすと跡がグシャ〳〵して、サルチル酸などで早く直しても、其痕が紫色になります、日に燒てたがさめると其點が目につきます、そこで東京の御方ー（東京の御方と云ふと私が東京の御方で無い樣で可笑しいが）、東京の御方が御承知で無い防蚊覆面と云ふ物は、蚊の大きいのは防げますが、あの目の中へ入り込む小さい蟲は防げないので、晝の中は蚊の非常に多い國へ往きますと、晝間の蚊はブン〳〵やつて來ても立派に防げますが、夕方から夜に掛けまして蚊と交代で無い、蚊の補助に出て來る蟲でヌカガといふ者には非常に困ります、目に見えない位小くて、さうして螫す力が非常で、非常に痒ゆみがあるので、夫れは寒冷紗の白い袋を被らなければいけませぬ、國家の爲に山を歩いて艱難辛苦して居る人を、小さな蟲が非常に攻めて來ることは迚も東京では分らない事です。

それから次は飯盒、即ち御辨當箱の少し大きい物で金で造つてあります、あれに一杯飯を炊きますと、可なり胃の健全な人でも二人一食位には足ります、あれはアルミニュームで造つてありますので、勿論輕くて落しても破れる氣遣は無い者であります、旅行中殊に吾々が心配することは食物の絶えること、次に履物の絶えること、それから鍋などを壞はすこと、それから燐寸の切れることです、燐寸などは東京では實に廉い、燐寸といへば彼方でも此方でも呉れる位ですけれども、山へ這入つた時、少し草臥れた時などに燐寸を附けてどうかいふことで、一箱ボヤ〳〵と一度に燃して仕舞ふと、一緒に連れて歩いて居る者に、御前燐寸があるかと云つて、腹掛から一本か二本三本出させてそれで是から三日を通さなければならぬといふ樣な時は隨分弱るものであります、鍋の代りになる彼の飯盒は破はれない代り缺點もあります、あれで酒の燗をするのは差支ありませぬが、酸や鹽氣は善くないといふことであります、確か日清戰爭の時分はあゝいふアルミニュームの品は無かつたと思つて居ります、今では戰爭が濟むでから大分あれが東京に餘つて居ると見えて、古手を買ふと大分安價であります、まアあれで湯を沸すことは勿論出來ますが、湯を沸すと不都合なことは、沸くことは早く沸きますけれども、直きに冷める、それから湯を注いで飲むとき唇を附けた時分に金が恐ろしい熱い、金が善い加減に冷へたと思ふ時分は湯が微温くなつて、どうしても別に茶碗か何か持つて歩かぬといけませぬ。

それから今日持つて參らうと思つて持つて來ませぬですが乾燥野菜、煉味噌、醬油エキス、などゝいふ物があります、煉味噌といふのは、味噌をブツ〳〵煉りましたので、それを溶かせば直ぐにおみをつけが出來る物、醬油エキスはもう日清戰爭時分にありましたから、格別珍らしいものではありますまい、乾燥野菜、是も珍らしい物では無いので、前から隨分有つたでございませうが、是には蓮根、馬鈴薯、胡蘿蔔、大根や、色々の物があります、さうして水に浸け

れば煮られるので、理論上は當り前の生の野菜の様に成てもどうしても夫ほど旨くは無いもので、乾燥野菜の中でも切干などは古來日本にあります、それから氷蒟蒻などは誠に輕便でありますけれども、併し食べ飽きるものと見えて、しまひには皆嫌やがつて焚付けにするさうで、焚付けにすると大變結構なものでありますが、實に罰の當る様な譯であります、是は又日本人の大變惡るい性質で、平日餘り自分が朝に晩に御馳走を食べて居るでも無い癖に、食べ物がやかましいのであります、實にロシアの兵隊などを見るとそんなことは餘り言はないので、感心します、日本の人は朝おみをつけにれ香の物ぐらゐの人が、三度〳〵牛肉はどうも困る、誠にまづいと言ふ癖が多くあります。

それから壓搾茶といつて、茶を壓潰した物があります、是はどういふ製法ですか知りませぬが、丁度瓦の様な形の物で、是は却々良い茶を壓搾したのださうであります、ちよつと火に炙つて、さうして經節を削る様に削つて入れますと茶が飲めます、飯盒の中籠に少し入れて、蓋を輕くしてそつと注ぐと、茶殼が出ずに善い工合に出ます。

それから次に手帳形の寫眞機械といふものが置いてあります、あれは大變小さい寫眞機械でありまして、明治二十五六年に買つたドイツ製の品物であります、撮れた所の寫眞の大さといふものは、僅かに一寸二分四方位の繪で、上手に寫しますとそれでも却々鮮明で、それを引伸し寫眞にすると立派な繪になります、是は上手下手があつて、兎に角小さな物ですが、ちよつと手際に出來て居りまして、中は三部屋になつて居て、ちよつと寫して押すと、寫した種板が向にまで往つて、眞ン中の所へ、新規の種板を送る、あれでも三十圓位する、兎に角ポッケットの中へ這入るので、小さな寫眞ですが鮮明に出來ます。

又た彼所に薄い白い紙の様な物に神保出品と書いてあります、あれは木の皮で、特別の季節に巧みに薄く剝いだのであります、あれはシラカンバの外側の中の皮であります、シラカンバは御承知の通り火が付くと非常に善く燃えて、黑い油煙を出して非常な勢ひでパリ〳〵いつて燃えるのです、小林房次郎君の出品で、別にシラカンバの皮が側にあります、あの皮は北の國で露營をする時には缺くべからざるものであります、露營をすると思つた時分には、手當り次第に剝いてポッケットへ納めて置くが宜いので、どんなに木が大雨で濕つて居つても、シラカンバの皮へポッと火を付けるとドッと燃上つて、其上に細い木を積上げると火が大抵物になります、その外にも特別の焚付は色々山で得られます、併し燐寸が無ければ火は燃けません、俄かに火口を使つたら宜からうと云ひますが、あの火口は今日は殆ど絶えて仕舞つて、あれは却々容易に製造する事は出來るものでありません。

それから又た薪の様な物が九本程列べてあります、あれはカラフト五十度地方の林木の標本で、あの中の色の白いのはシラカンバであります、あの中の色の白いの

ます、それからトドマツ、エゾマツ、是等もあの地方で森林を成して居ります、且幹が眞直ぐに立つて居る落葉松も澤山あります、北海道では落葉松はエトロフとシコタンにのみありますが、カラフトは全島に澤山あります、其次には柳などもあります、ドロはカラフトには非常の大木がありまして、直徑五六尺位のものがあります、大きな純林をなして居る處もあります、ドロには二種類あつて、乾いた土地に生へるのと少し濕つた土地に生へるのと二つあります、それから太いので、御茶臺に宜しからうと思ひますのは、あれはハイマツで山へ登つた時分に大分吾々が迷惑をします者で、非常に繁つて遠くから見ると黑い樣な青い樣なもので、始末にいけないもので、這ひ方がひどいので、吾吾の丈けより無論高くなつて這つて居て、枝が非常で下を潛ることも出來ず、上に上がれば横に這ふて人が倒れるのです、五十度の境界劃定の人は十「メートル」の幅に境界線の林を伐り倒しましたが、ハイマツの中などでは、非常に骨を折りました、境界劃定の御方の御困難の紀念として持つて來ました、カラフトの森林帶を別けた時分には隨分上の方に生へる木であります、一番天邊に此松が生へて居つて誠に歩き惡い、所が其少し下に兩方に濶葉樹の帶があつて、それから針葉樹帶となる、所が樺太へ往きますと、大體今の規則が本當でありますけれども、海岸までも這松の生へて居る所があるです、彼所に確か出品してありますが、三好學君の日本植物景觀の中で榛柏部にカラフトの樹木及び

草の景色があります、其中に這松がありますが、あゝいふやつが海岸の砂丘の上に生へて居ります、それからダケ樺白樺は高い所から低い所まで下つて居るです、始めて飛込むとちよつと分り惡いのがカラフトの性質、尤も北海道の方へ往きましても、針葉樹帶の物は根室邊りの海岸に生へて居る、擇捉などへ往きましても海岸に生へて居る所があります、カラフトは殊にです。

私の御話しは一向用意がありませぬで、まづこんなことに致して置きますが、是で大抵、日も暮れかゝりまして映し繪の方に差支なからうと思ひます。（拍手）

（理學博士　神保小虎氏口述）

日本北アルプス縱走の記

七月二十六日

一昨夜來の暴風雨も漸く止んで天氣も少しはよく成りさうなので我等一行は八時半白馬山頂の小屋を出發した、今日は此の山脈を南方に縱走して大黑嶽の麓にある大黑鑛山迄行く豫定なのだ、濃霧の中を釋師の裏にと進み鑓ヶ嶽の絕頂に着たのは十一時頃だ然し何にも見えない、此所で書飯を食つて十一時半南方に向つて下つた、少し行くと天狗の小屋場と云ふ所がある此所から左方に降ると溫泉のある處に行かれるさうだ、尙も南方に進む程に三角標のある一高所に來た、此所は唐松谷の三角點だと人夫は云ふが餘り信用は置けない、元來天狗の小屋場以南は通行する人甚だ稀で、我等の雇ひし人夫の中でも一人より外道を知らない位

だ、此三角點から少しく左方に進むのだ然し大體に於て南方に向つて行く事は前の通りだ、之れから愈不歸(カヘラズ)嶽の嶮にかゝるのだ、道は豫想以上に惡ひれまけに雷雨となつたので一層困難だ不歸の嶮を越すと南嶽の嶮がある不歸嶽の方から南嶽の頂上に登るのは丁度上州の妙義山の岩を登る樣で實に嶮しい、同行のM、T、氏は大の山狂で且つ健脚家だが人夫が笠や蓆が邪魔でしやうと問へばそんなものは少しも邪魔にならぬが山が邪魔だと答へた、此奇拔な答には一同大笑ひして一時苦痛も忘れた、雨は止まぬが雷は止んだ、斯くて南嶽の絕頂に登つたのは五時頃だ、之れから先は道は少しは樂だ然し腹が減つたので思ふ樣に道がはかどらない、八方(ハツポウ)の三角點のある處に着たのは九時頃だつたらう、暗くはなるし體は疲れるし元氣も何も消へ失せた、此三角點の所から鑛山の小屋までは下り一方だ、尤も道は大黑嶽に出て鑛夫や何かの通ふ途を下るのと此三角點の處から直に雪のある谷を下るのと二つある、我等は急いだから嶮しくてもかまはぬと云ふので、大黑嶽に出でずに下る事にした、雨は止んだが星も見ゑず雪あかりで下るのだ、否下ると云ふよりも寧ろ雪の上を轉んで行くのだ十二三町で雪もなくなつた、然し此十二三町が二三里もある樣な氣がした、あとは澤に沿ふて下り、行かれぬ所は崖を攀ぢると云ふ樣にして、漸く道らしい道に出て鑛山の小屋にと着た、時に二時三十分だつた。

一行中には鑛山の事務員のO氏があつたので大に都合よく非常な優待を受けた、此日(二十七日)は前日來の疲勞もあるので一日休む事とし鑛山を一覽した、此鑛山は數年前我等の人夫の一人なる松澤菊一郎が發見したもので、今は爲田文太郎氏の所有にかゝり有望な銅山だ、所在地は越中國下新川郡船見村二外七ヶ村字黑部奥山國有林と云ふ永い地名だ、翌二十八日はO氏は鑛山に止まられるしM、T、氏は健康を害したので大黑嶽を越へて一旦北城村に下らるゝと云ふのでM、T、氏に人夫二人を附し余は松澤一人をつれて此旅行を續ける事になつた、七時三十分諸氏に別れを告げて五龍嶽に向け出發した、五龍嶽は大黑嶽の近くにあり白馬から祖父ヶ嶽の方に連れる山脈の一峯なのだ(但し地圖には見當らない)道すがら左方に谷を隔てゝ前日降りた八方の雪の澤が見ゑる、よくあんな所が下りられたと思ふ位だ、十一時五龍嶽の頂上に着いた口繪にあるは此時撮影せしものにて荷を負ひて立てるは人夫松澤なり、此邊の山は白馬などから比べると餘程低い樣だ又雪も少ない、然し眺望はなか〳〵よい立山などは手に取る樣に見える、又能登の方の海も見える、十二時頃から霧が又かゝつて來た、今一度立山を見たいと思つて三時まで頂上に居たが終に晴れず、止むなく下山する事とした、松澤が云ふのに此所から下りるには少しく大黑嶽の方に戻り向に見える山に登り山づたひに鹿島の谷に出るのだと云ふ、然し余は眼下に鹿島谷の本澤が見えてるのでどうも直下に此澤が降りて見たい、そこで行けるか行けぬか一つやつて見やうと云ふ事になり

雪の澤を降り初めた所が上から見るとは大ちがひで其急な事甚しい、然し戻る事も出來ないので右に廻り左に轉じたりして漸く少し傾斜のゆるい處に來た、それから出來るだけ急いだが間もなく雪はなくなつた、雪がなくなると澤は水が多いので行かれなくなるそこで岸を攀ぢたり水の中を歩いたりして進み、八時頃漸く野宿の出來る場所を見出したので泊る事にした、勿論小屋もなく眞の野宿だ、翌二十九日は六時三十分出發前日と同じ樣な所を下り十一時漸く鹿島嶽の方から來る谷との落合に出た此所からは道もある又昨日松澤が話した山づたひに來る道も此所で出逢ふのだ、漸く安神して晝飯を食し鹿島の村を通り三時半大町に出た之れで先づ此旅行は終つたのだ、元來此旅行は白馬から鹿島嶽迄行つて大町に降る計畫だつたのだが、暴風雨の爲めに白馬で二日餘計に費したのとM、T、氏が健康を害して途中で山を下られたのとで鹿島嶽まで行かれず五龍から下つた次第だ、且つ毎日雨や霧に妨げられたので豫期して居た觀察も出來ず自分で單に通行し得られると云ふ事以外に何物をも得なかつたので、委しい事は再行の上ならでは御話する事が出來ない、不得要領な點は御許しを願ひ度、唯あの中央山脈が縱走し得られると云ふ事を證するのみだ。

（三　枝）

日本北アルプス中央部横斷の旅行談（二）

二十六日、早起、昨夜小舍（二の俣）の前で捕へた大兎の味噌汁、肉は中々に硬く、且つ骨澤山の汁で、東京に居つては我慢にも喉へ通らぬ樣なものでも、中房以來罐詰のみで生活して來た身には、生肉と云ふので殊に有難く、一同舌鼓をうつて朝飯を終へ、午前七時二十分支度をとゝのへて、二夜の宿りにおなじみとなつた二の俣の小舍を後に、今宵宿るべき槍ヶ嶽の坊主の小舍をさして一同は出發をした。

小舍の南の小高い處へ上り、それから二の俣の澤と一の俣の澤との間に連つて西南に突出した尾根に沿ふてだん〳〵下つて行く、目的とするところの槍ヶ嶽から穗高の山つゞきは前面に連り、消え殘る雪田は山體の半分以上も蔽つて朝日にかゞやき「坊主の小舍は雪で埋つて居るづらー」と類嶽をして嘆せしめた、右手の方を顧ると近く二の俣の天上の峰は天に聳へて、それから今自分等が立つて居る方へつゞいた尾根の一番低いと思はれる邊に二の俣の小舍はなごりを惜しむ吾等一行の眼にはそれと著しい、翻つて左の方を眺めると、昨日其の絕頂を極めた奧常念は呼ばゝ答へんばかりに近く、横尾烏の連脈は其の左にひかへ、頂上の三角測量標までも明かに見得る、又奧常念の右の肩よりは遙かに日本南アルプスの北半の面々が、鋸嶽よりはじめて

右に甲斐駒、北嶽、仙丈、間の嶽と云ふ順に峰を連ねて居るのが、昨夏其の附近に赴いた余の眼には明白に映じて來る。

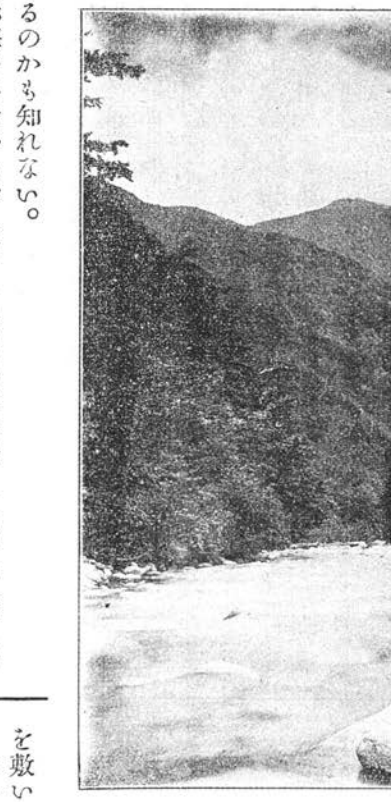
尾根に沿ふてしばらく下つて行つてから、やがて白檜の樹林の中に入ると、それからは尾根をはなれて下るので、非常に急な樹林の中を下ること約二時間ばかりで澤の緣に達する、これは二の俣の一の澤と云ふのださうで、それから少しその澤について下ると右の方から二の俣の本流が來て一の澤と合する、人足共はこの處を二の俣の堂(ドウ)(宛字)と云つて居る、すべて川の合流するところを堂と云つて居るらしい、この二の俣の堂のところはやゝ平な河原があつて野營などするにも適當であらうと思はれる、二の俣の一の澤の緣へ下るまでの樹林の中は非常に急でもあるし、且つ木の枝などが妨げて歩き惡く、可なりな難所であると云つてもよからうと思はれる、この合流點からやはり二の俣の澤に沿ふて下るのであるから大して急なところと云ふ程のものもないが、所々に兩側の支溪などから墜落して來た殘雪が推し出て居たり、又は溪を徒涉したりするので中々に歩き惡いことは同じである、大小十數回の徒涉をして、午前十一時三十分二の俣の澤と梓川との合流點に達した、こゝで梓川を徒涉して對岸のやゝ平な所に行つて中食の支度をはじめ、人足の一人は米を出してとぎ、他の者は鍋を洗ひ、又他の者は附近に自生して居るフキを採つて來て皮をむきなどする、其の間に吾々は梓川の清流で顏を洗つたり、上着をぬいで汗を拭ふたりする。

梓川は槍ヶ嶽の方から流れて來て、この二の俣の澤と合してから急に右折するので、二の俣の澤の方は却つて直流して、且つ水量なども格段の差がなく、どちらが本流とも云はれない樣な形勢になつて居る、合流點に立つて下流の方を眺めると正面に蝶ヶ嶽が胸から上をあらはす、一行の一人は早速ピントを合せてシャッターを握る。やがて飯が出來上り、蕗の味噌汁も煮えて晝飯がはじまる、味噌豆が舌にさはる樣な汁の中から、手でちぎられた大小不同の蕗が出て來るのも却つて面白い、其の他デンブ、胡麻鹽、紫蘇鹽等も開かれて飯はたちまち終をつげる、デンブや胡麻鹽等は今回はじめて試に持つて來たのであるが、味も中々によく、且つ蓋のしつかりした罐の樣なものに入れて置けば、他の罐詰類と異つて開いたときに皆平げてしまふ必要がなく、又あまり重くもないので頗る便利である、紫蘇鹽と云つたのは青紫蘇の葉を鹽漬にして乾かしたものを、粉にしたので紫蘇香煎とか云ふて市中にあるものと同じである。

飯後少時休憩して午後一時二十五分にこゝを出發して直ちに復梓川を涉つて其の左岸に出る、それから一時間程樹木の茂つた中をわけて行くと赤澤の小舍に達する、小舍といつても川岸にある大きな岩の上部が幾分か出張つて居るやうなもので、丁度甲斐駒の裏山にある大岩の小舍と同樣なものである、此の邊の林中にも例のミヤマチドリがある、こゝなどは上高地から槍ヶ嶽に登るにも通るところで、前

の燕嶽の登路などに比して多くの人々が通過したに違ひないから、ミヤマチドリの產することなどはとくに知られて居るべきであらうと思ふ、要するに精細に探究したならばこのものは日本北アルプス中央部の森林中には通じて產する、やがて溪が斜左（上流に向つて）の方へ向ふところへ來るともはや溪の水はつきて殘雪のみとなる、あたりの岸を見ても近頃雪が消えたばかりと云はぬばかりに去年の枯草が地に伏して、僅かにオホバキスミレのみが黃葩かざして頭を持上げて居るのみである、登るにつれて雪は益々多くなり、坊主小舍に近づくと見渡すかぎり過半は雪で蔽はれて居る、本誌前號の口繪「槍ヶ嶽の大雪溪」は即ち此の時撮つたもので、七月下旬に於ける槍ヶ嶽の雪の一部を示したものである、やがて午後五時三十分坊主小舍に達すると、果して類藏の言の如くに、小舍は雪で埋もれて居つて泊ることが出來ない、已むを得ないから少し下つて雪のないところに野宿することに決てし踵をめぐらすと、奥常念は斜陽を帶んで正面に聳つて居る。

坊主の小舍より數丁下のやゝ平で雪のないところに野宿することに定めて荷物を下ろし、ハヒマツの枝を集めて薪とし、着莫座を敷いて、いよ〳〵野宿の支度が出來る、將に沒せんとする太陽に映じて蝶ヶ嶽は金色にかゞやき、其のはるかかなたよりは富嶽の優しい姿が夢のやうに眼に入つて來る、自分は富士の姿を諸所から眺めた、しかし相州山北の少し北のある峠から、ある秋の夜に星の明りに眺めた富士と、こ



梓川上流より蝶ヶ嶽を望む

（辻村伊助氏撮影）

るのかも知れない。

赤澤の小舍から少し行くと梓川の幅が廣くなつて、深さが淺くなつて居るので、主に其の中をザブ〳〵歩いて行く、雪が今解けたばかりの水であるから其の冷さは非常なもので骨に浸みると云ふのは眞にこのことだと思はれる位であ

の槍ヶ嶽に野宿した夕の富士とはことに麗はしく感じて、いまだに深く頭の中に印象されて居る、振りかへつて見ると、蒲田谷の方から槍の肩を越へてしづ〳〵と推よせて來る薄墨色の霧に今し槍ヶ嶽の劍ヶ峯は蔽はれやうとして居る。

ハヒマツの枝さしくべて火を盛にし、身は毛布にくるまり頭から油紙を被りて横にはなつたものゝ、岩角に背を衝れたり、ハヒマツの葉に襟をのゞかれては、中々に寢りつかれない、やがて終日の疲勞でしばしとろ〳〵としたかと思ふ中に、被りたる油紙に當る雨の音で夢はやぶれてしまつた、雨が降つて來ては悠々と寢ては居られない、仕方がないから皆起き上つて蹲まる、一つは暖をとる爲めと一つは景氣をつける爲めにハヒマツの枝をうづ高く積んで火をつける、颯と吹きつける風に炎は立ち昇つて側に生へて居るハヒマツの枝葉にまでも燃えうつり、全山のハヒマツを燒きつくさずんば止まずと云ふ勢で燃えはじめる、雨も亦まけまいとてか一しきり烈しく降つて來た。

しかしそれも一時で、やがて曉近くにはいつどこに雨が降つたかと云ふ樣にすつかり晴れてしまつた。

翌れば七月二十七日、午前五時五十分一同野營地を出發して絶巓に向ふ、雪溪はます〳〵急になる、やがて劍ヶ峯の麓に達して暫時休憩する、絶巓劍ヶ峯は面前に聳つて吾等を威壓する樣な心地がして來る、さて一同相戒めて登りにとりかゝり七時四十分絶巓三角測量標の下に到着した、この登りは隨分危險であるには相違ないが豫想したほどではなかつた、しばらくこゝに止まつて四方の眺望をほしいままにする、此の朝は無上の好天氣で、日本の高山と云ふ高山は殆んど皆一眸の中に集まつて來ると云つてもよい、一々何山又は何嶽が見えたと云ふよりも、たゞ加賀の白山の頂上が雲に蔽はれて居つたのみであると云ふのが適當であらうと思はれる。

さてこゝで一寸一言したいのは槍ヶ嶽の高さについてゞある、高さと云つても標高何米突と云ふ樣な次第ではなく、他の二三の山と比較した高さについてゞある、かつて自分はある日本の地圖の附錄について居つた山岳高度表によつて富士山につゞいて槍ヶ嶽と云ふ山が高いと云ふことをはじめて知つた、その後烏水氏の文等によつて槍ヶ嶽が日本第二の高山である樣に思つて居つた、其の後高頭兄の日本山岳志を拜見すると槍ヶ嶽附近に尙大天井だの、常念だのと云ふはじめて耳にする樣な山があつて、且つ其の標高は槍ヶ嶽よりも高いと云ふことを知つた、しかし現今までにしられて居る山の標高はあまり精確なものでないと云ふことを聞いて居つたので、槍ヶ嶽が日本第二の高山であるかどうかはしばらく置き、果して槍ヶ嶽よりもこれらの山々が高いかと云ふことについては大に疑を存して居つた、ところが其後本會會員で親しくこれらの山々を踏破せられた方々の御話を承て見ると何となく常念の方が槍ヶ嶽よりも高いと云ふ樣な氣がして來た、しかし前日常念の絶頂から

槍を望み、今又槍の絶巓に立つて常念、大天井（二の俣の天上）等を望んで之を比較すると、どうも槍ヶ嶽の方がこれらに比して可なり高い樣に思はれる、此附近では槍ヶ嶽と穗高山とが傑出して居つて他は皆それよりも低い樣に思はれる、槍と穗高とではどちらが高いかと云ふことは一寸考へもので或は穗高の方が少し高くはあるまいかとも思はれる、さてついでながらこゝから眺めると乘鞍嶽を越えて御嶽が頭を出すので、槍ヶ嶽が乘鞍に比して非常に高ければとにかく、それでない限りは御嶽の方が乘鞍よりも高いと云ふことが考へられるのである。

測量標のあるところより北の方に突出した岩頭にある小祠に赴いて、昨年の夏以來この大槍と同化して、雲の夕、雪の朝に大自然のパノラマを眺めて暮した辻本兄の名刺に見參をして、やがて下山の途についた、所々の岩際に淸き白花を綴るミヤマナズナの姿を賞しながら前に休憩した處に歸着すると外人二名と邦人一名と人足數名を連れて來たのに會した、この人足の中にはかの有名な上高地の嘉門治が居つたので、蒲田へはいづれの谷を行く方がよいかと問ふと左股（槍ヶ嶽の絶頂より望んで右にあるもので蒲田の方からは向つて左にある谷）は近頃水が多くて行かれまいと云ふので右股を下ることに決し、さらばと午前九時こゝを出發して蒲田に向つた。

自分等は中房を出發するとき槍ヶ嶽より尾根傳ひに笠ヶ嶽まで行かうと思つて來たのであるが、少し米が不足しさうなので計畫を變じて蒲田に下るとにしたのである（此の槍ヶ嶽より尾根を傳はつて笠ヶ嶽に赴くことは、その後會員石川光春氏によつて決行された）、自分等はこの蒲田の溪谷をはじめて小島氏の槍ヶ嶽の紀行で紹介され、後林並木氏の紀行を「山岳」の誌上で拜見した位で、あまり都人士の通過したことのない處である。

岩石の崩れてがら〳〵して居る上を進むと間もなく雪溪になる、烏水氏の紀行に綠草が敷きつめた樣になつて居て其の下に岩角が隱れて居るので不意に足を嚙まれると云ふことが書いてあつたが、今はまだ大部分は雪で蔽はれて居るし、又雪の消えた處も草が未だ芽を出さぬので、岩角があらはになつて居るから不意に足を嚙まれる憂もなく、却て歩きよい位であらうと思はれる、やがて雪消の水が少しづつ集つて來て岩と岩との間を流れ、此の流れはだん〳〵集つて來て谷川となる、此の谷まで下る間は至つて樂であつたが、これからは岩石も大きくなり、水量も多くなつて下るに從つてだん〳〵險阻になつて來る、やがて谷がやゝせばまつて下を通過し難いところに來たので、さてこそ所謂「熊飛」であらうと思ひ、左の崖に攀ぢのぼつて見ると、何だか烏水氏や林氏の紀行に書いてある熊飛とは樣子がちがつて復川の方へ降る樣な具合になつて居る、水がもつと少なくなつて居ると此の處は下を通れるので、別段熊飛などと思ひ違へるほどのところでもないのであらう、或は大きな岩石の腹を横に傳はり、又は樹の枝や蔓にすがつて岩角

を下つて行く中に、先に立つた人足の一人がつかまつた蔓がもろくも切れて、あつと云ふ間に岩と岩との間に落ちてしまつた、上からは岩の角にさへぎられてどこに落ちたのか判らないのに、そのまゝ彼も這ひ出して來ぬので、一時は非常に心配して、下つて見たらうしろの岩で頭を打つたらしく、眞青になつて居つたが、思つたほどでもなく、やがて起き直つて歩き出したので、一同愁眉を開いた樣な次第であつた。

こんな風で或は右岸をたどり、或は左岸に渉りながら下つて行くと、いよ〳〵眞の熊飛に來た、こゝまでにも所々に兩岸がせばまつた處もないではないが、それでも可なりの距離があつた、しかしこゝに至ると兩岸は切り立てた樣な絶壁で其の間が僅かに數間に過ぎまいと思はれる、そこを通じて水は勢こんで流れるので、こゝより下はもはや直接川に沿ふて通行するとは出來ない、そこで左に切れて笹の中を掻き分けて行くと、間もなく一軒の板小屋に達した、時に午後の四時半、小屋の前には笹のない平な地が可なりあつて、そこ一面に材木の截り屑が厚く堆積して、上を踏むとふはりとして蒲團の樣である、小屋の前に油紙が乾してあつたからこの頃人が泊り込んで居るのではあらうが、山へ仕事にでも出て居るのであらうか中をのぞいて見ても誰も居らなかつた。

この小屋から下は笹が苅つてあつたので幾分か歩きよく、やがて復び河原の石の中を行くと間もなく左股、右股の合流點で、對岸には新しい木小屋が見える、この處から又少し河を離れて進むと道の側に桑畑が少しばかりあつた、合流點から蒲田までは一里少し餘りで、蒲田は川の右岸にある、蒲田から七八丁程手前で上高地の方から中尾峠を越えて來る道に合し、右方に河岸から沸き出る湯氣をながめ、太い針金でつり上げた橋を渡つて七時十五分蒲田に着いた、まづ松下旅館に赴いて椽に腰を下ろすと中から雪袴を着けた主婦らしい女が出て來て「御出でなさい」とも何とも云はずにたゞじろ〳〵と一同を眺めまはす、何だかうす氣味惡るく、泊めて呉れろとこちらから口を切ると、米がないから泊められぬとことはる、强ひて賴むと不承〳〵に袋を持つて下の家に米を求めに出かけて行つた、後に聞くと蒲田と云ふところは、どこの家へ行つてもみなこんな風で、もしはじめに入つた家に無理やりにでも何でも泊つてしまはぬと、他の家へ行つてもどこでもことはられて、終に泊りそこねることがあると云ふことである、奥の一間に案内せられて行つて見ると、室の造りなどは中々立派である、しかし吾々の案内された部屋のみは疊が敷いてあるが、他の部屋は皆板の上へ莫蓙が敷いてあるのみで、歩くと足にことんと當り、敷居が一段高く出て居るので、暗やみで歩くと危險である、中房を出てから四日目ではじめて人里に出たので、何と云つても石小屋へ泊るよりは窮屈でなく、又これで日本北アルプス中央部の横斷もすんだから湯に入つて來てからは間もなく高鼾、夢は果して那邊に飛んだで

あらうか。

附記、翌二十八日は笠ヶ嶽に登つた、とつた道も案内者も林亜木氏の採用せられた者と全く異ならず、且つは笠ヶ嶽の頂上にては霧の爲めにあまり眺望もなかつたから別段に云ふこともない、たゞ此の山でムシトリスミレが咲いて居るのを見た、別に珍品でもないけれども余の今回の旅行中でムシトリスミレを見たのはこゝばかりであつた、しかし全く此の附近の他の山にないとはもとより斷言は出來ない、槍ヶ嶽から尾根傳ひに笠ヶ嶽に來る途中の植物も、槍ヶ嶽附近と變りはないが、たゞ此の方面にはクモマグサがあつたと云ふことを石川氏から承つた。

二十九日は中尾峠を越にて上高地へ泊り、三十日は疲勞やすめに一日滯在して附近へ散歩をした。

三十一日は嘉門治を案内として奥穗高へ登る、この登路も林氏の紀行に詳しいからこゝには述べないつもりである、たゞ奥穗高よりも却つて其の北にある一峯が大きくて且つ高い樣に思はれる、又類藏はかつて槍ヶ嶽から尾根傳ひに穗高に行つたと云ひ、嘉門治はとても通行されない處が一ケ所あると云ふ、いづれが眞か類藏を案内にでもしてこれを確むる勇士はないであらうか、植物ではミヤマオダマキとオクヤマワラビに就ては前回に述べたが、ミヤマオダマキは此の行中、たゞ穗高に於て見たのみである。

八月一日、上高地へ落ち合つた會員總勢そろつて七人燒嶽の登山をした、これにつきては前號に高野氏が詳しく記されたから別に云ふことはない。

二日は穗本峠を越に、島々より馬車で松本に出で全く日本北アルプス中央部の横斷旅行を終へたからこれで筆を擱く。

常念嶽烏川の登路に就て

（河田生）

常念嶽には、小島烏水氏一度信州中房温泉より登山を試みて以來、この方面よりの登山者、頗る多きを加へたるも、一方烏川方面の登路に至つては、かの外客ウエストン氏が一八九四年に通過したるを除きては、之を上下したる人比較的稀なるが如く、從てこの道に關する記事も亦少なきが如くなれば、疎漏の觀察をも顧みず、余が昨夏(四十一年)中房方面より常念に登りたる後、この道を下りたる時のことを左に畧記することゝせり。

九月十一日、二俣小屋を發し、奥常念登山を了り、北麓の小屋（木製新設）に泊す。

翌十二日、午前五時三十分常念の小屋を出發、常念、ヨコヲトリ兩山の鞍部を東に向つて下る、始めは灌木多きも、稍下りて喬木帶に入る、林中に小屋の遺跡を見る、猶下れば やがて岩塊磊々たる澤に出づ、これ烏川の源流の一つにて、後左方即二俣天上の方面より來る一溪を合せて、水量大に增加す、稍下れば殘雪溪の左右に横たはる（時期少しく早ければこの邊總て殘雪を以て埋めらるゝといふ）其の下方にて又左方より一溪の來るに會す、水量少なし、此處にて朝食の用意をなす、時に七時五分、蓋し常念の小屋は水に不便にて、全く得る能はざるには非ざれども、半里程西の山腹に下らざる可らざるを以てなり（尤時期猶少しく早ければ小屋の附近に殘雪あらんもこの時は毫も無かりき）。

然るに此の邊は、前夜降雨ありしと見え、枯木を集めて點火するも、皆濕り居りて容易に燃え付かず、遂に一行三人の朝食を終るに優に二時間を費やしたり、此の邊溪の兩崖仄立して頗る狹隘の感あり、九時十五分又下り始む、暫くは亂立せる岩石の上を飛びつゝ下る、溪漸く廣く、兩崖に沿

ひて雜木林を見るに至り、屢その林中を出入す、林中には岩魚釣の通行する細徑微かに通ず、然れども始めは極めてわかり惡く、我等普通登山客には發見すること難し、溪には漸次巨岩の顯はるゝを見る（花崗岩なりしと記憶す）、水量亦漸く多く清洌を極む、徑は常に川の左岸を通ず、下ること一時間許、道も稍わかりよくなり、漸次川と離る、此の邊人よりも高き雜草、細徑を挾んで茂り、征衣悉く霑ふ、但この續きの山などにて屢登山客を苦しむる、根曲竹の攻擊に遇はざりしは有難かりし、やがて朽ち果てたる獨木橋にて右岸に移り、再一橋を得て左岸にかへり、益す川と離れて山腹を行く、此の邊より道は立派なるものとなり、馬をも通ずべく、山麓の村よりは日々草苅りに來るといふ、烏川は既に遠く離れ去り、右の方脚底遙かに蛇行するを見る、炭燒の煙山間の所々に揚る。暫らくにして、谷は俄かに開け、道は終に、アルプス前山の裾野ともいふべき所に出でたり、顧れば溪の奥は暗霧に閉されて、いづこを常念とも、定かならず、行く手には、千曲山脈、霞を帶びて走り、松本平其の下に開け、犀川帶の如く流る、離山とかいふ小さき禿山を右に見て、正午、牧の村外れに出づ。

桑畑を横ぎりて、再烏川の岸に出で、川原を歩して右岸に移る、このあたり殆ど河床に水を見ず、田圃の間を行くこと一時間にして、漸く東穂高の町に出でたり、こゝに晝食を終り、同行の案内山崎惠喜藏（類藏の息子）とわかれ、人力車を傭ひて、薄暮松本に着せり。

之を要するに、烏川道は、常念の八合目位迄を烏川の溪によりて登るものにして、途中別に危險なる箇所もなく、里程も割合に近く、尤も確かなる處は知れざるも、大凡常念小屋より牧迄三里、牧より東穂高迄一里位と思はるれば、登山道としては比較的容易なるものならんか、尤も熟練なる案内を要することは勿論なりとす。而して以上記せる處は、奥常念北麓の小屋より以下の事なれども、烏川の登路も、中房方面よりの登路も、共に小屋の附近即常念ヨコヲトリ兩山の鞍部に出づるものなれば、小屋より奥常念の絶巓に至る登路は、兩者格別の差異なきものゝ如し、尤も此の行余が案内のとりたる登路は、通常中房方面よりの登路よりは稍東に寄りたるものなりと聞けり、登路といふとも、別に定まりたる路にはあらで、稜々たる岩塊の重疊せる急斜面を、ひた登りに登りて絶巓に至るものなりき。

（中村清太郎）

諏訪方面よりの立科山

立科山の登山口中、南佐久の畑、北佐久の蘆田などはよく知られたものであるが、中央東線の貫通した今日、東京から最も便利なのは、諏訪方面であつて、殊に北山村湯川は、最も適當な出發地點であらう、此村は大門峠の通路に當つた一驛で、茅野停車場から凡そ三里弱、早朝飯田町を出發すれば、夕刻には樂に到着することが出來る。

湯川から瀧の湯溫泉迄、一里許りの間は、裾野の緩斜面で、

立派な路がある、湯の上手で湯川(或は瀧の湯川)の溪流を横ぎつて、少し許り急な登りを終ると、又た緩かな傾斜となつて、前面には立科山と横嶽とが頭上を壓するやうに聳え、後の方には甲州アルプスの大傑が皆な見える、此處から見た仙丈の頂上の刳れは、實に奇妙である、木曾駒も見える、追々落葉松の粗林が始まり、やがて小流を横ぎる、之が最後の水で、之から上では全く水を得られない、(湯川より此處まで約二時間)。夫から稍や傾斜の著しい、屈曲した路を登ると、裾山の間の平地に出で、草が深く大岩が處處にある、蝦墓岩とも名くべき一大岩の右を過ぎ、草を押し分け、三四町も行き、左に折れて急な登りとなり、左前の山背に登る、登り切ると又た鈍い傾斜であるが、始めて西の方が開け信飛界の大山脈は一眸の裏に見える。

此處までは大した傾斜の處もないが、之から俄かに急斜となり、針葉樹の密林中の登りとなる、例に依つてサルオガセ長く垂れ、蘚苔堆い林中を木の根、岩角を頼りに、一時間許り攀ぢ登ると、少し下りとなつて、又た急な登りとなる、愈々本山の登りにかゝつたのであつて、登路は右諏訪郡、左北佐久郡と云ふ郡界の目標に三間幅許り、樹木を切り明けた處を上る、倒木に妨げられるので、相應に骨が折れる、一歩一喘と云ふ狀態で、漸く頂上に近くと、樹木の高さは追々減じて、偃松が現れて來る、頂下一二町の處から、全く岩山となつて、程なく頂上の一端に着く、自分は午前六時十五分湯川を出發して絶頂に達したのが同十一時、休憩時を加へ、五時間弱を費した。

立科の頂上は、岩石磊々たる岩原で其中央は緩き窪みを成してゐる、蓋し噴火口の遺跡であらうが、決して深い孔などはなく、只だ窪い丈けである、上田圖幅說明書に據ると、頂上の直徑百三十メートル、窪地の深さ十三メートルに過ぎずと記してある、東の緣の最も高い處に、一等三角標の櫓がある、海拔二千五百三十メートルと註せらるゝのは、此處であらう、窪地には蓼科神社の小祠がある、白木造り四尺四方の大さで、扉は破損して跡方もなく、神體としては、僅かに一枚の板が、正面に張られてゐる許り、板の面には「奉建替蓼科神社長野縣第七大區鄕社御本宮棟札」と記し、其兩側に「紀元二千五百三十二年」、「朝家御繁榮」、「政上御安穩」、「明治九年」の文字があり、下の方に大工、會盟祠掌、祭主祠掌、本願主等の姓名が列記されてゐる、神社の東北に面してゐるのは、佐久郡から祭祀した故であつて、此方面が表口である、諏訪方面は裏山の格で、湯川には、蓼科神社の里宮が無い。

自分の登山したのは、昨年八月二十九日であるが、頂上の岩罅にはガンカウランが一面に繁茂し、之に交つてコケモ、イハカヾミ、シャクナゲ、タケカンバ等があつたが、偃松は殆んど見當らない、古い書物に依つて、偃松密生の光景を想像して登つた自分は、意外の感に打たれた、人夫の話では、佐久郡から雨乞の爲めに登山した農夫等に依つて、燃き盡された故であるさうな、以前神社下から湧出したと

云ふ水も、右の爲めか全く涸れて得られない。

立科の山頂は、流石に高山の趣はあるが、跌宕雄偉の景を豫期すると間違である、岩石は火山に普通な赭色粗鬆な熔岩でなく、極めて堅緻なる帶紫色の安山岩で、凄い處はないが、頗る美しい、此美しい岩原の景色は、他に比類なき一奇觀であると自分は信ずる。

頂上に近づいた頃から、遠方の山頂には、大分雲が懸つたので、眺望について詳しいことを述ることが出來ぬが、位置が本州の中部にある丈け、北日本アルプスを、一目に遠望するには、唯一と云はねばなるまい、富士は八ヶ嶽と重なるから、或は見ねないかと思ふが、生憎雲に妨げられて、解決出來ずに終つた、高山植物は、自分の素人目では極めて乏しい、八ヶ嶽などゝは、無論比較にならぬ。

蓼科を立科と書くのは、何日頃からであるか、自分には取調がつかぬが、どうも蓼科の方が正しくはあるまいかと思ふ、蕎麥の花が信州高原を彩るからは、蕎麥が信州の名物であるからは、信州の山に一蓼科山があつても、惡くはあるまい、兎に角自分は此優美な名稱の方を好む、其他此山には諏訪富士、高井山、飯盛山等の異名がある、飯盛と云ふのは山容から名けたものであらうが、凡俗で感心出來ない。

立科に登山を行はるゝ人は、更に一日を費して、其東南隣なる横嶽に登ることを御勸めする、自分は登らなかつたが、一寸面白い山ださうである、此山の北には龜甲、二子と云ふ二つの小さい池もある、立科と横嶽の間の低い處は、諏訪から南佐久の高野町へ越す通路で、人夫は大河原峠と呼んで居た。

（辻　本）

鳳凰山にて採集せる植物の目錄

從來鳳凰山方面は、專門家の採集が、まだ餘り行はれたことを聞かないやうであるから、自分の採集した少し許の植物を取り纒めて、次に記して見ることにした、勿論頂上目標の登山の序に、路に當つた或者を採つたに過ぎぬから、所產植物の一部をだも、表すに足らぬであらう。

表題に鳳凰山と記したのは、廣意義のつもりで、地藏、藥師等より山麓に至る地をも含む、植物の名稱は武田久吉氏の鑑定を煩はしたものである。（明治三十九年及四十年八月採集）。

フクロシダ　ウシノケグサ　サルマメ
ツバメオモト　タケシマラン　マヒダルサウ
シロバナノエンレイサウ　クルマユリ　コフタバラン
キソチドリ　ゴセンタチバナ　キヌタサウ
クルマムグラ　ムカゴトラノチ　ミヤマミヽナグサ
ビランジ　トリカブト　ヤマチダマキ
モミヂショウマ　サラシナショウマ　カラマツサウ
ハクサンイチゲ　チサバゲサ　スカシタゴボウ
ミヤマハタザホ　クモマナヅナ　クロクモサウ
ヅダヤクシユ　コガ子イチゴ　シロバナノヘビイチゴ
チングルマ　ヤマブキショウマ　ナヽカマド
ウラジロナヽカマド　タイツリワウギ　コバノイチヤクサウ

ケンナイフウロ　キバナノコマノツメ　ヤマセンコ
ヤマウイキヨウ　ツマトリサウ　ツガザクラ
ツリガネツヽジ　タウヤクリンダウ　チヤマリンダウ
セリバシホガマ　ヨツバシホガマ　キバナノシホガマ
ミヤマコヽメグサ　リン子サウ　ホタルブクロ
Adenophora sp.　カウモリサウ　カニカウモリ
アキノキリンサウ　ウスユキサウ　タカ子ウスユキサウ
ミヤマヒゴタイ　チタカラカウ

武田氏に依れば、リン子サウと、タカ子ウスユキサウとは、甲州の此方面の山では、珍らしいさうである、又Adenophora sp.は、ホタルブクロと共に連嶺中海拔約二千五百メートルの高距で採集したもので、種名は追て武田氏より報知があることゝ思ふが、何か珍らしいものであれば、宜いと思つてゐる。

（辻　本）

信野植物採集略記

仙臺に赴任してより既に七年、いつも奥羽地方の高山を跋渉し、年々同じ地方ばかりに飽きたると、別に面白き植物もなき樣なればとて、本年は信濃に一二の高山を見舞ひ、歸路幾年ぶりに、一寸日光に立よる事に決した、信濃の方面につきては、此方面に最も明なる知識を有せらるゝ烏嶺氏の懇篤なる敎示を仰ぎ、日數の都合上、八ヶ嶽及び戸隱山を選擇せり、七月二十二日同志者と共に仙臺を發し、二十三日信州南佐久郡馬流につき、二十四日は本澤溫泉といふ順に進みて、二十六日横嶽に登り、茅野驛を經て二十九日長野に達し、翌三十日は飯綱山に、越えて八月一日戸隱表山に登り、四日に至り漸く長野に歸りて日光に向ひ、六日女貌山に登りて歸仙の途につけり、豫定の日數十有二日、到る所種々の故障に遇ひ、豫定を超ゆる事五日餘、而して遂に豫定の高妻山及び白根山を見舞ふに及ばざりき、過ぐる所何れも路程頗る明なるの地、本誌既に之につき詳細なる紀行あり、亦拙文以て蛇足を添ゆるを要せず、且余等の此行、我學界にありて比較的未知なる蘚苔を主として採集し、加ふるに奥羽地方に見ざる數十の顯隱花植物を採集せんとするにあり、之亦本誌に詳細を報ずるの必要なき所、よりて萬般を畧し、只余が信濃の山につきて初めての感想と、途中の失敗とを記して此記を終らんとす、始め御代田の驛につくや、午前五時、此日を以て本澤に至らんとす、而して手荷物至らず、徒に兩毛線に於ける不親切を鳴すも甲斐なし、驛員曰く、午後一時に至らざれば着せずと、遂に此日の行を馬流に止むるに決し、附近を採集す、ハナハタザオ、シャジクサウは我奥羽に見ざる所なり、馬流より本澤溫泉に至る凡四里半、次日午前六時牧生館を發し午後七時本澤につけり、途中、キンバイサウ、クリンユキフデ、ジヤカウチドリ、ニヨホウチドリ、オサバグサ等あり、タカ子キ、ミヤマミヽナグサ等余等に珍品たりき、本澤溫泉に近く凡二十八町にして森林に入るや、木といふ木は蘚苔を以て蔽はれ、未だ奥羽の地方に見ざる所、予等採集を縱にせしも、尙深く入りて探るに及ばざりき、深く以て遺憾とす、同志若し

茲を見舞ふあらば幸に一顧を與へよ。

八ヶ嶽は高距の割合に登路短く、道亦よく通じ之を奥の山岳に比するに早池峯の嶮（嶽口）に及ばず、栗駒と里程よく似て頗る平易なり、しかも植物の豐富なる、比すべきものゐるを見ず、本澤溫泉は人夫に乏しく、予等豫め出發の日を告げざりしを以て遂に一日を多く滯在せざるを得ざるに至れり、夏澤峠より八ヶ嶽に至る植物は、予等に取りて珍らしきもの多きも、今一々之を記せざるべし、峠は亦蘚苔に富むも、之を前記の森林に比すべくもあらず、八ヶ嶽は登山極めて平易なり、之を以て園藝家の入ること多く、珍品或は絶滅の虞なしとせず、茅野方面にはリンチサウ、多く、亦頂上に搜索する必要なし、ヤブヘウタンボク亦多く、路傍水蘚に富む。

長野戸隱間は田道にして、車馬を通ずべし、予等亦豫め駄馬の準備を命せざりしを以て、遂に高價なる人夫賃を仕拂はざるべからざるに至れり、曰く戸隱より長野に到る、賃錢極めて廉なるも、長野より戸隱に至るには、一日前に命せざれば駄馬のゐるなしと、予等其正否を知らず、飯綱山は長野戸隱間の一小山なり、予等之を輕視し、案内者を待たずして登り、道を失し、一行四人、二人は幸に戸隱に出でしも、二人は方位を誤まり遂に山中に露宿せり、輕舉は宜しく採集家の愼むべき所なり、タテヤマウツボ、ウチヤウラン（白花）ハリガネカヅラ、ニヨホウチドリ、クロバナノヒキオコシ、エゾノムカシヨモギ等多し、予等二人常に道路に近く探りしも得る所なかりき、戸隱に至るや久山氏に乞ふて泊し、八月一日案内者曾根原峰太郎を雇ひて登山せり、彼は熟練なる案内者にして、絶えず微笑を帶びつつ予等に從へり、彼は予等が採集せる間、常に最後のものを待合せ、我奥羽地方に於ける如く、予等少しく採集して後、道に出づれば即ち案内者の影を失ふ樣のことなかりき、亦熱心に路傍の草木に注意し其不明なるものは之を予等に質せり、奥社附近に蘚苔を探り、シキンカラマツ、クリンユキフデ、ミヤママンチングサ、キンセイラン等を採り、頗る時を費せしが、奥社に詣し、社務所の勝手口を通り拔けて險路にかゝる、道始より急峻にして奥の諸山よく之に比するなし、逢棚にヒメクモマグサを採り、蟻の戸渡、劍の及渡の嶮を超へ、前後にキバナノアツモリサウ、及タテヤマウツボを採り八方睨に至るや、茲に前古未曾有の珍事出來せり、　予等の茲に至るや案内者予等に勸めて曰く、採集家の茲に到る、必ず茲を下りて採集すと、予等前路を急ぐと、一は予の調査せる範圍に於て、別に茲に予等の希望する植物なし、敢て其言に從はずして頂に一休す、彼れ獨り降りて採集せり、既にして前行せんと欲し、案内者を呼ぶ答なし、頻に大聲を發するも應ずるなし、少しく降りて之を求む、影なし、百方搜索するも得ず、徒に想像するも甲斐なし、待つと半時間餘猶至らず、前行せんも道明ならず、遂に午後三時を過ぐ、天候險惡黑雲空を蔽ふて至る、徒に待つも益なし、而して予等歸路に迷ふの虞あり、曰く

下方は斯の如く草木繁茂せり、萬一の虞なし、飯綱の過を重ねんよりは歸りて之を報せんと、遂に前行を斷念し、彼の殘せる籠の中に握飯と草鞋を容れ、待つこと多時、愈よ來らざるを以て前路をとり、歸路につく旨を紙片に記し置き、歸りて之を報ず、翌朝報あり、曾根原遂に歸らずと、搜索隊と共に又八方睨に至りて附近を搜索す、得るなし、午後一時に至り報あり、曰く發見せり、但し近く到るに道なしと、既にして亦報あり、一人綱を以て身を縛し漸くにして之に達せりと、嗚呼昨の好案內者たりし曾根原は遂に現世の人にあらざりしなり、如何にして斯くなりしか、徒に想像するに過ぎずと雖も、或は岩上に採集の際、執る所の岩角又は樹根剝離し、顚落せしならんか、更に不運なる彼は多數の茂生せる草木にも身を支ふるの餘地なかりしか事數分の間に起り、予等の一人も彼に近く居りしものなく、大岩塊を隔てゝ談笑せりしかば、當時何等の音響をも感せざりしなり、予等岩塊に登りて採集するの際、不安を感ずると不少、しかも今日まで事なかりしは天幸の致す所、予は深く登山者の徒に輕擧妄動することなく、深く其自愛を祈るなり、予等曩に飯綱の珍事あり、今亦此變事あり、爲に豫定の日數を重過すること少からず、遂に奥山行を止めて歸路につくに至れり、宿主久山氏懇篤に予等を待遇せられ、前後の變事につきても其奔走を煩はせしこと少からず、深く謝する所なり。

女貌山につきては別に記すべきなきも、始め予故五百城書伯にきく、女貌の登り嶮にして里程頗る長く、山中に一泊せざれば充分の採集をなすこと能はず、然らざれば午前四時出發、夕方歸着の豫定を以てせざるべからずと、玆年八月六日午前四時三十分出發、登山の途につく、其後予等の目肥へたるか、或は植物の少きか、別に採るべきなく、途中僅に、ミヤマギク、イハシモツケ、イハギク、ミヤマヌカボ等を採りたるのみにして七瀧に至り、庚申草を採り、唐澤の小屋に至る迄にニヨホウチドリ、カモメラン、ホソバセリバワウレン多し、小屋は大破して用ゆべからず、附近には只ギョウジャニンニクを得たるのみ、零時頂に達し、午後二時歸路につき、午後五時三十分日光に着けり、登路凡四里之を岩手、早池峯の、殆んど同距離に比すれば易く、鳥海、月山の七八里には、到底比すべくもなし。

（飯柴永吉）

鋸山の運命

小供の時分、小學校の先生から、房總半島は丘陵に富み、高山に乏しいが、房總の國境に聳える鋸山は、やゝ高く、其形鋸齒狀をなすを以て有名であると敎はつて以來、地圖を見る毎に、房州邊を船で通ふと鋸山が目立つて見ゆるに相違ないと想像して居つた僕は、今回好機を以て、其鋸齒に跨がつてみたのである。

東京灣から房州行の汽船に乘つて、山の北麓金谷へ上陸した、少しく左して電線に沿うて登道を求めた、一時間餘で

鋸齒に觸るゝ事が出來た、三百二十三米、千尺に足らない標高である、然し房州第二の高山であらう、從來鹿野山を房總第一の高山と聞いてゐるが、地圖によつて見ると、妙見山が最高らしい、鹿野山は鋸山よりも低い。

鋸山の北面は樹木が少く、所々に山骨現はれ、南面即ち保田方面は樹木が繁り形態奇拔な岩も多い、北面の鋸齒は鋭く、南面のそれは鈍い、故に遠方より鋸形を見やうと思へば、北面を眺めるのがよく、山坂の風光が見たくば南坂に遊ぶべきである。

樹木といつても、東京附近の武藏野の雜木林にある如き、櫟、抱(コナラ)、楢、榊などは殆んど見えない、神社佛閣の境、若しくは底園に植ゑられる樣な、まさき(キミ)、柃(ヒサカキ)、榊、木冬(ヒイラギ)、莽(シ)草、婆羅樹(トベラ)、もちのき、海桐花(トベラ)、枇杷、櫧、椎、たぶ(ア)、馬酔木(ヒ)等で、所謂亞熱帶常綠濶葉樹の林相である、四國九州の山林は其樣なものが多いであらう。

北面の頂上附近即ち鋸齒の根元のあたりに、數個の石取場を設け、多數の石工が居て、どん〳〵石材を切り出し、修羅の樣な裝置で谷底に落し込み、房總石材運搬株式會社は軌道によりてこれを、山麓から海岸に運んでる、石材採取の跡は船上からも黑く四角に見えるが、此處に來て見ると、直立數丈、危い屏風の樣に上から下に削り取られた斷崖もあれば、鑛山の如くに底深く掘り込んだりして、鋸の齒も缺けて落ちさうな處もある、此調子で進んだら、何うなるであらう、旅順の山岳は砲彈のために山形改まつたさうであるが、鋸山は鶴嘴によりて山容が變せないとも限らぬ、硬い砂岩であるから、山崩も容易になからうし、少々位の地震があつても平氣であらうが、何んだか行末が案ぜられる、汝鋸山の運命を思はざるを得ない。

南面の中腹に日本寺あり、今は漸次衰退して古の盛況を見られないが、岩石樹木の勝景が南坂に多いので、寺も風致も保たれて居る、房州の名稱地として知らるゝに於ては、或は再び榮え賑ふかもしれぬ。

石材採取は北面のみで未だ南面に及ばさないのは風致のためにも、寺のためにも悅ばしいと思つて居ると、忽ち東の峰に人語と斧の響を聞いた、ついて見ると南面、南齒の一角、既に鶴嘴の閃きがある、北面は鋸齒の根元に切りつけて頂上の鋸齒狀を損せない樣であるが、南面はもう頂上鋸齒の眞面(まつぺん)に切り込んである、石材の搬路が日本寺の境內を貫通してゐる、これも追々盛になつて、やがては南坂も北面の如くに荒されて、日本寺は益々悲境に陷るであらう、寺の扉の正面に、古刹保存費の寄附金募集の公告を貼り付けてある。

古刹保存も好ましいが、石材採取問題も獨り鋸山の運命を左右するのみならず、日本寺の盛衰にも一大關係がある樣である。

（山　本　巔　坊）

前號「十和田湖談」の中、方言毒を、歐洲產のグーズベリイと言ひたるは、誤りにつき取消す、尙ほ同號登山霧報欄に余が福島巢より森吉山に登る如く記しあるは、鷹の巢より云々の誤植と知らるべし。

ハサミ岩(安山岩の絶壁)

伊賀、伊勢、大和三國の國境に國見山と云ふ山がある、(農商務省二十萬分一地質圖には三國山と記せり、茲には參謀本部五萬分一地圖名張町圖幅に據る)、この附近は一面の山地で、大洞山、具留尊山、兜嶽、龜山、屏風岩などの峰々が國見の南方をひしと圍み、その谷々を縫うて、伊勢と大和を結ぶ初瀨街道や、この邊から伊賀の上野に達する名張道などが寂しく横はつてる、これら山々は太古の片麻岩系を破つて噴出した、石英雲母安山岩の塊りであつて、高さは千米突内外、その名は餘り世に知られて居らぬ樣であるが、山形仲々面白く、殊に至る所の山腹に存する絶壁はこの地方に特有の風光を與へてゐる。この絶壁は具留尊山、屏風岩、兜嶽に於ては殊に壯觀を極め、山頂に近き所より直下數十丈、幅三四町乃至十町位の大絶崖を現出してゐる、而してこの絶壁(土地の人はハサミ岩と稱す)は悉く柱狀の安山岩よりなり、殆ど直立してゐるのであつて、僕が兜嶽で測つたに九十一度を示す所があつた、又兜嶽の東につゞく八百九十三米突の名無し山の如きは、やはりこのハサミ岩が諸所にあるため東側山腹全體が七十度以上の急傾斜をなして居る、而して西側はかはど急でないから山は丁度烏帽子の樣に見える。

三日も費せば、この邊の山々は大半登り得るであらう、土地が交通に不便であるが、風光の奇は充分遠來の客を慰むるに足ると信ずる。

備考　この邊を探ぐるには參謀本部五萬分一地圖、名張町、及び高見山の二枚を携うれば充分である。

宿屋は御杖村字管野にゑびす館と云ふのがあつて、この附近では一番宜い樣である、外にろくな宿屋無し。

具留尊山を御杖村邊の人は龜山と呼んでゐる、地圖所載の龜山には別に名付けて居らぬ樣である。

管野附近に石炭と白雲母の出る所がある由。(那須生)

山岳寫眞と其器械

近來登山者にして、寫眞器を携へらるゝ人多きを加ふるが如し、こゝに新に山岳を撮影せんとして、器械を買求めらるゝ諸君のために、余の僅かなる經驗に由りて、山岳寫眞の要領を述べんとす。

○暗箱(カメラ)　登山の際携帶するには、輕量、簡便にして、且つ堅固ならざる可らず、此三つの條件は相互相反する事にして、輕量ならしめんか、堅固ならず、堅固ならしめんか、輕量ならず、此外器械は、其裝置をなすに於て、迅速ならざるべからず、登山に際し幸にして快晴なれば可なり、然れども少しく、風雲に會せば、一瞬時にして霧の閉ず所となり、又晴れざる事多し、斯る實例は、獨り撮影者のみならず、經驗ある所なるべし、斯る際に於て、急速に器械を裝置せざれば、目的とする山岳のカメラに入らざる事あるべし、されば、登山用としては、裝置の迅速と輕量、堅固

なるを要す、普通の野外暗箱は、堅固の點に於ては優らんも其組立に時を費す事多し、然らば手提暗箱の類可なりと云へど、元來手提暗箱なるものは、輕便を主としたるものにして、精密ならず、「ツアイス」のミニマム、バルモスの如き、ゴルツ氏のアンシュッカメラの如きは、輕量にして精巧なるものなるべしと雖も、他の在來の手提暗箱に於ては、登山用としては適當ならず、（登山專用の暗箱あれど、未だ內地に輸入されざるが如し）イーストマン會社のコダックの如きフィルムを用ふるより輕量にして、迅速なりと雖も、明細に焦點板より焦點を定められざると、望遠レンズを用ふるを得ず、此等の條件を稍々滿足せしむる暗箱は、近來流行せるプレモ形の暗箱にして、其前板を開きて、引き出せば直ちに撮影し得べく、レンズの一方を外づして撮影する場合にも、十分の延長あるべし、レンズも、焦點硝子も、外箱に包るれば外觸に耐ふべく、且つ其體裁も美麗にして、素人用として、良好なるものなるべし、此形は獨り、プレモ會社製品のみならず、他に其類多し、又、和製にては、小西商店のプラノの如き全く此形を模せるものなり、床板の延長は、レンズの一方を外したる時に於ても尙ほ十分延長し得るものなるを要す、此れ遠距離の山岳を撮影する時に間々、其レンズの一方を外づして焦點距離を長くし、影像を膨大する事あればなり、又特に望遠レンズを裝するには長き蛇腹を要するや論なし、此プレモ形の多くは其取枠エボナイトの差蓋のもの多く、輕量なるものなれば甚だ便なり、大きさは、手札二枚掛、カビヲを限度とし、其れ以上のものは、餘りなし、是れ娛樂家向きなればなり。

此外特別なるものあり、双眼暗箱、パノラマ暗箱等にして、前者は、實體鏡にて見んが爲めに撮影するものにして、後者は廣茫たる、景色を一枚の印畫となさんとする時に用ふ、普通のレンズにては、角度は其包含する七十度乃至八十度にして廣角鏡玉と雖も百度を越ゆるもの少し、然るに此暗箱にては、レンズは一方より一方に廻轉するものにして、優に百四十度の角を包含するものあり。

近來センチュリー社の發賣せるものにしてCirkutなる器械あり、此器械は高價なりと雖も、印畫の幅は六乃至十六吋にして、長さは十數呎に達するを得べく、角度は三百六十度一回轉をなすを得べし、此器も、パノラマ暗箱も、共にフイルムを用ふるものにして、此器の如きは一軸を中心として、暗箱を廻轉さするにあり、廣き山脈の如きを撮影するには、其包含すべき角度は廣大なるを要すべく、普通の寫眞器にては、數枚撮影して、つぎ合さゞる可からざるなり、然るに此等の特別の裝置あるものにては、優に全山系を撮影し得べく、殊にCirkut器の發明の如きは、パノラマ的寫眞の一革命期なりと云ふべし、然れども價不廉にして、娛樂家用として、果して用ゐ得るや否やは不明なりと云ふべし。

○三脚　暗箱と相當せざるべからず、而して又輕量堅固、簡便なるを要す、普通の三脚は其裝置に時間を要する事大

なり、且つ堅固なる點に於ては優れりと雖も、輕量ならず、アルミニューム、眞鍮等の振り出し三脚あり、一見輕量且つ輕便なるが如くなれど、軟弱にして、山岳用ならず、山巔等に於ては常に風强く、足場惡しければ振り出し三脚の如きは、暗箱の動搖する事多くして撮影に困難なり、殊に少しく大形にして、重量大なるものに於ては其憂愈々多し、されば形、量大なるものに於ては、普通の三脚を用ふるより外なし、近來、イーストマン會社の作れる、簡單なる三脚あり、木製、五段伸びにして、引き出してチヂ止めし、其頂上は脚を押し開きさへすれば直ちに、暗箱に裝し得べく、雲臺等の必要なし、元來此れは、コダック等に用ふるものなれば、大形の器械には用ゆべからざるや論なし、此三脚をブレモ形暗箱に附して用ふるに、同時に普通野外用暗箱に普通の三脚を裝して撮影する時は、前者が焦點を合して撮影し終れる頃、漸くに焦點を合するが如き差あり、一見其差たるや僅かなるが如くなれど、山岳を撮影する時は、其僅かなる時間の相違は、雲霧の位置に大なる差異あるものなり。

○レンズ　山岳寫眞にレンズの良好なるを要するは、普通撮影と選ぶ所なし、殊に山岳地に於ては、遠景を撮影する場合多ければ、レンズも成るべく良好なるを要す、一山一石を撮影せんとする時に、平地に於るが如く、器械の位置を接近せしめ、又遠からしむるの便、多くはなし、されば十分なる撮影をなさんには、良質なるレンズにして、各前後の玉は、各單鏡玉として用ゐらるゝものならざる可らず、斯るレンズに於ては、三種の焦點距離を有し、物體の遠近によりて、自由に影像の大小を定むるを得べし、遠き山系等を撮影する場合に於て、焦點距離を延長せしむる時は、極めて小なる影像も增大されて滿足なる結果を得べし、斯る目的よりしては、ツアイス氏のダブル、フローター、ゴルツ氏のパンター鏡玉の如き其最上のものなるべし、レンズの種類及び其効用の如きは、普通の寫眞書及び、商品目錄を見らるれば判明すべし、而して山岳寫眞に於ては極めて遠距離の撮影を要する事稀ならず、此等の場合に於て、普通レンズは、影像小形にして其用をなさず、斯る場合に於ては望遠鏡玉を用ふるを可なりとす、此等のレンズは普通レンズに比して其畫像の直徑、二乃至五倍に至る、去れば遠距離の物體もよく近距離に接近せしめて撮影し得べし、望遠鏡玉は、同じく各レンズ製造家によりて供給せらるゝを得べく、レンズは積極、消極の前後の兩レンズよりなり、普通積極レンズは、良質のアナスチグマットレンズを用ふ、されば、一個良好のアナスチグマットレンズを所有すれば、僅に望遠レンズの鏡胴と後玉（消極鏡玉）さへ求むれば、直ちに望遠レンズとなすを得べし、ダルメヤー氏の製造せる、アドンなる望遠寫眞鏡玉は普通レンズの前部に捻込て直ちに望遠レンズとなすを得べく、或は、直ちに前板に取りつけて撮影するを得べし、甚だ便利にして、且つ價格も他望遠レンズに比して廉なりと云ふべし。

速寫器（シャッター）は、普通用のもにて可なり、フォーカルプレーン、シャッターの如き極迅速の露出をなすものを要せず、此れ多くは不動的のものにして、千分一、千五百分一の如き極迅速度を要せざればなり、然れども、遠山等を撮影するには、手を以て鏡蓋を動かし得るよりは尙ほ早き速度を要する事あれば、適當なる、シャッターを裝すべし。

○外箱　暗箱、三脚等を携帶する時に是を入るゝ外箱は、成る可く雨水等の侵入し難き物質を以て作るべし、登山に際しては、間々强雨、霖雨に逢ひて、器械を浸し遂には、蛇腹の剝離する事あり、常に外箱を桐油紙にて包む事は、取扱に不便にして、可ならず、負ひ革は普通の如くなるよりは、背嚢の如く、背中に密着する如くすべし、登山に際しては、肩より掛くるに比して、歩行甚だ樂なればなり、且つ革の幅も、成る可く幅廣くすべし、尙ほ殊に背の當る部分は、汗等の浸透せざる樣特別に注意すべし、登山の際、人夫に器械を負はしむるには、一々鍵を掛け、開き難くすべし、此れ大に必要なることにして、無智なる人夫の爲めに間々取枠の蓋を開かれ、大なる失敗をなす事あり、彼等は乾板の如何なるものなるか知らずして、唯だ影像の寫り居るものと心得へ、試みに見んとなすものにして、此の爲めに間々大事の乾板を傷ふ事多し、器械は開くべからずと云ふと雖も、制すれば尙ほ、好奇心を以て竊に人なき時に取枠の蓋を開き見るものなり。

○乾板換函　一日に數枚の撮影をなすに際しては、其數に應じて、多數の取枠を携帶せざる可らず、此れ輕量なる主旨に反するものにして、此換函なるものを携ふれば、一箱に一打の種板を貯へて撮影するを得べし、近來布製の乾板差換用の袋を發賣せり、甚だ便利なるものにして、一個の袋中に取枠及び乾板の包みを入れて、袋中にて差換へ得るものにして、連山等を數枚に撮影する時の如き、極めて便利なり、又旅行等に際し旅宿に於ては適當の暗所なく、乾板の取換へにさへ困難する事多し、斯る際にも極めて、有効にして是非携帶すべきものなり、少しく考案せば自ら作り得べし、黑毛繻子一枚、赤金巾二枚にて十分光線を防ぎ得べく、余は自ら作れるものにて十分有効に使用しつゝあり、布製なれば、質量も少にして携帶に便なり。

○雜具　尙ほ暗箱にはなるべく、水準器を附すべし、暗箱と共に磁針を携帶すべし、一山を撮影するに當り、正確に其方向を知る必要ある事あり、又寫眞器を利用して、山岳の方向を定むるを得べし、暗箱を組立て、焦點板の中心に目的とする山岳の位置を正し、暗箱の方向を驗すべし。數日に渡る登山に際し、數打の乾板を携帶するには一、二打位づゝ、鐵葉製の箱を作り濕氣の侵入せざる樣すべし、又直接に外物と觸れしむる時は間々、其一二枚を壞つ事あり、僅少なる注意なれど登山に際して、風雨、水流、雪田等濕氣に侵さるゝ事極めて多し、大切なる撮影濟の乾板を全く不用に來す事なしとせず、此れ余輩の親しく經驗せる事にして是非に此用意あるべし。

初めて寫眞器を買ひ求めらるゝ諸君は、經驗ある知友に謀るか、或は極めて信用し得べき商店に就きて選擇すべし、然らざれば間々不正品を握り、大に損失をなす事あり、注意すべき事なり。

（高　野）

山岳寫眞の名家

山岳會は文明國にのみ限つて起され、又隆盛になつて行くやうである、山岳會―むしろ山岳に對する趣味を喚起することに最も與かつて力あつた人々は、誰であるかといふやうな問題は、一朝一夕で說き盡くされぬが、科學者でデ、ソッシュール氏や、チンダル氏や、文豪でラスキン氏や、畫家でデュレール氏、タアナア氏、セガンチニ氏等の如き諸傑は、誰が何といつても、數に洩らすわけにはゆくまい、が此外近代になつて、寫眞術で、山岳美を寫し出した元祖、ヴィトリオ、シルラ（Vittorio Sella）氏を是非とも加へる必要がある。

嚴格に言へば、山岳を始めて印畫に寫したものは、シルラ氏以前にも隨分多くあつたかに相違ない、併し立派な登山家であり、又山岳寫眞家として、繪畫に迫る名品を作り、世間に、山岳の寫眞を流布させ、山岳が寫眞の一題目として、この方面に專門家を出だすやうになり、果ては山岳寫眞展覽會が開かれ、寫眞雜誌が特別に「山岳號」を刊行するやうになつた趨勢は、このシルラ氏の力が最も多く與つて作つたと言つても、宜いくらゐで、此人は山岳寫眞家もしかういつた稱號が、許されるならば）の聲名上の元祖であり、又一大家であるとは、今日までの歷史で、否み得ないところである、然るに前記の人々が、有名であるに拘はらず、シルラ氏の名は、比較的（殊に本邦に）知られて居らぬやうであるから、こゝに紹介を書くことにした。

シルラ氏が、山岳寫眞の名家とも言はれるやうになつたのは、半分は氏の系統で、半分は氏の努力と、才能とである、此人の父はヴェナンジオ（Venanzio）といつて、伊太利のアルプス山麓ノヴァラ（Novara）谷地に家を建て、立派な工業場を有した人で、學術に嗜好を有つてゐたが、殊にその時代に、至つて幼稚な寫眞術に對して、研究を怠らなかつた、今より五十一年前（安政五年）寫眞に就いて、立派な論文を艸し、その當時、佛文や獨文に飜譯せられ、後にはローレー（Roret）の百科辭彙（エンサイクロペディア）にも、此問題で執筆したことがある。又シルラ氏の伯父は、クインチノ（Quintino）といつて、有名な伊太利の政治家であつた、此人は平民政治家の典型とも言はれた、人格の高い人で、今でもその黨與には、偶像のやうに崇拜せられてゐる、非常にアルプス山に趣味を有つて、山岳事業の熱心な保護者となり、死ぬときは、伊太利山岳會の總裁に推戴せられてゐた。

寫眞研究好きの父と、山岳愛護の伯父とに、薰陶せられて、シルラ氏は世に出た、十五歲のとき、この伯父に伴れられて、始めて山に登り、山岳の崇高偉大に、目も魂も醉はれて、家に歸ると、父からは研究中の寫眞の手傳ひをさせられる、

さうして父と二人して、苦心して器械（カメラ）の改良をやる、器械は段々完全に近づいて來る。

シルラ氏の生れたのは、父が、前に話した、有名な論文を書いた、翌年のことであつたが、十八歳のとき、學校生活を終り、軍隊に入つたが、父が死んだので、其空位を襲つて、毛織物製造所の社長になつた、それで商賣の方が忙がしいのであるが、シルラ氏は「時間が無ければ自分が時間を作る」といつた立志傳中の人物である、一分一秒間も空費しない、で好むところを勉強した、明治二十年、二週間の暇を作つて、アルプスの高峰に七回登山を行つた、翌年も大分に無理をやつて、ダアフイニイ、アルプスの連峰を、印書に收めた、又明治二十二、二十三の兩年には、カウカサスに二回登山旅行を試み、双方とも著るしい効果—登山と印書との上で—を擧げた、この時にシルラ氏の撮影した山岳寫眞の數量は、夥だしいもので、明治二十六年、チュリンで開かられ地理學大會で、懸賞出品の中に加はつて提出した數が、約四百五十枚、世間の耳目を聳かして、一等金牌、名譽褒狀を授けられた、これ等の印書は、後に米國ボストン府に開かれたアバラチアン山岳會に出品せられ、直ぐこの山岳會の買上品となり、今でも「シルラ印書集」の名で、大切に保存せられてゐる。

明治三十年に、アブラッジ侯に召されて、アラスカに遠征し、處女峰セント、アリアス山を窮めたが、この時の印書は、過度の濕氣のために、充分に用心したにも係はらず、不出來に終り、大きい種板を損じたので、其後覺るところあり、大きいカメラ（十二×十五吋）を使はず、大抵は小種板で廓大を試みてゐる、その翌年は、英國山岳會の連中と共に、ヒマラヤ山を征し、クンチンヂンガ山（Mt. Kunchinjinga）に登つた、歐洲人としては實に最初の登山である、このときは大崩雪に遇つて、登山困難をきはめたけれど、そのため、却つて空氣を清朗にして、印書は非常の成功であつた、この山での作品は、彼の傑作中の傑作とまで賞讃されたもので、中にも此山の北西から見た巨畫的大觀、簇々兀起の大峰と、荒蕩の峽谷を下る五つの氷河と、浮雲片々として、峰の一角に停なり、振り返つて下界を瞰たところを收めた作品は、絶妙といふ評判である。

ヒマラヤ旅行の後、兩三年は休養の時代であつたが、此時は既にシルラ氏が斯道の造詣深くなつて、名聲が益す高く、諸國から印書の頒附を乞ふもの、引きも切らず、その需要に應ずるために、助手を雇つて、印書を燒きつけるに忙はしいといふ程であつた、が間もなくサルジニア島に赴き、又アブラッジ侯に招聘せられて、熱帶阿非利加の、前人未踏の高山、ルウエンゾリ（Mt. Ruwenzori）を征服し、前のヒマラヤに劣らぬ好印書を齎らし返つた。この印書は今から三年前に米國で展覽に供された筈である。

シルラ氏の年齒は、本年五十歳未だ壯なりであるから、今後この上、如何に發展するか解らぬ、想ふに本文の始めに擧げた、知名の科學者、文人、畫家の如きは、未だ寫眞術

が發明せられなかつた昔、もしくは寫眞術が、至つて幼稚で山岳などが容易に手に合はなかつた時代の人々で、シルラ氏は、最も晩れて世に出でたゞけ、以上の諸豪とは、全く別の方面から、機軸を出して、山岳趣味の煥發に努め、さうして成功した人なのである。

シルラ氏の作品は、歐米の山岳雜誌に、散見せられてゐるが、一昨年の一月、ボストン府で刊行の雜誌「寫眞時代」(Photo-Era 第十八卷第一號)に同氏のアルプスの雪峰、氷河、溪流の危橋、マテルホルン山巔、氷河湖、山麓の山羊、カウカサス山氷河、ヒマラヤ山(二萬二千五百七十呎の山巔を望遠鏡寫眞(テレフオトグラフ)で撮影したもの)等の數枚が、複寫印刷されてゐる、これだけでも、大體の技倆を覗ふことが出來る。

シルラ氏の外に、山岳寫眞を以て鳴る人に、ワイムバア氏がゐり、クリスチイ氏がゐる、ワイムバア氏は、寫眞は寧ろ餘技に屬する方で、この人の事は、本號の「山岳圖書批評」の中で、紹介して置いた。

終に臨んで、本文は米國山岳會長、チャーレス、フェイ氏が、シルラ氏の功績に就いて、艸せられた一文(前記の「寫眞時代」雜誌に登載)を原として譯補したものでゐることを斷つて置く。

(烏　水)

山岳圖書批評

山水美論

小島烏水氏著

四十年の夏なりき、自分が信州中房温泉に滯在して居つた時、某中學校の卒業生だと云ふ一人の青年に遇つた、此青年は山岳會の會員で山岳誌上にて自分を知つて居ると云つて、附近の山地に就きて種々の質問を受けた、聞けば此青年は温泉宿に依賴してゐる人足が來次第に、燕嶽から大天井、常念、蝶が嶽を經て上高地に下り、歸京するとの事でゐる、余は曩に此地方を跋渉した經驗から、蝶が嶽より直に上高地に下るは、路が困難で趣味が無い、是非一ノ股から二ノ股に出て、槍が嶽に登るか、左なくば、上高地から穗高に登つて歸るがよからんと勸めたるに、青年はどこまでも前說をとつて動かず、余は餘りの不思議さに、何故かかる壯擧を企てながら、槍も登らず穗高をも究めずして歸るかと尋ねしに、此青年は烏水氏の日本アルプスの南半なる記事を讀み、登山に就きて大に興味を起し、氏の紀行文の通りに、自分も歩いて見たいとの考へを起したのでゐるから、一歩も違はずに氏の足跡を蹈んで見たいのでゐると云ふ事でゐつた、話しは之れぎりでゐるが、之れに由つて見ても氏の文章が如何に讀者を感動さする力がゐるかと云ふ事が分る、如何に長き文章にても氏の文を讀み始むると、途中で止める事が出來ぬ、又自分達も氏と同樣な旅行をして見たいと云ふ感じを起すのは啻に此青年計りではない、

現今の紀行文家中氏の文章程、色の有る肉の有る厚みの有る、文章を書く人はない、されば此山水美論も惡い筈がない、此本は四六版二百六十六頁の小冊であるが內容はなかなか變化がある、製本の體裁も澁い、緒言にも製本は西歐の或るカタログの意匠を模したと云ふ、近く出た太平洋畫繪畫集の體裁が、頗る自分の氣に入つたので、その通りを書肆に注文したのであると云つて居る、さて內容如何と繙き見るに甲斐山岳の形態美（一頁—七七頁）書中の大部分を占めて居る、之れは曾て雜誌山岳に登載せられたもので、次ぎは雪中富士登山記、不二の繪畫に就きて、不二山と淺間山、日本アルプスなる名稱、日本アルプス登山談、山を讃する文、紀行文論、紀行文續論、晩秋の自然と風景畫、芒の美、川の美觀、等である、中には雜誌園藝の友やみづゑで見た事のあるものもある樣だ、そこで甲斐山岳の形態美は審美上より見たる山岳なる一節が最面白く感じた、之れは實に著者が山岳に對する自己の態度を遺憾なく說明して居るので、文章以外に一種の興味がある、夫れから富士山論は氏の御手の物で批評するまでもない。

雪中富士登山記は內容に比して標題の勝ち過ぎて居る爲か標題を見て想像が大なりし爲め氏の富士に關する紀行文中最も趣味なし、著者は自からもしか思はずや、不二山の繪畫に就きては、さすがに富士通を以て任ずる氏だけある、恐らく如斯精細なる富士の形態論をする人は他にはあるまい、富士の研究に就きては著者は實に古今獨步である、不二山と淺間、山を讃する文、何れも頗る短篇日本北アルプス登山談、之れは常念山塊の跋涉記である、故に標題は內容に比して大に過ぐ、常念山塊と北日本アルプス主脈とは山の高低大小日を同じうして語るべからず、又文中の細目に至りては異論なきにしもあらず、紀行文及其の續論は之れ卷中の白眉、苟も今の紀行文を論せんとするものは一讀の價値あり、氏の紀行文に關する意見は左の數節で十分知ることが出來る。

紀行文と云ふものは山水の形骸に假托して、文章の技工を見せるものと解釋した時代もあつた、又紀行文は自然を描寫するものであるから、客觀的に、その變化を見て寫してゐればよいと信じてゐた時代もあつた、前者は「扇頭小景」に書いたものが多くそれで、後者は「不二山」で、その筆致を見せた、併し前者の誤せれる素より、後者も自然の爲めに自然を說明する、即ち言語文章で自然を註釋する傾きがある、是れが科學的筆致と云はれた所以であらう、その弊は、角力を取らずに、四十八手の捌きを講釋すると同じに、徑路は一通り解るが、力瘤も出ず、感興も乏しい、今の自分は自然の變化活動と云ふところに、力の表現を認めて、自分の感興と其の魔力と、しつくり結びつけたく思つて居る「雲表」にその通り現はれて居らぬのは、未だ大に到らぬ所があるからである、少なくとも、企圖するところはこゝにある（一七五—一七六）。

自然を主とする紀行文では、作者の小主觀を別にして、人間と自然とを親染さする機會が、小說中の叙景文に比して、稀有或は絕無である、實に作りにくゝつて弱るのです、さうかと云つて、文章をムヤミに擬人にすることは、幾回も繰り返されず、繰り返せば必然いやみなものが出來る、いきほい自然其物を人情化するとか、所謂萬有神化するとかするやうに、なつてしまふ、それを愼めば、純客觀の寫生、即ち自然の註釋書に陷り、科學的叙述となる恐れがある、自然の外形や、輪廓を描くのは、尋常科一年生の事である、人情化の程度及び方法が實に紀行文家の第一問題である（一九二―一九三）

こゝに我が紀行文と云ふのは、道中日記や何々に遊ぶ記的の、半ば實用的、半ば遊戲的の文學を指すのではない、現在を起點として、これからの紀行文は、余の信ずる限り、自然及人生の兩面を、自然の姿に透寫して見るものを云ふ樣になりはしまいか、小說との相違は、小說は人間を主とする、自然は舞臺のバックとして用ゐられるに過ぎぬが、余の所謂紀行文は、自然を目的格とする、前景も中景も自然である、遠いバックは神秘である、その中間に介まつて居る者は、人―作家自身である、然らば何故に今度の新らしき、紀行文は、自然を主とする樣になるか、これには說がある。（一九四―一九五）

晩秋の自然と風景畫、川の美感、何れも捨て難き文である、併し芒の美には遠く及ばない、氏の近頃發表せし者の內では、雲表の相摸野と此文とが一番興味がある、全體氏の文體と筆致とは斯う云ふ題目に最適當して居るかの樣に思はる、見給へ、雲表の日本アルプスの南半などでも、其の分量から云つても、內容から云つても甲州から中房まで（百六十五頁）の所が一番面白い、燕嶽及大天井（六十一頁）、奧常念（三十四頁）は之れに及ばない、全體僕などの登山記ならば「日本アルプス紀行に下界の記事書くも懶く、讀むは又猶更の事なれば」で一行で濟むところを百六十五頁は盛んなものなり、雲表中にては相摸野に及ぶものなく、山水美論中にては芒の美は雪中富士登山記等の企及すべからざる趣きがある、之れは文を解するの能力なき余の僻見なりや否や、著者以て如何となす。

又氏の文中にはなか〳〵六ヶしい熟字が多い、例へば、美根、（一一）、宿根（一一）、人心に安住（一三）、全人（三〇）、波線的に齊整（三一）、三角を尖起す（三一）、尖角形（三一）齊對（三二）、象成（三三）、太線に統べ了んぬ（三九）、標型的形式（四〇）、完人（四〇）、一寸其の一二を擧げたるなれども、此等は字劃が少ない平凡な文字でも熟字としては前後の關係でも分らなければ意味が取れないのが多い、之れは自分の淺學の罪であるか、用語が餘り奇に失するの罪か、之れは讀者の裁斷に待つ。

（烏　嶺）

"A Guide to Zermatt and the Matterhorn"
"A Guide to Chamonix and the Range of Mont Blanc" by Ed. Whymper.

（ゼルマット溪谷及マテルホルン山案内記）一冊
（シャモニイ溪谷及モンブラン山脈案内記）一冊

エドワード、ワイムパア氏著、倫敦（ジルリング）ション、マアレイ出版定價各六志

上記二書は、同人の手に成れる同型の册子にして、余の購入せるは、一昨年の版なれども、前者は第十一版、後者は第十二版なり、本書名は案内記なれども、山岳書籍としては、頗る重要なるものなれば、少しく詳しく紹介すべし。今より約五十年前、ラスキン氏の有名なる『近世畫家論』第四卷出で、全文を山岳美論に宛てゝ、極力アルプスを精解細剖するや、殆んど世界の高級讀書社會を動かして、其翌年山岳會の第一始祖なる、英國山岳會の設立となり、アルプスの高山峻峯に先鞭を著けんとして、競うて登れるもの多かる中に、アルプス中央大山塊の中、峻嶮を以て最も名あるマテルホルン山は、我が慶應元年を以て、初めて登攀せられたり、抑もマテルホルン山は、方尖塔（オベリスク）狀を成して、孤高峻秀せる山にして、形狀略ぼ我が槍ヶ嶽に似たるを以て、ウエストシ氏の如きは、槍ヶ嶽を呼んで、日本アルプスのマテルホレンといひたるほどなれど、高さは槍ヶ嶽より、猶高きこと四千餘尺（マテルホルンの海拔尺は、一萬四千七百五呎なり）岩石は槍ヶ嶽ほ石英斑岩なれども、マテルホルンの鋒先は結晶片岩より成れり、しかしてこのマテルホルンの最初の登山を成功したる人は、即ち本書の著者、エドワード、ワイムパア氏なり。●●

ワイムパア氏に服することは、其極めて多能多才なることなり第一に、氏は著名の登山家なることは、此マテルホルン先登の一事にて、明らかなるべく、歐人の著書、アルプスに關係するものにして、説いてマテルホルン山に至れば、氏の名を引かざるはなし、マテルホルンの存在する限り、氏の名も共に不朽なるべし、此外氏の工夫せる登山用繩など、今日頗る、彼アルプス地方に行はると聞けり。

然れども、單に危險を冒して、高山大嶽に登りたりといふばかりにては、氏の人物を盡くしたりと言ふべからず、氏は第二に立派なる文學者にして、其著書數種あり、殊に "Scrambles amongst the Alps" の如きは、氏がマテルホルン登山の詳細なる紀行にして、十數版を重ね、佛獨に飜譯出版せられ、ブラックウッド雜誌の詳言によれば「是れ戲曲なり、悲劇なり……吾人をして駭かしめ、恐れしめ、嗟嘆せしめ、憫憐せしむ、……瞬間は息も吐けず、講談師の舌頭に飜弄さるゝ如く云々」とあり（此書は別に紹介すべし）此外「赤道大アンデス旅行記」「アチロイド晴雨器用法」以下の著書ありて、到るところ、山岳愛好者を作れるは、實にラスキン氏以來の第一人なり、之をラスキン氏に比するに、ラスキン氏の總論的なるに比して、部分的なり、語を換へて言へば、狹くして細し（最へて深しと言にす）然れども、その筆力の天分に至りては、到底ラスキン氏に比ぶべくもあらず、ワイムパア氏の才力の中にて、比較的、最も下りたるものは、文學の才なるべしと思はる。●●

第三に山岳の繪畫を能くすることなり、今より二百五十年前に畫家ジュレール（Durer）あり、木版の山岳畫、世に傳ほりて、逸品と稱せらるれど、眞箇に山を描き得たるは、ワイムパア氏にありといふ評家さへ出で來れり（然れども余は其適當なる言なるやを疑ふものなり）ワイムパア氏の出づる前、十二年ほどに、寫眞などより寫したる山岳畫出でたれど、拙劣認戻殆んど見るに足らず、ワイムパア氏の手寫は、ペン畫、鉛筆畫多く、水彩、油繪等の作は知られど、山岳の皺線皆活きて、如何ばかり氏が山岳に對してEducated eyeを有するかを知るに足る、氏の繪は岩石の性質や、形態や、傾斜などに、留意して、科學的に精確を務むる方にて、日本で言へば、高島北海氏といつた風のところなるが如し、藝術品としては如何哉と思はるれど、書籍に挿むス

ケッチとしては、巧妙なるに疑ひなし。

●●第四に寫眞術に巧みなり、山岳の好印畫は、氏の手より續々出でたり、今倫敦にて、發賣せる寫眞印刷畫十七種あり、孰れも氏の手署を有せるもの、アルプスの雪崩、氷河、夕照、氏の Camera を潜らざるもの稀なり（余は其中の一葉「アルプス中央大山塊モンブラン山頂の落日」を購入して、過日山岳會有志談話會にて、展覽に供したりき。）

かくの如く多能多才なるワイムパア氏が、編輯せる此二書は、氏の能文を以て、路案内、登山歴史、自己の登山紀行等を、おもしろく綴り、殊に繪畫は、自己の手帖より引き寫し、寫眞亦然るが如くなれば、現今のところ、登山案内記として、此著者より好匪家はあらざるべく、此書より良書はあらざるべし、信用するに足ることは勿論、アルプスを知らざる吾人が、單に讀みものとして通讀しても、面白き本なり、但しマテルホルン案内記は、文に畫に、氏の前述の著書 Scrambles amongst the Alps より拔萃したるところ多く、單に讀み物とせむには「スクラムブルス」の方宜しかるべし。

こゝに目次を擧ぐれば。

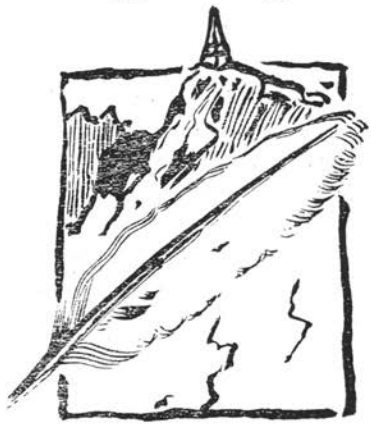
「モンブラン山脈案内記」は、緒言（旅費、登山の服裝、所持品、旅行免狀、導者雇ひ入れなどに關する注意）第一章シャモニイ溪谷、モンブランの歴史、第二章モンブランに企てられたる登山、第三章、大白山の最初の登山、第四章、博士デ、ソッシュールのモンブラン登山、第五章シャモニイ、及びモンブラン、其後の歴史、第六章災厄記、第七章モンブランの測候所、第八章シャモニイに入る路、第九章、シャモニイの記、第十章、十一章、十二章は附近の跋渉地、第十三章はモンブラン頂上記、第十四章は同山登路に就いて、又附錄としてモンブラン山脈標高表、章者姓名簿（年齡、經歴、或は誰某は英語を辯ずといふことまで）氷突と英尺の換算表、モンブラン附近峠路の案内などあり、例の美事なる木版圖六十餘を挿み、モンブラン山の圖には登攀路を、線にて示したるなど、準備周到なり、アルプスの王位にある最高モンブラン山を知らむと欲せば、本書を以て第一となすべし。

次に「マテルホルン案内記」の目次は、緒言、第一章、ゼルマット溪谷史、第二章マテルホルン登山の計畫、第三章マテルホルン第一登山記（著者が本山最初の登山成功者にして、記事最も周匠をきはむ）第四章マテルホルン下山記（頂上を極めて山を下るとき、行を共にせる人々、足を失して顚墜死亡せるものあり、光景慘烈、文章亦本書中にては絶品なり）第五章マテルホルン其後の歴史、第六章ゼルマットに入る路第七章ゼルマット溪谷の記、第八章ゼルマット村落の記、第九章ゼルマットよりの旅行、第十章、十一章はゼルマット附近旅店を起點とせる登山道路案内、第十二章はサアス溪谷記、附錄の項目は、前の書と大同小異なり、木版畫七十五個、ゴルナア大氷河の寫眞大版一面ゼルマット溪谷、及び中央パンナイン、アルプス地圖一面を添ゆ、著者自身のスケッチに成れる木版圖、或は疎淡、或は精刻、そのために本書の面白味を倍加したる感あり。

二書の中、「モンブラン案内記」所載の事實に就きては、面白き個所頗る多けれども、卷中の山岳溪流を識らざる、邦人には、或は興うすかるべくやと思ひ、こゝには單に目次の列擧のみに留め置きたり。

（烏　水）

雜報



燒嶽の噴煙及降灰

信飛境上の燒嶽（別名硫黄嶽）は、本年一月に入りて、又噴煙の活動を開始したるものゝ如し、其諸報を左に一束す。

北安に降灰　昨二十日夜北安曇郡七貴村陸郷村方面に火山灰降りたるが積雪の上に積ること夥しく其の狀慘として恰も黑雪の降りたる如く小穴山邊殊に多し燒嶽の噴出したるものなるべし。

燒嶽の鳴動か　二十日夜南安南部地方梓村邊にては遠雷の如き音響聞へたるが多分燒嶽の鳴動ならんと思ほる降灰は此の鳴動の結果なるべく然すれば同山は大なる噴出ありたるものならん。

南安地方の降灰　既電の如く南安地方一帶の地には黑色或は鼠色の降灰あり積雪ほ爲めに變色せる奇觀を呈せるが右は燒嶽の猛烈なる噴煙に原因するならんと思ほる同地方殊に北部方面なる西穗高村より有明村東穗高村にけて最も多量の降灰あり傳聞する處に依れば北安押野附近は雪の色の見えざる程多量の降灰ありし爲め盡說紛々として種々なる說をなす者あり降灰の時間は二十日午後三時頃より夜間にかけて多く降りたるものゝ如く中には有明山の噴火とか西穗高村滿願寺附近に噴火孔を生じたりとか傳へらしれも斯は何れも虛說なり多量に降灰したる地方の農民は燐酸肥料の必要なりと迄稱へ居れり、又二十日夜は同地西部なる山の手附近は硫黄の臭氣紛々鼻を衝き殊に北部に向ひて歩行せば降灰多量のため目も口も明けざるの始末なりしと。

北安南部の降灰詳報　前報の如く有明山麓に降りたる灰は池田町には其形跡を認めざるも會染村の一部七貴村の内川手附近に面せる鹽川原、荻原、並に陸郷村中村、小泉、日岐等には四望一面灰の積る事多く之を掻き集むれば一坪に一合以上あり其色濃鼠にして曾つて降りたる燒嶽の灰に等しかりしとなり尙ほ陸郷村の内小穴官林は殊に甚しく附近の人々は有明山又は穗高嶽の噴出したるものたるべしと評し合へる程なりき池田町にて遠く望めば穗高附近の連峯悉く眞黑に化せり當夜即ち去る二十日午後六時半頃明科方面より來りたる運送挽の談に轟然として汽車の進行を遠くより聞くが如き響を耳にし深夜定かに夫れと分られど パラ〳〵と面を打つしものあり又々雪にもやあらんと思ひしも歸宅して檢めたれば鼠邊灰を帶び居たりしと云へり去れば降灰時刻は午後七時頃なるべし又同夜九時頃鵠鳴を聞きたれば人々奇異の思をなし時ならぬ啼鳴と云ひ闇の夜鴉は何か不思議の事あるべしとの古老の言に人々警戒しつゝありしと云ふ。

東穗高降灰詳報　去る二十日午後六時頃より十一時頃迄南安曇郡東穗高村近傍一帶鼠色細末土砂の降灰を以て埋められたるが今回の如き多量の降灰は稀にして一時間に半紙一枚に約五分六厘の降灰を見たりと。

坂北村の降灰　去る二十日午後八時頃より翌二十一日午前へかけて東筑摩郡坂北村字仁熊に降灰あり積雪の道路は爲に黑色に變じたり。

南安にも降灰　二十一日朝より當地方一帶に黑色の灰降り積雪の上に積りて從來暄々たりし眼界も俄に黑色に變じ頗る奇觀なり燒嶽噴煙の爲ならん。

高にも降灰　昨二十日午後二時頃より十一時に至る迄南安曇郡東穗高村附近に鼠色の細末土砂の降灰ありたり昨年三月頃に同郡安曇村地籍に降灰ありたれども今回の如く多量の降灰はあらざりし。

下高井にも降灰　一昨二十日の夜下高井郡山ノ内及び夜間瀬村一帶の積雪を降灰にて褐色せしめ同地の人は白根山の噴火ならんと噂し居る由なるも別項燒嶽の灰にはあらずや。

上高井にも降灰　當上高井郡西南部綿内保科井上諸村等には昨夜十二時頃より今曉近くへかけ降灰あり積雪上面に黑色を呈するに至れり當須坂町にても屋根の積雪上に亦降灰の痕跡を認む。

燒嶽の大噴火乎　本月二十日夜の降灰に就き同夜蝶ケ嶽の麓に山仕事にて宿泊せる樵夫の談に依れば初めは遠雷の如き鳴動あり同時に大なる地響きして恰も猛烈なる地震の如く樵夫の泊れる山小屋に吊せる洋燈は動搖甚だしかりしと之により燒嶽の大噴火せるは明瞭なるも如何せん降雪深く其實況を調査確實ならしむる能はずと。

降灰の分析　去月二十日午後一時より同十一時頃迄南安東櫶高村に燒嶽の降灰ありしが穗高署にて一枚の紙に一時降らしたる灰を本部に送り來りたる故分析せしに鐵、爾炭酸、硫酸、炭分、灰分各々少量麻苦溫失亞、安母尼亞共に僅微硅酸多量にて養分更に無し然れど土壤を疎理ならしめ耕耘灌漑に便ならしむる地質に變移の功あるを以て有害の虞なしと。

燒嶽の新噴火　（新たに三ヶ所を生ず）信飛國境に聳へる燒嶽は先頃大鳴動と共に南北安曇へ大降灰ありたる後數日を經て齋藤安曇村長は槍峠の頂上に至り望見せるに從來大火坑一ヶ所なりしに新たに其後三ヶ所の火坑を生ぜしと見え猛烈に倍々熾んに四ヶ所より噴き出し居れりと然れども目下積雪多く到底其の實況を知るに由なしと云へり（二月十七日）。

大鷲の標本

更級郡信里村青池區嶋田吉太郎外二名の青年は山中にて翼の長さ九尺に達する大鷲を捕獲し同村小學校に寄附し度旨役場に申し出でたれば役場にては長野博物標本社にて製製に附し新年祝賀式に學校に陳列し一般の人に觀覽せしめたりと。

去年の富士登山

富士の登山は例年七月二十日を以て開山し八月下旬を以て閉山式を行ふを例とし去年も八月二十八日を以て閉山式を行ひ山上復た人影を認めざるに至れりとの事なるが今本年の登嶽期間に於ける二三の事實を追記すれば左の如し。

登山者五萬人　登山口の重なるは事新しく云ふ迄もなく大宮口、御殿場口、吉田口の三ヶ所にして大宮口の登山者のみにても一萬五千人を下らず他の二口亦之に匹敵すべく南表口其他より登山する者を内端に見積りて五千人とすれば本年の登山者は約五萬人にして實際は夫以上なりとするも尠きとは無かるべしと云ふ。

守札十八萬枚　本年は申年なりしかば登山者殊に多かりしものゝ如く絕頂及び北口の久須志神社にて賣渡したる守札は實に十八萬枚の多數に上り紀念スタンプの押捺數は金額より推せば五萬圓を超ゑ居るなるべし。

紀念繪端書　本宮社務所にては申年紀念繪葉書を發賣したるに其賣高非常の多額に上り閉山後の今日にても尙遠國より手紙にて申込む者さへある由。

絕頂の生活費　本宮社務所にては開山中絕頂に出張所を設けて職員四名を派出し置くの例なるが是等の生活費は一日十五圓にも上るの常にて日用諸品とも一切山下より人肩に依つて運び上ぐる事ゆゑ四十錢の炭は山頂にて一圓四五十錢の高價となり夜具一組の上げ下し運搬費に六十圓を要する始末なれば前記の如き費額を要するも無理ならず本年の如きは守札十八萬枚の收入にて辛くも其經費を支へ得たりといふ。

開山期と鐵道郵便　本宮の方にては例年開山期を七月二十日と定めあり閉山期に至らざれば石室其他の休泊所とも設備整はざるに本年は鐵道廳にて六月二十九日より九月十日迄登嶽の割引券を發行し山上の郵便局亦七月十六日より事務を開始したれば中には最早開山したる事と速了してか鐵道割引に依り率先登山したる者は大に困難したりとの事なれば今年よりは是等の事に能く注意すべしとなり。

火山學者の來朝

獨逸伯林出身の富豪にして火山、地質學に特種の趣味を有し其の造詣淺からざるイムマヌエル、フリードレンデル氏は去年十二月初旬來朝して目下横濱オリエンタルホテルに滯在中なり約九ヶ月間を我國に費して遍く我火山地質等を研究するの豫定なるが氏は所謂篤學者にして凡て自己の費用を以て其研究心を滿足せしむるものなりと云ふ。

淺間山の噴煙

本年一月二十九日、信州岩村田發電にいふ、今日午後四時三十五分淺間山噴火劇しく當岩村田町附近家屋劇しく震ふ但し五分間にして止めり、又別電に曰く二十九日午後四時五十分より約三分間淺間山鳴動し大噴烟ありたり同山鳴動の爲め附近震動し屋内戸障子の倒れたる箇所もありと、又曰く只今（二十九日午後五時）淺間山大鳴動し四里を隔つる當小諸町まで大震動を與へたれば住民は屋外に飛出し驚怖一方ならず大鳴動は第一回にて鎭靜し其後は別段異常なきも長老の言に依れば六十年來の大鳴動なりと云へり、又曰く二十九日午後五時頃淺間山が俄然大鳴動を起し附近町民の太く驚怖し居れる事は既に前號の紙上に記したるが尙ほ當時の模樣を聞くに同五時頃淺間山は轟々として大風にても吹來る如き音響聞ゆると同時に凄じく一鳴動を起し四十秒間程は最も強烈を極めたれば家屋は動搖して中には戸障子の外れたる所もあり都合一分二十秒餘にて震動全く歇みたるよし當時山頂は雲に蔽はれて噴火の模樣を認見する能はざりしが斯の如き大震動は六七十歳の老人さへ嘗て知らざる所なりとの事なれば山上の模樣は多小の變態を現出せしやも測られずと云へり。淺間山の噴煙は去年以來猛烈となりたるもの、如く、右に就き去年某月、火口を調査せられたる小林房太郎氏の談として『報知新聞』に揭げられたる一節に曰く、二十日淺間山の下なる沓掛に於て非常なる鳴動を耳にせり二十一日早朝より登山したるに噴烟は平日に比して特に甚だしかりき午前十一時山頂に達す中央火口丘は全部火山灰及びラバの岩塊を以て掩はれたり火山灰及岩塊は新に降下したるものにて現に盛に降下しつゝあり御釜噴火口直徑は約三百五十米突にして白烟濛々として立ち昇り孔底此處彼處には百千の雷霆一時に轟く如き鳴動あり悽絶言ふ可らず噴火口の北方に直立せる火口壁は硫化の爲めに白色を帶びつゝあるを見たり、濛烟の斷續せる間に孔底各所には列狀を爲して白烟の立昇るを望み尙其間々石の裂目よりは灼熱せる物體を認めたり多分流動體の岩漿なるべし。此日は幸にして東風なりしかば火山灰及びラバ等の阻害を受けざりしが數日來降り積れる火山灰にて滿山灰色をなし又ラバの大なるものは直徑二尺に及べり隨て風向次第にては登山危險なりと信ず頃日活動激しとは雖も噴火口あるは一種の安全瓣あるものと認むべく隨つて鳴動の大なるも降灰の多きも決して恐るゝに足ずと認む。

◎雜　報　火山學者の來朝　淺間山の噴煙　新高山の探檢

新高山の探檢

（野呂總督府技師談）

四十一年十二月六日に達邦社を出發して阿里山に向つた、一行は僕と志田、森の兩囑托と池端蕃薯寮廳警部、中村嘉義廳警部、榊同廳巡査及達邦社蕃丁出身のアバリ巡査補を初め糧食其の他の荷物を運搬させる爲めに引率した蕃丁二十五名是等は皆達邦社と知母勞社の蕃丁であるが、此内に達邦社の蕃務官吏派出所で教育した藩人の生徒が二名あつた、此生徒は自由に日本語を饒舌つたり聞いたりするし、人間もシッカリして居つて登山中は始終炊事方を擔當して眞目眞目數立働いて吳れたので非常に重寶であつた、其の日は阿里山で泊つたが翌日も朝から雨がドン〳〵降つて來たものだから已む無く滯在して越ゑて八日早朝阿里山を發足しタータカに到り同處の溪底に下りて露營を遣つた、九日には新高の西南麓迄漕ぎ着けて同じく石を枕に溪流の淙々たるを聞きつゝ露營の夢を結んだ僕等は兎も角毛布とか天幕とかを準備して居るから好い如うなものゝ蕃人等は君御承知の通り素裸同樣だ……鬱革の陣羽織と胸當をして居る限り……夫れで方々から流木枯木を拾つて來て熾んに焚火を遣りながら彼奴等ゴロリと石の上で高鼾だ、流石に蕃人だと今更ながら感心したヂ、夜に段々更けて來る而かも人跡絶えた深山の谿底だ、聞ゆる水の音孤の音に一層の寂しさを增す、其の森々たる夜氣を破つて焰々と燃え上る火光丼を圍める蕃人何んだか云ふに謂れない一種の趣きであつた。

十日は今日こそ絶頂に登ると云ふので一行勇ましく出發した、路は例に因つて難所計り殊に僕は左足を傷めて居つたから苦しさは一層、けれども午前十時二十分には目出度新高中峯の絶巓に到着するを得た、絶頂に登つた時は深い霧が立罩めて展望がきかぬので殘念だつたが次第に晴れて來たから嬉しかつた、初めは寒暖計は四十三度を示して居たが後には五十度以上に昇つた恰度其霧が晴れた時俗に所謂御來光なるものを見た、即ち絶頂から東北に當つて眼下一面の霧に山巓の輪廓がボカシの如うに映つる、其の上の方へ目も絢やなる虹色の七彩が四重になつて大きく輪狀を畫いて現はれたのであるが、其の美しさは何とも云ひ樣は無い位實に奇麗なものだつた、夫れから霧の晴れるを待つ間に豫て準備して來た一座の祠を山巓に鎭め奉つた、是れは出發の前に調へたので全部檜造りとし外部を銅で張つたもので高さは一尺七八寸梁木の長さ一尺五六寸位下の方に曳出し付け夫れに紀念の印三顆と肉池、開明鑒、筆等を入れて後日登山した者の紀念用に便する事とした、神靈は山口宮司に賴んで特に祝詞を讀んで臺灣神社の神靈を祭つて貰つたものである、高山植物は最早時が過ぎて居つたので兒玉菊や佐久間リンダウ、後藤草、なども在つた事はあつたが大方花も凋んで居つた、其の他薄雪草とか母子草、祝スヽキ、等も少し計り採集して來た。

新高山の絶巓には彼是四時間程も居つて地理上の調査とか測量其の他の研究を遂げた、測量の方は志田君が主として擔當して居るので同君が歸府せられたら何れ其の結果も發表せらるゝ時期があるだらう、新高山の高さは曾て土地調査局で測量したのがあるが今回の調査と大した違ひは有るまいと思ふ、地理上では大分新發見を得たら、先づ第一にはソラ君も知てるだらう彼の新高から源を發し八通關の下を過ぎて東南に流れる溪流子、彼れは從來秀姑巒溪とか新武呂溪とか謂つて地圖にも曖昧に記いてあるし是迄の登山者も秀姑巒と云ひ、新武呂と主張する等其だ疑問になつて居た併し孰れも臺東方面へ注ぐものとせる點は一致して居た、處が能く調査して見ると何ぞ圖んに昔聞違て實際は老濃溪の上流であるのだ、臺日に楠梓仙溪の上流と記いたのは誤りで楠梓仙溪は西南へ流れて居る。

第二には中央山脈で是れも新高山彙が夫れだとの說が多かつた、而し中央山脈は新高から東方約二里位の處に在つて南より西へ趨つて關山一帶の連山に接續して居る、其處で新高の絶頂に立つて東方を望むと遙に新高と拮抗否寧ろ新高を凌がん計り聳峙として天表に聳ゆる一個の峻山が在る、高さは一萬三千尺以上もあらうが之れは從來秀姑巒山だらう位に稱されて居つたが正に秀姑巒首山と謂ふべしである、而して中央山脈の水は悉く老濃溪に落ちるのである。

如上の地勢になつて居るから僕等が登つた新高中峯から東方指顧の間に聳ゆる一峯即ち從來臺東新高と稱されたものは地勢上よりすれば全然薔薇聚廳に屬すべきものである、隨て爾來臺東新高の稱を改め單に新高東山と命名するが至當だと信ずる、又新高中峯から南方約二千米突を隔てゝ屹立せる山がある、之れは所謂新高南山なるは疑の無い處だ、此の他種々調査の結果得た處も尠なくないが追ての機會に讓る事とする。

新高の絶頂を下つたのは午後三時半頃で其の日は東麓の溪底で露營した此夜月が皎々と冴えて霧間の露營地を照し殊に一味凄涼の感に堪へなかつた、明くれば十一日昧爽出發して午前十時頃八通關上の平原に出た、恰も好し豫て打合をしてあつた通り斗六廳の鴻農巡査が集々街に通事某と東埔社蕃人七名（男四女三）を引率して待ち受けて居たのに會うた、其處で森、志田、池端の三氏は此等の蕃人を伴ひ更に中央山脈から關山方面の探檢に向う事となつた暫しの別れだが前途は人跡未だ到らざる所且つは重大の任務を負はるゝ事として其成功を祝する爲め海拔九千餘尺の八通關上に篷を張つて罐詰を開き酒を酌み交はし紀念の撮影等をして午後一時三十分森氏一行と袂を分つたのである。

此くて八通關を下り陳有關溪の上流に出で溪底を辿りつゝ樂々に到着した、此處で溪側に湧出する溫泉に浴したが何しろ久し振の入浴で滿身の汚垢一時に洗ひ去つた如うな氣がして淘に好い心持になつた、十二日同地を發して直立千尺もある東埔の峻坂を越し十時頃東埔社に着し三時間休憩したが其間に引率して來た達邦、知母勞等の蕃丁と東埔社蕃丁とに大に酒を振舞つて遣つた、蓋し達邦社と東埔社とは種族が違ひ互に反目して居つたのであるが、本年夏の交兩社を和解せしめた其後今回が初めての會合だから懇親を增さしめん

爲めで兩社の蕃人も大に歡んで蕃獸を獻ふやら實に非常な賑いで僕等もお蔭で馬鹿に面白かつた、此くて日暮桶仔脚萬社に着し蕃務官吏派出所に一泊、翌十三日同社を出立し陳有關溪に沿うて下り牛輕轆を經て無事に集々街に出で斯くて雲上の客たりし僕等は遂に黃塵千丈の巷に再び離離するの俗人となつたのである。

附記　野呂技師一行が新高中峯に登攀せられし際去る三十九年十一月記者が岩政稅關長、荒賀斗六廳長の一行に隨ひ新高山に上り絶頂の岩隙中に紀念として塡め置きたる大國旗に一行の名を署したものを發見せられたる由なるが今尙ほ依然として舊觀を存し墨痕鮮かなりしと而して再び鄭重に油紙に包み元の如く岩石中に藏められたりと。

臺灣中央山脈の探檢

（森殖産局囑托談）

▲今回探檢の目的は主ら中央山脈より關山に亘る所謂セブクン蕃族の占據地一帶の地理其の他蕃情等を蹈査闡明せんとするに在りしなり而して此中央山脈を探檢するには三種の線路あり即ち▲第一線は八通關より中央山脈の脊梁を傳ひ關山の東麓に出で更に關山を越ゑて荖濃溪に下り關山西麓の霜山脚社に到るものにして野宿三日を要すべく而して此間は蕃人の稀に交通するあるのみ未だ探檢家の足跡を印せざる處とす▲第二線は八通關より中央山脈を越ゑ臺東の大崙坑社に下り夫より關山方面に分布せる同種族たるセブクン蕃の各蕃社を遍歷しつゝ霜山脚社に赴くものにして此間當に八日間を要すべし▲第三線は八通關より同じく大崙坑社へ下り蚊仔厝社を經て巒蕃の各社を迂り大崙社を經て霜山脚社へ到るもの此間十一日を要すべし▲而して第一線は中央山脈の脊梁を直線に進行し全く無人の荒地を通過するものにして地理の觀察には利便なるも線路中最も峻嶮を極むるもの第二線は中央山脈東麓の最高位置に散在せる各蕃社を遍歷するもの是れ又地理の觀察上利益尠なからざる道程なり第三線は中央山脈と臺東平野との中間に連直せる谿谷に沿うて進行するものにして三線中大局の觀察上には比較的不利なるものなり▲然りと雖も此等の方面は古來人跡未到の地にして地理的狀況は全く暗黑に屬せしを以て當初は何れの線路を取るも今回の踏査は各方面に亘り頗る有益なる資料を齎らすものと信ぜしものから只蕃人縱橫の部合如何に依り出來得る限りに於て最も有益なる線路を踏査せん事を期したるも第一線は嚮導たるべき蕃人に適任者を得ざりし結果遂に第二線を取るに決せり然りと雖も若し蕃情の關係上第二線の前程不穩にして進行覺束なき時は臨機第三線に變更するも當初の目的を貫徹する決心を極めたり▲斯くて去る十一日午後一時三十分八通關に於て野呂技師一行と袂を分ち愈々中央山脈に向け探檢の第一歩を移せり而して此行に加はるもの志田警察本署囑托、池端蕃務警察部鴻農斗六廳巡査及我輩にして此他集々街の通事と東埔蕃人七名を引率せり而して此日は八通關より東南二里中央山脈の西麓なる溪底海拔九千六百尺の地點に達し露營を爲せり▲十二日は中央山脈より西方に流るゝ溪流を徒涉し絶壁を攀ぢて中央山脈に登り其脊梁を迂りつゝ進行し一萬二千尺の分水嶺上に野營し▲十三日は臺東方面へ下り大崙坑社に入り蕃社頭目の家に宿泊せり此地點海拔五千五百尺なり此處にて引率し來りたる東埔蕃と大崙坑蕃との儲び替へを爲す十四日は天候其の他蕃人傭替へ等の都合にて同社に滯在▲十五日出發打訓社を經て同社の分社下世老社に赴き十六日更に同社の蕃人と傭替へを爲し大里渡社に向ふ事とし途を西南方に取り幾多の難所を經て中央山脈の支脈を越へ一萬六百尺の地點に露營し翌十七日は尙其の頂上なる一萬七千百尺の峻峰を踏破し九千六百尺の轆々溪上流に下り溪谷を傳うて八千五百尺の地點に野營▲十八日は夫れより東南に下り大里渡社の小社パチグル社五千五百尺の處に宿泊此處にて三度蕃人の傭替へを爲し十九日更に西南に進み五千四百尺の霜山木社に達せり然るに此社は明日より粟祭りを擧行する日取りなりしを以て人夫の募集に應ぜず已む無く該社より半分を募り前日來隨ひ來れる蕃丁の半分と交換ぬ霜山脚社へ向ふ事とせり▲二十日霜山脚社へ到りし處同社も四日の後には粟祭を儀さんとて當に粟酒を釀す最中（粟酒は四日の後適當の發酵を爲すと）なるに加へ祭りの準備として狩獵に出づるを要するを以て蕃人等は蕃署案方面へ人夫に赴くを肯ぜざりしも種々懇諭したる結果漸く數人の蕃丁を得て玆に豫定の如く荖濃へ歸る都合となれり▲二十一日霜山脚社を發し關山の一萬六百尺の頂上を越ゑ尙ほ連脈一萬千尺の間を進行する事約三里にして西北荖

濃溪に向つて趨る支脈を辿りつゝ中央山脈の西麓九千尺の地點に露營し翌二十二日も同方向を取り大透火社を經て雁爾溪頭社の南方高地を過ぎ此くて菴濃溪二千五百尺の地點に下り深さ乳に達する急湍を渉り左岸三千尺の臺野に上りたり此處即ち雁仁社にして蕃務官吏駐在所の在る所なり▲顧みるに逢邦社を出てより本日迄日費す十七日此間全く無人の山谷を往來し或は千仞の峭壁を攀ぢ或は奔流岩を嚙む急瀨を渉り或は飛暴圍る可らざる蕃社を出入する筆舌ご名狀す可らざる幾多の辛苦艱難を經て漸く目的を達し玆に我同胞たる內地人の住居せる土地に出たるにて一行の歡喜は蓋し其極に達する位なりし▲此雁仁は下四社の一部にして阿里山蕃の一分派也而して菴濃溪の上流中央山脈より八通關に亘る一帶の山地に分布せる蕃人は東埔社及郡大社を同種なるブヌン族の一部族セブクンの一派なりとす隨て今回の探檢は斗六より臺東、蕃薯寮方面に分布せるセブクン蕃族占據地の大部分を踏査せる者なり此等の外蕃は疇昔斗六方面の同蕃族が次第に臺東の山脈に移動し斯て現今の如く膨脹蕃殖せしものにて今回探檢の能く其目的を達するを得たるは即ち此等蕃族分布に對する史的關係を討究し順次其の移動々派の系統を追うて踏査したる結果に外ならざるものとす▲越て二十三日排剪を經て菴濃に到り二十四日菴濃を發し六龜里新威を通過し蕃薯寮に出るを得たり▲而して此行の結果は今回初めて實施されんとする蕃地測量の基礎となる重要なるべき地形及圖根點の像察を遂げ其方針を確定せしのみならず從來不明なりし地理上の眞相を闡明するを得たるを以て本島地理上の研究に寄與する處寔に多大なるべきを信ず若し夫れ其結果の詳細に至つては何れ公表せらるべき時期もあるべく暫く之を後日に讓らんとす云々。

有明山中の大猪

本誌に應ば出でたる日本アルプスに關する紀行中、讀者は橫澤類藏なる獵師の名を記憶せらるゝものあるべし、同人は信州南安曇郡有明村字蕎下區に住む老獵師なるが、本年一月九日有明山の奥なる中房谷に於て十餘貫の大猪(俗にクラシシ)と云ふを狩獵せり、同山中は少なくも六尺以上の積雪ありて狩獵に甚だ困難なるが今回の狩獵場所は日本アルプス山脈中平素最も烈風吹き荒む處なるを以て降雪あるも烈風の爲め吹き散らされて積雪少量なるより猪は降雪期間中此處を生活の樂園となし居る由にて、初め此の大猪を發見するや否や直ちに銃口を向けたるに猪は斯くと見て遠く走つて峨々たる岩石の頂上に駈け上りて必死の勢ひ鋭く反抗せんとするの氣勢を示したるも、此勇敢なる獵師は數頭の獵犬と共に之れを包圍し、遂に一彈の下に見事射殺して下山し村內の人々に肉を頒ちたりと云ふ、猶此類藏に關しては、本號高野氏の『上高地の記』にも、その噂出でたり。

木曾山中の鐵道

名にし負ふ、木曾街道も、愈々鐵道布設せられて、御嶽の麓、駒ヶ嶽の下なる、福島、上松、果ては棧橋、鼾覺の床も、二條の鐵軌にて貫通せらるゝの運命に迫れり、今中央西線阪下以東に於ける工事の內容及び將來同線の木曾に及ぼすべき効果如何に就き鐵道廳名古屋鐵設事務所渡邊技師の談に曰く

中央西線阪下以東福島に至る間は、山岳重疊行けども行けども盡きせず、加ふるに溪間は狹くして深いから、絕壁の個所は頗る多い、隨つて隧道も多ければ線路の勾配も處々に設ければならぬので鐵道を布設するには頗る困難なる地勢である、啻に困難なるのみならず、隧道が多ければ旅客をして不愉快の感を生ぜしめ、又勾配が多ければ、多いだけそれだけ、牽引力を減殺せしむるの憂ひがあるから、吾々は深く此の點に留意し、斯る難所に遭遇する毎に、必ず頭を惱ますのである。

吾々設計者に於て、隧道にするか、山麓を通じて迂回するかとの問題の出る時は、每時も後者の勝を占むるので、中央西線に於ても色々の說もあつたが、結局木曾川左岸に添ひ、國道との間に布設する事に決したので、多少の迂回は免るゝ事に出來ないが由來木曾川沿岸は絕勝の地に富めるを以て愈々開通の曉には、旅客をして其身仙境にあるが如き感あらしめ、思はず快哉を叫ばしむる事であらうと思はる。

之が爲め隧道も餘程減ずる事が出來て、阪下三留野間に二ヶ所、三留野野尻間に二ヶ所、野尻須原間に二ヶ所、須原上松間に一ヶ所、上松福島間に二ヶ所と、都合九ヶ所にして此の延長六千六百尺であるが、その內阪下三留野間

の一千六百尺の隧道が最高延長で、他に一千尺のが二ヶ所あるが、山の線路としては最も尠ない、隨つて線路の勾配も減少し加ふるに以前は最急の四十分の一を利用し、阪下以西は悉く之に依つて設計したのであるが、これでは牽引力を非常に減殺せしむるので色々と研究の結果、三十九年以來は遙に線路の勾配を緩かにして平面より五十分の一と改正したので、阪下以東は悉く此の新式に依つて設計する事となつた、此の新式が鐵道界に與ふる功果は實に莫大のもので是れ確に鐵道線路の設計上一新機軸を出したるものと思ふ。鐵道をして山の麓を通ぜしめんとするには、山麓の先端を斜に切取りて、石垣を築き而して線路を布設するのであるから、石材を多量に要するのであるが、木曾街道附近は御影石の產出夥しきを以て、山麓を切取りて得たる石材は同時に、其の個所の石垣に使用する事が出來るから、此點に關する工事は頗る樂であるが、石垣は非常に多い、球摩川沿岸の鐵道は、石垣が多い事全國第一と稱せられて居るが、木曾川沿岸も恐らく之に讓らないのであらう。線路布設費は平地にて普通一哩に付き十萬乃至十五萬であるが、中央西線阪下以東の如き山間の地に至つては二十萬圓乃至二十五圓の費用を要するのである、就中木曾川鐵橋の如き、一回架設するに十萬圓から十五萬圓を要するのであるから、多少迂回しても成るべく鐵橋を架設しない設計を立てたのであるから、鐵橋も比較的尠ないが、その內著しき鐵橋と云へば阪下の東方即ち名古屋驛から六十一哩半の處、吾妻村木曾川第二橋梁であつて、延長三百尺、橋梁三百尺にして、次は源を駒ヶ嶽に發する滑川の鐵橋で、延長は五百尺なるが橋梁は僅かに七十尺なるを以て、木曾川第二橋梁に比すれば、工事は遙に容易である、其他野尻須原間の稻川橋梁百五十尺二ヶ所と六十尺の二ヶ所にして外には著しき鐵橋はないのである。

困難なる工事の中にも最も困難なるは木曾川と國道との中間を通る個所である、塲所に依れば國道を破壞して鐵道線路を設くると同時に、交通を杜絕する譯にゆかないから、更に塲所を變へて國道を造らなければならぬから恰も同時に二條の鐵道線路を設くると同じで、その困難なる事は實に豫想意外である、三留野野尻間に困難の塲所は二ヶ所あるが、就中上松福島間のものが最も難工事で、夫は彼の日本三奇橋の一つと稱せらるゝ木曾の棧橋の巷跡を通ずる處であつて、三百五十尺の隧道を一ヶ所と、國道より約八十尺の高さを通ずる一鐵橋を設けなければならぬ、又須原上松間にある彼の有名の寢覺の床と、眺望佳絕と稱せらるゝ林仙寺の墳內との間を通過するので同所附近の村民は、之が爲め風致を害せらるゝ樣な事があつてはならぬと騷いで居るが吾々設計者では、風致を害するよりは寧ろ風致を添ふる考へにて目下考案中である。

該鐵道が愈よ完成の曉には、不便と稱せられて居た木曾の山間の僻地も文明の餘澤を蒙り、急速の進步發達を爲す事であらうが差し當り此便益を感ずるのは、從來木曾川に依つて下流へ運搬し居たりし木曾材木である、之を鐵道で運搬する事になれば非常の便利である、野尻の阿寺、上松の小川、上松福島間の土瀧等の御料林から年々出づる五木の木材は、實に夥しい事であるからいづれ輸送設備の點に就ては鐵道廳と御料局との間に協議を爲し便利なる方法を講ぜらるゝ事であらう。

阿蘇山上の天幕生活

東京帝國大學理科大學助教授理學博士中村清二氏陸軍砲工學校教官理學士福田爲造氏及び熊本第五高等學校教授理學士平塚忠之助氏は文部省震災豫防調査會の命により去る八月八日東京を出發し阿蘇山上にて三週間磁石力變化の研究をなしたり、磁石力には時と處とに依て急激なる變化と緩漫なる變化此二種あり其內前者は總ての鐵類に激甚なる電氣作用を感ぜしむ可く若し然りとせば其激甚の度數は最少時間に於て幾何なるや、且噴火山と低地との試驗比較の結果を調査する爲に登山したるなり、博士一行は調査に要する鐵條其他の器具鐵材等をば豫め橫濱より汽車便にて送送し阿蘇山麓よりは馬七駄を使役して山上に達せしめ共に新噴火口の周圍約四萬五千平方メートルに鐵條を張りしが是でも尙ほ不完全なるより再び新噴火口に屬する小岳の周圍十五萬五千平方メートルに鐵條を張り噴火口の南麓に天幕一張を屋根造り磁器寫眞器其他の器械類を据付け三氏とも其中に起臥し辛酸をなめて其研究に盡瘁したり。

八月十日熊本を出發せし博士一行は其夜十時過阿蘇山の北麓坊中に達せしも

夜遅くして泊るに宿なく辛うじて木賃宿に入れるが福田學士は當時の光景を語りて曰く「夫れは隨分苦しかつたですよ木賃宿に泊る外別に方法はなかつたのです、だから別に嫌な氣も起りませんでした合宿は一人でしたが宿賃は一等貳拾錢二等拾錢三等八錢と云ふ大安です何分其時の狀況は推量して呉れ給へ」と學者の顏に微笑浮ぶ。

阿蘇火山は其山容頗る雄大にして南北六里東西四里を數ふる舊噴火口を有する世界第一の活火山なり現に噴火するものは舊噴火口中に一、及び其南方に當りて明治三十九年初めて噴火したる新噴火口を有するが其の最高點は四千八百六十尺、高嶽、猫嶽、烏帽子嶽、杵島嶽の群嶺連峯と中嶽（火山）とを併せて五嶽或は阿蘇山と稱するものにして山上の空氣清く目に映るもの悉く紫色四周は一帶の平原なり、博士一行は噴火口の深さを知らんとて種々方法を盡せしも舊噴火山は危險にして近寄るべくもあらずそこで新噴火口の口底を測りしに約十米突ありし由にて其口底の北壁に横穴あり其處より白煙及び水氣を吐出すものゝ如く或は舊噴火口の煙が地中を潛つて此處に噴出するにあらずやと云ふ。

されば舊噴火口に於ては知らず新噴火口に投身する壓世者ありとしても其噴出さるゝ醸骸は風向きに依りて或は之を望み得可く殊に目下は噴火の狀遲緩にして何等崇高の念も起らされど從來舊新噴火口に投身せし者十餘名を以て數ふ可く其投身するや即時に白骨中天に飜つて火口に近き茶屋などには再三白骨飛入りしと云ふも博士一行が三週間滯在せし間には只水氣と白煙とを見たるのみなりき。

晝間は阿蘇の登山者二十人乃至五十人位なりしが博士一行が天幕生活をなすに及びて物珍らしき鄙の男女之れを見物せんとて登山するもの一時は日に七八十人もありしよしにて午後二時よりは一行三名と人夫二名とを除いては阿蘇山上人の子一人も居らぬのみか噴火の音さへ聞かず靜寂又靜寂晝間の晴天も此處にては夜となつて白雲四方を覆て悲雨必ず山上を襲ふ。

一行が熊本を出發する時少量の罐詰を用意せしも數日ならずして盡きしかば自ら坊中より干芋、豆等を買ひて携へ來りし鰹節にて味を附け炊事當番を定めて醬油汁をたきしが馬鹿に辛きもの甘ますぎるもの抔を造りて種々の滑稽を演ぜしが磁力調査のため夜は二十分交代に望遠鏡を見詰めるやら寫眞の撮影、設備の修繕など皆博士等自ら是を行ひ非常の辛酸を嘗めたり。

一行の登山を聞くや熊本の某新聞大阪東京の某々新聞は博士が噴火力を應用して電力を得る方法を研究せんとて登山せり等眞面目に報導し又鐵條を見て自殺者防止の爲なりと噂せし村老あり、或は噴火口を取廣げる爲め東京より大先生來ると口賢に語るあり最も奇拔なるは追々寒くなるから噴火口に器械を据付けて火力（ストーブ用）を熊本の町に送るために測量しつゝありと傳へし中學生ありき。

斯しく充分の調査を終へ博士一行は九月一日同山を引上げ熊本に於て再び調査を重ねて十九日歸京せられたるが、中村博士は目下風邪にて臥床中なれば福田學士に就いて其談話を聞けり、而して其調査の結果は追て公表せらるゝと云ふ。

駒ヶ嶽の噴煙

本年二月十日札幌發電によれば、三日午前十一時三十分頃より北海道渡島國駒ヶ嶽背面より灰煙盛んに噴出し、項上より約五尺以上吹き上ぐるや、西北の强風の爲め、東方砂原嶽項上を掩ひて飛散し、日沒に至るも噴煙歇まずと。

會報

山岳會有志晩餐會

山岳會の大會は、當分のところ、年一回の會合である、其れも講演が時間の大部分で、會員各自が膝と膝とを突き合せて、話を仕合ふと云ふわけには行かない、つまり大會は公衆的で、話を聽くにはよいが、話を仕合ふには不便である、で、もつと個人的な、家族的な會合を催うして會員同志、大に面白く話さうと云ふ趣意で、此會は催されたのである、云はゞ懇親會に兼ぬるに、談話會を加味したものである、で、第一回を本年一月十六日に開く事になり、場所も山岳に縁ある名の富士見軒（東京市麹町區富士見町）で午後五時から開いた、會するもの次の十六名。

今村己之助。河田默。川島祿郎。高野鷹藏。辻本滿丸。辻村伊助。中村清太郎。村上元次郎。梅澤親光。柳田國男。山口金太郎。小島久太。三枝威之介。城數馬。角倉邦彦。杉浦普。（イロハ順）

食卓は六時に開かれ、發起人辻本氏の開會辭があつて、テーブル、スピーチは、柳田氏の大人の話に初り、列席諸氏の本會、又は本會雜誌に對する希望、注文等、ビールの廻ると共に、話も一巡して、各自その席より述べ了り、餐を濟ましたる後、ストーブを取圍みて、山岳談に花を咲かし、全く散會したのは、夜十時であつた。

當日諸氏の持參展覽に供せられたる山岳參考品は、中々の珍品多く、今村氏の越中立山全圖の如きは、稀有の珍品、蓋し文晁あたりの筆であらうと云ふ事である、小島氏は、特にロンドンから取寄せた、アルプス夕照の寫眞を、三枝氏は氏常用の登山用の鳶口二個と數多の寫眞、朝鮮より新年休暇にて、歸朝中に列席せられたる城氏は朝鮮の寫眞を、高野氏は、山岳寫眞帖一冊と白馬、穗高の半切大の引伸と、上高地の幻燈畫を携へられ、辻本氏は參考地圖を持參せられた。

此會は、本會役員中の有志、辻本滿丸、高野鷹藏、會員三枝威之介氏等の發起で成立したもので、幹事は順廻りといふことになり、次回は四月中、場所未定役員梅澤、河田二氏と、會員辻村氏とが、次の幹事に指命された。

此會は、山岳會の名を以て催したわけでないから、會員全般に案内したのでもなく、一部有志者間の會合であるが、出席希望の方があれば、誰でも悅んで迎へる、次回御出席

希望の方は、前以て往復はがきで、事務所宛申込まれたい、すれば時日、場所、會費等確定次第、幹事の方から御通知申すから。

西内金吾氏逝く

本會會員、西内金吾氏は、去年十二月十八日臺灣臺北に於て逝去せられたり、氏は覆審法院の法官として彼地に赴任せられたるなり、本誌第二年第三號に出でたる「觀天逆鉾記」なる一文は氏が精緻なる觀察を覗ふに足るものなりき、訃報に接して、本會よりは弔辭を送れり。

本號附錄（第一）

本號より第四年と改卷致し候に就きては、例の通り、會員名簿を新製して、附錄と致し置候、但し此名簿は、會員以外には配付不致候。

又第一年第一號より、第三年第三號まで、既刊九冊分に對する總目錄を、本號の末尾に附し置き候。

會員名簿は今四十二年二月五日迄に、當事務所まで、入會御申越相成りたる諸君を、網羅致し候つもりなれども、脱漏は勿論、住所姓名等に、誤謬を發見せられ候節は、乍恐縮、御一報を賜はり度候。

本號附錄（第二）

參謀本部陸地測量部よりの囑に依り、「陸地測量部要覽」一冊及び同部測製五萬分一尺、富士山、及び霧島山地圖各一部を附錄として、普ねく讀者諸君に呈し候、「陸地測量部要覽」は、同部に於て、弘く讀まれむことを希望致され候、若し夫れ實測五萬分一圖の、精確と便利とに於ては、今更紹介を要する迄もなき儀と存じ候。

本號の表紙

會員丸山晩霞氏の作、中央の雪田は、白馬嶽のそれを模したるもの、四隅は雷鳥を春夏秋冬四季の羽毛に描き分け、枠内の高山植物は、長之助草裏白金梅等をしつらへたり、四度刷。

因にいふ、これまでに本誌の表紙を、筆せられたる、和洋畫家は左の諸氏なり。

第一年　竹内桂舟氏
第二年　小杉未醒氏
第三年　大下藤二郎氏
第四年　丸山晩霞氏

『山岳』殘本發賣

（『山岳』は決して再版せず愈よこれにて絶版とならんとす）

本誌は、第一年第一號より、豫想外の歡迎を受け、最近の號を除くの外、大概賣切れとなり、從來熱心なる愛山家諸君より、取纒めて、事務所宛の御注文を受くるとありしも、

上記の次第なるを以て、不本意ながら、貴需に應ずる能はざること多かりしが、今回各賣捌店より、僅少の殘本を拾收し、辛ふじて左の號數を取り揃へ得たれば、入用の諸君は、此際至急新事務所宛てに、前金を以て申し込まるべし、中には僅かに、三部又は四部しか備はらざるものあり、故に御注文の際は、希望の第何年第何號、賣り切れたるときは、第何年第何號を以て代ゆるも苦しからずといふ類の、御附記ありたし（代價は一冊參拾五錢にして、部數によりて割引なし、但し送本費は、本會に於て負擔すべし）もし希望の號、賣切後にて、代用の號を欲せられざる向きへは、無論代金は即刻御返戻に及ぶべし、（但し御返金に關する費用を差引申すべし）各號記載の項目は、本號に總目錄の附錄あれば、就いて、見られたし。

○

第一年　第一號
同　第二號
同　第三號

○

第二年　第二號
同　第三號

○

第三年　第一號
同　第二號
同　第三號

本會事務所の移轉

本會の事務は、從來幹事の一人、法學士城數馬氏邸宅に於て、取扱ひ居候處、城氏韓國控訴院長として、彼地に赴任せられ候以來、留守宅に於て、暫く處理致し居候へ共、近來會員の增加、雜誌の增刷と共に、取扱ひの事務も、繁忙を加へ、留守宅にては、何かにつけて、不便不尠候爲め、協議の結果、同じく幹事の一人なる、高野鷹藏氏に於て、會務一切を引き受けらるゝ事と相成候。

（舊）　東京牛込區新小川町二丁目
二十番地城氏方山岳會事務所

は、本年一月より、左記へ引移し候間、今後入會の御申込、又は會費の御拂込み、其他一切の書類等は、凡べて左記へ宛て御遣はし被下度候。

（新）　横濱市本町四丁目六十七番地
高野鷹藏方山岳會事務所
（電話最長百七十一番）

猶宛名に「高野鷹藏方」の五字を脱落せざる樣、御注意相願候。

但し、寫眞又は、原稿の御寄送等、編輯事務に關する用件だけは、從前の通り

横濱市西戸部町八百九十八番地小島久太方
山岳會編輯所

に宛て、御送り被下度候。

會費未納の諸君に

本年度より、會費切れとなりたる諸君は、此際至急御拂込有之度、又前年分より、御拂込みを滯られ居候僅少の諸君に對しては、本年分と共に、此際至急の御送付を願ひ候。

振替貯金口座加入

會員諸君會費御拂込の便宜を計り、郵便振替貯金に加入致候、番號は

東京　四八二九

に候、振替口座は、東京と大阪とに分れ居候間、必ず東京の二字を冠らすことを、御忘れ被下間敷、御拂込の際は、會費の外に、記名手數料として二錢（此分は郵便局に徴收さるゝもの）受領證代用ハガキ代として一錢五厘を、附加被下度（例へば此方法によりて、一ヶ年の會費御拂込みの際は、壹圓參錢五厘を拂ひ込まること）候。

山岳會第二大會

來る五月十六日（日曜日）山岳會第二大會を東京市神田區帝國教育會會館内に開かんとす、講演者等は目下交渉中にあるを以て確定次第題目、時刻等は會員諸君に報知すべし、當日は例に由りて、紀念はがきを發行し、山岳參考品を展覽に供する筈なれば、奮て來會あらん事を希望す。

雜一束

○御寄稿の中、紙數の都合により、止むを得ず次號に廻したるものあり、諒焉。

○特別會員松田周平氏を、嘗つて本誌新入會員紹介中「特別」の二字を脱したりしが、今號の附錄名簿に訂正し置けり。

○會員佐藤傳藏氏は、肥前國多良嶽、温泉嶽へ地質調査のため登山せられ、霧島山へ向はれたり。

○會員山中太三郎氏は、雜誌探險世界社發起の雪中富士登山隊に加はり、登山せられたり。

○今號に附錄としたる會員名簿にて、前期間の退會、及び轉居等は凡べて除籍又は訂正を施し置きたるを以て、別に本誌には重錄せず。

○別項の如く振替貯金口座に加入したるに付き自後會費等の御拂込は振替貯金にて願ひたし、此れ會員諸君の御便利多ければなり、拂込に要する用紙は、各地到る所の郵便局にて無料にて交付せらるべく、此方法に由れば爲替料も書留郵便料も要せずして、極めて安全に送金せらるべし。

○本會は自今金錢の收受に關しては、必ず受領書を發行する事とせり。

去れば會費等の納付は受領書を以て證とする事と御承知ありたし。

○會員諸君が轉居、改姓名等せられし時は、必ず事務所宛御報知ありたし。

明治四十二年三月二十三日印刷
明治四十二年三月二十五日發行

定價金參拾五錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町六丁目九十三番地　廣瀨安七

印刷所　横濱市太田町六丁目九十三番地　東京印刷株式會社　横濱分社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九號　電話最長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

志村烏嶺先生著松洲畫伯表紙圖案

高山植物採集及培養法

四六版頗美本
定價金壹圓
三月十日發行

内容、口繪、三色版、コロタイプ、網版、拾九葉

第一章　總説、第一節高山植物、第二節高山植物分布の由來、第三節日本の高山、第四節高山植物の研究、第五節高山植物と日本趣味、第六節高山植物は天然の盆栽

第二章　培養法、第一節高山植物培養の流行、第二節高山植物の活着せざる理由、第三節培養土、第四節肥料、第五節給水法、第六節置場、第七節高山園、第八節位置、第九節材料、第十節構造、第十一節小瀑及谿流、第十二節移植法、第十三節一種の高山圖築造法、第十四節冬季保護法、第十五節蕃殖法

第三章　高山植物採集保存法、第一節高山植物採集の時季、第二節登山の準備、第三節採集用具、第四節採集法、第五節乾腊標本製作法、第六節同上保存法

第四章　日本高山植物産地及植物目錄、第一節より第十七節まで
白馬嶽、針木峠、越中立山、有明山、燕嶽、大天井、常念嶽、槍ヶ嶽、戸隠山、飯綱山、黒姫山、妙高山、八ヶ嶽、加賀白山、富士山、日光山、白根山、尾瀬沼、飯豐山、鳥海山、岩手山、月山、八甲田山、早池峰、岩木山、マカリヌプリ等各山の登路案内及植物目錄を揭ぐ

補遺、第一節より第四節まで木曾御嶽、同駒ヶ嶽、勢州菰野山、江州伊吹山の登路案内及植物目錄を揭ぐ

東京日本橋通三丁目　成美堂

大好評三版

近刊　山岳大觀　志村烏嶺著　成美堂發行

高山及高山植物寫眞帖　や　ま　志村、前田合著　橋南堂發行

飛驒叢書出版趣旨書

世運は日々に新なりと雖も其進むや必ず由て來る所あり其由て來る所を知るは其進むを知るの一端たり然らば如何にして其由て來る所を知るべき世運に棹し世運を回轉せしめたる人は名を留むれども今やなし吾人は其研究に導くものは只其筆にあり回祿鼇魚等の災にもれたる文書あるのみ已に寫本として數部を存するものは幸に傳古の任をつくせども現存僅に一部にして篋底に秘せられたるものは其進命や知るべきのみ。茲に於て自志相計り此等の古書大となく小となく之れを剞劂に附し一に散逸消滅の災を免れしむると共に一に具眼の士に供して研究の伴侶たらしめんとすれば其順序種類の如きに至りては初めより一定せず或は史料あるべく或は單に文藝上の作品もあるべしこれ叢書と命名せし所以にして其成功を急がず徐々として他日世の大成を期す鄉里研究の篤學者の好伴侶たを得ば發起者の幸とする所なり。

發起者

池之端　大池眞澄　惣助　伊東仙十郎

文學士　奥田正造　押上森藏　西本逢郎

工學士　吉木一朗　笠井圓藏　岡村利右衛門

上木小三郎　牛田九島　壯二郎　文學士　上原菊之助

延太郎　上木其四郎　田中貢太郎　文學士　垣内松三

文學博士　福田吉郎兵衛　土川宗左衛門　倉手利八

平田來友吉　元田修三　法學士　森彦兵衛　福壽滉藏　大坪善右衛門　二木長右衛門

鶴松　鈴吉　林學士　森三郎　文學士　上原菊之助　醫學士　加納積吉　岡村利平　本田六三郎

編纂主任　岡村利平　文學士　奥田正造　中川源次郎　日部九兵衛　佐藤彦太郎　杉下太郎右衛門　文學士　垣内松三

富田豐彥　奥村久郎　柿下清六　永田吉右衛門　山崎東弓　坂田稔　杉下定七

岡村御陸　奥田源三　吉島休兵衛　内記龍舟　牧野英一　法學士　平瀨市兵衛　幸謙　住

飛驒叢書發行事務所　住　伊　伊　書　店

飛驒叢書第一編

飛　州　志

全一冊　正價金壹圓　送料八錢

本書は、享保延享の頃、飛驒高山代官たりし故長谷川忠崇の幕命によりて編述したる遺著なり。ゆらゆる古今の史書を渉獵し、之を地理に照して考證し、半生の心血を濺ぎて飛驒の眞相を闡明せる大著述にして、全編十卷、飛驒三郡の山川形勢、國郡鄉村、神社佛閣の由緒來歷は勿論、物産風俗人情の發達變遷に至るまで、飛驒に關する一切の緣起沿革を網羅詳說し、材料豐富、叙事精透、眞に、飛驒歷史地理研究書として缺くべからざる好著なり。然るに、此書は從來、著者の遺族が獻上したる內閣記錄課本、東京帝國大學圖書館本、及びこれを傳寫せるもの二三あるのみにて、斯學研究者はもとより、苟も飛驒を知らんとするものゝ、等しく遺憾に感せし所なりしが、曩に、飛驒の歷史家として、卓絕したる史眼と該博なる識才とを備へたる岡村利平氏が、內閣本を原本として、大學本及其他の異本を校合して藏せられしが、今般、更に史實の錯誤を考證訂正し、原書の特色を失はざると共に、史的事實の精確を期せられたりしを、飛驒叢書第一編として上梓して普く世に頒たんとす。希くは學者と實業家とに論なく、苟も、飛驒を解せんとする人の精讀を切望して止まざるなり。

發賣所　飛驒高山町安川通　住　伊　書　店

賣捌所　東京市日本橋區數寄屋町　林平次郎　同神田區表神保町　東京堂　同下谷區仲根岸　嵩山房
名古屋市本町　川瀨代助　同玉屋町　星野松次郎